学習院大学史料館所蔵史料目録　第五号

中川善之助寄贈文書（下）

序文

一昨年より当館所蔵史料目録の第三・四号として「中川善之助寄贈文書」の全目録と、未公刊の主として近世史料を刊行してきたが、本書はこれの最終巻をなすもので、本書によって「中川善之助寄贈文書」のうちの近世史料の刊行はすべて終了したことになる。

本書には、第四号に引き続いて仙台藩関係文書と、それに会津藩の「御法度書」を収録した。このうち、本書の大半を占めている会津藩「御法度書」は、藩祖保科正之の寛永期から容敬の文政期にいたる、家臣に対する法度（禁令）を編纂したものである。この編纂がどこで、誰の手によって行なわれたものであるかは不明であるが、これによって主として会津藩家臣の生活の様子、たとえば困窮状態などが知られて興味深い。最近、豊田武氏を監修者として『会津藩家政実紀』が刊行されつつあり、会津藩政史研究はなお一層さかんになっているが、本史料がそれに寄与するところがあれば幸いである。また、伊達邦成の「手控」は、明治初年に北海道の開拓に入った仙台藩家臣の動向を伝えるもので、これも大変興味深い史料といえよう。史料中、明治三年の有珠郡におけるアイヌの「家数人別調」などで、アイヌのことを「土人」と呼ぶような問題の箇所もあるが、これも歴史的史料として、とくにアイヌの家族構成などが知られて貴重だと思われるので収録した。諒とされたい。

なお、本書の作成には主として在原昭子、齋藤洋一、須田由美子、高澤憲治の諸氏があたった。

昭和五十五年二月二十五日

学習院大学史料館長　大石慎三郎

例　言

一、本書は、昭和五一年に令夫人中川綾子氏より学習院大学史料館に寄贈された、故中川善之助氏所蔵文書のうちの仙台藩関係史料と会津藩関係史料を収録したものである。

一、史料筆写は、通例の古文書筆写要項に従ったが、そのうちの主な点を示すと以下の通りである。

(1) 適宜読点をつけた。

(2) 漢字は原則として当用漢字とした。

(3) 仮名は、而・江・ゟ・〆・ハ・ヒ・ヒ・ㄱは生かし、その他は平仮名に改めた。

(4) 誤字・あて字等は適宜（　）で、補足・訂正した。

(5) 闕字は一字あけ、平出・擡頭は二字あけで示した。

中川善之助寄贈文書（下）　目次

史料の部……1
一四　御法度書（会津藩）巻一、巻二、巻三合巻
一五　御法度書（会津藩）巻四、附録合巻
一六　御触留（仙台藩）
一八　手控（北海道開拓関係記録）
中川善之助寄贈文書解説……231

史料の部

一四　御法度書（会津藩）

（表紙）

御法度書　巻一　巻二　合巻　巻三

凡例

一土津様以来　御代々之御制法共大経ハ雖相貫、漸々御増損も有之、数度之御令条不考合候而ハ現行之品不相分紛敷成行事ニ付、自今已後可被相用分を御議定之上改而被相載候条可得其意候事、

一武家諸法度ハ　公儀御代替之毎度被　仰渡候といへとも　厳有院様以前之御法度幷　文昭院様御代之御法度ハ　御当代御用之品とハ少敷異同有之候処、　有徳院様以来元和之御法制ニ被為随、其後御代々其通之事故　御当代天明之御法度而已被相載候事、

一御家ニ而御家中之掟は　土津様　御代寛永十四年始而被　仰出、猶御潤色之上慶安万治両度被　仰出、其後至于今万治之御定御遵行之御事ニ候へ共、其内沿革有之旧文之儘ニ而今日之御制度と対様不致品とも有之ニ付、此度改而被相定候上ハ寛永慶安万治之三令ハ此帳面へ不被相載候事、

一御代々之御教令及数度候、後々迄も心得とすへき品ニして文長く意味深長たるハ旧文之儘ニ而初之二冊ニ被相載候間、役名称呼等現在之御制度と異成儀も有之条可得其意候、倹約之御教令等ハ数多有之といへとも去ル亥年改而被相定候故旧文ハ被相省候事、

一次之二冊御定之条々原文之儘ニ可被相載候得共、左候而ハ文言殊ニ繁雑ニ相成而已ニ無之、其中ニ不用之事或ハ前後齟齬之品も有之紛乱到安き事故、此度御吟味有之一覧之上ニ而分り安き様取捨添削之上其要文を被相載候事、

一御家禁御軍禁ハ不及申軍役定其外不時之節之御条目ハおのつから其品を以被行候故、此帳面へ不被相載候事、

一公儀服忌令前条同断之事、

一御意之事大小ともニ大形ハ此帳面ニ雖被相載、或ハ大綱を掲ケ細目を略し、或ハ役人其事を奉行する事ハ夫ニ譲り候品も儘有之事、

一毎条其事之起れる年を肩書ニいたし、近年少々御増損之年代ニ至而ハ煩敷儀ハ相省候事、

一臨時之命令ハ後年迄其通御遵行之事にも無之候条被相除候、仮令ハ宝暦已来御借知ニ付被相定候類ハ不被相載候事、

一旧来之御作法何年ゟ起れる共不知仕来之品も数多有之事ニ候所、品ニ寄なたれ候弊も有之事ニ候故、其類をも被相載候事、

一公儀御定をも一々可被相載候得とも　御家之御制度ハ多分　公儀御定ゟ内端ニ被立置候事故、其類は不被相載候事、

一公儀ハ勿論　御家之御定日用之間、心得とすへき事共大方御吟味有之事といへとも、条例之類ニ至而ハ一書之尽すへきニ無之候、此帳面を本とし常々吟味探索を加へ貴(遺)失無之様可相心得義勿論之事、

一所々ニ被建置候高札之条々ハ諸人明らかに知ル事ニ候間此帳面へ被相除、其外指手形を出シ或ハ赤子之屍を棄候類触面ニ有之といへとも、令条を待すして心得違有之間敷筈之事故是亦不被相載候事、

一今度新規之御議定之義ハ其趣肩書ニ相断候事、

一旧令之内いつとなく廃せるもの、此度御再興之上古に被復候儀も有之候間可存其旨事、

一凡而御知行高御切符高ニ随而次第有之分ハ、当分御借知中ハ残知之割ニ随ひ夫と違有之事ニ候処、婚葬之御定式ハ其外迚も残知全知之差別なく定被置候品も有之候間可得其意候事、

一肩書ニ出す所或ハ年代月日断るといへとも、全く不相知或ハ年号計りを記し或ハ年月ありて日なきもまゝ有之候、或ハ江戸会津にて申渡所之月日等相出入するも有之事、

文化十四年丁丑七月七日

目録

公儀
「一」(朱)　一武家諸法度、
土津様御代
「二」(朱)　一御家中武具心懸之義ニ付被　仰出候事、
「三」(朱)　一組頭始諸頭心得方之義ニ付被　仰出候事、
「四」(朱)　一御家中武具可改旨被　仰出候事、
「五」(朱)　一諸士屋敷〻手作物売出或ハ礼物等取候儀ニ付被
仰出候事、
「六」(朱)　一組頭共仲ヶ間合之義ニ付被　仰出候事、
「七」(朱)　一組頭共其組之馬を可見旨被　仰出候事、
「八」(朱)　一風説雑談之義ニ付被　仰出候事、
「九」(朱)　一侍共之者町へ出候時格好相応供可召連旨被　仰
出候事、
「十」(朱)　一仲ヶ間申合拝借物之義及訴訟候節被　仰出候事、
「十一」(朱)　一御供番頭御小性(姓)頭小番頭支配取扱方之義ニ付被
仰出候事、
「十二」(朱)　一火葬并殺産子候義ニ付被　仰出候事、
「十三」(朱)　一子共(供)を無慈悲ニ育候者有之被　仰出候事、
「十四」(朱)　一被下物之願申出候義ニ付被　仰出候事、
「十五」(朱)　一御家中無尽之企相聞候ニ付被　仰出候事、
「十六」(朱)　一倹約之義箇条を以被　仰出候事、
鳳翔院様御代
「十七」(朱)　一御家督之節御家中之者へ被　仰出候事、
「十八」(朱)　一御家中之士困窮ニ付訴訟を企候由達　土津様
御聴御下知之趣友松勘十郎一柳平左衛門奉之(承カ)会
津御家老共へ申遣候ニ付、御家中之面々へも申
渡候事、
「十九」(朱)　一組士之内金銭利倍到(致)候ニ付跡式御立被成間敷候
処、御慈悲ニ御立被下候旨被　仰出候事、
「廿」(朱)　一後妻を早速娶候義ニ付御教誡被　仰出候事、
徳翁様御代
「廿一」(朱)　一御入部之節御家中御領中へ被　仰出候事、
「廿二」(朱)　一町奉行始諸役人心得方之儀被　仰出候事、

「(朱)廿三」一御領中虚説之義ニ付被　仰出候事、
「(朱)廿四」一御家中之面々為遊猟罷出候節心得方之義被　仰出候事、
「(朱)廿五」一大酒乱酔之義被　仰出候事、
「(朱)廿六」一建馬心得方之義被　仰出候事、
「(朱)廿七」一頭役心得方之義被　仰出候事、
「(朱)廿八」一芸術を以被　召仕候者家業出精可相励旨被　仰出候事、
「(朱)廿九」一番代之者多無之様被　仰出候事、
「(朱)三十」一御役訴訟之心得被　仰出候事、
「(朱)三十一」一御家老奉行差図之品卒爾ニ及愚意候ニ付被　仰出候事、
「(朱)三二」一学問之義孔孟程朱之学流致講習其他之教法不可雑旨被　仰出候事、
「(朱)三三」一士共仮初之寄合ニも困窮之咄仕候義ニ付被　仰出候事、
「(朱)三四」一江戸御屋敷御条目先制之趣御増損之上被　仰出候事、
士常様御代
「(朱)三五」一御政道其外士民(四カ)心得方之義被　仰出候事、
「(朱)三六」一士風之義被　仰出候事、

巻二

目録

恭定様

「(朱)三七」一諸役人精力を励し淳直ニ可相勤旨被　仰出候事、
「(朱)三八」一孝悌之風文武之筋可相励旨被　仰出候事、
「(朱)三九」一高利之差引之儀ニ付御家老共ゟ申聞候事、
「(朱)四〇」一婦人出奔之儀ニ付被　仰出候事、
「(朱)四一」一役場々々先輩之者主立飲食之儀不相弛様可致旨被　仰出候事、
「(朱)四二」一御改正之儀大経ニおいてハ聊義不可改旨被　仰出候事、
「(朱)四三」一町郷村之者ゟ得頼目安書之儀ニ付御家老共ゟ申聞候事、
「(朱)四四」一御軍制御改被成被　仰出候事、

「四五」(朱)一婚葬之式被相定候節被　仰出候事、
「四六」(朱)一学問武芸修行之儀ニ付被　仰出候事、
「四七」(朱)一御政道之儀無訳致疑惑批判等ニ及候儀ニ付被
仰出候事、
「四八」(朱)一学問修行之儀ニ付被　仰出候事、
「四九」(朱)一勤之者学問修行之儀ニ付被　仰出候事、
「五〇」(朱)一家筋ニ無之共其器ニ当候者ハ可被召仕旨被　仰
出候事、
「五一」(朱)一公義ゟ御触有之候ニ付武役之面々心得方之儀御
家老共ゟ申聞候事、
「五二」(朱)一学校御普請成就文武修行弥可相励旨被　仰出候
事、
「五三」(朱)一日新館童子訓御編集被成其意を意得致候様改而
被　仰出候事、
御当代
「五四」(朱)一兵学修行之儀ニ付被　仰出候事、
「五五」(朱)一頭役之者組支配之者取扱方之儀被　仰出候事、
「五六」(朱)一御参府前士風之儀ニ付被　仰出候事、
「五七」(朱)一学問之儀程朱之学流へ被相復候節被　仰出候事、
「五八」(朱)一武備教練兵学修行之儀ニ付被　仰出候事、
「五九」(朱)一学校諸生風儀可相励旨被　仰出候事、
「六〇」(朱)一御目見被　仰上候節江戸御屋敷御家中之面々風
儀相励候様御箇条を以被　仰出候事、
「六一」(朱)一御家中之諸士へ御手当被成下士風御教誡之事、
「六二」(朱)一御家中倹約之制被　仰出候事、
「六三」(朱)一江戸御屋敷内倹約之義ニ付被　仰出候事、
「六四」(朱)一御入部之節御家中御領中へ被　仰出候事、
「六五」(朱)一御軍役之儀ニ付被　仰出候事、
以上

巻三

目録

「六六」(朱)一諸士諸奉公人之御作法、
「六七」(朱)一継目或は嫡子養子等之儀ニ付御作法、
「六八」(朱)一武備之儀ニ付御定、
「六九」(朱)一学校文武之修行ニ付御定、

「七〇」(朱) 一家中物成幷諸渡物或ハ居役金小普請料之御定、
「七一」(朱) 一建馬之御定、
「七二」(朱) 一御城中御規式御定、
「七三」(朱) 一御礼申上候節差上物之御定、
「七四」(朱) 一御祝儀申上或ハ　御機嫌伺之御作法、
「七五」(朱) 一御通行之節之御作法、
「七六」(朱) 一御城中之御作法、
「七八」(朱七七脱) 一郭門出入御作法、
「七九」(朱) 一公儀御手前御日柄御用地向謡鳴物停止之御定、
「八〇」(朱) 一御家訓幷御掟書幷御軍令拝聴御定、
「八一」(朱) 一撰挙御定、
「八二」(朱) 一夜居之間幷会所ニて御家老共ヨリ御用承知或ハ申達候節之御作法、

附、宅々へ申達候次第、

「八三」(朱) 一御礼御受等勤方之御定、
「八四」(朱) 一神文之御定、
「八五」(朱) 一御家老共へ諸士謁候御定、
「八六」(朱) 一御勘気者幷御穿鑿人之義ニ付御作法、
「八七」(朱) 一赦願之心得方、

以上

「一」(朱) 公儀武家諸法度

一文武忠孝を励し可正礼儀事、
一参勤交替之義毎歳守所定之時節、従者之員数不可及繁多事、
一人馬兵具等分限に応し可相嗜事、
一新規之城郭構営堅禁於居城之湟塁石壁等破壊之時は達奉行所可受差図也、櫓屏門以下ハ如先規可修補事、
一企新規結徒党成誓約幷私之関所新法之津留制禁事、
一江戸幷何国にても不慮之義有之候と言とも猥に不可駈集、在国之輩は其所を守り下知を相待へく也、何所にて雖行刑罰役者之外不可出向可任検使之左右事、
一喧嘩口論可加謹慎私之争論制禁之、若無拠子細有之ハ達奉行所可受其旨、不依何事令荷担者其咎本人ゟ重かるへし、幷本主之障有之者不可相拘事、

附、頭有之輩百性(姓)訴論其支配へ令談合可済之、有滞義

ハ評定所へ差出可受捌事、
一国主城主壱万石以上近習幷諸奉行諸物頭私不可結婚姻、
惣而公家も於結縁辺は達奉行所可受差図事、
一音信贈答嫁娶之規式或は饗応或ハ家宅営作等其外万事可
用倹約、惣而無益之道具を好ミ不可致私之奢事、
一衣裳之品不可混乱、白綾公卿以上、白小袖諸大夫以上免
許之事、
附、徒若党之衣類ハ羽二重絹紬布木綿、弓鉄砲之者ハ
紬布木綿、其外ニ至りてハ万に布木綿可用事、
一乗輿は一門之歴々国主城主壱万石以上幷国大名之息城主
及侍従以上之嫡子、或ハ年五十以上許、儒医諸出家ハ制
外之事、
一養子は同性相応之者を撰ミ、若無之においてハ由緒を正
し存生之内ニ可致言上、五十以上十七歳以下之輩及末期
雖致養子吟味之上可立之、仮令雖実子筋目違たる義不可
立事、
附、殉死之義弥令制禁事、
一知行之所務清廉沙汰之、国郡不可令衰弊、道路駅馬橋舟
等無断絶可令往還事、
附、荷船之外大船は如先規停止之事、
一諸国散在之寺社領、従古至于今所附来は不可取放は勿論、
新地之寺社建立弥令停止之、若無拠子細有之ハ達奉行所
可受差図事、
一万事江戸之法度ニ応し国々所々ニおいて可遵行事、
右条々堅可相守者也、
天保七年丁未九月廿一日

「二」土津様御代御家中武具心懸之義ニ付被　仰出候事、
諸侍共兼而度々被　仰含候儀ニ候間、定而武具馬具等ハ分
量相応ニ可相嗜候得共必小道具共を調不申物ニ候、大抵道
具を調候ても其外細々之道具ハ安き事ニ候故油断致、只今
打起候時儀に何角行当物ニ候、常々組頭は組之者ニ諸道具
沙汰候様ニ内々催促可致候、少々ハ武具馬具を組頭内々ニ
而見候而も尤ニ候得共、今程左様之義を仕候ハヽ世間之沙
汰を可致候得ハ左程ニハ不入事ニ候、不足之道具を無油断
心懸候様ニ可申付、此趣ハ其組中ニ親類歟近き人ニ様子具

ニ申伝候ハヽ脇々ニ而も承心懸を可致候条、八人之組頭江此段可申渡旨被　仰出候事、

正保二年乙酉四月八日

「三」(朱)土津様御代組頭始諸頭心得方之儀被　仰出候事、

組頭物頭諸頭共大一(第カ)御為を肝要ニ可存事ニ候、我預之役を
は常々我物ニ存候様ニ朝夕心ニ入候ハヽ悪敷義ハ有間敷候、
仮令は何様之義を被　仰付候共是ハ如何と存候得は被　仰
付次第と存かたつりに物を心得候故、悪敷かたつりて申渡
候間、組中も(ママ)さまに心得候事皆々頭衆不合点故ニ候、
言葉ハ如何様にもあれ心を能請而差引仕候ハヽ悪敷儀ハ有
間敷候、自然是ハ如何と存寄候ハヽひそかに談合前々保科
民部へ申候而僉儀可仕候、組頭衆ハおとなしき心持肝要ニ
候旨被　仰出候事、

慶安二年己丑三月

「四」(朱)土津様御代御家中武具可改旨被　仰出候事、

家中之武具馬具組頭常々心懸、壱人々々之前を細々に改而
不足之所を可為仕候、乍然惣様を只一度に存候ハヽ世間之
沙汰も亦如何に候間、壱人ツヽのを不絶改る義専要ニ候、
俄之時不足之事諸品共ニ於有之ハ其組頭之可為越度候、物
頭共も武道具一度請取封を付置候と計心済ニ存候ハヽ、虫
喰又広狭長短をも存間敷候、折々矢倉へ参り他へ不見様人
々へ為着見て、能比をハ其名を書付、俄之時ハ書付次第ニ
着セて指物ハ差出候様常々心懸可申候、乍去俄ニ人ニ左様
仕候ハヽ世間も如何ニ候間、折々目立候はぬ様に矢倉へ参
り戸をもさし我組々之者ニ申付、必々常々嗜肝要ニ　思召
候間、追々頭々手元ニ而吟味致候様被　仰出候事、

慶安二年己丑三月廿日

「五」(朱)土津様御代諸士屋敷ゟ手作物売出或ハ礼物等取候儀
ニ付被　仰出候事、

風俗流弊ニ而侍屋敷ゟ手作物売出、或ハ極月ニ至り町家へ
罷出候者も間々有之、或ハ物頭之内ニて同心之方ゟ節句為
礼菜大根つれを取候、是ハ又も不苦候得共自然代物を取者
も有之由沙汰之限り成事共ニ候、少々菜大根つれも不入事

共ニ候と　御意被遊候段、保科民部平日之物語ニ咄風俗可相励由被　仰出候事、

慶安二年己丑三月廿日

「六」（朱）土津様御代組頭共仲ケ間合之儀ニ付被　仰出候事、

組頭衆仲ケ間之儀万事御為所之儀ニ候間、互ニ無心置毎事打とけて心を不残和らかに相談仕候様ニ常々之心得肝要ニ候、我々ニ而は御用も調間敷候、其品々北原采女常々心懸候様ニとの御事ニ候、

慶安二年己丑十一月

「七」（朱）土津様御代組頭共其組之馬を可見旨被　仰出候事、

組頭衆ハ年中ニ二度程ツヽ何れの馬場なり共最寄次第ニ罷出、五疋七疋ツヽも折々組之衆之馬を自身ニ為乗見可申候、老人或ハ病者之義は格別ニ候、若者は常々自身ニ乗相嗜候様可仕旨被　仰出候事、

慶安二年己丑十二月七日

「八」（朱）土津様御代風説雑談之義ニ付被　仰出候事、

諸侍共傍輩之噂ニ罷（罹カ）り候風説或ハ不実之雑説致候儀可相慎候、就中　御城御番所において無作としたる雑談不致様兼而組頭共御番所へ寄合候刻能々可申諭旨被　仰出候事、

慶安四年辛卯十二月十七日

「九」（朱）土津様御代侍分之者町江出候時格好相応ニ供可召連旨被　仰出候事、

侍分之者用事有之町江出候時は、其身上格好相応ニ供を召連可罷出候、縦ハ知行高之者小者一僕之体ニ而出候儀ハ不入事ニ候、少しも宜者ハ道具等を為持出候而尤ニ候、人々町へハ用所有之物ニ候間出候儀無用之　思召ニハ無之旨被　仰出候事、

承応元年壬辰六月朔日

「十」（朱）土津様御代仲ケ間申合拝借金之儀及訴訟候節被　仰出候事、

此度身体不成者共記証（起請）文を書仲ケ間として中合候段、其節

心ニ不覚徒党之様相聞候、然共少も左様之心底ニ而ハ無之身体不成段迷惑成儘ニ可致と　思召候ニ付而、此度之者共儀拝借被　仰付候、自今以後拝借金之義申上候共御取揚被成間敷候間取次仕間敷候、惣而不依何品申合起証文抔於仕候は無御取揚却而曲事ニ可被　仰付候間、此趣就中組頭共ニ懇ニ申渡以来之義堅無用ニ可仕由被　仰出候事、

万治三年庚子十一月十七日

「十一」(朱)　土津様御代御供番頭御小性頭小番頭支配取扱方之義ニ付被　仰出候事、

一組中之儀万事無私致差引猥りニ不可令他出、奉公不奉公之段無遠慮可申上事、

一組中之訴訟於道理有之は急度可申上事、

一理不尽之輩有之は急度可申上事、

右条々堅可相守、若於贔屓(ママ)中忘公儀は可為越度者也、

寛文三年癸卯七月十日

「十二」(朱)　土津様御代火葬并産子を殺候義ニ付被　仰出候事、

火葬ハ不孝、産子を殺候は不慈ニ候処、風俗ニ相成諸人共行有之処、只今急度御法度ニ被　仰付候ニ而ハ無之候へ共、頭々之者不限此度平日火葬之不孝成事、産子を殺候ハ不慈成事を下々へ折々無油断委細ニ可申教候、其中ニ教を不聞入者候ハヽ　殿様殊之外御嫌被成候間、達　御耳候ハヽ不可然事之由弥可申聞候、左候ハヽ次第ニ火葬も可相止と思召候、尤葬送之規式を美々敷致分外ニ厚致葬可然と思召候義ニ而ハ全無之候、先ツ火葬ニさへ不致候へハ能事と　思召候、依之　御主意之御書付左之通被遣候、頭立候者へ為見可申旨被　仰出候事、

一火葬ハ甚為不孝之儀能教可申事、

一下々殺産子候事甚為不慈候条、是亦能教可申候事、

寛文三年癸卯七月廿五日

「十三」(朱)　土津様御代子供を無慈悲ニ育候者有之被　仰出候事、

組附吉田次郎左衛門草履取長蔵と申者、御勘定頭野村喜惣兵衛悴宇兵衛と付合居候処、組付黒河内彦右衛門悴又市郎

儀右宇兵衛（ママ）長蔵を討立退候企有之哉ニ長蔵承之、已故ニ若輩之宇兵衛を為討候事を無念ニ存し、於本二丁又市郎を討候処、　土津様御下知ニ長蔵義已故ニ宇兵衛を為討候而は無念ニ存又市郎を討候段、此上之仕方ニハ尤之儀ニ候、彼又市郎義ハ日来不作法其上草履取風情之者ニ見苦敷被討候段、此者之死骸をハ諸人為令見晒候而も可然程ニ　思召候、長蔵義ハ常々御助可被成程ニ　思召候得共、元之違たる義ニ候条討首ニ致、勿論死骸を様し首晒候ニ不及旨被仰出候、其親々へ左之通被　仰出候段御家中之面々へ為申聞候様御下知之事、

一黒河内彦右衛門義悴又市郎日来不作法之儀有之候をも無構差置、子を殺候様ニ仕なし候儀子に無慈悲なる者ニ思召候間閉門可申付候、

一野村喜惣兵衛儀若輩之悴草履取風情之者と付合候をも不存、是亦子を捨候様ニむさと育候義無慈悲成者ニ　思召候間閉門申付可差置候、

一右彦右衛門喜惣兵衛義悴不作法有之をも無構子を捨候様ニ致候義、子ニ無慈悲成者ニ　思召候ニ付閉門被　仰付候間、右之旨御家中之面々へ可申聞候、子を持候者ハ常々無油断子之教育可仕旨被　仰出候事、

寛文五年乙巳三月五日

「十四」（朱）（十五カ）土津様御代御家中無尽之企相聞候ニ付被　仰出候事、

侍共無尽之企仕候由粗達　御耳ニ候、兼而御法度ニ被　仰出たる儀ニハ無之候得共心法見苦事ニ被　思召候、百性（姓）町人小者中間抔之作法之様ニ可有之候、常々致倹約一分之見苦敷ハ不苦候、侍に不似合仕方ハ縦及餓死候とも有之間敷儀ニ候、右之趣田中三郎兵衛相心得八組之組頭方へ申渡内証ニ而無尽相止候様にと被　思召候、御近習之面々成瀬主計心得可申渡、右之外従会所申渡筋有之は自然内証ニ而可申聞旨被　仰出候事、

寛文七年丁未二月十日

「十五」（朱）（十四カ）土津様御代被下物之願申出候義ニ付被　仰出候事、

惣而無筋被下物抔之訴訟仕者有之様ニ　思召候、自然左様

之者有之申度儘ニ私欲を貪者訴訟致候者をハ会所帳ニおいて記置以時分可達　御耳候事、

寛文七年丁未月日不知

「十六」(朱)　土津様御代倹約之儀ヶ条を以被　仰出候事、

御家中之面々借金有之進退不続由御侘申候ニ付、度々拝借被　仰付候処、身持不調法故弥進退致困窮高利之金子を借、其上買懸等も沢山有之様ニ被及　聞召、七分之利足を加御返金被成候、以来諸事致倹約進退続候様身持可仕旨被　仰出、其節心得方之儀　御書付を以被　仰渡候事、

一家中之侍共進退不成者多く自分として可存様無之、依而今度金子を貸悉古借金買懸等を済させ、諸士之身上をあたらしく自今以後諸事減少之分限ニ随而諸事費を禁し、堅く倹約を守るへし、法之立と不立とハ家老奉行共之身之上ニ有り敬而風俗を可乱さる事、

一家作之儀分量ニ過修造致、他国〻之使者或ハ往来之者之見る所をよくし御為と存者間々有之由、是皆外分(聞)を思ひ実義を失全御為ニ宜からす、向後分際〻減可致修造事、

一外倹約ニ見ゆるといへとも内却而奢り、妻子ニひかれ女数多仕へ不似合衣裳上着なと着させ、或ハ分量ニ過無益之道具を求メ、或ハ厚味楽分際を忘れ費を弁さる者間々有之形、左様之者ハ仮令進退続と言とも恥を知らす士たる者之志にあらさる事、

一家中之士共何様之見苦敷物を着すといへとも不苦聞番使番之者も同事たるべし、家中之者共万見苦敷と世間之取沙汰有といへとも其段ハ不苦、却而御為宜敷と　思召候条少も不可憚事、

一借金并買かゝり久しき迚返済せさるハ人たる之道にあらす、又無尽等ハ士之すへき事にあらす、依之借金買かゝり悉く令返済之、無尽を破るへき旨被　仰付候処難有不存、却而種々之儀申者間々有之由、誠ニ利欲之心にして士之義ニあらさる事、

一知行方之事金方を以米方に改米方一様ニ致度と申者有之由、久しく有来る所之定法を破るへき事を願、下として上之政を計り己か分限を守る事をしらす偏ニ利を貪る輩其頭たる者左様之事一切申させ間敷事、

一諸頭之内与下之無筋願、或ハ訴訟有之時其頭与下にたのもしく思はれん事を欲し上を軽し申達候条、是皆己か為にし風俗を乱す者也、向後与下之者申事有之時義理を不弁無筋事を取上於申達ハ畢竟其頭之越度たるへき事、

一家中之面々能々人之高下をわきまひ無礼を不致諸事敬ミ畏れ其役々を守り風俗を励すへき事、

右条々諸頭横目之者能其旨を存し、其組下ニ至る迄不残可令知之、自今以後違背之輩并己か私欲に溺れ猥りに政事を誹る者於有之は急度可申上者也、

寛文七年丁未十二月十二日

「十七」（朱）鳳翔院様御家督之節御家中之者へ被　仰出候事、

一前々　家君被（訓カ）　仰出候旨謹而可相守之事、

一武事不可怠、縦雖有不意之事以自力可勤軍役事、

一常守倹約家居器物衣服飲食等可用簡略事、

右三章依先制之旨重如此全不可違背者也、

寛文九年己酉八月　日

「十八」（朱）鳳翔院様御代御家中之士困窮ニ付訴訟を企候由土津様達　御聴御下知之趣、友松勘十郎一柳平左衛門承之会津御家老共へ申遣候ニ付、御家中之面々へも申渡候事、

家中之士共当春火事以来殊ニ及困窮候由横目之者共達　筑前守様御耳候ニ付、不便ニ　思召各可被致僉議旨被　仰付候、依之僉儀之趣達　御耳此度鈴木六郎左衛門に様子被仰含被差登候、先達而士共訴訟を企候由達　中将様御耳候ニ付、　思召之段最前委細勘十郎平左衛門方ゟ申遣候、今以　思召不相替候、此度右書付之趣逐一被聞召候、横目之者共若き御前江前後之顧なく図（途）方なき事申上候事、さり迚ハ無覚束　思召候、常人ハ遠き慮なく家督之君其一代に其家中を存候事規模ニ思ひ強而諫メ密ニ人をして告し、是鄙夫之謀畢竟其身之為を専らと存たる者ニ候、筑前守様御事中将様初中後御家中之士共御扱之段々御存被　遊間敷候得ハ不便ニ　思召候事無御余義候、中将様御自分ニおいても度々指当不便ニ　思召候ニ付理ニ不当義と乍　思召三四度御救被成候、其面々も難有仕合可続と申、又各ニも如

此被成候ハヽ可続候、向後ハ申者も有之間敷又御取次をも仕間敷由申候、　中将様御家中士共之噂において姑息ニ御流れ士之風俗御そこなひ候事各勘弁可有之候得は、其品々達　筑前守様御耳候ハヽ、御救被成候事も又御救不被成事も皆諸士身上之為畢竟　上様へ御奉公之筋ニ候、尤於御自分少しも利之為ニあらす候間、可被聞召届候処ニ御不便ニ　思召候段無端成候而、各初中後之訳も存及僉議候諸士之面々其内ニハ蒙御取立数度預御救、又其親々之跡式無相違被下候者有之候、其上何之課役も不被　仰付其分限ニハ如何程人馬持何程に綺羅致如何様ニ御奉公可仕と之無御定も候、於是ニは武道も欠たる程に候、飲食衣服之御戒妻子之衣類等迄之義　御心を尽され御示ニ候得は恩を感し義を重し分限に応し抽る御奉公可仕覚悟可有之事ニ候、皆々迄義を失ひ恥を不知者有之間敷候得共、風俗ニひかれ

筑前守様御家督間もなくはや訴訟を企候、如此義を忘れ利欲に耽り己々ハ名を顕し貪事を専らと致候ハヽ耻ことを知さる様ニ可罷成候、ケ様之図方もなき者之申事戒教所もなく還而（ママ）弥利欲にほこらしめ剰未年之拝借を三年延積し特に京銀之沙汰ニ及候事、各職分ニは去とては不似合次第無聊　思召候、如此被　仰遣候事無筋儀に思はれ候哉、又被申上候趣理ニ当候と被思候哉、君臣之際於　御為ニ疎ニ被存間敷候条屹度御随ひ可被成候、此上なから家中之者共過を悔身を省ミ君臣之儀を重んし恥を知士之者を励し厳敷倹約を専（守）分限に応し候ハヽ必定可続候、是ニ当候者ニおいてハ二十人も三十人も又幾人も身代禿餓死に及候共、左様之者ハ被召仕候而も御用に立間敷候間、少も取上被申間敷候、依　中将様御意如此ニ候事、

寛文十一年辛亥十二月廿二日

「十九（朱）」鳳翔院様御代組士之内金銀利倍致候ニ付、跡式御立被成間敷候処御慈悲ニ御立可被下之旨被　仰出候事、

組士筒井善太夫儀存生之内金銭差引之筋致不埒之所行有之哉ニ相聞、跡式御延被置候へ共御怠懈之　思召ヲ以翌年跡式被　仰付候節左之通被　仰出、追而御家中之面々江心得之為申渡候事、

筒井善太夫義侍に不似合無憚所利倍仕候段達　御耳候、
ケ様之者之跡式御立被成間敷候得共、御慈悲に無御相違跡
式御立被成之旨被　仰出候事、
（寛文十三年）延宝元年癸丑五月十六日

（朱）「二十」鳳翔院様御代後妻を早速娶候儀ニ付御教誡被　仰
出候事、
丸山五太夫妻ニ竹本新左衛門娘を娶候由申出候ニ付及言上
候処、初一度娶候其妻死、再娶其妻致離別、此度又及言上
候、再三如此之次第不憚　上尾籠成様子ニ候、且又士之娘
を貰舅姑方へ遠慮も無之徒に勝手之為而已を思ひ早速妻之
沙汰ニ及候事、侍之礼義も欠候様ニ　思召候、縁組之義只
今迄ハ内証之様子不被聞召候故双方被任望候、向後組頭之
面々聞届候上老共方迄可申達旨被　仰出候事、
延宝二年甲寅三月廿四日

（朱）「二一」徳翁様御入部之節御家中御領中へ被　仰出候事、
御意之覚

中将様以来　御代々不相替会津へ被成御入部、　殿様忝御
大慶被遊益御忠儀を可被励　思召候、依之諸士及農工商賈
ニ至迄面々其身を慎風俗を可相励事、
一中将様甚御学問を被成御好候ニ付、御家中之諸士并町在
郷之者ニ至迄好文学候者間々有之候、今以不失御余風様
ニと　思召候、御家中之士庶人并子弟医師等講習之望有
之候ハヽ被設置候講所ニ而可令会集候、且又町之者等講
習仕度候ハヽ町之稽古堂ニ而可相学候事、
一諸士之面々常々武備不可相怠候、兼又抽衆人励武芸其芸
品々究之、或ハ武具人馬等相応ニ所持之、平生身持能軍
用之貯等迄有之、不意之御用ニも能可相立者ハ寄特成心
懸ニ候、或ハ武芸尋常ゟ勝候者等有之ハ其頭横目之者向
後共致見聞置、家老共へ相達可訴之事、
一家中大中小之諸奉公人、或ハ町在郷之検断郷頭肝煎等ニ
至る迄、面々其職役ニ心を尽し無怠相勤等実他ニ勝れ、
其勤方宜其支配之筋へけやけき験之有之者、且又旧功有
之輩其頭其支配之者横目之者常々其品致見聞置記之、其
筋ニより家老奉行共へ相達可訴之事、

附、四民之内不依何品一芸に名ある者有之候ハヽ致注進置へき事、

一御家来之本道外科之医師共其家業を可続子共(供)に医学を励ミ医療ニ可出精候、凡医術は民命死生之かゝる処其慎専一ニ可仕候、町医者之内ニも医術ニ抽功有者ハ其筋々ゟ致注進置へき事、

一御家人之諸細工人并町在郷ニ有来細工人等之中、其細工秀たる者又ハ前々之細工人ゟ其功勝れ、御領中之調法ニなる者有之ハ連々試之其筋々より書出させ可置候事、

一諸郷村百性(姓)之内ニ勝れて農業を励ミ、其業功者ニ而一郷一邑之大益ニも可成者有之ハ肝煎郷頭代官郡奉行常々改置奉行共へ達之可行其賞事、

一凡町在郷ゟ所作出之諸品諸商物ニてくろふにせ物、或ハ〻売々抜等之不直成儀不仕様支配之者常々其教肝要之事、

一四民之中抜類忠儀之者孝子節婦友悌之者、或ハ平生身之行善親族朋友ニ睦敷家道正等之善行之者陰徳之者も有之ハ、其頭其支配之者横目之者以其筋家老奉行方へ相達可訴之、随其行跡可行其賞事、

一御領内之諸寺社之僧侶社人等之内勝而其道を励ミ、戒行道義殊勝にして諸人之見聞顕然之輩有之ハ、兼而支配之者書出之奉行共方ゟ可訴置事、

一士農工商医師社人僧侶等之中、其役其家業ニ相怠其職分ニ不似合所行之者有之ハ、大小之目付或ハ其筋々之者連々試之家老奉行共方へ相達可訴之、糺之軽重改其職或ハ可処其科事、

一御領内ニ有之極老之男女鰥寡孤独之者、或ハ貧人乞食之輩一人なり共不及飢ニ様ニ其筋之者常に心を付、兼而被定置候老養貧人指持等可充行事、

右之趣此度御入部ニ付被　仰出候間、其筋々之者謹而致承知之永可存此旨者也、

貞享五年戊辰八月廿三日

「二二」(朱)徳翁様御代町奉行始諸役人心得方之儀ニ付被　仰出候事、

町奉行郡奉行公事奉行此三役人之義ハ、其所司大にして下民衰ると富ると、訴論の多と少と、民心之奸しきと浮なる

と、風俗之善きと悪きと、或ハ御納所方等之損益彼是以御仕置筋大事之かゝる所、役人平生工夫を尽し前々勤来候其旧例をも相考、其宜所ニハ是ニ随ひ欠たる所をハ補之、面々一役所之為計りを不相計三役所共ニ心を通し力を合セへし、縦一方之請前ニ其益有之といへとも他之請前之害ニ成候へハ一統之御政道之所片落有之　御為ニ成さる事ニ候、且又勘定頭吟味役人之儀ハ諸役人勘定之惣計を万事之損益勘弁仕事ニ候、乍然専利害之筋ニ馳セ道理を狂候得ハ大に御政事之不当義ニ候間、此段能可致勘弁候、何れ之役所之儀ニ而も宜筋存当事有之候ハヽ先其役人ニも告之、奉行共ニ誤(ママ)シ其上家老共へ申聞宜遂僉議、右役所之面々専此旨を可存、下を治る之道無限事ニ候得ハ幾重ニも可尽心候、其外之役所といへとも皆国用之かかる所一として不疎事ニ候間随分心を用宜相勤(可脱カ)旨被　仰出候事、

元禄四年辛未三月

「二三」(朱)徳翁様御代御領中虚説之義ニ付被　仰出候事、

御領中時々虚説有之風俗不宜候ニ付、兼而御教誡被　仰出候処、間々佞奸邪曲之輩有之不守此旨無筋悪妬之意を挾、何かと不実之儀を以人を致誹謗候儀不恐御政法且又士道ニ不似合所存ニ而、向後永々其頭目付之者も心を付虚談多き行跡之者有之ハ家老共迄可申聞旨被　仰出候事、

元禄五年壬申四月四日

「二四」(朱)徳翁様御代御家中之面々為遊猟罷出候節心得方之儀被　仰出候事、

家中之諸士幷諸奉公人為遊猟山川野外等へ出、民間之妨となり却而田夫之慮外を尤め及殺害人候事甚不法之至ニ候、於遊山翫水之地侍分上之備も無之脇差をも不帯、馬郎樵夫之輩と武威を争ひ猥りニ国民之生命を絶候事不憚上恣成御義と　思召候、若町人百性之内存外之無礼仕候者有之其通難差置儀ニ候ハヽ、其在所之名を聞届町奉行郡奉行方へ可断之候、僉議之上可処其罪候条、右之趣面々堅可相慎旨被　仰出候事、

元禄五年壬申七月十一日

「二五」(朱) 徳翁様御代大酒乱酔之儀被　仰出候事、

大酒乱酔之儀兼而御停止ニ候、殊ニ婚礼之時は盃数迄御定有之候処頃日其守り弛候由、又朋友親族等ニ会候時も不覚酒宴に長し及沈酔族粗有之様被及　耳召甚不届之儀ニ被思召候、平生ハ実儀成者も及沈酔候而ハ心ならす不当事共可有之儀ニ候、此節猶以此慎専一ニ可仕候、向後領中之四民共ニ酒ニ酔不届之所行有之ハ、当人ハ勿論酒を強候者迄可為越度候、右之趣西郷頼母を始年寄奉行諸頭目付之輩迄先つ厳敷自己を相守り并支配組之者へも時々急度致助言乱酔之事一切無之様ニ可仕旨　御意ニ候事、

元禄九年丙子九月十六日

「二六」(朱) 徳翁様御代建馬心得方之儀被　仰出候事、

先年倹約之儀被　仰出候節、御家中之諸士人馬減少不苦旨被　仰出、馬持候之義暫御用捨被遊候へ共、畢竟知行相応之者馬持候義諸士之当務ニ候、其上御奉公道ニも成義ニ候間、向後御近習外様共ニ三百石以上之者ハ馬可持之候、其以下扶持馬所持之者共ニ能き馬持候而ハ専武用之重宝ニ可仕処、無左候て馬口労(博労)かましく商売之為ニ仕候は為士者ニ不似合風俗ニ而可有之候条、其覚悟専一ニ可仕旨被　仰出候事、

元禄九年丙子十一月廿四日

「二七」(朱) 徳翁様御代頭役心得方之儀被　仰出候事、

凡有組者其支配之者ニ被誉度存、下之為計りニ心付不当訴間々有之風俗不宜候、能上下之分考合第一御為宜下之為ニも罷成候様可相心得旨　御意ニ候事、

元禄十二年己卯十一月廿七日

「二八」(朱) 徳翁様御代芸術を以被　召仕候者其家業出精可相励旨被　仰出候事、

凡芸術を以被召仕候面々子共(供)ニ不怠家業相続可仕旨被　仰出候、猶以可相励候、若相続難成嫡子於有之ハ向後至其時御吟味を以被　仰付候様可有之旨　御意ニ候事、

元禄十四年辛巳七月廿四日

「二九」（朱）徳翁様御代番代之者身無（多カ）之様被　仰出候事、
近年は番代之者数身有（多カ）之候間、番頭共能々致吟味候様ニと
先達而被　仰付候、向後は病気ニ而　御番難勤者儀番代を
不申出、緩々遂養生本腹次第罷出可相勤候、若又長く経年
月候病気ニも候ハヽ病気之内小普請料可為出候、且又先達
而病気ニ付番代願出被　仰付候者之内、当時病気到本復候
者も有之由相聞候間、右之者共罷出相勤候様申付可然候、
只今之通番代多候而ハ皆々年若ニ相成候条不得止事候ハヽ
番代可被　仰付被思召候事、

元禄十五年壬午五月廿三日

「三〇」（朱）徳翁様御代御役訴訟之心得被　仰出候事、
都而御役訴訟之難得止義ハ各別（格）御詫不申上不調法有之候而
ハ如何と存、一通ニ而は不申上様ニと　思召候、度々御役
移替候而ハ勤馴鍛練之者相改、不鍛練ニ而其役々御用も不
調、切々御役移替候段不宜義　上ニも御苦労ニ　思召候、
右之趣筋々へ内証申聞候様ニとの　思召候事、

元禄十六年癸未七月廿四日

「三一」（朱）徳翁様御代御家老奉行差図之品卒爾に及愚意候ニ
付被　仰出候事、
奉行共方へ諸役人用候義申達被差図候砌品ニより甚及愚意
義有之由相聞候、年寄奉行共義ハ御政事被任置候得ハ存旨
有之候共追而可申述義ニ候、縦即時ニ申述候とも無礼ニ無
之様可申伸（述）処及愚意候段不敬之至ニ候、向後屹度相慎候様
役人共へ可申聞旨　御意ニ候事、

宝永四年丁亥七月十九日

「三二」（朱）徳翁様御代学問之義孔孟程朱之学流致講習、其他
之教法不可雑旨被　仰出候事、
近年諸士学問及怠廃候由相聞甚　先君之御遺風に背き風
俗不可然候、依之此度講談読書等之師被設置候間、大小之
面々志次第令会集可励文学候、尤講堂之儀ハ風俗之儀ニ而
候得ハ専孔孟程朱之学流を致講習、其他之教法不可雑候、
自今以後学才秀国用ニ可立者有之候ハヽ其品ニ応可被　召
仕候条、其筋へ可申聞候旨　御意ニ候事、

宝永五年戊子正月廿三日

「三三」(朱) 徳翁様御代士共仮初之寄合ニも困窮之嘶仕候儀ニ付被　仰出候事、

御家中之者近年ハ武芸怠り、其中ニは困窮之者共仮初之寄合ニも其咄而已申候、昔ハ困窮仕借銭買懸ケ仕候を恥と存し質等も人ニ隠し置候処、只今はあらはし内証不成を手柄之様ニ申立、又ハ出火之時大手ニ相詰候儀受前ニ候へとも多分不罷出甚以少勢に相見風俗不宜候間、寄々頭立候者共可申諭旨被　仰出候事、

宝永六年乙丑(己)十月

「三四」(朱) 徳翁様御代江戸御屋敷御条目先制之趣御増損之上被　仰出候事、

定

一於屋敷中喧嘩口論有之節、其場近所之者、於座中は其座ニ居合候者早速立合事ニ不成様可相計、物頭足軽を召連横目之者幷歩行目付は其場へ駈付相囲之老とも差図を受へし、縦雖為親子兄弟猥りニ不可出合候事、

一博奕好色一切停止之、此旨下々等へも厳敷可申付候事、

一酒不及乱酔小歌不可謡之事、

一暮六ツ時ゟ表裏門其外所々門戸を可固事、

一用所なくして昼夜猥りニ寄合へからす、附、夜四ツ時ゟ屋敷内之火を消へし、用事有之時ハ格別之事、

一他出之者其頭或ハ横目之者ニ其故を断出へし、下々之者ハ木札を以可致出入事、

一町之湯風呂へ入候義停止也、但、足軽以下ハ格別之事、

一他所者猥りニ不可入、故有之来候者ハ裏門迄送之者附之可出事、

一家中之又者直参或ハ他所之衆へ対し無礼不仕様ニ可申付事、

右条々堅可相守者也、

享保九年甲辰閏四月

「三五」(朱) 土常様御代御政道其外四民心得方之儀被　仰出候

事、

御政事は四民之安否筋々之曲直ニ有之事ニ候間、御家訓を本とし利害道理を以可取計候、諸人之服すると不服とハ所行之善悪ニ寄事ニ候間　御先代之形を相守諸役人悉心を可附候、

一近来ハ諸役所ニ而当座之才覚を以始終之儀迄不行届新規之取計有之趣相聞候、利用ニ不拘大小之事共新規之取行ハ吟味之上可相改候、

一御家中之諸士諸奉公人ニ至る迄武義（技）を専とし、風儀を励候事為士者本意ニ候処、おもねりへつらひ風儀取失候而は不宜候間、忠正実儀之志を励可申候、

一依怙贔屓なくこひ賂を慎正直ニ可致候、党を組姦曲を以貪候者有之ハ厳可相糺之候、

一凡風俗之善悪は其長たる者之志ニ習可申事ニ候間、頭立候面々自己を慎其志を相励候様教誡可致候、

一凡諸穿鑿之道は悪を懲し善を勧め可申為ニ候間、於三役所心を尽し我意を不立執行可申義ニ候、尤　御代々被仰出候趣も有之事ニ候間、考合無筋義を以下を苦しめ人情ニ背き不申様可致事ニ候、

一倹約を守り驕に不可長、面々之分際ニ応し若遊楽花美を好或ハ（ママ）客ニ落入候類有之候ハヽ屹度相糺可申候、

一農工商之三民専産業を勤御国用を差塞不申様可申付、若不直之筋を以御国用を妨る類有之候ハヽ厳可遂吟味候、尤諸士諸奉公人ニ対し無礼仕間敷候、

一孝悌忠信節婦之類其外善行之者有之候ハヽ可申出候、其行跡ニ随ひ前々之通其賞可被行候、

一鰥寡孤独ハ不及申其外極老貧人之類不及飢様筋々ニ而常々心を付、前々之通老養貧人扶持を可宛行候、

一大小之御目付共其役分ニ被立置候間善悪ニ御書附可申上候、

右之趣筋々へ可申聞旨被　仰出候間屹度此旨可相守候事、

延享元年甲子三月十五日

「三六」（朱）土常様御代士風之義被　仰出候事、

家督以来追々申聞候通上下無滞繁栄候様存入義ニ候、然処入部以後も彼是不得止事取扱共有之甚以心を痛候事ニ候、

追々考見候処都而実意之不行届故と残念ニ存し候、依之我等存念之趣書付為見候、向後ハ何れも右之趣押移行候様可相心得候、此段申聞置候、追々申通候様可致候、書付ハ一覧後可相返候、

御自筆御書付

家中之者自分之不行跡或ハ家事不治不行跡之義有之、其咎メ家法取行事元〻不得止事儀ニ候、右体之儀往々有之御代々附属之家人名字を絶し、又ハ代々先祖〻其者之家筋勤功之格禄俄ニ減し何とも歎敷事ニ候、右ニ付考候所全取扱不行届故と　思召候、其者之親類縁者於有之ハ其過之不長内ニ急度異見を加へ事立ぬ様可致義実意ニ候、他人たりといへとも懇意之筋合有之歟、又ハ同役等勤候訳合を以異見を加へ、不道成振廻ハ可為直事ニ候、一向懇意ニも無之一通之他人たりといへとも他所之者ニくらべ見候時ハ縁者同前之思ひ可有之候、他之非をなけかはしく存候実意有之候ハヽ其者へ異見取計如何様ニも可有之候、朋友ニ信ある処ニ而候、右体之取扱之上其非を不改者ハ咎之軽重ニ随ひ仕置申付候義勿論ニ候、然るを他之非を噂而已致し寄合そしり咄ニ言ひ合候事全実意無之儀、武備之（ママ）にて候、是家法〻り崩れ候基ニ而候、是亦不捨置事故左様之佞智有之者行儀を乱候咎メ可申付候、前文之如く咎を得者有之其縁者親類凡に致居候ハヽ品に寄其崇可申付候、

一番頭之面々別而心得可有之候、相組之内頭ニ取扱候者も有之上は如何様ニも是ハ取扱致能可有之事と　思召候、右実意を以傍輩之交り厚くなり候ハヽ家風之備堅固ニ而不恥事と存候、又不絶不埒之者出来目立候咎メ取扱候時ハ他之外分恥（聞）入事ニ付存念申聞置候事、

寛延二年乙巳（己）二月

「巻（朱）二」
「三七（朱）」恭定様御代諸役人精力を励し淳直ニ可相勤旨被仰出候事、

近頃諸役人いつとなく勤方弛候様に相聞候、主立候役人共任する所不軽事ニ候、　御代々被　仰出候趣を相守り幾重ニも精力を励し淳直に可相勤候、支配之役人共へも不打置教誡可致候、若賄賂等之聞於有之ハ被遂御吟味屹度可被

仰付候、右之趣重軽之役人へ可申渡旨被　仰出候事、
（宝暦十三年）明和元年甲申二月廿八日

（朱）「三八」恭定様御代孝悌之風文武之筋可相励旨被　仰出候事、

孝悌は人道之大本当前之事ニ候処、相怠候者有之候而ハ御代々被　仰出候御遺風をも取失ひ候条、文武不怠風俗可相嗜候、若倫理ニ戻り或ハ沈酔風義を乱候体之者有之候ハヽ、父兄親族ハ勿論於頭々も無油断教誡候様被　仰出候事、

安永六年丁酉六月十一日

（朱）「三九」恭定様御代高利之差引之儀ニ付御家老共ゟ申聞候事、

一近来諸浪人之内町在村へ高利之貸方致利合等之差引ニ法外之儀も有之、或ハ直ニ町人宅へ参り騒々敷致し、又ハ得頼彼是難渋かましき義も有之由相聞風俗甚不宜儀ニ候、決而法外之儀無之様可致旨近頃従　公儀御触も有之義、若右体之者於有之ハ屹度可及吟味旨此旨差引致候浪人有之候ハヽ可被申聞候事、

安永八年己亥正月廿五日

（朱）「四〇」恭定様御代婦人出奔之義ニ付被　仰出候事、

近来間々婦人出奔相聞候、兼々人元之者忽（諸）緒故之儀ニ候、已来右体之儀有之候ハヽ可為越度候条、常々無油断及教誡候様被　仰出候事、

安永九年庚子十二月廿六日

（朱）「四一」恭定様御代役場々々先輩之者主立飲食之儀不相弛様可致旨被　仰出候事、

近頃音信贈答幷飲食之寄合別而相弛候形ニ被及　御聴候、畢竟為取（締）続度々被　仰出も有之儀ニ候間、面々質素を守無益之費を省き分限ニ随ひ武器手入等之心懸をも可致儀ニ候処不心得成義ニ　思召候、尚守り安きため改而別紙之通被　仰出候間（此別紙ハ雑令ニ而相済）頭々教誡ハ勿論之義、飲食之儀ニ付而ハ役場々々先輩之者ニ而一両人主立、組支配之者共ニおい

ても人を定是又両三人ツヽも主立罷在、決而不相弛様可取計旨被　仰出候、若彼是ニ事寄被　仰出ニ背き及飲食候義有之候ハヽ、主立取計候者ニおいても可為越度旨被　仰出候事、

天明七年丁未十二月九日

「四二」(朱)恭定様御代御改正之儀大経ニおいてハ聊不可改旨被　仰出候事、

此度　公儀之御振合ニ随ひ、且は　御代々之　御神慮ニ基き文武之政を糺し時勢ニ応して変革之取計品々申付候、発端之節は善悪不分明候得は衆口区々成も古今人情之常ニ候、家老共始列座之者共偏ニ令和融誠精を以無二心遂行候事専要也、其中瑣細之事ハ時勢之差引尤ニ候、其大経ニおいてハ聊も不可改留主中一入心を尽し、若邪佞之説あらハ速ニ江戸表へ可申達候、此末於有安堵之沙汰ハ忠孝之道無此上候、家老共此旨を存し文武之頭人共へも寄々可申諭者也、

天明八年戊申三月廿四日

「四三」(朱)恭定様御代町郷村之者ゟ得頼目安書之儀ニ付御家老共ゟ申聞候事、

町郷村之者共諸願出入之類訴之筆才有之者頼為認、右之類紙面料銭を取認候者を目安書と名付、右料銭之多寡ニより精粗を成候姦悪ニ有之訴論文面精しく整候を利運候様ニ心得、双方互ニ目安訴状之工拙(巧)を争ひ猥りニ料銭を費し、目安書ハ料銭之利潤を甘んし事跡之実否も不承届文面取繕、最初訴之素意承候節非分之儀と見候をも理有之様に取繕候ニ付、出入取上及吟味候得は訴状之旨趣と齟齬いたし、虚雑を申懸候罪跡ニ至候者も有之、皆以目安書共文飾致候姦悪ゟ起候義ニ候、尤町郷村へ参居候浪人或ハ寺社修験之類出入訴論之発及相談理非を承り一図ニ我意募り、右之類双方腰抑荷担之類ニ而纔之出入も大造ニ仕成、尤右出入ニ不限御手当等之願迄も入組候儀ハ目安書を雇筆才ニ任認之、願人并文面認候者姦悪之業を以実体を取失ひ欺上を候仕方風俗ニ懸不届至極ニ候、以来出入之筋は勿論諸願等迄も吟味之上訴状之旨趣ニ齟齬致候儀有之候ハヽ、当人は勿論筆

者をも遂吟味当人同罪ニ可被所候条、心得違無之在体実意（有）を以申出候様、尤寺社修験浪人之者共ニ相談等ハ決而致間敷候、町在郷之者共諸願争論之類町在郷村ニ罷在候浪人共之内発端預談候得ハ、親しく目を懸候者も争論ハ其者之利ニ致度情合を以非儀をも利分之由為申聞候故、地下人一図ニ迷ひ尤ニ聞請何れ迄も我意申募候者も有之、双方荷担腰抑之類有之纔之出入も大造ニ相成候儀も有之、右出入ニ不限御手当等類迄も入組候義ハ筆才ニ任願書等をも認呉、肩を持候体之儀も有之哉実事ニ違ひ色々取結候訴状も間々有之由ニ候、御家人之身分ニ而訴状認呉候体之義有之間敷義ニ候得共、目を懸候者之諸願出入之義抔筋々へ彼是取結ひ頼申込候体之儀も有之歟ニ相聞、甚風俗ニ懸り不相当義ニ候、以来願入訴状之旨趣吟味之上右体腰抑荷担之者も有之候ハヽ屹度御所当可被　仰付候条、心得違無之様子弟浪人へ屹度教誡可被申聞候、町在郷にても願出入之類子弟浪人之者へ決而不相談様申聞置候旨共ニ御家中へ相触候事、

天明八年戊申十一月

「四四」（朱）御軍制御改被成被　仰出候事、

此度御軍制御改被成候、尤武備不可怠旨　御家訓之御箇条ニも有之、且御料所幷陣屋元等ニおいて徒党之儀有之節最寄大名へ申遣候ハヽ時刻を不移取鎮之人数差出候様近頃御触面も有之、聊之不時有之節ハ勿論　御公務御差支無之様役々をも被増不時之順番をも極置兼而心得居候様可致候、武備之義平日不可怠義ニ候得ハ改而被　仰出候迄も無之候得共、武備ニ被召仕候者共ハ猶更相嗜不時之節御用支無之様可心懸旨被　仰出候事、

天明八年戊申十二月六日

「四五」（朱）恭定様御代婚葬之式被相定候節被　仰出候事、

婚葬之儀は人々始終重んし慎むへき儀ニ候処、婚姻養子等其財を論し或ハ分ニ過支度装ひ或ハ便利を主とし夫々之式を廃し、又困窮之者ハ相応之縁組をも整兼、強而整候而も其為弥増難儀ニ及候者も有之由、且葬式之義ハ薄葬之沙汰も不相聞候得共人ニ貴賤貧富之差別有之、其礼不等儀勿論之儀ニ而高録（禄）之者たりとも分ニ不越、少録之者も其分相応

之葬可致儀之処、孝子慈孫之者も困窮之上ハ財用ニ付哀戚之情も自然と薄可相成儀と被　思召候、依之婚葬之式其分限ニ随ひ専外飾を被除質素を基と相成、時俗ニ応し其制被　仰出御貸金御貸道具被成下、始を正ふし終を慎候様ニと被　思召候事、

寛政元年己酉（天明九年）正月十一日

「四六」（朱）恭定様御代学問武芸修行之儀ニ付被　仰出候事、

御家中学問武芸修行之義近々被　仰出候処、一己勤之者幷格役以上之者たりとも文武之芸習熟之上ニ而も可怠様無之儀ニ候、且壮年之者ハ専修行可致義之処大勢之内ニハ遊惰ニ日を送り、或ハ中ケ間合ニもたれ候義も可有之哉、多出精之者無之様被　聞召候、以来文武無怠相励猶面々得たる所之才を成候様ニと　思召候、中ケ間ハ申合頭々は無油断及教誡候様被　仰出候事、

寛政元年己酉（天明九年）正月十一日

「四七」（朱）恭定様御代御政道之儀無訳致疑惑批判等ニ及候義ニ付被　仰出候事、

凡而御取行之義ニ付無訳致疑惑批判等ニ及候義抔有之間敷儀ニ候得共、若右体不心得之者抔有之候而ハ不相済義ニ思召候、皆共油断無之義ニハ候得共猶心を付候様被　仰出候、若右体之者も有之候ハヽ寄々教諭を加へ不心得之者無之様可心懸旨被　仰出候事、

寛政元年己酉七月廿六日

「四八」（朱）恭定様御代学問修行之儀ニ付被　仰出候事、

両学校御再興最早三ケ年ニ相成面々無怠出精之段ハ御歓思召候得共言行ニ顕る処未薄き様ニ被及　御聴候、学問ハ己を治め人を治るゝ道ニ而孝悌を本とし、己か欲せさる事を人に及さす恥を知て言行を慎ミ初学之者先とし可学事也、然し可恥を恥す却而恥間敷を恥とする事間々有之儀ニ候間心得違無之様可致、人は一念之志す所厚薄大小ニよりて賢不肖分るゝ事にて、文武之道を会得して国家之用に立ん事を欲し仁に志し忠信成者と、文武之技を以称誉を得禄位を増んと思ひ利名ニ志す鄙劣成者と日を同して論すへけんや、

依而孝ハ如何して教(孝)ならん、悌ハ如何して悌ならん、恕ハ如何せん、恥ハ如何なると恥とせんと師に問ひ、其余右件ニ思を凝し教を受、勉て身ニ得朋友互ニ善を責め兼而御教諭被成置候、糺則之通ならん事を誡六科六行に進て日々実行を励へし、師は親子之思ひをなして教之〻り方始会頭句読師ハ其身行之平日之行事作法迄も懇ニ導之、違事を誡しめ徳行実義之風厚く相成候様取立可申候、最早　御登前も近寄候間猶又被　仰出候、　御留主中人品上達之程重而御下之節　御聴可被成と　御楽　思召候旨被　仰出候事、

寛政二年庚戌二月十七日

「四九(朱)」恭定様御代勤之者学問修行之儀ニ付被　仰出候事、

学問之儀ハ専身を修め徳をなし治政安民ニ志し可相学義ニ而、長サ役をも可致者ハ猶更学問無之候而ハ不相済儀ニ付、御代々彼是御世話共有之、就中当時学校御再興をも被仰付格別ニ学問御引立之義ニ候得は、勤之者たりとも年若ニ而禄高之面々ハ家事之世話等も薄く可有之義ニ候得ハ学問致出精可然と　思召候、依而ハ禄高ニ而三十五歳迄之勤之者会日ニ而学校へ罷出不断修行致候様、尤三拾五才以上之者ハ勝手次第之儀ニ候得共成丈ケ右会日へ罷出修行可致候、且禄卑之者ハ家事之世話別而多く可有之義ニ候得ハ是又三十五歳以上之者同様相心得候様被　仰出候事、

此時御家老共〻学校出席之義ハ新番組々外之士以上禄高之義ハ三百石以上ニ相心得候様別而申渡候事、

寛政七年乙卯二月八日

「五〇(朱)」恭定様御代家筋ニ無之共其器ニ相当候者可被召仕旨被　仰出候事、

是迄御役替被　仰付候儀役人之外ハ多分家筋ニ而知行相応之者被　仰付候処、已来御家老始夫々之役義其器量ニ相当候者先ツハ家筋之者之内役々高下新古ニ不拘可被　仰付候、家筋ニ無之候共其器に相当候者ハ新古ニも不拘知行卑ニ而も御足高を以可被　仰付候、尤抜群之切作(磋)無之者年切(功カ)を以ハ右之御足高容易に御加増ニハ御直被下間敷候、面々徳ニ進候業を修め国之器用に相成候様専一己を可相励候、勿論才能有之候とも不実成者ハ重き御役場へハ被　仰付間敷候、

右之通被　仰出候ニ付而ハ其身を顧ミ転役席進等無之義を不足ニ存間敷儀と　思召候、撰挙被　仰出候役々之者共右之心得を以撰書可書出旨被　仰出候事、

寛政九年丁巳四月廿一日

「五一」(朱)恭定様御代従　公儀御触有之候ニ付武役之面々心得方之儀御家老共ゟ申聞候事、

武役之面々不時順番を以極置御用支無之様可心懸旨十一年巳前申年被　仰出一統へ申聞置候義ニ候間、面々懈怠も在之間敷義ニ候処、今度従　公儀近辺御料有之面々於御代官所ニ若人数入用之節、尤御代官所而已ニも不限小身之面々知行所を始陣屋等も同様、惣而近料ニ而人数入用之節ハ其所ゟ直ニ申通次第相応手配之儀厚可申付置、寺社領ゟハ申通無之候迚も其時宜次第差引も可有之義、勿論大身之面々ハ猶更之義ニ候旨御触面ニ候、右体之儀有之人数被差出候節自然遅滞ニ及候体ニ而ハ　御家柄之義被対　公儀別而難被為済義ニ候条厚可心得、尤御触面之趣ニ而ハ其節之模様も可有之候得共、御先手当前之内一両組と歟乃至一陣位ハ急速被差出、或ハ頭々之内人指を以可被差遣も難測義、左候得ハ自分組々召連候儀ニ候条、此段も兼而可被心得居候、且去八月中格別之御尊慮を以厚御手当をも被成下、倹約之儀も永く難相守可有之とヶ条書を以被相弛、其内も相省無用之費無之不時之心懸専要ニ可致旨改而被　仰出も有之候処、飲食之筋ハ別而弛安き事ニ候得は、平日寄合等有之酒食差出候共成程手軽ニ致し、凡而無詮雑費悉相省面々分限ニ応し人馬兵器等相備、格別之　御尊慮空敷不相成弥以御公務不被為欠様可被相励候、此旨共ニ被行其意中ヶ間互ニ申合組支配へも頭々能々可被及教誡候事、

寛政十年戊午正月廿一日

「五二」(朱)恭定様御代学校御普請成就、文武修行弥可相励旨被　仰出候事、

文武之芸修業之儀ニ付而ハ申年巳来当年迄十四ヶ年彼是御世話被成下、猶更此度修行果敢行ニ相成候様学校内諸稽古場一纏ニ御普請被　仰付候処、畢竟ハ面々御教諭を守人品相嗜諸芸致出精御用ニ可相立人ニ御取立被成度　御尊慮

ニ候得は、一己々々は不及申於父兄等閑ニ可相心得義ニ無之候処、大勢之内ニハ不心得之者も相聞諸稽古場へハ祖先之祭事、或ハ父母之悉(急カ)病等を申立相断遊行等相催、又ハ御日柄ニも殺生ニ罷越候類も相聞、不心得之者ハ左迄之事ニも不存罷在候儀と相見候得共　上へ偽り祖先をなミし父母を欺き候ニ当り、一己之不慎は申迄も無之父母之教誡忽緒(諸)故之義と相見候、婦女子之姑息ニ而歳取さる内々稽古事ニ気を為詰候而病身ニ致候而は不相成候間、一向心任セ之方宜なとゝ申忽緒ニそたて候々自然と子共(供)も惰弱ニ相成空く年月を費し、修行時節を取失ひ年長し候ニ随ひ了簡出段々令後悔(梅)俄ニ修行存立候而も、幼少々不仕込業ハなつミ勝ニ而、其上年ニも恥候心有之存分之業も成兼、往々家督跡式之節は小普請ニ相成、悉皆姑息之情々子ニも恥辱を為受候儀ニも相至候而ハ父母之過と申者ニ而候条、屹度相心得幼少々不絶教諭を加ひ、学校ハ勿論諸稽古場師範役附之者申聞候儀を等閑ニ不相心得堅相守候様ニ常々為申聞　御主意行届候様可致旨被　仰出候事、

享和元年辛酉九月廿九日

「五三(朱)」恭定様御代日新館童子訓御編集被成其意を会得致候様改而被　仰出候事、

学校御再興以後数年間諸生教導之筋色々　御心被為尽、日新館御造営をも被成下格別之御世話も有之、何れも無油断諸芸相励上達之者も粗相聞候、乍然只々書を読芸ニ達候而已ニ而孝悌実行之筋疎ニ而ハ人として人ニあらす、依而此度日新館童子訓といへる御教訓之書を御編集被遊、孝友睦婣任恤を時俗相応に幼年之者迄も日用行事ニ相成候義とも御撰被成候而、大小司成司業を始学校執事之面々へ御渡被成候、依而は一己之慎行事ハ申迄無之諸生平生之行事ニ相成候儀ハ、右童子訓之趣不背様令教導諸芸をも不怠様相励し、尤出精懸り諸生へも一部ツヽ被下置旨ニ候間誦師大小什長とも組合之内向へ銘々立入、平日之身持慎方を始内行之善悪得(篤)と及見聞、若不心得ニ而不相守者有之候ハヽ深切ニ申諭し、猶父兄へも申談幾重ニも教諭を加ひ、夫(を)とも不用者ハ御教化を妨る輩ニ候間父兄迄も屹度被　仰付方可有之候条、不差控学校奉行へ相届候様被　仰出候、尤教育之

儀ハ幼稚之砌ゟ漸を追而しつけ習之、不覚善ニ化候様ニ無之候而ハ長キにハ堪かたく、増而終身行遂候義ハ甚難き事ニ候、申迄も無之子共(供)ハすなほにして善き事ニも悪き事ニも移りたく、人のする事をまね候ものに候得は物心不附頃ゟそれ相応之業を覚させ、かりそめにも信義を不失いつわりあさむく事をせす、かたましき心をこらさる程に教育候得ハ、自然と心も貌もすなほにて御教諭を守り、労せすして徳行に進ミ芸能に達し国家之器用ともなり　上之御用ニ相立、其身も栄えて能父母を養候ハヽ此上もなき忠孝と申ものに候、右之仕付は専ら父兄之厳と緩とに預る事ニ候、併父兄之身ニ而もあからさまに自分之孝を尽セ悌を尽セとも難申事ニ候得共、此度右之通被　仰出候、童子訓之　御主意日用之行事ニ不違様慈愛を本とし督責厳成時ハ子弟之人となり正しく其材を成者ニ候得は、誦師大什長幷什長へ懇に相頼一同教誡いたし心得違ひ無之様得と父兄へも可申聞旨被　仰出候事、

文化元年甲子四月廿一日

「五四」(朱)御当代兵学修行之儀ニ付被　仰出候事、

御軍役之儀　御先々代様　御尊意を以当御流彼(岐カ)ニ被転、武講をも被相設武役之面々兵学修行被　仰付、役義専任之廉々相心得居不時変之節聊手支等無之国家之御用ニ被相立度彼是御世話共有之候処、近頃兵業至而微々ニ相成欠席断も不致族有之歟ニ相聞候、畢竟無人等ニ而自然と右体ニ至候儀も可有之候得共、申迄も無之治に居て乱を忘さるハ武家之本(ママ)ニ有之、既ニ蝦夷地之変も相起り公辺ゟ御沙汰次第御人数可被差出義明日ニも難計候、併此度当前之面々不日ニ用意相整御跡備之者迄も心懸候向も相聞御悦　思召候、此上ハ出陣摂戦之次第面々任とする処習熟致居候義第一之心懸ニ候、学ひ得候者も怠候ヘハ不束ニも相成儀、兵学ハ吟味を積候義専要ニ有之、且学級進されハ兵道之意を得候事も不相成儀ニ候間、此節ゟ他ニ不拘致出精御代々之武備御世話有之儀空からさる様相心得修行可相励旨被　仰出候事、

文化四年丁卯七月朔日

「五五」（朱）御当代頭役之者組支配之者取扱方之義被　仰出候事、

但、頭無之役々ハ中ケ間互ニ申合、別而先輩之方ニ而心を付候様被　仰出候事、

凡而組支配風儀之興廃は専頭役心入之精粗ニあり候義勿論ニ候条、面々一己を慎ミ身を以是ニ先立、聊偏頗なく公平ニ取扱自然不所行心得違之者相聞候ハヽ不打置厚く教誡を加ひ、或ハ何か出入かましき筋出来候とも初発之内取締是を沙汰し、事不引立様常々懈らす心を処すへき儀ニ候処、上之御苦労に相成其者終ニハ重き蒙御所当候段、畢竟頭役之者共御奉公筋等閑故之儀と思召候、以来は組支配之内右体之儀を以御咎方被　仰出候節頭役之者兼而取扱忽緒之段夫々ニ可被　仰出候条、此旨屹度可申聞旨被　仰出候事、

文化六年己巳十一月廿三日

「五六」（朱）御当代御参府前士風之儀ニ付被　仰出候事、

此度　御参府被遊候得は　御入部迄は御間も有之儀ニ候処、　御幼年之御時節とハ申永き　御留主之儀不残御案し被成候、御家来一統別而相慎志を立大切ニ御奉公可致此節ニ候、士は農商之上ニ相立縦令鄙賤之業致候ともに士之節儀をハ決而不取失様益志操を磨き可相励義ニ候処、若不所存之次第於有之ハ重き御所当可被　仰附候、面々御代々之被　仰出を守り風俗を嗜謹慎ニ相勤、頭役之者ハ旧冬中委曲被　仰出候通組支配之者深切ニ取扱、猶又不怠可及教誡旨被　仰出候事、

文化七年庚午三月廿八日

「五七」（朱）御当代学問之儀程朱之学流へ被相復候節被　仰出候事、

文武之諸生共孝悌之風を励諸稽古出精可致旨御参府前改而被　仰出候通定而不相弛義ニハ可有之候得共、此度　土津様御信仰被遊候御学風ニ被為基修行之矩をも被相定候ニ付而は、別而一同志を立士道を嗜忠信篤厚之風を励ミ、童子訓及六科糺則に　恭定様厚御教導被成置候趣ニ随ひ土津様御編集三部之御書をも会得致実用之財をなし可申義と　思召候、兼而被　仰出候通一念之志す所厚薄大小ニ

ゟて往々賢不肖わかるゝ事ニ候条、幼年ゟ心懸実学を以徳ニ達候様兼而不怠修行致、御家中子弟之風儀著しく相成候段重而　御下向之節　御覧可被成と　思召候、大小之司成を始文武之役付とも此旨を存し実意を以教導いたし、儀(義)気を養ひ士風を引起漸々徳行之筋へ導候様可致旨被　仰出候事、

文化七年庚午十一月九日

「(朱)五八」御当代武備教練兵学修行之儀ニ付被　仰出候事、

御軍政之儀　御先々代深厚之　御尊慮を以当御流岐ニ被成替、武講并教場被相役(設)武備之筋細々御世話も行届、御武威列国ニ相聞　御幼年之御時節ニ候得共蝦夷地御固を始、相州大筒台場御府内海口第一之御備重キ御用向永久御引受之被為蒙仰候段、畢竟御家来重軽共ニ兼而武道ニ心を用ひ相励候故之儀と武門之御規模此上もなく　御満悦ニ　思召候、依而ハ此上猶以　御尊意を被為継武備教練之筋益御引立被成度　思召候所、此末武講教場を始夫々之修行方麁略ニ相成、万一臨時之節欠乏等有之御手支ニ相成候而は　御代々之御名誉を被為損候而已ニ無之　公辺へ被為対決而不相済義甚以御大切之義と　思召候、依之猶又此度武講教場之矩則御増損之上被相定候条、以後長立役々ハ勿論其余数代承恩之面々軽輩ニ至迄厚此旨を存し、和融を本として各職掌を講習し一同志を立実ニ国家之為修行可相励旨御意ニ候事、

文化九年壬申正月九日

「(朱)五九」御当代学校諸士風儀可相励旨被　仰出候事、

文武之芸修行方之儀ニ付而ハ是迄度々被　仰出も有之一統兼而弁居候儀ニ候間、風儀を励ミ諸事実義廉直ニ可心懸儀、且四年以前午年中　御参府之砌改而被　仰出も有之、永々御滞府ニ付而ハ別而忽緒ニ不相成様一向ニ出精相励、面々器を成し往々御用ニ相立候心懸専一之義ニ候処、諸生之内ニは不心得之者も有之彼是故障等申立欠席致候者も有之歟ニ候、壮年之節遊惰ニ日月を送り一度修行時期を失候得は再ひ取戻も不相成、年長ケ何程後悔致候而も無詮義、其節行当儀ニ修行致候とも幼年ゟ不仕馴業ハ相泥ミ一倍之心

苦有之、其上年ニも恥存分之業不相成生涯無能ニ而終候義士たる者之可恥義、且代々蒙　御厚恩なから士之職分不全義ハ恐入候義ニハ有之間敷哉、元ゟ一己之不心得より起候義ニ候得ハ幼年之内ハ専ら父兄教誡を厚薄ニ預候義ニ候間、父兄各身を以先立実義廉直之風ニ可致教導義ニ候、将又文武之学寮勤之会日近頃相なたれ出席致候者も無之由相聞候、畢竟ハ父兄之心得右之通故自然と子弟も相怠候様成行候事ニ可有之、尤父兄之怠ハ専ら頭々教導ニ預る義ニ候条、是又身を以先立組支配之面々を励し修行引立ニ相成候様可致旨被　仰出候事、

一文武之芸術修行方之儀ニ付而は毎度御世話も有之、且此度改而前条之通被　仰出候、諸生之風儀行跡慎方之儀ハ是迄幾度となく被　仰出も有之候処、一両年以来自然と風儀なたれ候哉如何之筋も相聞、且学校内諸稽古場へ罷出候而も中ニハ騒々敷かさつ体之者も有之、学校往来ニも組合不相纏ちり〳〵ニ相成、他之組合ニ入交り互ニ相戯れ悪口雑言等ニも及、或ハ飛あるき礫を打合往来之障ニ相成候をも一向不相講（構）、道を譲候義抔は差置辞義致候者有之候而もろく〳〵挨拶ニも不及、重き役柄之面々へも不知体ニ而罷通、或ハ疎略成会釈等致傍若無人之体ニ相見候者も有之哉ニ相聞、右体之儀は幼年之者致候事ニハ可有之候得共、幼年之者ハ何事も長者之する所ニ習ひ候ものニ候得ハ、年長之者身を以先立教へ導不心得之者へハ深切ニ異見を加へ、聊たりとも御教化之助ニ相成候様常々可心懸義ニ候間、年長之者ハ別而士風相励言行を慎ミ遜議を本とし朋友互ニ善を責、六科糺則并童子訓等之　御主意を相守り、不敬不礼は勿論之義人之前言かたく難行事ハ死とも士之為す間敷儀と堅くミつから戒め、人之不見所不聞所ニ而致候義ハ同しいたつらにても甚可悪事ニ候間、非義に不陥様常々心懸人柄相嗜、凡而年少之手本と相成候様可致義ニ候、依而ハ各始司業其外師範役付之面々兼而被　仰出候通、父子之思ひをなし欽慎篤実廉恥之風ニ進候様精々相尽し、無間断世話致し御教化行届候様可致候、夫とも（をカ）不相用者ハ御教化を妨ケ其分ニ難被成置義ニ候間、不心得之者有之候ハヽ不差控可申出旨被　仰出候事、

文化十年癸酉二月五日

「六〇」(朱)　御当代　御目見被　仰上候節江戸御屋敷御家中之面々風儀相励候様御箇条を以被　仰出候事、

一文武を励候事ハ士之道ニ候、然とも志卑劣なるにおゐてハたとひ諸芸に秀候とも士とハ難申義、専ら士風を励ミ礼儀廉恥を先とし義気を重ん(し脱カ)候義可為専要事、

一尊貴長者を敬不遜之風無之様可心懸、座席道路尊長之時(辞)宜致候共敬を主とし仮初ニも失礼之儀は勿論、作法見苦敷義無之様可致候、増而物陰ニひそミ或ハ見ぬふり等致候義は甚不宜候得ハ心を附るへき事、

一平日朋友之寄合ニも書を読武を講し、古今之物語武士之覚悟抔僉儀致候義ハ殊勝之風ニ候処、みたりニ会集に及ひ無益之雑談等致候義ハ士之いやしむへき筋ニ候、まして飲食等催候儀は如何成儀ニ候条、無用之会集不可致事、

一御家風を守り武士之本意を不失様兼而可相嗜、当地之儀ハ他邦之風易移場所柄之義ニ候間、身形言語等心を付身ニ付たる諸道具迄も虚飾を遠け質素を本とし　御家一統之風可相立候、軽浮之風を真似致し卑薄ニ馳候義於　御家柄ニ別而見苦敷、律義実体之風は美事ニ候条、他ニもたれす志操可相立事、

一御家中之子弟常々分格其程ニ応し付合、互ニ信義厚くし徳を切磋し仮初ニも軽き者と交り申間敷候、幼少之育柄悪きハ後年ニ成立之障と相成義ニ候条、常々遊戯迄も父兄之面々深く心を用可致教育候、士ハ暫も腰物身ニ離さゝる義勿論ニ候へハ、幼少ゟ心得違無之様教立、謡風遊惰を深く戒しめ、且軽き者ニなれ親しミ候得ハ自分侮を受候義ニも至り、事ニより士格難立儀ニも至り候得は不得心義も有之者ニ候条、平日之交をも心を可付候、尤軽々之者迚も軽んしいやしめ候義ハ有之間敷、面々之分格ニ応し応対致候様可相心得事、

一当地之儀は不絶他邦者共参会致し、親族縁者も他家ニ多く、且御門外は皆他邦之事ニ候得は、面々所行ニよりてハ　御家風善悪之境他之批判も可有之事ニ候間深く可相慎事、

一家内婦女子之風義ハおのつから家主之教誡ニ預る事ニ候

間、心を付たとひ御屋敷並たりとも猥りニ出歩行、或ハ町之湯風呂抔へ入候義は兼而御規定之通決而有之間敷、足軽以下は格別ニ候得共軽々之妻女たりとも夫々之分を不乱様可心懸事、

一御奉公道ニ常々心を尽し、倹約質素を守り中ケ間付合等之義前々被　仰出候趣猶以堅可相守事、

右条々可相守候、御家中風儀を励し子弟教育之義ニ付而は度々被　仰出も有之候処、此度　御目見被　仰出候ニ付而は耳目相改り候事ニ候条、猶以士風相励候様被成度　思召候、父兄身を以先立厚教育可致候、若不心得之者有之候ハヽ屹度御咎可被　仰付旨被　仰出候事、

文化十年癸酉五月廿三日

「六一」（朱）御当代御家中之諸士へ御手当被下成士風御教誡之事、

家中之侍共御借知以来追々及困窮候段　恭定様深く御苦労被成、如何様ニも御借知被相弛度　思召候所、不被為及其儀弥御内証向御難渋ニ被為至　御当代ニハ御賄扶持迄被仰付、其上蝦夷御用等をも被蒙　仰家中ニも及困窮候段無余義事ニ候、当年は　御入部可被遊之所面々身上難渋之上とハ乍申、士道廉潔之風義相衰可恥事を恥とせす、或ハ利を貪り卑劣なる事を致し、或ハ間近く被　仰出趣をも不相守顕ハに身上之不如意申述訴訟ニ及ひ、頭々においても夫なりに取扱打過候者も有之、或ハ何之子細も無之其身之不心得を以進退行迫候輩粗相聞、自然　御家風瑕瑾ニも可至と　御苦労ニ　思召、猶御下向後ニ追々被　仰出ニ而可有之候得共、此通ニ而は家中之為といひ上之御為といひ旁不可然候、依之　御手元始　上々様御用度迄此上省略節倹之御仕成ニ被　仰付、猶於其筋ニも考量之上当亥物成ゟ御借知壱分通之積米金を以来ル丑年迄御手当可被成下御尊慮ニ候間、面々倹約を相守り身之分限を省ミ士之義理を正し、仮令難儀ニ迫り候とも志を不失を以本意とし武士之道可相励候、　御主意之及と不及とハ専ら頭々之身ニ有之事ニ候条、其教肝要ニ候、若等閑ニ相心得士風を乱し身持不戒生ニ（甲斐性カ）而難取続輩ハ頭々横目之者共急度可申上之、可被及厳重之御沙汰ニ旨　御意ニ候事、

文化十二年乙亥三月九日

「(朱)六二」御当代御家中倹約之制被　仰出候事、

諸士之面々困窮之輩多風儀相衰、其儘ニ被成置かたく委曲　御尊慮之趣最前被　仰出通ニ候条、向後屹度覚悟を改め可申儀ニ候処、倹約之儀　御代々御懇ニ御教導被成　御当代ニも度々御沙汰有之、既ニ去秋も被　仰出候得共其守不全輩有之由達　御耳ニ候、御制法之趣うかと相心得不当事とハ　思召なから、其品士俗ニ応セさる所も可有之哉と、猶家居衣服飲食器財等前制之趣共御会儀之処、近比弥繁身ニ及ひ其上品ニより差支も相聞、永続無覚束との御事ニ而後年迄も守易不失其要様条目御議定被成、御書付を以改而被　仰出候間、其趣を会得し平生ハ如何ニも諸事質素簡略ニ致し、不時之御奉公無滞様可心懸儀侍之本意たるへき之処、覚悟悪敷身持おろそかにてハ御奉公も相欠候事ニ候条、自今以後厳重ニ相守一己々々之身上も御奉公之為と相心得、身を省ミ分を守り聊もゆるかせなる心得無之様頭々入念常々教誡尤ニ候、然ル上ハ風俗ニひかれ志を失ひ公法を後にし身持疎ニ而一分之守り無之身上難立之輩ハ、此上不届ニ可被　思召旨　御意ニ候事、

条々

一諸士之面々其身之廻りを簡略手軽ニし、家居衣服飲食器財等之上ニおいて無用之費悉省略セしめ、身上を倹約に御奉公之道ニおいてハ分限ニ応し人にも不恥相勤むへき覚悟可為専要候事、

一凡而武士は律義実体にして質朴壮健なるを尊ふ習ニ候、幼少ゟ其程ニ随ひ無造作ニそたち驕かましく無之様可心懸事ニ候、或ハ衣服之美麗を好ミ、或ハ飲食之厚味を嗜ミ惰弱之風ニ馳するは士之恥ニ候条其嗜可有之候、無益之飾を遠け身形言語等迄軽浮之風ニ不染様可致事、

附、小身ニ而召仕等不自由之輩は、屋敷廻り掃除等、或ハ持馬自身取扱、或ハ山野へ馬草取之類は苦からさる事、

一身上ならさる迚常ニ卑劣ニ賤しくむさき心持へからす、か様ニすれハ徳分ニ候抔手廻立之思案計致し、士之心を失ひ候事ハ不自由なるゟも大に劣たる心ニ候、其嗜可為

肝要事、

一家居幷門塀長屋道橋等修覆掃除不怠心懸へし、小身之面々は有来之外書院床違棚蘭(欄)間なけし等手之込たる作事、或ハ茶室ニひとしき普請等不入事ニ候、大小之面々迚も凡而外見を飾り無用之作事致間敷、新規之家作は可成丈ケ手軽ニ可営事、

一庭構ハ有来之外築山泉水等ニ数多之人夫を用、或ハ木石を集めてみたりに無用之財を費すへからさる事、

一諸士男女之衣服独礼以上御領中ニおいて紬類迄、下着ハ絹類を限とし其以下可用之、綿服一(ママ)ニ而も苦しからす、軍装火事装束或ハ肩衣野袴等は制外之外、

一御通之者以下ハ万に麻布木綿可用之、妻女同断、糸入之単羽織、或ハ袴羽織之絹裏、或ハ男女之帯絹紬迄月割以上用捨之、凡而御通之者以下幷軽々之妻女分に随ひ麁綺羅ニ致、諸士之婦人ニ紛敷体無之様厳密ニ可相守事、

附、御次医師幷御徒格迄之七拾歳以上、或ハ十歳以下絹類之下着用捨之、右已下迚も極老或ハ虚弱之小児は膚着ニ紬類用捨之事、

一拝領之衣服幷家中之又者主人ゟ為取候衣類は可為制外、雖然御紋付或ハ主人紋付之外は停止之事、

一大御目付大組物頭以上之隠居絹羽織免許之事、

一凡而婦人之衣飾美麗ニ及ふへからす、或ハ高料之染色或ハはやり之無益なる好等致間敷旨呉々も教誡を加ふへし、独礼已上之妻女といへとも帯ハ縮緬類を限るへき事、

附、召仕之下女不相応之綺羅ハ有之間敷候、襟帯等ニも木綿類之外堅停止之事、

一武具馬具分限ニ応し相嗜候義武士之道といへとも、其製作専ら実用を主とし、或ハ高金を費し外を飾り、或ハ花美無益之製作不可好、火事装束在来之外羅紗ハ無用ニ可致、革或ハ羅脅板以下可相用事、

一親族朋友ニ故ありて会集之時、料理ハ一汁一菜、酒肴ハ随分軽品両種迄を限とし美膳乱酔ニ不可及事、

一祭礼仏事之時神供霊膳ハ制限にあらすといへとも其分ニ応すへし、親族等其続柄を正し相招き、其余ハ可成丈ケ人少ニ手軽く可執行事、

附、仏事ニは飲酒弥停止之事、

一親族朋友之寄合ハ婚礼祝儀振舞父母祖父母之年賀、或ハ家督跡式初而之　御目見、其余重き勧賞を蒙りたる時抔に限るへし、大凡親子兄弟聟舅は勿論、同性(姓)或ハ従弟迄之続柄、或ハ故ある懇意之者迄会集苦しからすといへとも、平日之親疎をはかり可成丈ケ相省き人少にすへし、其余ハ停止之事、

附、男女紐解髪置上下着等軽き事ハ諸事手軽ニ致、其式可相整事、

一士は朋友仮初之寄合ニも武家之覚悟御奉公之心得抔咄合、酒食之設迄ニ及はすしめやかなる交当前之事ニ候処、故なく朋友之間ひそかに造作かましき飲食等相催し楽とする輩ハ厳敷誡むへき事、

一支配頭被　仰付候時其組を振舞、或ハ御役義被　仰付候時其中ケ間を振舞候儀停止之事、

附、先輩之仲ケ間心添相頼候者迚も、酒食振舞或ハ音物等堅停止之事、

一仲ケ間互ニ飲食之付合堅制禁之、面々深く相慎仮初ニも若輩之所行鄙陋成仕方有之間敷候、或ハ後輩之中ケ間へ酒食を貪り恥とセす、或ハ月番寄合等之節座向之設を始饗応等いはれなき仕来不相改、或ハ湯治并遊山川狩ニ事寄実は申合飲食ニ耽り、或ハ諸番所へひそかに酒肴を設け持参セしむるの類厳察(密)ニ遂吟味可被処其科事、

一親子兄弟聟舅ハ家内迄、其余叔姪孫之続迄ハ平日といへとも参りかゝり、時刻に至らハ軽き食事或ハ酒差出候而も不苦候、雖然互ニ申合可成丈ケハ斟酌すへし、其余は一切酒食無用ニ可致事、

附、隠居同士参り合候節、或ハ医師病用、或ハ所用有之相頼候者手軽き酒食可為格別事、

一師範を得候者内会之時食事差出苦しからす、会始会納其外故有之節ハ酒肴差出候而も不苦候事、

一音信贈答は親子兄弟聟舅ハ勿論、其余といへとも叔姪孫之続迄重立たる吉凶に限るへし、其外たりとも祭事仏事之節焼香之ため参候者死者之続於有之ハ神前仏前へ軽き供物ハ可為格別事、

一凡而贈答之品は可成丈ケ手軽之品取遣致候様申合、大身たりとも軽き樽肴之内一方を用ふへし、物を薄ふし情を

厚ふする之美風を慕ひ、まつハ庭前之菓物前栽之品或ハ山狩川狩之品等を用（ふカ）へき事、

附、婦女子常之往来ニ可成丈ケ手土産持参無之様可申合事、

一内会相頼候師範へ之謝礼、或ハ医師へ之薬礼、或ハ用事相頼候者へ謝礼之進物ハ其程ニ応し可相贈事、

附、其頭或ハ支配之者或ハ仲ケ間之贈答一切停止之事、

一賄賂之音物ハ旧来之制禁ニ候条弥可加謹慎、凡而賄賂ニ紛しき進物は聊たりとも一切可禁之、是を受る者ハ勿論相贈候儀其心ニおいて深く可恥事ニ候間堅可相慎事、

一江戸勤番往来之節親子兄弟聟舅之間餞別答礼ニ至而手軽き品持参之外は、仲ケ間或ハ其頭并支配之者等土産物一切停止之事、

一嫁娶之規式申合簡略を用ふへし、御定之制ゟ決而越すへからす、再縁之時は諸事弥手軽ニすへき事、

附、金銀を縁女へ付申合候義停止之事、

一酒器家具或ハ男女懐中物煙草道具之類、或ハ絵賛墨跡床飾等を始無益之翫物花美高料之品不可求、凡而器物は用之足を以主とし質実在来之品を尊ひ、奢侈風流之品相用間敷事、

附、鉢植飼鳥之慰等深きに至り、志を失ひ或ハ倹約之敗ニ不至程ニ可心得事、

一婦女子髪之飾り麁末之品を用質素ニ可致事、

一三月之雛祭五月之のほり簡略ニ致すへし、小旗雛具等可成丈ケ手軽之品を用ひ其式之整迄ニ可致事、

一家中之又者衣服ハ勿論万事御制度ニ随ひ、決而驕ケましき無之様其主人々々ゟ厳可申付事、

一召仕之若党中間平生之減少用捨たりといへ共、不時之節は相応に召連候様心懸へし、軍役之家来を減置なから下女数多召仕候義は不覚悟たるへき事、

一倹約を勤る迚年始寒暑之尋問吉凶之慶弔等略する事ニハ無之候、其人之高下により直勤或ハ使之取遣等旧好不失薄情疎遠ニ不流様可致事、

一平和郭内往来之節若年寄以上立傘可為持、御勘定奉行新番頭已上其外千石以上之士常道具たるへし、大御目付大組物頭以上若党可召仕連、其余常上下之士若党勝手次第、

格役或ハ三百石已上之士一僕可召連、禄高或ハ頭立候輩無僕之体ニ而ハ倹約迚も不相応成事ニ候条可有心得事、

附、新番頭以下ニ而千石已上之士ハ常道具心次第ニ候、諸稽古場往来ニハ供立略候とも用捨之事、

一公私に付重立候節幷郭外へハ其程ニ応し供立相増可召連事、

右条々依先制削繁増簡潤色之被相定候条、永不弛様可相守者也、

文化十二年乙亥四月九日

「六三」(朱)御当代江戸御屋敷内倹約之義ニ付被　仰出候事、

一勤番常詰之輩御長屋住居之上ハ、一身之事は会津之御作法ゟも一入簡略質素ニ心懸急事之御奉公無滞様一大事ニ可心得事、

一衣服之制於御屋敷内ニは御広間向ともに会津同様相心得、紬類迄を限とし決而綺羅かましき義致間敷、軽々ハ別而麁服可相用事、

一他邦之者之応対たりとも御屋敷内ニおいてハ衣服之制御家法之趣可相守事、

一常詰之面々酒食之寄合会津御定之節之通可相心得、交代之面々とても同様ニ候得とも、在番中之事は自分之義別而質素手軽ニ可心得事、

附、勤番之輩は常詰或ハ他邦ニ親類縁者於有之ハ互ニ手軽き酒食用捨之、懇意之朋友も可為同然事、

一常詰之面々重き祝義寄合たりとも御長屋内において万之規式も難整事ニ候条、諸事弥致手軽ニ随分人を省き会集致一汁一菜之料理軽き酒肴両種を限とし、造作かましき振舞不可致事、

附、故有之他家親類之参会ハ制限ニあらすといへとも、平生は御家法之通可相心得事、

一仲ケ間付合之趣屹度可相慎、或ハ御長屋内ニ而密々仲ケ間ハ勿論他筋ニ而も御用申談候輩酒食を貪り、或ハ他出先において筋なき奢気張奢たる遊興を催候輩相聞ゆるにおいてハ厳密ニ遂吟味可被処其科事、

一乗廻遠足或ハ神社仏閣之参詣等他出之途中ニおいて手軽き酒食は格別、奢たる趣向可為無用、惣而私用ニ付他出

之儀御定之通厳可相守之、御用に事寄御門を欺き出入致候義ハ有之間敷事、其頭々横目之者屹度可相改事、

附、役柄ニ付無札之面々出入無滞といへとも、御門限も有之事ニ候間故なく及遅滞候儀ハ似合しからさる事ニ候条可有其慎事、

一御長屋内ハ不及申他出先きニおいて大酒乱酔堅停止之事、

右条々堅可相守者也、

文化十二年乙亥四月

「六四」（朱）御当代　御入部之節御家中御領中へ被　仰出候事、

御代々不相替会津へ　御入部被成　殿様忝御大慶被遊益被励　御忠勤万之御仕置御沙汰可被成　思召候、依之諸士及農工商賈迄面々其身を慎風俗可相励事、

一諸士之頭を始凡而長立面々平日之教別而大切ニ存、旧来之御作法謹而不可令紛乱、万事私なく致差引其訴訟道理於有之ハ申達、不所存之者ハ教諭を加へ理不尽之輩ハ急度可申上之、大小之諸士侍之道無油断武士之心得聊も不吟味成儀無之様深く心を用ひ、偏ニ忠正実儀之者を励し利用之為に廉恥之操を不失様急度可心懸事、

一学校之教は人倫を明にし治道之根源風俗盛衰之所係也、倫理之道を講究し、文道武芸を習ひ、子弟之教幼少より大切ニ相心得、実用之修行肝要存し弥無怠会集可致候、

土津様聖学御尊信被遊　御遺意ニも学問相嗜とも種々之書取扱迄ニ而之儀理之学問薄く候、其心懸可為専一との　御旨ニ候条、益其御遺風を慕ひ専ら可励実学事、

一武備教練之筋益不可怠、治に居而不忘乱ハ為武家之本旨ニ候間、人馬武器之嗜不時之心懸聊も不可存疎略、事ニ行当り不覚を不取様ニ常々覚悟可致、尤出陣接戦之次第ニおいてハ其任とする所を習熟し吟味を積候ニ無之候而は事ニ望不束ニ相成事ニ候条、弥兵学ニ力を用へ（ゐカ）或ハ武芸之講習或ハ部伍之進退、或ハ貝太鼓之業足軽共弓鉄炮御旗稽古等先制之通無怠慢可練習事、

一諸役人共大小之庶務右制度ニよりて遵行之無滞埒明之正路潔白ニ取行ひ、利害之為に道理を狂す諸勘定諸吟味不可怠、勘定所は用を節する之要所ニ候間明ニ出納之度を正し、就中御預方始町役所郡役所公事所ハ御政事筋之大

成所ニ而下民之懇苦(困)すると安堵するとは其役人之可否ニ預る事ニ候条、工夫を尽し民情を察し上下之情不塞様諸事公平ニ可沙汰之、尤公事裁許之筋不可及停滞事、

一不寄何事ニ御政道之筋欠失或ハ御為と可相成品心付候儀有之ハ、聊も無遠慮家老共へ相達可申上之、或ハ他ニ向ひ私及批判或ハ秘計を廻らし内訴すへからさる事、

附、諸役所執行之筋において其下役小役人に心付候品有之ハ、仲ケ間へ申聞長役へ可申達之、若其意於難達ニは横目之者を以家老共へ可申出事、

一公儀之御法度は勿論　御家之御法令其身にかゝる程之事ハ随分無遺失様入念弥可相守之、御教令之及と不及とハ頭々存入之厚薄ニ有之事ニ候、其時計ニ而忘たる様ニ而は組下ニ而も可有油断候間、心懸ケ切々為申聞之無怠可加教誡事、

一家居衣服飲食器財等益倹約を守り私之奢不可致、貴賤各其分を守り僭上之風可禁絶事、

一諸士諸奉公人器量他ニ勝れ文武之材有之者、或ハ武士之心懸ケ衆人ニ抽て志操正しき者、或ハ何儀ニよらす人品心立格別成者、其外一芸一能ニ名ある者等其頭横目之者家老共へ達し可訴之、其品ニ応し御撰挙可有之事、

一農工商賈おの〳〵其業ニ相安し其道々ニ精を出し、惣して手くろふ手抜似セ物売抜〻売等之不直成事ハ弥是を禁し、国用不差塞様其教可為肝要事、

一四民之内衆に抽て忠義成者、或ハ孝子節婦諸善行之輩、或ハ農業功者ニ而衆ニ勝れ一郷一邑之大益ニも可相成者、或ハ細工秀御領中之調法ニ成者、或ハ社務神道出精之社人戒行道義殊勝之僧侶、或ハ医学療術秀逸之医師等有之ハ、其頭横目之者心を付家老共へ可達之、随行跡可被行其賞事、

一大小之諸士諸奉公人或ハ町在郷之所役人迄其役ニ精誠を尽し勤方他ニ勝れ候者、或ハ其支配之筋へけやけき功作有之者、或ハ旧功有之いまた不顕之輩等其頭横目之者見聞之品家老共へ相達可訴之、其品に応し可被及勧賞之御沙汰之事、

一請謁によりて推挙ニ及ふは上下之為を不存之心たるへし、不実之濫訴を企て人之賞録を請求るハ私恩を立るゝ所ニ

致候、或ハ何義ニよらす訴之内如何と存候義も組下之おもわくを兼其儘ニ取次之、（或カ）式ハ主人ニ頼もしく思はれん事を欲し当らさる訴ニ及ふ者ハ、皆私を以公を妨ケ大ニ御政道之害ニ候条厳敷可禁絶事、

一賞録を貪り求るハ士之醜行たるへし、覚望之心さわかしく或ハ権門ニ奔走してひそかに其力をかり、或ハミつから其功をてらふハ卑劣之至也、謹而其正操を可相守事、

一諸頭諸役人とも或ハ御為ニ成候儀を心付なから同僚ニ遠慮致し人にもたれ、或ハ後難を恐れて不申出身構有る之類ハ柔弱成義有之間敷筋ニ候、尤我意之議論は弥可相慎事、

一犯法者不可宥ハ　御家訓之旨也、大小之御家人之内自然御奉公を疎にし其務ニ相怠り、或ハ御法度不相守、或ハ姦曲貪利之輩、或ハ士道を失ひ男道之恥辱を受候者、或ハ御奉公道御後闇儀有之輩并町在村之者家業ニ相怠り御法度を背きたる者ハ其頭横目之者連々試シ急度可申上之、糺其軽重可被処罪科事、

一鰥寡孤独は不及申貧人乞食類迄一人たりとも不及飢様其筋之者心を付憐を加へ、極老之男女不洩様改之老養貧人扶持先規之通可宛行事、

右之条々此度　御入部ニ付被　仰出候条、頭々并支配之者迄謹而致承知之可存此旨者也、

文化十二年乙亥五月廿八日

（朱）「六五」御当代御軍役之儀ニ付被　仰出候事、

軍役之儀ハ　公務専一之備ニ候故ニ　御家訓を始　御代々重き命令有之、武役之輩は勿論其余之役々迚も聊等閑可心得筋無之、会津大小之諸役人ハ多分留主之備ニ差向、大節（切）之領地守衛ニ致置、将又表備人数を募候節は、他邦へ出勢申付儀も有之上ハ面々兼而其覚悟無之候而は不相成、尤相州表ハ重き備場之儀江戸屋敷迄も在府在邑時ニ寄手配之品有之ニ付、猶又此度　御祖先之御遺意を継内外之備組家中軍役之定并不時之節心得方之条目等先制ニ因り改而申付候、申迄なく　御代々武備之筋厚く　御心を被為尽候段も畢竟公儀へ之　御忠勤被為尽度との　御尊慮ニ候条、近習外様之諸士諸奉公人共ニ一同深く此旨を存し、面々志

を立治乱之用度不差支様可相勤者也、
文化十四年丁丑六月朔日

「(朱)巻三」
「(朱)六六」諸士諸奉公人之御作法、

享保十五戌年二月廿七日
一病気之面々七八ケ月も相煩御奉公難成ニおいてハ小普請料可差上事、

文化十酉年閏十一月廿六日
附、両三年も保養を加ふるにおいてハ其程も可相分、其身廃疾同然にして悴幼少之輩ハ格別、左も無之ニおいてハ可被遂御吟味事、

貞享三寅年十一月十日
一諸役人ニて役儀不得手之者ハ元役ニ可被相返事、

前々よりの例
一隠居は七十歳以上可被　仰付事、

元禄十四年巳八月廿八日
一御役儀被　仰付候時暫も不相勤恣ニ御免之願ニ及候ものハ仮令神文を以願出候とも容易ニ御免被成間敷候、暫く相勤候上弥以其筋難相勤ニ相決候ニおいてハ可為格別事、

享保八卯年五月廿二日
一少々之病気或ハ不得手を申立辞役之願申出候義不当事ニ候、年寄或ハ病身にて顕然ニ勤兼候義ハ格別、少し之病気不得手を以て願出候者取上間敷候、其内不得手之者ハ従上御免被成候ニて可有之事、

前々ゟ之例
一番代ハ五十歳以上可被　仰付、右年齢ニ雖不至病気必至と難相勤ニおいてハ御吟味之上可被仰付候事、

元禄十四巳年十月十九日
一番代之願差出候ハヽ其頭々遂吟味、永勤不相成体聞届候上取次御家老共へ可申達事、

享保十五子(ママ)年三月九日
一無給ニて御奉公仕度願取上間敷事、

元禄十六未年十二月九日
一諸士之内甚及困窮御奉公難成者ハ、知行切米被　召上借金皆済迄ハ上知之内を以少分之御扶持方被下之、或ハ居

宅或ハ町在郷ニ可罷在、猶取つゝきかたきにおいてハ永代之御暇可被下、品ニより初ニ御暇被下候義も可有之事、

享保二酉年七月四日

一七十歳以上ハ番代之願ニ不及直ニ隠居之願可申上事、

明和四亥年三月十九日

一芸術或ハ家業を以て御奉公致候者ハ偏ニ其家業を可励、或ハ其業を疎ミ他役を願、或ハ嫡子不器量之趣申上養子ニ遣し他筋之御奉公を願ふの輩ハ頭々ニおいて遂吟味可及教誡事、

前々ゟ之例

一諸足軽諸同心等辞役之願不可取上、雖然御奉公道或ハ役弓銃等ニて致怪我候もの頭々見聞之品願出ニ於てハ可為格別事、

寛政九巳年正月晦日

一諸足軽頭々吟味之上召拘(抱)候時ハ其人故障之有無御祭事役所へ可問合事、

寛政八辰年十二月廿四日

一軽々之者共御奉公之筋精出一己器量次第昇進之者ハ左も可有之事なから、其身勝手之筋を以差したる病気ニも無之暇を取、逐而本復之由を以格式宜き者之方へ養子ニなり、或ハ勝手宜方ニ新拘ニ相成候義ハ不届之事ニ候、頭々厳敷令教誡遂吟味不筋之訴取上間敷事、

享保酉(ママ)年十一月十二日

一軽き奉公人之子弟召拘候節ハ家中へ奉公致事馴候もの可召拘事、

附、都而軽き者上下着候類之子弟たりとも奉公願有之者ハ先つ家中へ奉公可致事、

文化十四年三月廿八日

一軽々之者病気ニ付暇為取候跡へ悴召拘候後、右暇取候者他筋ニおいて召拘候義、或ハ養子ニなり候義共ニ暇取候後十ケ年過候者ニ無之候而ハ不相成事、

文化三寅年九月十六日

一御給分を地方ニ御振替被下度願ハ月割与力以下之者取上間敷事、

「六七」(朱)継目或ハ嫡子養子等之義ニ付御作法、

前々ゟ之例

一知行取之諸士嫡子之御目見ハ御台所頭以上之悴十五歳以上可被　仰付、尤　御目見不仕者へハ跡式不被下候事、（元禄十六年未十二月廿八日　宝永五年三月十三日）

附、嫡子　御目見願出其親病死ニおいてハ可為格別事、

一嫡子死次男を置三男を嫡子ニ不可立、雖然次男御奉公難成体之者ハ其次第を以可訴出候、一子病死後嫡孫幼少ニて養子願出候者ハ六十歳以上ニ無之ハ取上間敷事、（享保十六亥年五月十二日）

安永元辰年七月五日

一切米取之面々御擬作差上其子新ニ被召出候義ハ嫡子ニ不限次男或ハ三男器量次第可　召出候事、

同

一凡て芸術を以被召仕候者共若嫡子ニて家芸出精相励候而も実ニ相続難成体之者ハ二男三男之内相続可被　仰付、右嫡子外ニ芸能何そ相勝候義も有之候ハヽ其芸能を以て被　召仕候とも、又ハ他へ養子ニ遣候とも相応可被　召仕候、家芸も相続不相成外ニ芸能も於無之ハ養子ニ遣候而も被　召仕間敷事、

文化元子年六月廿九日

一月割与力共二代迄為差御奉公も不致者ハ三代目之継目ニ分格引下ケ甲賀格可被　仰付、其内早世ニして御奉公之間無之者四代目ニ到り右之通可被　仰付事、

附、文武之芸勝れたるものハ格別之御吟味可有之事、

享保四亥年四月五日

一養子願之義続き無之とも元来一家ニて当時取かわしも致候程之内ニて相応之者可相願筈ニ候、養子願之時右一家之内存寄之者無之ニおいてハ其次第可書出事、

同

一他人を聟養子ニ致候ハ同姓之内養子等ニ致すへき相応之者無之時之事ニ候間、同姓を差置他人を聟養子ニ願間敷事、然とも同姓之内養子ニ可仕筈之者病身歟又何そ存寄有之ニおいてハ其訳を立他人を聟養子願候ハ格別之事、

寛文四辰年九月

一隠居又ハ御擬作差上候節其身御奉公之次第独礼以上竪帳、（明和四年四月）

其以下ハ横帳ニ調之委細ニ不洩様可書上事、

附、勤中病死ニおいてハ一類共之内其子供ニ御奉公之品委曲相尋、其者之子孫等相改可書上事、

天明八酉年（ママ）八月

一養子之儀他姓之者願出ニおいてハ、人柄ハ不及申文武之芸年齢相応ニ嗜み出精之者ニ無之候てハ容易ニ被任願間敷事、

寛政六寅年正月廿七日

一隠居之願幷御擬作差上悴被召仕度願或ハ死後由来書一類共ゟ差上候節、其悴文武之芸術修行之品々師範之者へ相断候上可書上事、

前々ゟの例

一諸士諸奉公人病死之節ハ病死幷其悴幾日迄忌中之段相届、尤悴幾日忌明之段可相届事、

享保七寅年七月

一養子致候者若養子を返候義有之時、最前致養子候以後実子出生候とも其実子家督ニハ被　仰付間敷候間又養子可相願候、然も返（と脱カ）候養子行跡悪敷品在之歟、病気ニて決して御奉公難相成義ニ相究り養子返候ハヽ、頭々得と承届実方へも相尋無相違候ハヽ其品申上、頭々ゟ実子を家督ニ可願出、養子軽き病気又ハ養父之心ニ不叶一ト通り之義ニて返候ハヽ実子ニ家督被　仰付間敷事、

附、其実子御奉公被　仰付間敷との義ニハ無之、分知又ハ他へ養子抔ニ遣候義ハ可為勝手事、

元文三年五月十六日

一実子無之者養子致候後右養子病身ニ相成御奉公可仕体ニ無之候ニ付双方願之上実方へ戻し、年数も無之内養子ニ遣度段相願候段有之間敷事、

附、差戻候後病気快く、最初之養父も前方病気難見届御奉公も難相勤体故差戻候へ共、年月過病気快く相見御奉公も可相勤体ニ候ハヽ医師抔へも相尋候上、今程ハ気分快く御奉公可仕体ニ相見候段実方最前之養父ゟも頭々へ可相届置之、其上ニて実方ゟ右之者相続等に相願候義、又ハ他へ養子ニ遣候とも年数十ケ年以上ニ候ハヽ其節之様子次第可被任願事、

宝暦六子年四月十五日

一嫡孫承祖相願候節嫡孫養子ニ相願候類も有之候処、嫡孫承祖と可相願、寛政四子年九月御切符取同断之事、

文化元子年九月

一上下免許以下足軽同心共〻月割与力以上へ養子ハ、同姓
或ハ続柄によりてハ吟味之上可取上事、
附、月割与力ニ準候格好之者其人ニより吟味ニ次第可
有之事、
前々〻之例
一継目之節其悴平日之行跡御吟味之上、左之文武之芸之内
一も無之者ハ小普請組被　仰付猶修行可　被仰付、番代
といへとも可為同断事、

新番組々外之士以上

学問　講釈所下等以上
兵学　出師免許以上
筆道　上等以上
神道　講談免許以上
礼式　九等以上業秀候者
和学　得業生
算術　九章卒業以上
弓
馬
槍
刀
鉄炮
柔術

右弓術以下之内試業之上極或ハ極ニ準し候席へ進候者、
但、右之内七百石以上ハ学問一等、兵学ハ練心胆練
銃頭教旗鼓之三篇返講済候者ニ無之候てハ小普請被
仰付候、三百石以上学問二等其余兵学同断、
但、兵学出師免許之者ハ学問二等ニ無之とも小普請
被　仰付間敷候、且又学問生得不器用ニて数年相学
候而も到兼候ものハ吟味ニ次第可有之事、

独礼已下

学問　一等
居合　極

以上

「六八」(朱)武備之儀ニ付御定、
慶安二丑年三月廿八日

一御近習外様共ニ俄ニ何方へ参候とも行当らさる様常々心懸可申候、明和八酉(ママ)年十二月六日御先手当前之者共他邦御私領ニよらす不時変有之節ハ早速可差越義ニ候条、速ニ発足罷越候様用意可罷在事、

附、時ニ寄御人指之義も可有之事、

文化十四酉(ママ)年六月

一病気小普請組之者共不時之節ハ陣代差出候様被　仰付候義も可有之事、

寛政元酉年

一前中後御備之交代ハ毎年番頭新番頭御家老組々頭〻相備共ニ取調可書出之、御備交代之日並ハ　御参勤年ハ物頭共江戸勤番相済下着之翌々日　御下向年ニハ　御着城翌日たるへき事、

文化九申年二月廿日

一毎年三月〻八月迄之間於三ノ丸諸隊教練可致単合二隊一ケ年之稽古五日ツヽたるへし、日割之内初一日ハ二隊之甲士一隊ツヽ交番ニ足並稽古致、中三日ハ弓銃隊六組ニて一隊ツヽ代合御備打稽古致し、後一日ハ甲士弓銃共ニ合隊可致稽古、但甲士足並御備打合隊稽古共ニ一日之返数三返ツヽたるへき事、

文化九申年二月廿日

一三ノ丸ニおいて一陣切之稽古相済次第毎年一度にて一大〻〻野原ニて一陣之合隊稽古可致候、其時御家老附御旗奉行も罷越稽古可致事、

同

一御本隊御家老附共御旗指稽古毎年四日ツヽたるへき事、

新規御議定

一毎年春秋御留主備足並弓銃之稽古可致役弓銃ニハ不及事、

文化九申年正月十一日

一表備鉄炮足軽共毎年四半打弐拾五放膝台十五放腰放拾放、御持筒之者膝台十放弓足軽的前百本持満三十本ツヽ為役稽古可致事、

文化十一戌年

一弓組足軽共役弓之外二十放ツヽ四半役打可致事、

寛政已来追々御議定

一隔年ニ一度ツヽ於大野原追鳥狩可被　仰付、八月九日内

習十一日御番日もし雨天ニ候ハヽ十三日御替日之事、

天明八申年巳来追々御議定

一三百石以上之面々幷右以上之嫡子十八歳ゟ御流岐之兵学修行御定之通り可相心得、其以下ハ勝手次第之事、

寛政以来追々御議定

一左之役々ハ御定之通り武講へ出席兵学修行可有之、其余之輩とても余隙有之者ハ望次第可相学事、

番頭　新番頭　御家老組々頭

大組物頭　番頭組々頭　新番組々頭

御旗奉行　物頭　御家老附御旗奉行

御側　御側大御目付　大御目付

御刀番　御奏者番　御副将附寄合組々頭

御使番　御普請奉行　武具奉行

御目付　御家老附御長柄頭之勤被仰付候者

御留主備頭立面々

文化九申年正月

一武役長立面々兵学講習を以終身之業と致し専業之篇より返講可致、御近習勤繁多之輩ハ武講出席勝手次第ニ候へ共右同様相心得可相学事、

一御近習外様共役懸り之会業毎日両度之内一会ハ聴聞一会ハ返講と相心得、外様役懸りハ外ニ一会可罷出事、

附、御近習勤繁多之輩ハ宅ニて返講可致事、

一三百石以上之者幷右以上之嫡子ハ別而出精可相励、嫡子ハ二十歳ゟ可致返講候、会業三度之内一会ハ返講会と可相心得事、

一少知之者といへとも単騎之心得無之候てハ不相済義ニ候間文武之芸修行之余独礼巳上之者ハ勿論子弟迚も勝手次第武講へ罷出兵学修行可致候、少知之者迚も新番組々外之士巳上ハ専武役へ被召仕候事ニ候間たとへ文武之芸極之業有之共練心胆之篇講習致し単騎之心得厚可致吟味事、

一武講へ罷出候輩不参之節ハ会業刻限以前可相断、万一間違ニて無断之者有之候ハヽ不打置役付ゟ早速当人ゟ令教諭、両三度ニも及候ハヽ不承置其筋々を以申達候様可取計事、

一許可之面々不及申学級相進候者武講出席心次第可致義ニ候処、長立面々出席有之候ハヽ組支配之引立ニも相成、

且先輩ニ而後学を導候得ハ修行之果敢行ニも相成義、一己研究之筋ニも候間不怠可罷出事、

一役懸り之内ニハ五十歳以上之者不弁舌等ニて人中ニおいて返講致候義至極難渋之輩ハ吟味之上返講用捨之、宅ニて可致返講事、

一御軍禁軍役定御備組御条目之類凡て御軍制之義は甚密し被置候義ニ候条、大切ニ致候義ハ勿論他へ不洩様可取扱、若猥ニ相洩候者ハ厳重之御咎可有之事、

附、鳥狩旗皷之合図を始進退懸引手都合之次第ハ他邦者へ堅可密置事、

「六九」（朱）学校文武脩行之義ニ付御定、

天明八申年已来追々御議定

一独礼以上之子弟幷御徒格以上之嫡子嫡孫迄、十歳ニ到候ハヽ入学致諸事其作法ニ随ひ可致修行、此年より筆道幷諸礼を可兼習事、

附、虚弱或ハ遠路ニて往来難渋之輩ハ其趣を相届十一歳ゟ入学可致事、

同

一十三歳ゟ望次第算術を学ひ、十五歳ゟ新番組々外之士以上之嫡子ハ不及申二三男迄弓馬槍刀之芸可致修行、右以下ハ望次第可致稽古事、

同

一二十二歳より二男以下諸芸之出席心次第、但四書五経之素読未済文武之芸極無之者ハ勝手次第不相成事、

文化三寅年九月

一三十五歳以下之子弟ハ凡て可任学校之差引事、

文化十三子年四月十七日

一三十五歳以上之諸生文武之芸術御定格ニ到候者ハ諸芸出席可為勝手次第事、雖然学問ハ修行（修身）之業等閑ニ可相心得筋無之殊更禄高之者ハ不怠様可心得事、

文化七午年十一月

一独礼以下二十歳以上之子弟学問一等ニ到り、或ハ武芸之内極有之者、或ハ書学ハ上等算術ハ九章之席ニ到候ハヽ諸芸之出席勝手次第たるへき事、

享和二戌年二月

一弓馬槍刀之四術究候者文武之学寮出席勝手次第之事、
寛政三亥年十月
一講釈所へ相進候諸生ハ諸芸之出席勝手次第、其内三百石以上之嫡子兵学修行ハ勝手次第不相成候事、
享和元酉年六月廿九日
一組外之士新番組以上之嫡子ハ槍術馬術肝要ニ相心得可出精、独礼以下之子弟ハ書算之芸別而可出精事、
天明八申年二月
一年割已下軽々之子弟ハ望次第南北学館へ致出席修行可有之事、
天明八申年ゟ追々御議定
一稽古小普請組之者共文武之諸稽古嫡子并相心得可致修行事、（原ノまゝ）
附、三十歳頃迄芸術未熟ニて難致出勤者ハ其次第御吟味可有之事、
文化二亥年（ママ）七月
一御在国中毎月十五日大書院ニおいて学頭之内御次講被仰付、大御目付大組物頭已上不残、右以下ハ御次詰合之内半々ニも可罷出、御城詰無之役々ハ一役壱人ツヽ、其余望次第聴聞可致事、
附、病気故障ニて難罷出輩ハ御目付へ可相断事、
享和二戌年以来追々御議定
一学校ニおいて講釈会読素読と三科ニ分ケ、毎月三会ツヽ御近習外様共ニ御通之者以上望之者ハ可罷出事、
附、武芸之義も其流岐々々之稽古場へ三会ツヽ可罷出事、
一毎月両度ツヽ、御家老共学校へ令出席学頭并諸生之講釈聴聞、其節御勘定奉行大小御目付を始御勘定組頭已上頭立候諸役人罷出可致聴聞事、
「七〇」（朱）家中物成并諸渡物成ハ居役金小普請料之御定、
享保十七子年
一御知行四ツ物成高百石ニ付
米方　七拾七俵壱斗
内弐俵壱斗　三口米
金方　四両壱分七匁六分八厘

内銀七匁六分八厘　三口米金ニ
金壱分　糠藁金

但、四ケ一米代金ハ金壱分ニ六斗弐升五合之積ニて弐拾五俵三斗之代糠藁金百石ニ付壱分、

一大豆油荏糯御成箇米之内を以、大豆ハ壱俵ニ付代米弐斗五升、糯壱俵ニ付米壱俵、油荏ハ四斗ニ付米壱俵之積りを以知行之高下ニ寄夫々被相渡候事、

一御切符高拾石ニ付

米方　拾九俵壱斗
内弐斗　二口
金方　壱両

但、四ケ一米代金壱分ニ付六斗弐升五合直ニて弐石五斗之代口米ハ米方計ニ而渡し、

前々ゟ例

一江戸御扶持之定

御近習扶持

百石　八人　百五十石　九人
（二百石　（三百石

（二百五十石　拾人　（三百五十石　拾四人
（四百石　（四百五十石　拾五人　（五百石　（五百五十石　拾七人
（六百石　（六百五十石　拾八人　（七百石　（七百五十石　拾九人
（八百石　（八百五十石　弐拾壱人　（九百石　（九百五十石　弐拾三人
千石　弐拾五人　（千百石　（千五百石　弐拾七人
（千六百石　（二千石　三拾人　（二千百石　（二千五百石　三拾三人
（二千六百石　（三千石　三十六人

但、何れも知行ニ付而ハ御定如此、其内役儀ニ寄候而ハ知行ニ不拘其次第有之、

常詰外様扶持

前々ゟ之例

百石　七人　百五十石　八人
（二百石　弐百五十石）　九人　（三百石　三百五十石）　十三人
（四百石　四百五十石）　十四人　（五百石　五百五十石）　十五人
（六百石　六百五十石）　十六人　（七百石　七百五十石）　十七人
（八百石　八百五十石）　十八人　（九百石　九百五十石）　十九人
千石　二十人

但書前同断、
交代外様扶持

前々ゟ之例

百石　五人　百五十石　六人
（二百石　二百五十石）　七人　（三百石　三百五十石）　十人
（四百石　四百五十石）　十一人　（五百石　五百五十石）　十二人

（六百石　六百五十石）　十三人　（七百石　七百五十石）　十四人
（八百石　八百五十石）　十五人　（九百石　九百五十石）　十六人
千石　十八人　（千百石　千五百石）　二十人
（千六百石　二千石）　二十三人　（弐千百石　弐千五百石）　二十六人
（二千六百石　三千石）　弐拾九人

但書前同断、
御知行駄賃雑用定

前々ゟ之例

百石　馬壱疋　上下五人内夫丸壱人
百五十石　同　上下六人同
（弐百石　弐百五十石）　馬壱疋半　上下七人同
（三百石

（三百五十石　馬弐疋　上下十人同

但、三百石以上乗馬為牽候ハ、雑用相渡し、

四百石
四百五十石　馬弐疋　上下拾壱人同

五百石
五百五十石　馬弐疋半　上下拾弐人同

六百石
六百五十石　同　上下拾三人同

七百石
七百五十石　馬三疋　上下拾四人同

八百石
八百五十石　同　上下拾五人内弐人夫丸

九百石
九百五十石　馬三疋半　上下拾六人同

千石
千百石　馬三疋半　上下拾八人同

千二百石　同　上下拾九人同

（千三百石

千四百石
千五百石　馬四疋半　上下弐拾人同

千六百石
千七百石　馬四疋半
同五疋　上下弐拾壱人同

千八百石
千九百石　馬五疋　上下弐拾弐人内三人夫丸

弐千石
弐千百石　馬五疋半　上下弐拾三人同

弐千弐百石
弐千三百石　馬五疋半
馬六疋　上下弐拾四人同

弐千四百石
弐千五百石　馬六疋　上下弐拾五人同

弐千六百石
弐千七百石　馬六疋半　上下弐拾六人内三人夫丸

弐千八百石
弐千九百石　同　上下弐拾七人同

三千石　馬七疋　上下弐拾八人内四人夫丸

但書前同断、

前々ゟ之例

一居役金御知行百石ニ付金弐分之割を以可差出、石切符御扶持方も御知行之割ニ直し其積を以可差出之、金切符ハ壱分ニ四斗之積たるへき事、

同

一追鳥狩幷勤番之輩ハ其年之居役金差出ニ不及事、

同

一小普請料ハ御知行百石ニ付金弐両之割ニ可差出事、

同

一御成箇御切符ハ翌々年三月晦日迄不受取者ハ流ニ相成候事、

同

一石切符金切符共ニ年割ハ壱ケ年三割月割ハ月々之割たるへき事、

同

一御扶持ハ正月ゟ十二月迄之分翌年三月十五日迄不受取ニおいてハ流ニ取計候筈ニ候、馬扶持同断之事、

同

一物成以前飯米差支候輩古米引越渡りハ二月十五日迄ニ御勘定所へ可書出事、

延宝二寅年三月

一士死而無後時ハ春三月之内死する者ニハ其年之知行不被下之、夏三月之内死する者ハ物成三分一被下之、秋三月之内死する者ニハ三分二、冬三月之内死する者ニハ不残被下之、葬祭之用奴僕之給金として其家人へ被下候事、

(朱)「七一」建馬之御定、

享保十九寅年三月十五日

一役馬幷御扶持馬或ハ建替或ハ払候時ハ翌月二日迄ニ大御目付へ可申届事、

元文元辰年六月廿九日

一御扶持馬新建幷建替之節御家老共へ可受一覧事、

寛政六辰年(ママ)閏十一月廿二日

一建馬地下へ相払候ハヽ役人共吟味之上売判を受取馬へ差添相払、郷村より牽入候節売判を取役人共へ可相納事、

同

一建馬他邦へ相払候ハヽ役人共吟味を受出判を取相払、他邦ゟ買入候ハヽ売主方ゟ入判を取役人共へ可相納事、

文化十一戌年六月十日

一乗馬ハ不絶乗責無之候而ハ不時之用ニも難立事ニ候、馬建之輩馬場へ不絶差出乗責可致事、

附、自宅へ不建置或ハ郷村相渡置、馬場も稀ニならて不差出或ハ飼方不宜乗責も不成程ニ而ハ武用之詮も無之、馬扶持受取候謂も無之事ニ候間、左候ハヽ其身ハ不及申其頭迄可為越度事、

享和二戌年十二月十三日

一郷村出役先ニおいて建馬致候輩ハ其趣兼て桜ケ馬場役付共へ可届置事、

同

一建馬無故馬場へ不差出者ハ一ケ月ニても馬扶持可被差留事、

一知行卑之諸士ハ新番組々外之士以上御切符といへとも建馬致輩ハ馬扶持可被下候事、

貞享二丑年九月公義御触れ

一馬之筋延候義停止之事、

文化八未年十月廿三日

一桜ケ馬場へ建馬差出候毎度其趣紙面ニ成とも役付之者へ可相届、且又乗手相願候ハヽ届之趣入会相頼差出候様可致事、

附、病気ニ候ハヽ如何様之病気ニて、誰得療治候と申趣共ニ書付役人共ニ可相届事、

寛政七卯年十一月五日

一御扶持馬相建候面々五十日迄馬不建厩明ケ置候ニおいてハ馬具御櫓へ可相納事、

「七二」（朱）御城中御規式之御定、

享和三亥年御議定

一年始之御規式ハ大御目付大組物頭以上并若年寄已上之悴長袴着用太刀目録持参、於小書院御礼申上御盃被下拝領物被仰付、平士ハ於大書院座列ニて御礼被為受、小書院ニ於て御流頂戴之事、

差上物

若年寄以上　御太刀馬代三百疋宛

御勘定奉行新番頭已上　同弐百疋宛

大御目付大組物頭已上并若年寄以上之悴　同百疋宛

拝領物

若年寄已上　錦五把

御勘定奉行新番頭已上　同三把

大御目付大組物頭已上并若年寄以上之悴　同弐把

同

一御流頂戴之義御近習ハ御納戸役、外様ハ無役組以上并大御目付大組物頭已上之悴弐人ツヽ、組外之士新番組以上并右已上之悴四人ツヽ、其已下独礼以上之父子六人ツヽ之事、

同

一御近習之面々同悴并御合力米を被下之医師其外御通之役人共元日ニ可罷出、外様之面々同悴外様御通之者共二日ニ可罷出事、

同

一御通之者ハ夜居之間、御家老附与力ハ時計之間ニ於て御目見之事、

前々ゟ之例

一正月十一日於小書院独礼已上御近習外様之父子御具足之餅被為頂戴之、大御目付大組物頭以上壱人ツヽ、御納戸無役組已上二人ツヽ、其以下四人ツヽ、御家老若年寄之悴悴（ママ）一人ツヽ、大御目付大組物頭以上之悴二人ツヽ、其以下四人ツヽ罷出自分取頂戴之事、

同

一御着城之御礼大御目付大組物頭已上并御小性惣代奥番壱人於御座之間御礼被為請、畢而於小書院独礼以上御近習外様之父子御礼可申上事、

附、御近習外様共ニ八人ツヽ、子共ハ若年寄以上之悴壱人ツヽ、御勘定奉行新番頭已上之悴二人ツヽ、其以下八人ツヽ、御礼可申上事、

同

一右畢而於大書院御家老附与力　御目見被　仰付、夫ゟ新番々所夜居之間長囲呂裏へ御通之者并居　御目見之事、

同

一五節句八朔之御礼右同断、但子共幷御通之者ハ　御目見無之事、

同

一惣而時ニ寄御規式座列ニて被為受候節ハ御近習は小書院、外様ハ大書院ニ並居御礼可申上之、正月十一日御近習は小書院、外様ハ大書院ニて御具足餅頂戴之事、

元禄十四巳年七月

一御規式之節御目付〻触次第早速大書院へ相詰順能く並居候様可致、若其場ニ到り当前之者不居合節ハ其次之者可罷出事、

宝永二酉年十月

一御規式之節うろたへ候もの有之作法不宜、取分ケ小役人或ハ子共之内多く相見候、兼而巧者成者ニ可為致稽古候、其上ニも不心得成者ハ其節ニ到御目付へ申達御座をも見習不調法無之様可致事、

前々〻之例

一冬至之日御家老若年寄迄御手自御熨斗鮑被下之、御側大目付迄於御前御小姓を以被下候事、

一御大老御家老若年寄御側之面々大御目付已上毎朝　御目見、左之役々ハ三日　御目見之事、

学校奉行　御軍事奉行　御勘定奉行

一左之役々例朝　御目見可申上事、

御奏者番　御刀番　御使番
御祭事奉行　御目付　御納戸役
御次番　御祐筆　御供番
新番組坊主頭

「七三」（朱）御礼申上候節差上物之御定、

万治四丑年三月廿日

一新規ニ被召出或ハ家督跡式被下候者三百石以上御太刀銀馬代、右以下六十石迄鳥目壱貫文、五十石以下ハ五百文たるへき事、

一御役被召替、或ハ御加増、或ハ席御進メ被下候節御肴代左之通り可差上事、

五百石已上　　御肴代五十疋

右已下百石迄　　同　三十疋
御切符幷御扶持取　　同　二十疋
附、御知行六拾石已上之者ハ差上物百石ニ可準、五十石以下鳥目弐拾疋たるへき事、

宝永六丑年十月

一大御目付大組物頭以上差上物御礼之節新番組麻上下着用之事、

前々ゟ之例

一番頭以上御礼側披露其外御奏者番披露之事、

同

一嫡子初而　御目見之時左之通可差上事、
御家老之悴　　御太刀銀馬代
若年寄之悴　　御扇子代百疋
番頭之悴　　同　五十疋
右以下　　同　二十疋
但、番頭以上ハ御肴一種差上悴　御目見之御礼可申上事、

同

一御切符御扶持新ニ被召出候者御扇子代二十疋可差上事、

「七四」（朱）御祝儀申上或ハ御機嫌伺之御作法、

前々ゟ之例

一御在国之節御近習ハ格役以上、外様ハ無役組以上月々両度ツヽ登城御機嫌可相伺事、
附、昵近（懇）之役は不及其義事、

同

一土用入、寒入、初雪、御発駕之前日、御着城之翌日、猪苗代御帰り、其外一宿以上御帰之節独礼以上登城御機嫌可相伺事、
附、病気或ハ故障等ニて不罷出者ハ其段御目付へ可相断事、

同

一御近習之面々御勘定奉行以上御焼火之間ニて御膳番を以相伺、其以下大御目付以上ハ四角囲炉裏ニて可相伺事、

同

一外様之面々大組物頭以上夜居之間ニて御家老共迄御機嫌

相伺、御家老退下之後ハ御膳番夜居之間へ呼出可相伺事、

同

一平士ハ御近習外様共ニ御目付を以可相伺候、昵近之役々ハ御膳番を以可相伺事、

同

一御着城之節幷御参勤御時節被　仰出候折、歳暮ニハ但廿八日独礼以上登城御祝儀可申上事、

同

一御城内ハ勿論御城近辺へ雷落候節、或ハ地震ニ而小壁落候程之節、或ハ御城下ゟ出火之節ハ御機嫌可相伺事、

正徳四年四月十四日

一御留主之節年始其外大立たる御祝儀之節ハ大御目付大組物頭以上便書を以御祝儀申上之、其以下ハ御家老宅へ参御祝儀可申上事、

享保八卯年十二月十六日附、故障有之難相越輩ハ其分可相届事、

前々ゟ之例

一御留主之節大御目付大組物頭以上寒入土用入ニ便書を以御機嫌可相伺事、

同

一臨時之事ニて御祝儀申上或ハ御機嫌伺候節ハ其時ニ相触候筈ニ候事、

「七五」（朱）御通行之節之御作法、

同

一御通行之節道具為持候者ハ鑓を伏セ、諸士及下々迄謹て下座致し、聊も御不敬之体無之様心を付可申、尤格子窓ゟ御行列透見不可致事、

附、大御目付大組物頭已上ハ御会釈有之候間其心得可有之、軽々召仕等之内御途中ニてうろたへ冠物をもはつさす翔走等致候而ハ御不敬ニ当る事ニ候間厚く可申付事、

明和六丑年六月二日

一御通行之節　御目見以上之面々御先ハ御長刀を目当ニ致し平伏、御跡ハ御道具御挟箱之辺ニて頭を上ケ候様可相心得、尤も頭を地ニはなし膝を突候迄ニ不及、御不敬無之様致平伏可罷在候、其以下軽々右ニ準し御不敬無之様

可相心得事、

一江戸表ニて御行列へ行懸候節ハ前条之心得を以送下座仕可罷在事、

「七六」(朱) 御城中之御作法、

一御在国之節御門出入明ケ六ツ時ゟ御夜詰迄、御留主は明六ツ時ゟ暮六ツ時迄、右刻限過候後ハ断無之者ハ出入不相成事、

附、出入無滞様御定有之役々ハ勿論定所之者ハ格別之事、

一御在国御在府ニ不限御用ニ付出入致候役人は格別、其余ハ西追手西中御門通用不相成、西出丸御櫓等へ武具納或ハ受取等ニ往来之輩ハ西中御門通用之事、

附、廊下橋通ハ御在国之節暮六ツ時過出入不相成候、御留主之節ハ断無之者ハ通行不相成事、

前々ゟ之御定

一品物御門出入之義ハ裏御門通可致事、

附、弁当番葛籠挟箱差替之衣服等ハ無断して御門出入致、御紋付之服幷其外之品ハ無断して御門出入不相成事、

貞享三寅年三月

一御城中ハ士共といへとも冠物不相成、甲賀以下高足駄停止之事、

文禄三午年五月(元カ)

一御留主之節当番之面々其父母夜中急病之節ハ、其筋々を以て御家老共へ申達候ハヽ、御門出入之義当番之物頭へ差図可有之候間其上ニて出入可致事、

文禄八亥年七月(元カ)

一夜居之間ニて列座之面々其外四角囲炉裏新番々所長囲炉裏幷詰所々々ニてたはこ呑候義用捨之事、

延宝三卯年五月十三日

一御城之諸番所ニて焚火停止之事、

前々ゟ例

一御城内ハ不及申両追手外之腰掛ニおいて煙草一切停止之事、

一御家中之面々登城之節供連之義左之人馬迄ニ可相心得、

其外ハ草履取壱人ツヽ之外不相成事、

御大老
　中小性　三人
　若党　三人
　草履取　二人
　挾箱持　二人

御家老
　中小性　二人
　若党　二人
　草履取　二人
　挾箱持　一人

若年寄
　中小性　一人
　若党　二人
　草履取　二人
　挾箱持　二人

大御目付大組物頭以上之面々但当番ハ格別
　若党　二人
　草履取　二人
　挾箱持　一人

新番組々外之士以上
　若党　一人
　草履取　一人
　挾箱持　一人

以上

（貞享五年）元禄元辰年六月

一三ノ丸内乗輿乗馬之通行幷冠物停止之事、

文化九申年四月七日附、諸士之鑓為持通候義或ハ駕ハつらセ馬ハ為牽通候義ハ不苦事、

前々ゟ之例

一三ノ丸内と雖も甲賀以下ハ高足駄停止之事、

明和六丑年八月四日

一追手外ハ腰掛南ゟ三本目之柱を目当ニ可致下乗事、

附、主人升形内江入候を見腰懸前へ竪ニ駕を並置可申事、

同

一右同所続き御堀端面へ廻り候角ニて下馬可致事、
附、主人升形内へ入候を見懸ケ腰掛前幷右近所往来之妨ニ不相成所ニ可差置事、
一棟門外割場路次之前ゟ腰掛東角迄之内可致下乗事、
附、主人同所御門を入候を見懸ケ腰懸へ可入候、駕ハ同所東角之柱ゟ東之方御堀端迄一行ニ竪ニ置可申事、
一同所腰懸ケ前ニて可致下馬事、
附、主人同所御門を入候を見懸ケ腰懸前ゟ西之方往来之妨ニ不相成様可差置事、
明和六丑年八月十日
一三ノ丸埋御門南御門ゟ廊下橋登城之面々二ノ丸南御門外御堀際往来之妨ニ不相成様駕馬竪ニ並置、其外残候供之者可差置事、
寛政五丑年
一御大老ハ升形外ニて可致下乗事、
寛政四子年三月一日
一御城中ニて供之者はき物担不申様可申付事、
宝暦十二年二月四日
一御城詰所ニて高笑高咄停止之、其詰所を明ケ他之詰所へ参間敷事、
（朱）「七八」郭門出入御作法、
前々ゟ例
一土手之内ゟ諸品差出候ハヽ手形を添可差出事、
一御在国ニハ夜中九ツ時、御留主ニハ夜中四ツ時限、春中火之番在之（元のまゝ）内ハ五ツ時限り御門〻候筈ニ候、刻限過無拠罷通候節ハ其故を断り姓名を名乗り可罷通候、平日共ニ無挑灯ニて罷通候者ハ屹度相改筈ニ候事、
同
一下女はしたの類暮六ツ時以後送之者無之者通路不相成事、
宝暦五亥年七月十九日
一軽々之内鉄炮持参罷通候節ハ其子細御番所へ申断姓名を名乗可罷通事、
（朱）「七九」公儀御手前御日柄御用地向謡鳴物停止之定、
権　現　様　　十七日　　夜中迄

台徳院様　廿四日　前夜ゟ当日夜中迄
大猷院様　廿日　暮六ツ時迄
厳有院様　八日　七ツ時迄
常憲院様　十日　同
文照院様　十四日　同
有章院様　晦日　同
有徳院様　廿日　同
惇信院様　十二日　同
浚明院様　八日　同

御家御日柄

土津様　十八日
鳳翔院様　三日
徳翁様　十日
土常様　廿七日
恭定様　廿九日
貞昭様　廿七日

右前夜ゟ御当日夜中迄

宣明院様　六月十七日
松寿院様　正月十日
心了院様　六月晦日、小ノ月ハ廿九日

右御祥月ハ前夜ゟ御当日夜中迄

心窓院様　五月十四日
知厳院様　八月二日
良徳院様　六月三日
幻光院様　十一月十四日

右御祥月ハ御当日夜中迄

「八〇」（朱）御家訓幷御掟書御軍令拝聴御定、

前々ゟ之例

一正月十一日、八月朔日、十二月十八日於　御前御家訓御拝聴、学校奉行拝読之、御家老若年寄御軍事奉行御勘定奉行御側之面々大御目付以上、外様ハ月番之番頭新番頭御家老組々頭大組物頭可拝聴之事、

附、猪苗代御城代ハ正月十一日計拝聴之事、

同

一毎年正月十一日会所ニおいて学校奉行御家訓拝読、諸月

番御勘定組頭以上頭立諸役人可拝聴読事、

寛政元酉年五月十五日

一御軍禁ハ毎年正月十一日、四、七、十月ハ五日を定日とし於会所御軍事奉行拝読、頭立役々麻上下着拝聴之、其毎度仲ケ間共月番宅へ寄合無怠可誦之事、

附、支配之者へハ士卒禁令可読聞候事、

学校奉行　御勘定奉行　御側之面々
大御目付　学校奉行御軍事奉行添役　御奏者番
御刀番　御副将付寄合組々頭　御普請奉行
武具奉行　番頭　猪苗代御城代若松居合之節
新番頭　御家老組々頭
大組物頭　番頭組々頭　新番組々頭
御旗奉行　物頭　御家老附御旗奉行

以上

新規御議定

一御留主備之面々御軍禁読聞候節不時之節心得方之御条目をも一同可読聞事、

一御掟書正月十一日学校奉行於会所拝読、諸月番拝聴之仲ケ間或ハ組支配之宅ニおいて可為読聞事、

一御掟書之趣家督跡式或ハ新組入等之節可読聞事、

「八一」（朱）撰挙御定、

慶安五辰年正月十一日

一諸頭諸役人共撰挙之義私之贔屓偏頗不可有之といへとも、平生其組支配之者を近付能不試ハ人之堪否を不可知、人を撰ひ進むるハ上下之心ニ叶ふ様ニ可存入事、

一撰挙書差出候ハヽ其一人平生之行跡、其役儀相応之才能有之所并先祖之来歴、御奉公之旧功等迄見聞之処委曲可書上事、

附、撰書之義頼（明和三酉（ママ）年）を得可書出様ハ有之間敷、不相応之撰等無之様可相心得事、

天明八申年九月十三日

一存寄無之撰挙不申出者も有之候処、撰挙被仰付候程之御役義可相勤者ハ兼々心を付へく候、乍然支配ニ限り書出候場所或ハ席卑又ハ常詰抔ハ稀々ニ存寄無之は格別之事、

同

一撰出之節其者之為人尤得手たる所を以て役義相応ニ可有之と申見込之趣委敷書面ニ認可申、支配之者之義ハ其者之行跡尤も長する所も別して相弁ひ居るへく義ニ候間猶更之義ニ候、名前一ト通之撰挙差出間敷事、

寛政元酉年三月十九日

一諸役撰之節大御目付大組物頭以上ハ格別、其以下之役々へハ番代之悴をも可書出事、

天明八申年十一月廿一日

一諸役撰ハ　御在国御在府ニ不限壱度被　仰出候撰ハ其月ゟ十二月之内御用被成候筈ニ候、享保十六亥年六月六日書出候者之内其後如何と存する義追而存当候歟、又ハ其節不書出者を追而書出度候ハヽ何時ニ而も撰書調直可差出、先達而差出候撰をも時ニ取又候被　仰付候義も可有之候へ共、先ツハ右之通御用被成候筈ニ候事、

寛政六寅年正月廿七日

一諸役撰被　仰出廻状を以て申聞候節、日限無之撰ハ日並十日程迄之内と相心得可書出事、

享和三亥年四月廿六日

一諸役所欠役有之節業役類之者ゟ勤之者ハ勿論悴共ニ他筋当座雇たりとも申出間敷候、然とも外ニ相応之者無之業役なりとも、其人成抽才力等も有之其役場相当之者と申す事ニも候ハヽ、其者何役場へ相当と申所其品可書出事、

文化申年（文化九年）五月

一武役欠目之節ハ高知たりとも家数年数等ニ不拘、先ツハ御流岐之趣相心得候者重ニ御撰挙可有之、卑知たりとも兵学相秀候ものハ格別之御撰挙可有之事、

正徳三巳年五月四日

一撰書存寄無之節ハ其趣口上書認可差出事、

「八二」（朱）夜居之間幷会所ニ而御家老共ゟ御用承知或ハ申達候節之御作法、

附、宅々へ申達候次第、

明和六丑年

一公所ニおいて御家老若年寄へ御用申達候節身丈ケ程下り可座付事、

文化五辰年十一月

一御家老若年寄ゟ御用承候節両手突可承知之、申達候節ハ新番頭以上両手上ケ、大御目付大組物頭以上片手下ケ、平士ハ両手可突事、

附、於公所若年寄以上ゟ名を呼候節ハ御側以下無殿ニ可唱、番頭を始凡而役頭之者へ組支配ハ勿論、得差配候者此規ニ可準事、

一撰挙賞罰并一己へ懸候諸訴ハ月番之御家老共へ申達、其余ハ懸り々々之御家老若年寄へ申達可受差図事、

附、御大老有之節ハ撰挙之御用ハ御大老へ可申達事、

文化十戌年十一月（ママ）

一大御目付大組物頭以上諸事御家老へ可申達、其以下ハ撰挙賞罰或ハ重き品或ハ一己へ懸りたる諸訴ハ御家老へ可申達、其外役所々々取計之筋ニ拘り候義ハ若年寄へ可申達事、

附、常上下ニ無之役々ハ一己ニ懸りたる軽き義ハ若年寄へ可申達事、

前々ゟ之例

一御家老若年寄へ御右筆以上直達、其以下頭無之面々ハ御目付を以可申出事、

文化五辰年十一月

一夜居之間会所召出之席ハ大御目付已上三段、平士三段、其次第ハ御目付へ可任之事、

附、若年寄以上之嫡子（悴）ハ大御目付席、大御目付以上之悴ハ平士御納戸以上之席、御納戸以上之悴ハ新番組々外之士已上之席、其已下之悴ハ親々之席へ可罷出事、

享和三亥年九月

一辞役隠居番代養子嫡子　御目見縁組改名養女等惣而堅書之訴ハ御家老共へ可申達、尤御城会所之外宅へ申達し間敷事、

附、末子之養子（後期）或ハ病気差重り嫡子御目見願ハ可為格別、惣而不差懸義ハ横書たりとも宅へ申達間敷事、

明和四亥年十一月八日

一諸書付へ日附無之差出候者も有之候処、何儀ニ不寄日附認可差出事、

文化十二亥年

一御家老若年寄より御申聞候節其座ニて直ニ申達間敷事、
同
一会所ニて申達候義ハ茶部屋之者を以申入候上可罷出事、
前々ゟ例
一御通之者以下ゟ独礼被　仰付候時、当人御下知承知之上御城会所共ニ頭々番人同道御家老共へ謁し御礼申上頭々取合可致事、
同
一御目見申上候時御家老共へ謁し御礼可申上之、直達以下ハ頭々取合可致事、
新規御議定
一凡而御家老若年寄ゟ廻状ニ而申来候儀面々名前へ点を不懸名之下へ奉之字可記之事、
「八三」（朱）御礼御受等勤方之御定、
前々ゟ之例
一凡而其身ニ付　御下知之品或ハ願之筋被任願候節、御家老共ゟ仲ケ間或ハ頭を以申聞候ハヽ、御礼或ハ御受として御家老宅へ可相越事、
附、御家老共聞届任願或ハ及差図候品同断之事、
同
一奉書ハ承知之旨致返事其上直勤可致事、
同
一重立候　御下知之節御家老若年寄不残御礼として可有廻勤事、
同
一凡而一己へ懸候御礼或ハ御受之儀其身故障之節ハ名代可致事、
同
一御叱其外蟄居閉門御咎方之　御下知ハ御請之次第仲ケ間或ハ頭々ゟ可申達、追而御赦免之節当人御礼として廻勤可致事、
同
一御留主之節御加増御役替席進等被　仰付候ハヽ、御勘定奉行新番頭以上以飛札御礼可申上之、大御目付大組物頭以上ハ御礼状差上ニ不及候、何れも追而御礼　御目見可

被　仰付事、

新規御議定

一平士ハ御留主之節諸御礼便書を以差上物をも仕御礼可申上事、

附、家督跡式被召出候御礼ハ御留主たりとも追而差上物を以て自身御礼之事、

寛政九巳年四月廿一日

一御通之者以下ハ若年寄巳上之広間ニ而刀可取事、

「八四」（朱）神文之御定、

万治二亥年二月

一御役替之節其役ニ寄早々起請文可仕事、

正徳二辰年十一月十七日

一神文相調候節御勘定組頭以上ハ大御目付、右以下独礼以上御目付、御通之者巳下ハ御徒目付ニて判元立合之事、

前々ゟ之例

一神文相済後立合之大御目付御目付御家老若年寄列座之席へ罷出一同可相届之、退下之後ハ其宅へ可相届事、

附、御通之者ニても小奉行ニ限り御普請奉行同道列座之間へ可罷出事、

今度御議定

一起請文前書之趣御勘定所ゟ役人共ゟ写申請銘々所持候様可相心得事、

依先例今度御議定

一忌中ニ神文致候時ハ名判計致、忌明後血判可相究、上之御障ニて名判計相究候節ハ、御障明候后大御目付御目付ゟ通達之上血判可見届事、

前々ゟ之例

一神文之時御紋服着用無用之事、

「八五」（朱）御家老共へ諸士謁候御定、

元禄四未年九月四日

一御留主之節年頭五節句八朔、幷五節句無之月ハ十五日、為　御名代御大老諸士へ逢候筈ニ候事、

附、御大老欠残之節ハ御家老共逢候事、

今度御議定

一新番頭以上会釈有之、其以下ハ会釈ニ不及候間其趣可相心得事、
　附、詰居候御目付へも会釈ニ不及候事、

前々ゟ之例

一来謁之節麻上下着用之事、

寛政六寅年四月八日

一御用障等無之面々ハ仲ケ間申合代ル々罷出、若病気障之節ハ別人罷出へく事、

前々ゟ之例

一正月元日五ツ半時、其余ハ五ツ時ゟ五ツ時迄之間逢候事、

同

一御参勤之御礼被　仰上候段不申来内ハ月並之諸士来謁無之、享保十巳年五月五日且御暇被　仰出候後節句ニても来謁無之事、

「八六」（朱）御勘気者幷御穿鑿人之儀ニ付御作法、

延宝二寅年十二月十七日

一凡而御仕置者有之会所其外何れ之所ニても諸士之面々ハ不及申、下々迄為見物出間敷幷田人（まゝ）同断之事、

同三月

一蟄居閉門御預者之方へ一切音問見舞不可致、若子細有之ハ御家老共へ申達可受差図事、

万治三子年四月八日

一誅伐者道具様し候者之外ハ構之内へ不可入、縦ひ道具様候者といふとも不呼出以前堀ゟ内へ入へからす、尤供之者多召連入間敷、様し埒明候ハヽ外へ可出事、
　附、鑓ハ堀ゟ外ニて様すへし、凡而検視之御徒目付之差引ニ背く間敷事、

貞享三寅年八月廿五日

一御追放幷御暇被下候者之親類縁者其者之妻子等無拠引取候迄預ニおいてハ其頭江可達之、其妻子先へ引取候ため通路仕ニおいてハ是亦相断可受差図、妻子引取候後通路一切停止之事、

文化十三子年四月四日

一及刃場或ハ為負手疵逃去候体之者於有之ハ申達候節早々最寄之公事奉行へ可及通達事、

一士屋敷自然盗賊入候ハヽ昼夜ニ不限先つ公事奉行へ可相享保十七子年三月廿九日

断、其上盗物等相改可出訴事、

一穿鑿吟味ニ付召出為相尋候者共甲賀以下軽々幷又者ハ、其頭或ハ主人江其奉行共ゟ直ニ申遣筈ニ候間無遅滞可差出之、品ニ寄直ニ為召捕候儀も可有之事、

前々ゟ之例

一蟄居或ハ公私慎被　仰付候者ハ大門を閉、小門無之ハ片戸可閉、惣而蟄居公私慎以上ハ月額剃間敷事、

同

一神文番人被付置候者ハ大門小門共ニ閉諸事穏便ニ相慎可罷在、御預ケ被　仰付候者之家ハ勿論之事、

同

一閉門幷神文番人被付置候者ハ内用事達之義一類共ゟ可相伺事、

同

一御預幷神文番人被付置候者人元父子兄弟同姓初一類共差控可相伺候、公私慎申渡候節右ニ可準事、

附、一類ハ大凡忌懸り幷聟舅或ハ其妻之兄弟等迄と可相心得事、

同

一閉門退嫡逼塞以上之御咎被　仰付候節ハ、其父子兄弟始同姓一類迄差控可相伺事、

附、蟄居ハ親兄弟之外差控相伺ニ不及事、

同

一御叱被　仰出候節当人差控可相伺事、

附、不調法之段一己ゟ申上被　仰出候類ハ其儀ニ不及事、

同

一御役儀首尾不宜御免被成候輩ハ差控可相伺事、

同

一親子兄弟或ハ一類等曲事或ハ重き不調法之筋於令露顕ハ、御仕置以前速ニ差控可相伺事、

元禄元辰年十月三日

一閉門蟄居之輩雪降り積候節ハ召仕之者出し道可為払、若召仕無之者ハ一類方ゟ可為払事、

附、草之掃除等ハ不相成事、

前々ゟ之例

一私用慎申渡候輩ハ普請ハ不相成、尤一己ニ懸候義願申上候ハヽ一類を以可願出事、

附、先祖々年忌ニ相当候節たりとも客相呼候義遠慮可致事、

享和二戌年四月十九日

一御目通差控被　仰付候先ツハ年始八朔五節句三日、其外御祝儀等ニて麻上下着用之節共ニ平服着用之事、

「八七」（朱）赦願之心得方、

文化十一戌年十二月

一赦願ニ寄而御情扶持被下候とも重科之跡ハ養子又ハ其子へ御扶持御振替不被下義ニ候、其次第ハ其犯科不忠不孝之者ハ勿論御奉公未練之筋有之、或ハ士道を失ひ候者之跡ハ御扶持御振替被下間敷、養子等致候とも名跡御立被成間敷事、

同

一前条之外事跡ニ寄養子勝手次第被　仰付候上、眷族之内弟又ハ甥なと其家血脈之者有之分ハ養子可被任願、一向ニゆかりも無之者を致養子候義ハ被任願間敷事、

附、其家訳有之者へハ筋目之者ニ無之とも他姓之者を以て名跡被相立候御吟味も可有之事、

文化十酉年御議定

一赦ニよりて御免之義ハ凡て可為赦前之犯科事、

附、赦之御下知被　仰出候前夜迄犯科を可限事、

一五　御法度書（会津藩）

（表紙）

御法度書　巻四　附録　合巻

巻之四

目録

「(朱)八八」一出火之節之御定、
「(朱)八九」一喧嘩騒動之節之御作法、
「(朱)九〇」一御領内幷他邦江御暇等之御定、
「(朱)九一」一供立幷途中往来之節之御作法、
「(朱)九二」一吉凶之寄合振舞料理幷音信贈答之御定、
「(朱)九三」一衣服御定、
「(朱)九四」一作事向或ハ居屋敷家宅之儀ニ付御作法、
「(朱)九五」一譜代或ハ年季召仕等御定、
「(朱)九六」一嫁娶之御定、附養子之式御定、
「(朱)九七」一喪葬之御定、
「(朱)九八」一武具馬具幷諸道具器財等之御定、
「(朱)九九」一旅行之御定、
「(朱)百」一江戸御屋敷内御作法、
「(朱)一〇一」一江戸表御門外諸事心得方、
「(朱)一〇二」一日用之儀ニ付御作法、

以上

附録

目録

「(朱)(重出)一〇二」一御領内湯治之願申出他邦迄相越候者も有之哉之由ニ付被　仰出、
「(朱)一〇三」一諸役御賞方之儀ニ付頭々心得方之義ニ付被　仰出、
「(朱)一〇四」一頭々心得方之条々、
「(朱)一〇五」一兵学修行方之義ニ付頭立候面々へ被　仰聞、
「(朱)一〇六」一武講返講心得方、
「(朱)一〇七」一御家中之子弟為営町在村へ罷出居候者慎方之義ニ付父兄へ被　仰聞、
「(朱)一〇八」一仲ケ間御用談抔申立新参之者引廻事甲乙ニ致し、或ハ於番所々々及飲食品々風儀ニ係り如何之聞へ有之歟ニ付頭々へ被　仰聞、
「(朱)一〇九」一婦人往来之儀ニ付夫幷父兄へ心得方被　仰出、
「(朱)(ママ)一〇十」一四民風俗取締方之儀ニ付大小御目付被　仰聞、
「(朱)一一一」一武備実用ニ相嗜御奉公可相励旨被　仰出、
「(朱)一一二」一土津様御尊信被遊候程朱之正学ニ被為基学風

御改正ニ付、実学之風弥以深切ニ可相励旨被
仰出、
「一一三」（朱）一御入部ニ付御家中へ被　仰出、
「一一四」（朱）一御入部ニ付目付役之者へ心得方被　仰出、
「一一五」（朱）一文武之芸術修行方之義ニ付被　仰出、
「一一六」（朱）一文武御教導其外子弟慎方之義ニ付父兄へ被
仰出、
「一一七」（朱）一撰挙心得方之義ニ付被　仰出、
「一一八」（朱）一文武御教導筋之義ニ付被　仰出、
「一一九」（朱）一御家中之面々倹約を守り志操不失風儀為相励
致思召（度カ）、頭立面々身を以先立可及教誡旨被
仰出、
「一二〇」（朱）一御流岐之兵学へ山神流之兵学築立等之法を附
し可致修行旨被　仰出、
「一二一」（朱）一頭役之者或ハ知行高之者供連之儀ニ付被　仰
出、
「一二二」（朱）一御留主中御家来一統之風御案事思召委曲可申
上旨被　仰出候ニ付、頭立面々身を以先立士
風可相励旨御家老共ゟ申聞候廉、
「一二三」（朱）一学校奉行添役被増候ニ付儒者素読所勤等之勤
体ニ付被　仰出、
「一二四」（朱）一正月十一日陳（陣カ）将宅ニ而禁令掟書読聞、
「一二五」（朱）一大御目付大組物頭已上迚も奉書之節御家老共
宅へ直勤、
「一二六」（朱）一かひらき鞘惣朱ニ無之朱鞘ハ陳（陣カ）刀ニハ不苦、
跡ニ而弛、
「一二七」（朱）一軽々暇取他へ拘（抱）ニ相成或ハ養子ニ成候義年限
も有之候処秀業之者吟味有之、
「一二八」（朱）一目録差上御礼申上候節御目付へ相渡候義ニ付
被　仰出、
「一二九」（朱）一御家中譜代家来ゟ普代（譜）へ養子之義年限ニ不拘
宜、
「一三〇」（朱）一為御機嫌伺罷出候役々以来夜居之間溜りニ而
相伺、
「一三一」（朱）一御家老広間へ罷出届之紙面是迄差置候廉之外
ハ不相成、

(朱)
「一三二」一於家近ニ火薬を以火業之真似如何之旨、
(朱)
「一三三」一町在之医師年数一ト通或ハ治療之多少ニ寄金銀銭等被下、等級を以被賞候義ハ被相止、治療有之は銀子被下御目見被　仰付御合力罷下候義ハ是迄之通、
(朱)
「一三四」一正月十一日被賞達之次第、
(朱)
「一三五」一御家老若年寄折々罷出民間之様子及見聞可然との思召ニ付、近山幷郷中ニおいて鉄砲殺生用捨供立略之微行、
(朱)
「一三六」一七月六日例朝　御目見以来流れ、
(朱)
「一三七」一出火之廉幷会所内役場々々詰場、
(朱)
「一三八」一御供往来幷自分往来着服幷革覆、
(朱)
「一三九」一御家中之子弟医師秀候者ハ俗体ニ而医官ニ被召仕、
(朱)
「一四〇」一二男養子之儀、
(朱)
「一四一」一婚金ハ引越三ケ月前其筋通達へ引越月を顕し、若延候時ハ断、
(朱)
「一四二」一平士御加増御役替席進等差上物御礼御留主之節、
(朱)
「一四三」一所当を以減給或ハ浮人等ニ相成候者組入期月四ケ月過宜、
(朱)
「一四四」一高卑屋敷相対替、
(朱)
「一四五」一軽々之者幷諸職人之類継目、
(朱)
「一四六」一試業相止、
(朱)
「一四七」一御規式之節新番々所煙草停止、
(朱)
「一四八」一紙鳶揚、
(朱)
「一四九」一諸職人ゟ独礼へ縁組、
(朱)
「一五〇」一家業を以被召仕候者相続之節、悴業未熟ニ候ハヽ御擬作被減、
(朱)
「一五一」一失事有之御役義被召上候者ハ組付幷与力共ニ失事之品ニ寄組入不被　仰付、
(朱)
「一五二」一軽々ゟ御徒格或ハ御通一代切月割等ニ御取立ニ相成候者辞役幷継目之節、勤切(功力)等無之者ハ格好是迄ゟ被相下義も可有之、
(朱)
「一五三」一教場操練之義、
(朱)
「一五四」一武講、

「一五五」(朱)　一席卑之者学校幷学館出席之次第、
「一五六」(朱)　一高懸り之者暇取被召拘(抱)ニ相成跡、
「一五七」(朱)　一御家老共学校臨席、
「一五八」(朱)　一小普請除幷入門幷勤之会相止、
「一五九」(朱)　一独礼養子、
「一六〇」(朱)　一高懸二家相続、在跡、
「一六一」(朱)　一私用慎歟故有之当人ゟ難願者頭ゟ、
「一六二」(朱)　一定席花色緒已上之役頭之詰所刀持参不相成、
「一六三」(朱)　一高懸之者二家相続、在跡、
「一六四」(朱)　一絵師共継目、
「一六五」(朱)　一九家老儀　御目見、
「一六六」(朱)　一寺社修験之子弟御家人筋へ縁組、
「一六七」(朱)　一父子勤卑席之親御擬作差上候後悴服色相用、
「一六八」(朱)　一旅行幷町人へ会符を渡武家之荷物ニ致候儀停止、
「一六九」(朱)　一軽々之者継目幷養子、
「一七〇」(朱)　一御家老附寄合組ニ入立場幷御近習役へ被仰付候節之立場、
「一七一」(朱)　一御通与力同断、
「一七二」(朱)　一組外之士継目、
「一七三」(朱)　一新番々所へ御規式之節ハ格別、平日刀或ハ持参之品不相成、
「一七四」(朱)　一五拾軒足軽、上荒井新田足軽継目、
「一七五」(朱)　一高懸之者二家相続、
「一七六」(朱)　一公儀御手前御日柄江戸表所々御屋敷謡鳴物停止、
「一七七」(朱)　一学校御入之節講釈所生ハ月割之子弟ニ而も罷出不苦、
「一七八」(朱)　一江戸勤番扶持常詰御知行分減、
「一七九」(朱)　一御家中之子弟為営町郷村へ罷出度願、
「一八〇」(朱)　一御通已下紐制以上、下着ニ紬糸入用捨、
「一八一」(朱)　一御参勤御供之外自分往来服制勝手次第、
「一八二」(朱)　一功労有之者共御賞減等、
「一八三」(朱)　一御徒組頭御徒相勤候者之悴継目、
「一八四」(朱)　一御徒目付悴継目、
「一八五」(朱)　一同心料弐分減、

「(朱)一八六」一御役料御四季施代費骨折料諸奉行筆墨紙代客賄料減、
「(朱)一八七」一御領内御預り所共ニ差上金致候御知行御扶持減、
「(朱)一八八」一当七月ゟ此先三ヶ年倹約、
「(朱)一八九」一振袖ハ八歳已上不相成、
「(朱)一九〇」一大小之寸尺鞘之塗色当時於　公儀も御構無之由ニ付可有其心得、
「(朱)一九一」一立髪願吟味之上、
「(朱)一九二」一高之嫡子嫡孫小普請除、
「(朱)一九三」一武講出席之次第、
「(朱)一九四」一卑之嫡子嫡孫学校出席之次第、
「(朱)一九五」一書学(寮)療同断、
「(朱)一九六」一学校入門、
「(朱)一九七」一三ノ丸并小田教場之次第、
「(朱)一九八」一月割与力金鼓之業直勤候者継目、
「(朱)一九九」一足軽差配与力被相止小頭古復、
「(朱)二〇〇」一目印ニ啄木下緒羽織紐用候者共、
「(朱)(二〇一脱)二〇二」一郭門以来他邦商人被差留、在跡、并乳母入用札不相成、
「(朱)二〇三」一召仕男女給金、
「(朱)二〇四」一諸向役取替不相成、
「(朱)二〇五」一御擬作地方御振替、
「(朱)二〇六」一学校武学寮勝手次第ニ相成御定、在跡、
「(朱)二〇七」一公儀御手前御日柄御用地向謡鳴物停止、
「(朱)二〇八」一学校武学寮勝手次第ニ相成御定、
「(朱)二〇九」一卑席同断、
「(朱)(二一〇脱)二一一」一稽古小普請之義御徒已上之者勝手次第ニ無之、
「(朱)二一二」一子弟之内御雇勤或ハ文武之学寮役付相勤候者勝手次第之有無、
「(朱)二一三」一御小性相勤候者勤中無滞相勤候者小普請御免之格ニ不至共吟味可有之、
「(朱)二一四」一卑之嫡子嫡孫武芸一流極有之候共講釈所ハ勝手次第ニ無之、
「(朱)二一五」一他所商人富山薬売肴売女諸職人目印渡置候者郭門宜、

（朱）
「二一六」一御情扶持養子、
（朱）
「二一七」一身売女郷中間同様奉公人改懸り切手ニ而召拘（抱）、
（朱）
「二一八」一南北素読所月割迚も勝手次第ニ無之、
（朱）
「二一九」一高懸之者新抱他所者幷素性不宜者不相成、
（朱）
「二二〇」一御咎被仰付候節差控之儀学校諸生之心得、
（朱）
「二二一」一軽々之者御家人筋へ奉公之義互方ゟ御式之届、
（朱）
「二二二」一勤中紐制之者迚も悴高へ入候分ハ家中奉公可致、
（朱）
「二二三」一他邦湯治ハ頭或ハ仲ヶ間ニ而添書願、
（朱）
「二二四」一他邦往来人馬之御定、
（朱）
「二二五」一百姓ニ而も召仕候内貸刀用捨、
（朱）
「二二六」一諸職人肩替勤ハ試業申付、
（朱）
「二二七」一御家老共講釈所へ四季一度位ツヽ臨席、
（朱）
「二二八」一学問書学御賞、
（朱）
「二二九」一書学入門幷勝手次第ニ相成次第、
（朱）
「二三〇」一礼式、
（朱）
「二三一」一数学、
（朱）
「二三二」一四術之外之業ニ而小普請除吟味、
（朱）
「二三三」一医術他邦修行、
（朱）
「二三四」一士中郭外寄的不相成、
（朱）
「二三五」一武芸御賞、
（朱）
「二三六」一医者小普請除、
（朱）
「二三七」一軽々之者末期養子ニ限り早速ゟ御奉公無滞者ハ家中奉公なく召拘、
（朱）
「二三八」一諸分限内医師幷寺社修験下緒羽織紐制幷御家人父兄子弟等ニ而医師ニ相成居候者町医幷御目見、
（朱）
「二三九」一卑知士分小普請除、
（朱）
「二四〇」一他所者養子縁組、
（朱）
「二四一」一高懸之類出入毎度届、
（朱）
「二四二」一江戸道中白川通夜中継立早追割増、
（朱）
「二四三」一講釈所生人ニ寄御扶持幷江戸修行被仰付廉、
（朱）（二四四脱）
「二四五」一独礼已上妻女帯制度、
（朱）
「二四六」一院内近辺之山火事、幷院内村出火之節諸役詰、
（朱）
「二四七」一地方御家人共養子取組地下筋ゟ不相成、

「二四八」(朱) 一卑知小普請除、
「二四九」(朱) 一江戸御屋敷内目印、
「二五〇」(朱)(本文中〈一六二頁〉では二五一) 一軽々之者養子地下ゟ不相成、
「二五一」(朱) 一軽々之者幼少相続之者御扶持之義、
「巻四」(朱)
「八八」(朱) 出火之節之御定、
「延保九酉年四月廿五日」(朱)(宝) 一出火之節火本(元)左右前後近所之面々手桶を為持火元江走付火を防可申、火消之者参候ハヽ退可申事、
附、自己之屋敷江火懸候所有之ハ火本江不参随分其宅防可申事、「寛文十一亥年九月九日」(朱)
「延保九酉年五月九日」(朱)(宝) 一割場高番ニ而鐘打候ハヽ諸士諸奉公人早々受前之場所々々江相詰、差図無之内ハ退へからさる事、「享保十六亥年三月廿日」(朱)
「明和六丑年五月廿日」(朱) 一御城内出火之節は鐘板木繰交早く長く打候筈ニ候事、
附、御城内ニ而は早拍木(子脱カ)打候筈、夫ニ合セ割場其外郭門等ニ而打候筈ニ候事、
「明和六丑年五月廿日」(朱) 一御城ゟ三丁内は(繰)操交一ト通ニ打候筈、三丁余ハ鐘計打候筈ニ候事、
「同」(朱)
一鎮りは三ツ宛続ケ鐘打候筈ニ候事、
「天明八申年三月廿一日」(朱) 一御先手御左右備幷無役組之面々北追手へ、御本隊幷後殿備小荷駄備之面々ハ西追手へ組支配召連可相詰事、
附、鎮り打拍子木打候ハヽ物頭備ゟ列を不乱順々可引取事、
「享和三亥年九月」(朱) 一若年寄壱人会所江可相詰、御勘定奉行始会所内ニ役所有之面々ハ不残可相詰事、「前々ゟ之御定」(朱)
一学校奉行支配筋始文武諸稽古懸之役人幷十五才以上之子弟学校へ可相詰事、
「同」(朱)
一学校火消番之物頭三人組之者召連学校江可相詰事、

「寛政三亥年四月」(朱)

一町奉行鳶之者召連郭内外ニ不寄早々火元へ駈付火消可取懸事、

「享和三亥年九月」(朱)

一若年寄壱人火本江駈付火消方可及差図事、

附、御目付御徒目付御勘定所小役人之内火本江可相詰事、

「寛政四子年九月七日」(朱)

一郭内出火之節月番之御家老火本へ罷越、郭外出火之節は最寄之郭門へ相詰居、及大火候歟又は土屋敷江火懸候候(ママ)様子ニ候ハヽ其場江罷越可令下知事、

一火事場最寄之郭内江大御目付御目付可相詰、不時番副番之物頭御長柄頭組之者召連相詰居差図次第火為防可申事、

附、郭外迚も花畑新町半兵衛町徒之町外小田垣五ヶ所出火之節は、物頭御長柄頭火本へ可相詰事、

「天明八申年以来追々御定」(朱)

一火之番之新番組幷御長柄之者　御宮へ可相詰事、

「前々ゟ之例」(朱)

一建福寺近習出(所カ)火之節は若年寄幷大御目付御目付御徒目付物頭御長柄頭御普請奉行可相詰事、

「新規御議定」(朱)

一院内建福寺延寿寺願成就寺浄光寺近所出火之節は御祭事奉行可相詰事、

「御用所帳記」(朱)

一御家老共勤番留主或ハ月番ニ而火元へ罷出候跡、寄場へは若年寄可相詰事、

「前々ゟ」(朱)

一御厩へは御厩別当幷馬医、下乗以下不残可相詰候事、

「同」(朱)

一於火事場拾ひ物制禁之、若於其場不頭以後露頭候共曲事たるへき事、

「同」(朱)

一火事場へ見物として徘徊停止之事、

附、役柄ニ無之輩馬ニ而罷出候義停止之事、

「同」(朱)

一火事之節井之内或ハ川之内へ諸道具不可入事、

「享和三亥年四月九日」(朱)
附、自然川之内へ諸道具入置候ハヽ、為相捨候筈ニ候事、
「前々ゟ」(朱)
一面々諸役所火急之時といへとも混乱無之様心懸可申事、
「同」(朱)
一火事之節喧嘩口論は甚為火防候妨ニ候間、仮令堪忍難成義たりといへとも屹度可相慎事、
「寛政七卯年正月十七日」(朱)
一出火之節近火或ハ風烈、或ハ風下等ニ而居宅危き体ニ候ハヽ寄場へ相詰不及、致在宅火防方可申付、猶予無之節ハ格別左も無之節ハ可相届、雖然御宮幷　御城内役付は此限ニあらす候事、
「宝永七寅年三月十三日」(朱)
一病気或ハ故障有之寄場へ不罷出面々は早々可相届候事、
一出火之節新番頭已上寄場へ馬上ニ而可罷出事、
「前々ゟ之御定」(朱)
一組支配有之面々纏高挑灯可為持之事、
附、高役或ハ頭立役々ハ中柄挑灯可為相持事、
「享保十七子年五月朔日」(朱)
一高番ニ而在郷之火事見損し、鐘打候節弥在郷と見届候ハヽ、火鎮り不申共鎮同様鐘打筈ニ候間寄場へ罷出ニ不及事、
「前々ゟ之例」(朱)
一小水籠士俵梯子等面々之屋敷ニ而可設置事、
「火消定之内」(朱)
一新類縁者之外ニ火元へ参間敷候、但火元近所之者走付候而不除様ニ可仕候、役所へ参候者共火元通懸候ハヽ不見逃火を可消候、役人幷火防候者集候ハヽ可退事、
「同」(朱)
一土手之内町中共ニ火事之節盗人有之候ハヽ何者ニよらす急度可召搦之、若働候ハヽ討捨ニ可仕事、

火事之節　「旧来之御定へ増損之上御義上」(朱)
御城中役付

一御座之間　御小納戸役弐人
御寐間　御次番三人
御納戸　御手廻之者拾人
御風呂屋

一御寐間之前御土蔵　御手廻之者弐人小頭共ニ　御小性部屋　御手廻之者三人
当番組之与力支配兼務之者幷中ノ口御金蔵番所当番之外之与力共
一御料理之間　御使番壱人　一御用人部屋ゟ中之口迄
御台所御料理人幷役人下男共ニ
御焼火之間　中間四人　一御台所幷雑蔵
御供頭六人　中間四人
一金之間　一御守殿
御数寄屋　御使番弐人　一奥御台所
御供番六人　中間三人
御料理之間　中間八人　一御駕部屋附腰懸共ニ
御手廻之者弐人
片庇　一御広間前腰掛共
抑之者弐人
一小書院　御副将附寄合組弐人　御手廻之者弐人　一平地門共ニ
坊主頭　組々坊主共
一大書院　御副将附寄合組弐人　御手廻之者弐人　一御本丸御座中幷ひあわひ小庭等迄
御徒支配組之御徒共
一御広間　芸者弐人　御手廻之者弐人　一御天守幷表御門走長屋
両御納戸役弐人同所役人弐人其外下役之類不残
一夜居之間　御右筆弐人　中間三人　一御金蔵
御持筒頭組之者共
一新番々所　新番組弐人　中間三人　一裏御門東走長屋　新御厩共ニ
御持弓之者五人内壱人差配与力、但当番共ニ
長囲炉裏　一裏御門番所共
鐘（撞カ）堂　共
受前之役人不残
御小性食事所　芸者四人　一西出丸御蔵共
御普請奉行組之足軽等
御茶部屋　中間四人　一追手腰掛
同断
御用所迄　一西追手腰掛
御文庫役人
御書簡部屋　一二ノ丸御文庫
夜廻之者六人
一御右筆部屋　御右筆弐人　一御城内水之手役人

内弐人　御台所前之井
壱人　御玄関前之井
壱人　小書院前之井
壱人　奥御台所前之井
壱人　稲荷社前之井

一三之丸雑物蔵　受前之役人
一同所渋蔵　同断
一西出丸塩硝蔵　武具奉行幷同所役人
一火事之節土手之内流為無滞見廻　夜廻之者四人町人足八人、但壱人ニ弐人ツヽ
一御城中下火之粉払　大御目付支配浮人御使番壱人ツヽ、御長柄之者屋上手之者
一西出丸南御櫓　同
一北出丸南御櫓

「(朱)八九」喧嘩騒動之節之御定、
「(朱)慶安二丑年六月廿日」
一不寄何事騒動有之節ハ諸士之其頭江馳参可受差図、物頭近習幷組はつれ之者ハ御家老共有合之方へ馳参可受差図事、
「(朱)慶安二丑年六月廿日」
一喧嘩口論有之時は双方之頭々其場江早速馳着令相談差引申付、其上御家老共可受差図事、
附、其頭故障之時は組頭馳着可差引、幷近隣之者共早ク出合随分事之不出来様可仕事、
「(朱)延宝三卯年四月廿日」
一喧嘩有之時親類縁者仮令役人ゟ早ク馳着居候とも、物頭横目之者馳参可退旨申断ニおいてハ神妙ニ可引退事、
附、本人之宅江縁者之内不居合候ハヽ勝手諸事才判調申間敷候条、一両人ハ役人へ相断其通ニ而可罷在事、
「(朱)同」
一物頭横目之者喧嘩之本人警固之上御作法之通相断ニおいてハ刀脇差不及子細可相渡候事、
「(朱)延宝二寅年三月」
一士分之者町中ニおいて人をあやまらは、町同心之者早速取囲ミ少しも不働様令警固、町奉行其様子を御家老共へ相達可受差図事、
附、親類縁者好身之者馳集及子細間敷事、

「九〇」（朱）御領内幷他邦へ御暇等之御定、
「前々ゟ之例」（朱）
一御領内といへとも二宿已上ハ願之上可受差図事、
　附、他所之儀は一夜宿りといへとも可願出事、
「寛政三亥年三月」（朱）
一御先手当前之者ハ他邦湯治願取上間敷、寄合組与力之類は可為格別事、
「前々ゟ之例」（朱）
一京江戸相州江ハ添状申受可罷越事、
「元禄九子年十一月六日」（朱）
一依願他邦江年季御暇之儀三年歟五年を限り可申事、
「九一」（朱）供立幷途中往来之節之御作法、
「前々ゟ之例」（朱）
一新番組々外之士已上他邦は勿論御領中共ニ道具免許之、其以下御役儀ニ寄而免許之輩は可為格別事、
「元禄二巳年閏正月」（朱）
一第は諸士といへとも御役義ニ寄免許之外は病人極老小児不行歩之輩断之上用捨之、旅行といへとも病気痛所等猥りニ申立乗間敷事、
「寛政九巳年八月」（朱）
一平和郭内往来ニは若年寄已上長柄傘可為持、御勘定奉行新番頭已上其外千石以上之士常道具たるへし、大御目付大組物頭已上若党可召連、其外常上下之士若党勝手次第、格役或ハ三百石已上之士は一僕可召連事、
　附、新番頭以下ニ而千石已上之士はかならす為持候ニハ不及常ハ心次第ニ候、諸稽古場往来ニハ供立略候とも用捨之事、
「前々ゟ之例」（朱）
一大御目付大組物頭以上常道具免許といへとも平和之儀は前条之趣ニ可相心得事、
「文化十二亥年四月」（朱）
一公私ニ付重立候節幷郭外江ハ其程ニ応し供立相増可召連事、
「前々ゟ之例」（朱）

一郭内は不及申　御城中江戸御屋敷ニおいて長柄傘為持候義大御目付大組物頭以下ハ不相成候事、

「(朱)元禄二巳年閏正月」

一独礼以上之妻女乗物用捨之、小知切米取之輩常ハ不可相用候、其以下は駕停止之事、

附、士中之婦女子は小知之輩たりとも供なくして往来無用たるへし、人込之場所夜中等ハ寺社参詣たりとも可致遠慮事、

「(朱)寛政元酉年十月十七日」

一御家老若年寄ハ勿論凡而重役之面々途中ニ行逢候節慇勤(懃)ニ可及会釈、其外格式之高下ニ応し礼節を相慎可致応接事、

「(朱)前々ゟ之例」

一御城下往来之節深笠幷面体を隠候冠物停止之事、

附、往来煙草不呑様下々迄厳ニ申付候事、

「(朱)天明八申年三月廿二日」

一甲賀之者幷右ニ準候格式之者ハ大御目付大組物頭以上幷其頭々江ハ下座、右以下軽々は新番組々外之士上(以脱カ)下座之事、

「(朱)文化六巳年十二月」

一時計之間　御目見以上之又者ハ御勘定奉行新番頭以上下座、其余　御目見以上之又者ハ大御目付大組物頭以上下座、右之外帯刀之又者ハ新番組々外之士以上下座之事、

附、其主人之一類同性(姓)は非制限、親疎ニ寄斟酌ハ主人之心次第たるへき事、

「(朱)前々ゟ之例」

一軽々幷又者諸士江対し途中ニおいて無礼不致様可申付事、

「承応元年辰年二月廿七日」(朱)

附、平生忽緒ニ而は御供之節或ハ他所へ参候而も不行儀成事有之ものニ候間、兼而無油断可申付候、横目之者共可相改之、対侍分不礼成者も候ハヽ其者ハ不及申頭々迄可為曲事事、

「(朱)九二」吉凶之寄合振舞料理幷音信贈答之御定、

「(朱)寛政九巳年八月廿九日」

一親族朋友等故有而会集之時、料理ハ一汁一菜酒肴ハ随分軽き品両種迄を限とし、美膳乱酔ニ不可及事、

一祭礼仏事之時神供霊膳は制限ニあらすといへとも其分ニ応すへし、親類等其続柄を正し相招、其余ハ可成丈ケ人少手軽之可執行事、

「寛文十二子年二月」（朱）附、仏事ニは飲酒弥停止之事、

「（朱）文化十二亥年四月九日」

一親族朋友之寄合ハ婚礼祝儀振舞父母祖父母之年賀或ハ家督跡式初而之　御目見、其余重き勧賞を蒙たる時抔ニ限るへし、大凡親子兄弟聟舅ハ勿論同性（姓）或ハ従弟迄之続柄、或ハ故ある懇意之者等迄会集不苦といへとも、平日之親疎を斗り可成丈ケ相省き人少ニすへし、其余ハ停止候事、

附、男女之紐解髪置上下着等軽き事ハ諸事手軽ニ致、其式可相整事、

「同（朱）」

一士は朋友仮初之寄合ニも武家之覚悟御奉公之心得抔咄合、酒食之設迄ニ不及しめやかなる交り当然之事ニ候所、故なく朋友之間ひそかに造作かましき飲食等相催し楽とする之輩は厳しく誡むへき事、

「（朱）宝永七寅年三月」

一支配頭被　仰付候時其組を振舞、或ハ御役儀被　仰付候時其仲ケ間を振舞候義堅停止之事、

附、先輩之仲ケ間心添相頼候者迚も酒食振舞或ハ音物等堅停止之事、

「（朱）文化十二亥年正月九日」

一仲ケ間互ニ飲食之付合堅制禁之、面々深く相慎仮初ニも若輩之所行鄙陋成仕方有之間敷候、或ハ後輩之仲ケ間へ酒食を貪り恥とせす、或ハ月番寄合等之節座向之設を始饗応等いはれなき仕来不相改、或ハ湯治并遊山川狩等ニ事寄実は申合飲食ニ耽り、或ハ諸番所へ密ニ酒肴を設ケ持参セしむる類厳密ニ遂吟味可被処其科事、

「（朱）同」

一親子兄弟聟舅ハ家内迄、其余叔姪孫之続迄ハ平日といへとも参りかゝり、時刻ニ至らハ軽き食事或ハ酒差出候而も不苦候、雖然互ニ申合可成丈ケ可斟酌、其余は一切酒食無用ニ可致事、

附、隠居同士参会候節、或ハ医師病用、或ハ所用有之相頼候者手軽き酒食格別たるへき事、

「同」(朱)

一師範を得候者内会之時食事差出不苦、会始会納其外故有之節は酒肴差出候而も不苦事、

「同」(朱)

一音信増(贈)答は親子兄弟聟舅ハ勿論、其余といへとも叔姪孫之続迄重立たる吉凶に限るへし、此外たりとも祭事仏事之時焼香之ため参候者死者之続於有之ハ、軽き備物ハ可為格別事、

「元禄二巳年」(朱)

一凡而贈答之品は可成丈ケ手軽之品ニ致取やり候様申合、大身たりとも軽き樽肴之内一方を可用、物を薄し情を厚ふするの美風を慕ひ、先は庭前之菓物前栽之品或ハ山狩川狩之品等を可用事、

附、婦女子常之往来に可成丈ケ手土産持参無之様可申合事、

「文化十二亥年四月九日」(朱)

一内会相頼候師範へ之謝礼、或ハ医師へ之薬礼、或ハ用事相頼候者へ之謝礼は進物は其程ニ応し可相贈事、

附、其頭或ハ支配之者或ハ仲ケ間江之贈答一切停止之事、

「同」(朱)

一賄賂之音物ハ旧来之制禁ニ候条弥可加謹慎、凡而賄賂に紛はしき信(進)物は聊たりとも一切可禁之、是を受る者ハ勿論、相贈候義其心ニおいて深く可恥事ニ候間、堅可相慎事、

「同」(朱)

一江戸勤番往来之者親子兄弟聟舅之間餞別答礼に至る手軽き品持参之、外は仲ケ間或ハ其頭并支配之者等土産物一切停止之事、

「九三」(朱)衣服御定、

「寛政九巳年八月廿九日」(朱)

一諸士男女之衣服独礼已上御領中ニおいて紬類迄下着は絹類を限とし、其以下可用之綿服一色ニ而も不苦、軍装火事装束或ハ肩衣野袴等は制外之事、

「享和二戌年六月」(朱)

一御通之者以下は万麻布木綿可用之、妻女同断、糸入之単羽織、或ハ袴羽織之絹裏、或ハ男女之帯絹紬迄月割以上用捨之、凡而御通之者以下幷軽々之妻女分ニ随ひ麁綺羅ニ致し、諸士之婦人に紛敷体無之様厳密ニ可相守事、

「享和二戌年十二月」（朱）

附、御次医師幷御徒格迄之七拾歳已上或ハ十歳以下絹類之下着用捨之、右以下迚も極老或ハ虚弱之小児ニは膚着に絹紬用捨之事、

「正徳五未年」（朱）

一拝領之衣服幷家中之又者主人ゟ為取候衣類は可為制外、雖然御紋付或ハ主人紋付之外は停止之事、

「天明八申年三月廿二日」（朱）

一大御目付大組物頭已上之隠居絹羽織免許之事、

「文化十二亥年四月九日」（朱）

一凡而婦人之衣飾美麗に及ふへからす、或ハ高料之染色、或ハはやり之無益なる好等致間敷旨呉々も教誡を加ふへし、独礼已上之妻女といへとも、帯ハ縮緬類を限るへき事、

附、召仕之下女不相応之綺羅ハ有之間敷候、襟帯ニも木綿類之外堅く停止之事、

「同」（朱）

一火事装束有来之外革或ハ羅背板以下可相用、羅紗ハ無用ニ可致、江戸表ニおいてハ白半襟ニ黒星九ツ其間壱寸程星差渡弐寸壱分之印可付事、

「享保三戌年九月」（朱）

附、会釈ニおいてハ印付之儘相用候而も不苦事、

「享保八卯年三月廿三日」（朱）

一御紋付御召物拝領仕候者其御品切ニ可致着用候、自分ニ而　御紋付相調致着用候義停止之事、

附、拝領之御品相払候義停止之事、

「同」（朱）

一常上下以上之者其妻嫡子ニ一已拝領之御品為着候義用捨之事、

「享和八卯年（保カ）ゟ追々御定」（朱）

一服沙御上下御羽織は大御目付大組物頭已上、麻御上下御小袖御帷子は新番組以上、父祖拝領之御品持合ニおいては願之上着用用捨之、御側御家老組々頭已上父拝領之服紗御上下御羽織、御供番外様士以上父拝領之麻御上下御

小袖御帷子ハ不及願着用不苦事、
附、御羽織継御上下平士ニ而御役義ニ寄拝領致候者共着用は其在役中ニ限り、其内大御目付大組物頭已上江転役被　仰付候者ハ格別たるへし、且常上下已下之嫡子ニ而勤被　仰付御紋服致拝領追而嫡子一ト通ニ相成候者ハ着用不相成候事、
「同」(朱)
一御紋付之御品他ゟ譲を受着用之儀ハ、其子細願出候ハヽ御吟味之上可被　仰付候事、
「享和元酉年八月廿一日」(朱)
一御紋之御羽織着用之儀御家老共始大御目付大組物頭已上は格別、奥番抔は御道中或ハ江戸表ニ而他行之節着用不可致事、
「天明八申年三月廿二日以来追々御定」(朱)
一常上下以上之者平日肩衣着用可致事、
附、三日登　城之節ハ麻上下着用之事、
「同」(朱)
一御勘定奉行新番頭已上之嫡子平日肩衣着用は勝手次第之事、
「同」(朱)
一常上下已上幷御勘定奉行新番頭已上之嫡子麻上下着用之節熨斗目袖口は御納戸茶染を可用、綿入袷ハ御納戸茶染帷子ハ薄柿を可用事、
「同」(朱)
一新番組々外之士已上幷右已上之子弟麻上下着用之節熨斗目袖口ハ黒染を可用、綿入袷ハ黒染帷子ハ浅黄を可用事、
「同」(朱)
一独礼之者熨斗目ニ茶色之袖口袷ハ青茶染を可用、
「同」(朱)
一御通年割之者幷子弟迄前条之服色を除き其余之染色勝手次第、月割之者子弟迄小紋之染色可相用事、
「同」(朱)
一若年寄已上在職之者ハ勿論幷右已上之隠居羽織之紐勝手次第之事、
「同」(朱)
一大御目付大組物頭已上幷右已上之役ゟ直ニ隠居之者、或

ハ若年寄已上之嫡子ハ羽織之紐ニ御納戸茶を可用、右以下組付或ハ御供番之頭之席迄ハ黒紐を可用、猪苗代士餅色紐、新番組々外之士已上花色紐、右已下独礼已上茶紐を可用、何れも子弟同断之事、

附、若年寄已上之二、三男ハ羽織之紐黒紐を可用事、

「同」（朱）

一御通以下年割迄萌黄紐、月割与力幷右に準候格好之者迄浅黄紐を可用幷子弟同断之事、

「同」（朱）

一羽織着用不致節は羽織紐色之袖口を夏冬衣服ニ可付候事、

一甲賀格ゟ元定番格迄黒半襟黒之衣裳は青茶之襟、上下免許之者大和柿白鼠半襟、同（何カ）れも地色ニ不紛品可相用、右以下軽々は中浅黄茶之半襟を可懸事、

「同」（朱）

一常上下ニ無之役々服紗上下綟子肩衣着用之節、衣服之時服ニ限らす其格式持前之染色可相用事、

「文化二丑五月十二日」（朱）

一四月朔日ゟ九月九日迄之内油足或ハ痛所有之者ハ届之上足袋御用捨之事、

「天明八申年三月廿二日」（朱）

一八歳已上之子弟御定之服色可相用、御役替、或ハ席進等ニ而服色相改候義、日並三、四十日迄ハ本（元）之服御用捨之事、

「明和四亥年九月」（朱）

一江戸会津御道中共ニ絹類之股引停止之事、

「九四」（朱）作事向或ハ居屋敷家宅之義ニ付御作法、

「元禄二巳年閏正月」（朱）

一惣而居宅作事之時は絵図を以申達可受差図、出来之後可受改、有故取毀候之時といへとも是又可訴出事、

「元禄十一戊（ママ）年九月廿九日」（朱）

附、若年寄已上ハ其筋へ断候迄にて不及絵図、且亦作事出来候後改ニ不及候事、

「前々ゟ之例」（朱）

一有来之外三間梁之家作停止之事、

「文化十二亥年四月」（朱）

一小身之面々は有来之外蘭（欄）間なけし書院床違棚等手之込た

る作事、或ハ茶室ニひとしき普請等不入事ニ候、大身之面々迚も外見を飾無用之作事致間敷、惣而新規之作事は可成丈ケ手軽ニ可営事、

「前々(朱)之例」

一表廻り新規之白壁腰板申達可受差図事、

「文化十二亥年四月」(朱)

一家幷門塀長屋道橋等修覆掃除常ニ不怠可心懸事、

「寛文十二年子九月廿三日」(朱)

一雪中は屋敷前幷横通共ニ道幅広く付べし、往来繁き場所は雪車ニ挺引違候程ニ可付事、

「元禄五午年(ママ)八月五日」(朱)

一庭構は有来之外築山泉水等ニ数多之人夫を用ひ、或ハ木石を集て乱りに無用之財を費すへからす事、「宝永四亥年十一月」(朱)

「承応三年三月十九日」(朱)

一凡而屋敷替之義屋敷大小家之善悪を申立御侘申者江ハ誰ニ而も御替被下間敷事、

「寛文五巳年十月十五日」(朱)

一諸士幷諸奉公人子細有之屋敷立去ニおいてハ、家道具敷物幷木石ニ到迄不取敢在来之儘ニ而可差上事、

「慶安四卯年十月十七日」(朱)

一屋敷裏境ハ、大身、小身ニ不寄半分ツヽニ心得、不埒之所無之様申合、垣根成りとも、屹度双方々境へ拵置可申事、

「慶安三寅年二月十五日」(朱)

附、士屋敷前へ麻を干、厩こひをほし、前之溝へ麻をひたし、或ハ表より見込候処江作物不可致事、「慶安二丑年」(朱)

「享和元酉年二月十一日」(朱)

一居宅を荒し永々見苦敷破損繕ニも不及者ハ其品御吟味可有之、事ニ寄其屋敷可被召上候事、

附、御知行御切符被減分限不相応之屋敷は御振替可被下、且又追々取毀屋敷地ニ不応小住居ハ割地ニも可被仰付候事、

「前々(朱)之例」

一屋敷前へ新規ニ水道を堀候節は訴出可受差図事、

附、屋敷々々へ取候水私として外へ切落、或ハ他丁へ水洩し、或ハ水道へ塵芥を捨候義停止之事、「文化六巳年五月」(朱)

「寛文四辰年二月六日」(朱)

一土手之内は切米取之面々へ屋敷被下間敷事、
「(朱)元禄十二卯年三月」
一凡而屋敷願之節何れも場所をさし願出間敷、或ハ屋敷替之節敷金礼物いたし、或ハ金銀を以内証申合候義停止之事、
「享和(保カ)十二未年六月十七日」(朱)
附、本屋無之、長屋計ニ而屋敷替被仰付間敷、或ハ類焼後家作不全者ハ、屋敷替願出候とも容易ニ取上間敷事、
「(朱)文化七午年八月」
一空地拝領之輩願之上引付材木申受十二ケ月限り家作可致、若期月過候而も其儘差置候者地面幷引付材木共ニ可被召上事、
「(朱)寛政元酉年八月八日」
一門塀長屋厩材木申受候者共五ケ月限り普請致、出来見分を可受事、
「(朱)享保十七年五月十一日」
一家屋敷拝領致し不引移他へ貸置候義停止之事、
「(朱)前々ゟ之例」
一凡而士屋敷二十間ニ三拾間已上ハ高屋敷、右以下ハ可為卑屋敷事、
「(朱)寛政九巳年六月十九日」
一土手附之屋敷ニ罷在候者土手之根張を切崩、或ハ御堀へ大垣を築出し下場を拵、或ハ諸木伐採候義停止之事、
「(朱)文化十三子年四月」
一高屋敷と卑屋敷と最寄勝手下通ニ而ハ相対替被仰付間敷候、不得止子細有之ハ其次第願出へき事、
「(朱)同」
一最寄勝手たりとも分限不相応成大振成屋敷へ相対替致候而ハ末々手入も不行及如何ニ候条、其心得を以一己之分限ニ応し可申合事、
「(朱)文化十三子年五月」
一空地拝領致家作不致、最寄勝手を以居宅有之屋敷と取替候義ハ停止之事、
「(朱)寛政九巳年六月」
一内外之御堀際九尺通りハ御用地ニ候条御堀際之屋敷々々其心得可有之事、

本屋材木被下之御定但、類焼之節小屋材材木ハ此御定ゟハ半数減被下候義ニ候事、

弐間半梁ニ　弐拾三間　弐千石以上
同　弐拾弐間（千九百石ゟ千八百石迄）
同　弐拾壱間（千七百石ゟ千五百石迄）
同　拾九間（千弐百石ゟ千石迄）
同　拾七間（八百五拾石ゟ七百石迄）
同　拾五間（六百五拾石ゟ五百石迄）
同　拾三間（四百五拾石ゟ三百石迄）
同　拾壱間（弐百五拾石ゟ弐百石迄）
同　拾間（百五拾石ゟ百石取共ニ）（取共ニ　組外之士以上、御切符医師以下小役人格迄）
弐間梁　八間（割小奉行御徒格年割之者）
同　六間（御通月割（ママ）定番格幷小）
同　五間　足軽以下

長屋材木被下候御定

弐間半梁ニ　三拾五間　三千石已上
同　三拾間　弐千石以上
同　弐拾五間　千七百石以上
同　弐拾三間　千五百石以上
同　弐拾間　千石以上
同　拾七間　七百石以上
同　拾五間　五百石以上
同　拾弐間　三百石以上
弐間梁ニ　九間（弐百石ゟ弐百五十石迄）
同　七間（百五十石ゟ百石迄）
同　五間（新番組芸者以上御切符取）

以上

「九五」（朱）譜代或ハ年季召仕等御定、
「前々ゟ（朱）之例」
一譜代之家人召抱候儀は毎度可訴出、私として分限ニ付候趣停止之事、
附、其筋証文入置増減有之節ハ可相断事、
「文化六巳年十二月」（朱）
一御家老之家柄ニ而若年寄已上在職之節は、旧年召仕候老役之内年始　御着城御規式之節於時計之間（御着城ハ大書院）　御目

見可被　仰付候、但同様（格カ）之老役代ル々差出候義主人心次第之事、

「（朱）文化六巳年十二月」

一若年寄引続相勤候義ニ而旧年召仕候老役之内、在職中年始　御着城御規式之節於新番々所　御通懸　御目見可被仰付、引続重職不相勤候共旧年之老役は其身一代之内壱度　御目見可被　仰付事、

「同（朱）」

一又者　御目見之節ハ　御座内帯剣不相成候事、

「同（朱）」

一御目見被　仰付候者ハ養子之節相応之者及吟味、新ニ召拘（抱）候共筋をも可及吟味事、

「同（朱）」

一若年寄以上之老役直参年割之服制ニ可相心得、其内時計之間ニ而　御目見申上候者ハ熨斗目用捨直参独礼之服制ニ可相心得事、

「同（朱）」

一御勘定奉行新番頭已上之支配人黒半襟可相用、大御目付大組物頭以上之支配人柿襟、平士帯刀之家来ハ浅黄襟可相用、右之内旧年之者共ハ壱人ツヽ其筋吟味候上、一段ツヽ格式御進可被下事、

附、御勘定奉行新番頭已上引続其席柄ニ被召仕候而、其家来も旧来之者ニ候ハヽ、御吟味之上直参年割之服制ニ可被成下候事、

「（朱）文化六巳年十二月」

一千石以上騎馬之家来并其嫡子ハ、直参月割之服制ニ可相心得、其内旧年之者ハ御吟味之上年割之服制迄可被相進事、

「同（朱）」

一訳有之格式相進候又者共主人御役義退き、或ハ隠居致候共身ニ限り主人在役中之格ニ可被成置事、

「（朱）文化九申年七月十九日」

一大身之面々譜代家来繁身召仕候者ハ其格之高下を分ケ不召仕置候而ハ不相成義も可有之処、其家格ハ勿論役席ニ付兼而御免有之より已下ハ御家人軽々之次第ニ準し取立召仕候儀主人々々所存次第ニ候、取立候ニおいてハ其趣

御(ママ)事役所へ可相届事、

「寛政(朱)六亥(ママ)年六月十三日」

一若年寄已上諸手形等其家来之名判ニ而可差出、家柄之者ハ在職無之共右ニ準へく事、

「明暦(朱)元未年六月朔日」

一百性(姓)筋之男女年季壱季共ニ差置候者ハ御代官肝煎之手形を可取、其上内証文をも可取置事、

附、切支丹之外「元禄五申年三月廿四日」公儀(朱)御法度之宗門ニ無之旨請状ニ為書入可召拘(抱)、幷召仕之男女指置試候義十日を可限、心に不叶候ハヽ十日之外不可差置事、

「同(朱)」

一年季召仕候者百性(姓)筋之者ニ而親相果無跡継由申断ニおいてハ、男女ニよらす吟味之上年季之内成共本金を取暇を可出、一季之者ハ給分可為日算用事、

附、病気ニ而暇取候者給金可為日算用事、

「同(朱)」

一年季一季之者ハ用ニ不立暇を出ニおいてハ給分可為日算用事、

「同(朱)」

一年季一季男女不届之儀候とも私として他所江追放致問敷、申達可受差図事、

「同(朱)」

一年季一季ニ召置候諸奉公人之義、江戸勤番幷他邦へ御使等之内壱ケ月、二ケ月滞留候ハヽ仮出替之日限来候共出間敷、勿論請人可為右之者、暇を出候時は召置候日数之分前廉給分之積を以可遣之事、

「同(朱)」

一召仕欠落者給金幷取逃之品々請人可弁済之、乍其上主人彼欠落者於見出之ハ殺活可任其主人之意、縦雖誅戮右弁済之物不可返与請人、但受人彼欠落者尋出来於令誅戮ハ右弁済之物可返与請人、若赦一命之時ハ勿論不可返与事、

「同(朱)」

一召仕不依何之罪科其罪人理在之上令誅戮之類は給金幷盗物請人ニ不可懸、但対主人無咎故主人致誅戮度不存といへとも、御刑法ニ依而誅戮被　仰付ニおいてハ請人半分

出之主人可為半損事、
「寛政三寅年三月」（朱）（ママ）
一中間召拘之節主人方ゟ何所之誰と申者召拘候由其者ニ手紙を添、郡方奉公人改役場へ差出改を受候様可致候、左候得ハ其筋吟味之上其御代官所へ裏判差出候様切手形渡筈ニ候、右切手無之者江ハ御代官所ニ而裏判不差出候、勿論内々ニ而中間召拘置候輩は屹度御咎有之事、
附、病気障不届柔弱之輩等、又無拠義ニ而暇為取、或ハ無故一己より暇取候類是又早々其次第可相断候、不届之断於有之ハ其筋ニ而吟味之上可被処其罪事、
「同」（朱）
一主人々々召仕方不法之義有之歟、或ハ給金等日数を過不相渡類相聞候ハヽ急度御咎可被　仰付事、
「寛政元酉年九月廿一日」（朱）
一年季一季之召仕代不召拘内ハ年を越候共暇差出間敷、尤日数越候ハヽ給金は日勘定を以可相渡事、
「享保二十卯年六月廿三日」（朱）
一召仕小者主人へ隠し長屋へ一切人を泊置間敷旨可申付事、
「寛政酉年」（朱）（寛政元年カ）
一長屋借并屋守等郷村ゟ差置候共、御代官所証文郡方奉公人改之抑切を受可差置事、
「享保二十卯年六月廿九日」（朱）
一召仕之中間ニ辻商或ハ刀を為指若党ニ召仕間敷事、
「享和三亥年八月十三日」（朱）
一帯刀之家来召仕候儀新番組之士組外之士迄ニ可限事、
「宝永二酉年十二月十一日」（朱）
一放し下人停止事、
「前々ゟ之例」（朱）
一譜代之家僕主従合点ニ而暇出候者といへとも私として他邦江出間敷候事、
「文化八未年八月十九日」（朱）
一譜代之家来郷村江差置間敷、若又不差置候而不叶次第有之候ハヽ申達可受差図事、
「寛政元酉年」（朱）
一間民之外長屋へ差置候義停止之事、
「文化十二亥年四月九日」（朱）

一召仕之若党中間平生ハ減少用捨たりといへとも、不時之節は相応ニ召連候様心懸へし、軍役之家来を減置なから下女繁身召仕候義不覚悟たるへき事、
「(朱)文化四卯年十一月廿八日」
一譜代家来養子ニ致、右養子又々他養子ニ遣候儀停止之事、
「(朱)文化十四丑年三月廿八日」
一他邦引入分限之者譜代家来ニ召拘度願取上間敷事、
附、他邦者直ニ譜代ニ召拘度旨願出候輩ハ、先ニ懸合之上及差図ニ而可有之事、
「(朱)九六」嫁娶之御定、附養子之式御定、
「(朱)(天明九年)寛政元酉年正月十一日」
一婚礼は子孫相続万世之始ニ候間、氏族を糺し家風正しきを撰候義可為専要、義を失ひたる不埒之取組不可致、若「(天明五巳年四月廿二日)」(朱)
続柄之吟味不委して申合輩は可為越度事、
「(朱)同」
一縁組願差出候義親子勤之者悴縁組相願候ハヽ、親願書可差出候事、
「(朱)宝永元酉年(ママ)四月十四日」
一諸士之妻容易ニ離縁は有之間敷義ニ候、其上後妻を無間娶候段不遠慮之義ニ候条、此旨可相心得事、
「(朱)文化十二亥年四月九日」
一嫁娶之規式申合可用簡略、御定之制〻決而越へからす、再縁之時は諸事弥手薄ニ可致事、
附、金銀を縁女へ附及約束候儀停止事、
「(朱)万治二亥年十二月廿四日」
一婚姻之節水あひせ候義停止之事、
「(朱)(天明九年)寛政元酉年正月十一日」
一乗物は独礼已上、長刀は弐百石已上為持之新婦之行装へ可入候、相略候分ハ不苦候、惣而行装ハ可随舅之格好事、
附、長刀持合候者御供番組士已上行装へ入候而も不苦、其已下新番組々外之士迄持合之品遣候とも行装へ入候義停止之事、
「(朱)同」
一長持は千石已上一棹、挾箱ハ五百石已上一ツ、其外は停止之事、

附、七百石已上桐櫃一荷葛籠壱ツ、五百石已上桐櫃壱ツ葛籠壱ツ、其以下独礼已上之面々杉櫃壱ツ葛籠壱ツたるへき事、

「(朱)万治三子年三月廿一日」

一手道具之類惣而蒔絵之品一切無用、櫃長持之類きちよふめん之品相用間敷、但譲之品所持致候者ハ勝手次第、或ハ蒔絵梨子地之品は譲りたりとも遣申間敷事、

「(朱)寛政元酉年五月十一日」

一下女は五百石以上壱人勝手次第、其已下は停止之、婚姻之当座為介添遣候義は非制限事、

「(朱)同」

一夜着蒲団等千石已上といへとも木綿之品可相用事、

「(朱)同」

一独礼已上聟入婚礼之当日舅入里披祝義寄合等之節、熨斗三宝抑引渡島台雑煎吸物長柄之銚子提土器等可出之、然とも身上ならさる輩其式を手重ニ相整候ハ無用之事ニ候間随分可用簡略、御通之者已下ハ島台抑引渡長柄之銚子等停止之事、

附、婚礼之節夫婦之膳部は一汁三菜迄用捨之、其余ハ御定之料理たるへき事、

「(朱)同」

一里披祝儀振舞之節聟并新婦之父母祖父母伯叔父姑兄弟姉妹、別家ニ罷在候とも互ニ相招候義不苦候事、

附、聟新婦之忌懸り同性(姓)ハ互ニ出入可致事、

一婚礼之節新婦ゟ聟江之引出物ハ麻上下一具扇子畳紙添之遣候、外は停止之事、

取遣候品は左之通迄ニ可相心得、申合減少ハ不苦、

三種壱荷　塩鯛壱掛　昆布五把　鰯弐拾枚

柳樽壱斗入塗台

太刀折紙　上作太刀壱腰　馬代金三百疋　折紙

餅五百八拾壱種壱荷　餅弐斗　鰯弐拾枚　指樽

右千石已上

三種壱荷　塩鯛壱掛　昆布三把　鰯弐拾枚

柳樽七升入塗台

太刀折紙　上作太刀壱腰　馬代金弐百疋　折紙

餅五百八拾壱種壱荷　餅壱斗　鰯弐拾枚　指樽

右七百石以上

弐種壱荷　昆布三把　鰯弐拾枚　柳樽五升入塗台

太刀折紙　中作太刀壱腰　馬代金弐百疋　折紙

赤飯壱種壱荷　赤飯壱斗　鰯弐拾枚　指樽

右五百石已上

壱種壱荷　鰯弐拾枚　柳樽五升入塗台

太刀折紙　下作太刀壱腰　馬代金百疋　折紙

赤飯壱種壱荷　赤飯七升　鰯弐拾枚　指樽

右三百石已上

壱種壱荷　鰯弐拾枚　柳樽三升入塗台

扇子壱箱　拾本入台白木

赤飯壱種壱荷　赤飯七升　鰯弐拾枚　指樽

右弐百石以上

壱種壱荷　鰯弐拾枚　指樽塗台

扇子壱箱　五本入台白木

赤飯壱種　赤飯五升　鰯弐拾枚

右百石以上　但、御切符拾六石已上同断之事、

壱種壱荷　鰯弐拾枚　指樽塗台

扇子壱箱　三本入台

赤飯壱種　赤飯三升　鰯弐拾枚

右独礼已上

「寛政元酉年五月十一日」(朱)

一養子願之儀同性(姓)由緒を正し、若於無之ハ其次第口上書ニ而可願出、養子再三ニ及候者ハ其趣をも可申出事、

「同」(朱)

一養子之式凡而婚礼之式ニ応し可致斟酌事、

「九七」(朱)喪葬之御定、

「前々ゟ之例」(朱)

一服忌ハ　公儀御定之趣無間違様可相心得、若其続柄に寄難究義は御祭事役所江可承合事、

「寛政元酉年正月十一日」(天明九年)(朱)

一喪葬ハ孝子之一大事謹慎を加へ衰(哀)戚を旨とし声をも荒く出さす静まり可罷在事、

附、飲酒堅停止之事、

「元禄二巳年」(朱)

一棺槨墓石等ハ孝子為死者霊永急(久カ)候条可随其分限、其余之葬具人之観をかゝやかし無益之飾等不可致事、
「(朱)寛政元(天明九年)酉年正月十一日」
一喪を弔ひ見舞等ニ参候者飯酒可禁候、贈物ハ備物或ハ軽き食料之品を限るへき事、
「(朱)同」
一漆塗之棺幷石槨停止之事、「享保七寅年四月十三日」(朱)
「(朱)同」
一独礼已上之面々麁布を以喪中之服を製し、死者之子共(供)幷遺跡相続之者忌丈ケ可着之事、
附、其家之祖父母曾祖父母之為ニ喪中之服着用勝手次第之事、
「(朱)享保十八丑年十二月十五日」
一儒道葬祭之儀儒者役幷儒学を以被召出候家は格別、其余は被任願間敷事、
「(朱)寛政已来之御議定」
一葬送之節死者之行装は随存生之格式、大凡他邦往来之行製程(装カ)ニ可相心得事、
「(朱)寛政元(天明九年)酉年正月十一日」
一葬送は日を撰昼時騒敷無之様墓所へ相送り壙内江可納之、詰石を埋候義孝子慈孫之本意たるへき事、
「(朱)享保三戌年二月」
一神道葬祭望之者重軽共ニ可被任願事、
「(朱)明暦四未(ママ)年四月十七日　正徳四午年六月廿六日」
一葬送は親族同性(姓)縁者朋友、或ハ死者之恩儀を得候輩、或ハ四隣之者之外大勢不可出事、
附、親族或ハ朋友より挑灯出候義可為無用事、
「(朱)寛政元(天明九年)酉年正月十一日」
一葬送之時独礼已上灯籠弐本ツヽ、御通之者以下ハ野挑灯弐本ツヽ或ハ壱本ツヽたるへき事、
「(朱)同」
一乳切指候棺幷棺台轆轤指柱立ハ弐百石以上たるへし、其以下釘指を可用事、
附、外棺ハ大身たりとも釘指ニ可致候、墓所山坂等有之舁送難儀ニおいてハ弐百石以下迚も轆轤指用捨之事、
「(朱)寛政元(天明九年)酉年正月十一日」

一千石以上棺ニ杉之赤身板を用ひ、弐百石以上は節なし上板、其以下御知行取或ハ御切符拾六石迄ハ小節付上板を可用、其外は並板たるへし、何れも厚サ壱寸迄ニ可致事、

「(朱)寛政已後之御議定」

一御通之者以下は座棺可相用、病体ニよりてハ寝棺相用候義用捨之事、

(朱)(天明九年)「寛政元酉年正月十一日」

一五百石以上は棺槨之間三物詰、右以下ハ炭詰たるへき事、附、五百石以上ハ外棺之外炭詰たるへき事、

「(朱)同」

一七百石以上外棺之厚壱寸五分迄ニ可限、二百石以上壱寸、其以下八分、御切符拾五石以上ハ七分を可限、何れも杉板を可用事、

「(朱)同」

一棺幷葬具之覆ハ紙を可相用事、

　　壙内幷石塔御定

壙深壱丈弐尺、外棺之内三物詰六方三寸、

壙内炭詰六方四寸、

石塔竿石三尺五寸を限とし台石塚石是ニ可準、以下同断、

　　右千石以上父母之取置といへとも是ニ過(ヘカ)やからす、妻子兄弟以下は相応ニ其等を下すへし、以下同断、

壙深壱丈壱尺、

外棺之内三物詰六方弐寸五分、

炭詰六方三寸五分、

竿石長三尺三寸限り、

　　右七百石已上、

壙深壱丈、

外棺之内三物詰六方弐寸、

壙内炭詰六方三寸、

竿石長三尺限り、

　　右五百石以上、

壙深九尺、

外棺之内炭詰六方三寸、

竿石長弐尺八寸限り、

　　右三百石以上、

壙深八尺、
外棺之内炭詰六方三寸、
竿石長弐尺五寸限り、
右弐百石以上、
壙深七尺
外棺之内炭詰六方弐寸、
竿石長弐尺三寸限り、
右百石已上、但御切符拾六石迄、
壙深六尺、
外棺之内炭詰六方壱寸五分、
右独礼已上、
「(朱)(天明九年)寛政元酉年正月十一日」
一御通之者已下独礼以上之規を以諸事随其分限可減少之、
石塔に北山石相用間敷事、
「(朱)同」
一御家人葬送之節大小為持不苦事、
「(朱)新規御議定」
一石塔之義家々之仕来も有之御定之寸尺ゟ増度輩ハ願之上
(ママ)可不為差図事、

布施回向料等之定

布施	金三百疋
回向料	同百疋
請代	同弐百疋
大衆布施	同弐百疋
寺中施行	同弐朱

右千石以上ニ而父母之葬送とへとも此外ニ過へからす、兄弟妻子已下ハ相応ニ可減少、以下
(い脱カ)
右同断、

布施	金弐百疋
回向料	同百疋
請代	同百疋
大衆布施	同弐百疋
寺中施行	鳥目五十疋

右七百石已上、

布施	金弐百疋
回向料	同百疋

請代　同百疋
大衆へ　同百疋
寺中へ　鳥目三十疋
右五百石以上、
布施　金百五疋
回向料　弐朱
請代　金百疋
大衆へ　弐朱
寺中へ　鳥目三十疋
右三百石以上、
布施　金百疋
回向料　弐朱
請代　弐朱
大衆へ　弐朱
寺中へ　鳥目五十疋
右弐百石以上、
布施　金百疋
回向料　鳥目五十疋
請代　鳥目五十疋
大衆へ　同断
寺中へ　鳥目拾疋
右百石已上、御切符拾六石迄、
布施　金百疋
回向料　鳥目三十疋
請代　同断
大衆へ　同三十疋
寺中へ　同拾疋
右独礼以上、

「寛政元酉年(天明九年)正月十一日(朱)」

一葬式之儀貴賤貧富之差別有之其礼不等儀高録(禄)之者も分ニ不越、少録之者も其分相応ニ葬可致儀ニ候処、孝子慈孫も困窮之者ハ財用ニ付不本意事可有之趣ニ付、頭々或ハ仲ケ間へ一類共ゟ差支之品申出候ハヽ役人共へ対談可致候、左之通拝借金可被成下候事、

拾両　葬送料　千石以上
弐両壱分　墓所料

九両弐分	葬送料	七百石ゟ九百九拾石迄
壱両三分	墓所料	
七両	同	
壱両壱分弐朱	同	五百石ゟ六百九拾石迄
六両壱分	同	三百石ゟ四百九拾石迄
壱両弐朱	同	
五両	同	弐百石ゟ弐百九拾石迄
三分弐朱	同	
三両弐分	同	御切符拾六石ゟ御知行百九拾石迄
壱分弐朱	同	
弐両壱分	同	御切符拾五石以下独礼
壱分	同	
壱両弐朱	同	御通之者年割
弐朱	同	
弐分弐朱	同	年割以下
弐朱	同	
弐分	同	高懸り之者
弐朱	同	

但、父母祖父母之葬如此拝借被　仰付、伯叔父姑兄姉妻嫡子ハ壱等を下し、次男以下弟妹甥姪孫は一等を下し御貸金可有之、七歳未満之者ハ御貸金無之事、

「(朱)九八」武具馬具并諸道具器財等之御定、

「(朱)文化十二亥年四月」

一武具馬具分限ニ応し相嗜候義武士之常といへとも其製作専ら実用を主とすへし、或ハ高金を費し外を飾り、或ハ花美無益之製作不可好事、

「(朱)寛政五丑年六月廿九日」

一武具馬具共軍役之通御檜江相納可置、若子細有之受取度輩は申達可受差図事、

「(朱)寛政酉年」

一格差物免許之面々注文之品等類之有無御用所江問合之上絵図を添竪書を以可願出事、

附、纏馬印縅(幌カ)出章吹貫出章同断之事、

「(朱)宝永七寅年五月廿七日」

一凡而指物に日之丸之紋用候義可為無用、月之紋は訳有之

面々ハ其次第ニ寄可被任願、物好等ニ而願出候輩ハ取上
間敷事、
「寛政七卯年四月」(朱)
一大小下緒萠黄啄木は御家人は不及申、又者迄停止之事、
「公儀御定」(朱)
一刀ハ弐尺八九寸を限りとし、大脇差壱尺八寸を限とし、
是より長きは停止之事、
「同」(朱)
一大鍔大角鍔朱鞘黄陳鞘かひらき鞘停止之事、
「万治三子年三月廿一日」(朱)
一諸士妻女之駕繁鋲無用并手道具等梨地高蒔絵或ハ平蒔絵
ニ到迄可為無用事、
「享保三戌年三月十七日」(朱)
一在江戸之面々出火之節御供等ニ而自分挑灯之儀自分々々
之紋付、其肩ニ会之字（曲尺ニ而三寸五分）指渡黒ク可付、挑灯之大
小紋之大サ勝手次第之事、
附、会之字付候挑灯常ニ用候儀不苦候、
「享保十一午年十二月廿六日　公儀御定」(朱)
一諸秤千木新古ニ不限修覆糸附等内々ニ而拵候義、又ハ無
印之枡相用候義停止之事、（「前々々之例」）(朱)
「寛政三亥年四月十三日」(朱)
一勤番往来之節挾箱練繰ニ而〆紐掛間敷、傘袋之結ひ紐房
共ニ是ニ準目立不申様可致事、
附、其外ニも行装へ入候諸道具飾かましき儀共相省き、
質素を専ニ致候様可相心得事、
「文化七午年二月廿日」(朱)
一江戸勤番之役々江ハ従僕装具於江戸表御貸可有之、手指
股引法被之類ハ御貸物無之候間可致持参事、
「文化十二亥年四月」(朱)
一凡而器物ハ用之足を以主とし、質実有来之品を尊ひ奢侈
風流之品相用間敷、酒器家具男女懐中物煙草道具之類、
或ハ絵賛墨跡床飾等を始無益之翫物花美高料之品不可相
求事、
「文化六巳年六月」(朱)
一御役替之節ハ三十日限り相納置候武器共御櫓移替可申事、

「(朱)九九」旅行御定、
「(朱)享和二戌年正月十一日」

一旅行之面々人馬之者先触差出可致通行、尤先触ハ疎末ニ無之紙を可相用事、
「享和三亥年正月廿三日　公儀御触」(朱)
附、先触江泊り附致可差出事、
「(朱)文化三寅年二月十九日」

一江戸幷他邦往来之節人馬望之儀役人共江申断、先触駄賃帳共ニ印鑑抑切を受、旅行終而町役所へ可相納之、他邦へ罷越候節ハ往来之分共ニ抑切を可受事、
「(朱)前々ゟ之例」

一公儀御関所懸り候節切手無之通行不相成御場所も有之候間、問合切手可申受事、
「(朱)同」

一御境目番所ハ女其外諸留物差出度輩は切手可申受事、
「(朱)文化十二亥年六月十一日」

一江戸幷他邦ゟ帰着候ハヽ、先触駄賃帳幷不時ニ人馬継立候分ともニ日数五日之内可相納事、
「(朱)慶安五辰年正月十一日」

一道中ニおいて抑買狼籍諸勝負不可致事、
「(朱)同」

一木銭旅籠銭駄賃銭急度可相済之、宿之亭主と申分仕間敷事、
附、宿之善悪ニ付難渋申間敷事、
「(朱)同」

一大酒好色停止之、門立小歌高声高雑談仕間敷事、
「(朱)同」

一竹木垣根以下猥りニ不可伐採、湯風呂へ参間敷事、
「(朱)寛文元丑年七月廿五日」

一家中荷物貫目御定ゟ重く不仕様可申付、於道中下々口論仕候義も荷物重き故ニ候間急度可申付事、
「(朱)公儀御定」

一本馬は一駄四拾貫目、軽尻(はカ)之弐拾四貫目、人足之荷物之(はカ)壱人ニ付五貫目ニ可限事、
「(朱)同」

一乗物壱挺ニ人足六人乗物ハ四人持たるへし、長持壱棹三拾貫目を限るへし、人足壱人ニ五貫目之荷損ニ而三拾貫

目ハ人足六人、夫々軽き荷物ハ貫目ニ随ひ人数減少すへき事、

「天明七未年三月十五日」(朱)

附、丸棒駕、山駕等弐人三人懸り之人足ニ而罷通間敷事、

(朱)「文化十四丑年二月始而被仰出此度猶又御議定」

一御参勤御往来御供之面々装束は麻木綿之装羽織、士分以上ハ麻木綿之裁付、其外は股引着用、自分往来勿論之事、

附、御本陣勤之面々ハ届之上麻木綿之野袴着用之事、

(朱)「文化十四丑年二月二日」

一旅行之節物頭御使番以上長柄傘、大御目付已上中道具立弓対挟箱、御勘定奉行新番頭以上対道具、若年寄以上蓑箱、御大老御家老打物可為持候、雖然自分往来ニハ持道具供勢共ニ成丈ケ減少御供迚も随分可令減少事、

附、御大老ハ鉄炮為持、御家老ハ平和之往来ニ鉄砲無用事、

(朱)「同」

一御使番以下迚も三百石以上之士騎馬御供之節ハ長柄傘可相用、其外役柄ニ寄吟味之上長柄傘免許之事、

(朱)「新規御議定」

一御勘定奉行新番頭已上之面々差持具足櫃、右以下両掛具足櫃背負具足櫃之内可相用事、

(朱)「元禄七年五月」

一他邦往来之節第は、大御目付大組物頭已上不及願免許之事、

(朱)(ママ)「文政七卯年六月二日」

一江戸勤番上下并他邦江御用ニ付罷越候者帰着ニ付被召出候節着服、当日は野袴、翌日は麻上下着用之事、

(朱)「文化五辰年二月十六日」

一御家中之者共江戸々々罷下候節、長持或ハ長き荷物持参候ハヽ、房川渡御関所ニ而切手無之候而は通行不相成候間、切手申受長持之鍵を添致持参改を受可罷通事、

(朱)「同四月十一日」

一東海道旅行之面々勝手を以中山道甲州道中往来荷物附送候ハヽ、道中奉行衆へ達し差図之上致往来候様御達有之事ニ候、訳有之中山道甲州道中往来致候者、人馬仕ひ候ハヽ申出差図之上可致往来候事、

「公(朱)儀御定」

一房川渡御関所夜ニ入通行之節ハ、切手無之候而ハ不相成候条、急き之御用ニ而罷通候輩は切手申受可致通行事、

「百(朱)」江戸御屋敷内御作法、

「享(朱)保二十年卯年七月」

一御屋敷前　御成還御之節窓之板戸壁等障間敷物音不立様相慎可申、尤御人払相触候ハヽ二階ニ人決而差置申間敷事、

「同(朱)」

一表御長屋ニ罷在候面々　通御之節表之壁へ障申間敷、壁透等有之候ハヽ其以前申出可繕、差懸り損所等出来候而ハ難繕候間此旨可相心得事、

「同(朱)」

一窓之板戸弐本ツヽ仕付相渡置候、　御成ニも不限急ニ建候義も有之候間兼而可相心得事、

附、御近所出火有之御人数出候程之節ハ板戸建可申事、

「同(朱)」

一御大名様幷武家軽々ニ到る迄通路之者之義批判致間敷事、

一親類或ハ近付たりといふとも窓より言葉取かはし申間敷幷窓より諸品決而買取間敷事、

「同(朱)」

一自分ニ而炭櫃等仕付候節梁尾引等を切かき候族も有之由相聞候、都而御長屋之木柱ニハ疵付申間敷候、幷表通之壁へ釘打申間敷候、板戸壁等損し或ハ透等有之候ハヽ御普請方へ早々申出可繕事、

「同(朱)」

一表窓ゟ塵芥ハ不及申何成共捨申間敷事、

「同(朱)」

一表ゟ見込候所へ見苦敷品指置へからす、尤不敬成義無之様可相慎、すたれ掛置候間可成程ハ巻上さる様可相心得事、

「宝(朱)永七寅年十二月十一日」

一所々御屋敷内横通ニ囲置候梯子私用ニ迦(架カ)申間敷事、

「同(朱)」

一屋上へ薪其外干物停止之事、

「(朱)寛政十午年十一月十三日」

一所々御屋敷毎年十月始ゟ春三月初旬頃迄之内、御長屋毎に樽桶類之物へ水を湛へ御長屋構之内、或ハ手狭之場所ハ御長屋前へ可備置、水箒をも可設置事、

附、足軽以下軽々之者ハ三軒ニ壱ツ或ハ五軒ニ二ツ宛程之積を以御普請方ゟ為相渡候、其品損等有之候ハヽ手入之趣は自分々々ニ而可致事、

「(朱)安永三午年正月十九日」

一出火之節役人之外火之見へ登間敷事、

「(朱)寛政七卯年七月三日」

一昼夜ニ不限御屋敷内往来之節ハ小唄謡候義停止之事、

「(朱)安永七戌年正月廿一日」

一上御屋敷三丁四方之内出火之節、高番所ニ而板木を打候筈ニ候事、「(朱)附、三丁内弐ツ拍子、至而御近火ハ摺付拍子ニ打候筈ニ候事、」

「(朱)(寛政六年)寛政寅年六月廿四日」

一御屋敷内ニ而花火を建候義制禁之事、

「(朱)同」

一夜中御屋敷内ニ而大勢相集り相撲を取力持いたし、或ハ御長屋前ニ而煙草を呑候儀停止之事、

「(朱)前々ゟ之例」

一所々御屋敷内ニおいて夜中イ候儀停止事、

「(朱)天明七辰(ママ)年二月十一日」

一子共(供)之徒とハ乍申隣御屋敷ゟ上ケ候凧をからませ、或ハ石礫不打様其親々教誡可致事、

「(朱)寛政元酉年」

一江戸御発駕之節御家中之面々御行列拝見ニ罷出間敷事、

「(朱)宝暦(ママ)三戌年」

一私用ニ而三度他出之後指懸り急ニ無拠訳ニ而罷出度者有之ハ、頭或ハ仲ケ間を以御目付江其訳相断候上断私(札カ)申受可罷出事、

「(朱)天明八申年八月十二日」

一暮六ツ過ゟ私用札ニ而他出不相成、無拠子細有之ハ御目付へ申断、断札を以可致他出事、

「(朱)明和五子年」

一御家中之子弟他所親類方へ差越逗留之儀、一宿たりとも

願之上可受差図事、
「同(朱)五月」
一会津ゟ罷登候子弟幷町人百性(姓)或ハ他所者逗留之義、四夜五日迄ハ御目付江相断、其余ハ達之上可受差図事、
「同(朱)」
一御家中之子弟所々御屋敷へ為逗留差越候節、七歳以下は親々ゟ御目付へ可相断、八歳已上は一宿たりとも達之上可受差図事、
「前々(朱)ゟ之例」
一御家中婦人御屋敷内乗物不苦事、
「寛延元(朱)辰年八月十九日」
一父母大病之由申来対面之願申出御暇被下罷下候上ハ、快気之様子見届気遣無之場ニ到候歟、或ハ病気次第ニ差重り介抱難見離罷在相果候ハヽ取置済候後可罷登事、
「延享元(朱)子年八月」
一他所ニ罷在候親子兄弟等病気之節、為対面罷越度者ハ余事とも違候間、定例之外頭或ハ仲ケ間を以御目付江相断、々札を以可罷出事、
「万治元(朱)(明暦四年)戊年六月六日」
一御長屋ニ而囲炉裏へつつい塗候ハヽ壁際少し除ぬりつゝけ申間敷事、
「同(朱)」
一本屋板敷之上ニ而直ニ水を遣ひ申間敷事、
「同(朱)」
一庇之内ニ厩湯屋雪隠仕付申間敷事、
「同(朱)」
一近所火事之節面々長屋之上へ召仕之者を上ケ火之紛為払可申事、
附、平日は勿論、近火ニも無之節ハ、屋上へ上ケ間敷事、
「安永(朱)三午年正月十九日」
一出火之節他所一類之方、或ハ無拠訳等有之候ハヽ其訳御目付へ相断可罷出、尤火之模様ニも可寄儀一類抔ニ事寄猥りニ罷出間敷事、
「享保(朱)四亥年」
一惣而御長屋補理幷内仕切戸障子建具等何品ニよらす移替

り候節、自分ニ而拵候品も其儘差置可申、但敷物釣り棚ハ格別ニ候、畢竟御長屋不弱様ニとの義ニ候間、棚ニても幅三四尺ニも及候ハヽ見聞(分)を受可取払事、

「(朱)享保十二未年」

一御長屋移替之節、有来之住居を用ひ其儘ニ而相渡候内住居望有之仕置候儀堅停止候事、

附、内住居自分ニ而仕度候ハヽ、御普請方江申談御長屋之障ニ不成様内仕切仕候義ハ勝手次第之事、

「(朱)前々ゟ之例」

一葬送之儀ハ即日可取行之、夕七ツ時過病死ニおいてハ翌日ニ到り葬送不苦事、

附、葬式之儀土風も有之会津御作法之通ニハ成兼候義ニ候条可有斟酌事、

「(朱)同」

一所々御屋敷御門限明ケ六ツ時ゟ夜四ツ時迄出入可致事、

附、上御屋敷ハ　御在邑之節夜五ツ時御門〻候事、

「(朱)同」

一御門限過往来致候儀御用幷病用ハ御目付へ相断(ママ)可出入可致事、

「(朱)同」

一常詰之隠居幷子弟其外厄介之者御門無札之事、

「(朱)寛政八辰年四月廿三日」

一浜御殿　御成之節芝御屋敷御人少ニ相成候而ハ不宜候間成丈不散様可致候、　御機嫌伺或ハ御祝儀等申上候為上御屋敷へ罷出候とも、御成之日ハ相延翌日可罷出候、其外御用ニ而所々御屋敷等へ罷出候とも御用相済次第早々可罷帰事、

「寛政六寅年十一月十一日」(朱)

附、浜御殿　御成之節芝御屋敷へ罷越候義可成丈致延引、たとひ御用たりとも翌日へ差延相済候義ハ繰合之上御当日は可見合事、

「(朱)寛政七卯年十二月十三日」

一出火等之節は勿論平日ともニ御用之外猥りニ御紋付挑灯相用間敷事、

「(朱)寛政三亥年八月五日」

一御紋附挑灯之義影日向之御紋印不附候而ハ　公儀御挑灯ニ紛敷候条、影付之分ハ会之字可付事、

附、御紋附挑灯御用ニ付相用、於途中他所者へ対し威勝ケ間敷義を致し、就中出火等之節軽々之者別而いかつなる儀も有之由ニ候条、左様之儀屹度可相慎事、

「寛政六寅年閏十一月十一日」（朱）

一常詰之者年季明之夫丸之内、直ニ召抱度輩ハ何村之誰と申者相対を以夫丸ゟ直ニ召抱候段其主人跡支配を以会津役人共江相届切手可受取事、

「寛政十二申年十一月廿五日」（朱）

一出火之節御人数被差出候節子弟召仕等迄見物ニ罷出間敷、且又御長屋屋上へ上ル間敷事、

「寛政十一未年六月廿三日」（朱）

一交代之者猫を飼置、罷下候節飼放し其儘ニ差置間敷事、

「文化二丑年正月十一日」（朱）

一御屋敷内ニおいて春米商売停止之事、

「文化五辰年十一月十一日」（朱）

一芝御屋敷之儀浜御殿　御成之節ハ勿論、平日ともに凧を不上様可致候、右御庭内鳥不落付由も相聞候間、何儀ニよらす御殺生之障等ニ罷成候義ハ不宜候条、平日にたこたりとも不上様子弟召仕等へも屹度可申付事、

附、三田深川御屋敷之儀も最寄　御成之節ハ、当日ハ不申及前日ゟたこ上間敷事、

「文化七午年十月三日」（朱）

一芝御屋敷において螺貝吹候義、九月ゟ三月迄浜御庭御鳥御場江差障ニ相成由ニ候間決而吹不申様可致候、尤稽古致度者ハ外御屋敷ニおいて稽古可致事、

「文化八未年六月十四日」（朱）

一御屋敷前　御成之節ハ水汲も朝之遣ひ料ハ前日ニ汲置、夕之遣ひ料ハ昼之内ニ汲、御払より　御成還御不相済以前ハ幼年之者ハ宿へ呼置、尤不得止御屋敷内致往来候とも心を付物静ニいたし、雪駄下駄之音不致様且又煙抔不出様可致事、

附、丸太長竿等有之候ハヽ伏セ置可申事、

「享和二戌年五月十四日」（朱）

一御成之節前日表御長屋画板戸を差候儀之処、其節外出等致し留主居も無之帰り後〻り申付候而ハ差支も有之、自然御道番之衆ゟ断等有之候而は如何ニ候条、外出致し留

主居不差置面々は其毎度簾を迦し板戸可立置事、
附、板戸ニ而粘細工致し、或ハ棚抔ニ用候儀停止之事、
「甲賀番所御条目」(朱)
一独礼以上之諸士中ノ口廊下通中程ニ而刀を取、詰所無之面々ハ御納戸前長囲炉裏上へ可差置事、
「同」(朱)
一御通之者ハ長囲炉裏へ刀可差置事、
「同」(朱)
一月割年割之者ハ甲賀番所前之刀掛へ可差置事、
「同」(朱)
一足軽上下免許小頭抔ニ到迄膳立之間入口之東之方へ、往来之障ニ不相成場へ可差置事、
「同」(朱)
一中間ハ中ノ口中間詰所へ大小共ニ可差置事、
「享和三亥年七月四日」(朱)
一足軽共台子之間并時計之間次之間へハ脇差帯候義不相成事、
「文化三寅年二月十一日」(朱)
一上御屋敷御家中御貸蔵へハ武器或ハ勤将(装束)速等、要用之品計望之者ハ御徒目付へ対談可入置事、
附、出火之節ハ勿論平日ともに入置候義勝手次第ニ候、且又我勝次第ニ諸道具入候而ハ不足ニ候条其心得可有之、尤土蔵内へ煙草盆或ハ火鉢体之物を入其内ゟ失火之儀も間々有之由ニ候条、火急混雑之節心得違無之様平日可相心得事、
「同」(朱)
一御家老御長屋構之内御蔵へハ出火之節会所始諸役所帳諸共可入事、
「文化五辰年二月十二日」(朱)
一藁灰其外火気いろい候品埃溜へ棄候節ハ得と鎮し可捨候、しめし候とも即時ニ不捨得と吟味いたし、猶又水を沢山ニ懸ケ弥火之元可入念事、
一所々御屋敷謡鳴物停止之事、日並左之通可相心得事、
公儀御日柄
権　現　様　十七日　所々御屋敷共ニ夜中迄、
四月十七日御祥忌ハ上御屋敷計前夜ゟ、

台徳院様　廿四日　所々御屋敷共ニ前夜ゟ御当日夜中迄、
正月廿四日御祥忌共ニ、
大猷院様　廿　日
四月廿日御祥忌、
厳有院様　八　日
五月八日御祥忌、
常憲院様　十　日
正月十日御祥忌、
文昭院様　十四日
十月十四日御祥忌、
有章院様　晦　日
四月晦日御祥忌、
有徳院様　廿　日
六月廿日御祥忌、
惇信院様　十二日
六月十二日御祥忌、
大猷院様ゟ
惇信院様迄月并御日柄は所々御屋敷共ニ暮六ツ時迄、御祥忌ハ上御屋敷計前夜ゟ御当日夜中迄、
浚明院様　八　日　上御屋敷計前夜ゟ御当日夜中迄、所々御屋敷は御当日夜中共ニ、九月八日御祥忌共ニ同断、

御家御日柄

土津様　十八日
鳳翔院様　三　日
徳翁様　十　日
土常様　廿七日
恭定様　廿九日
貞昭様　廿七日
欽文様　廿九日
右所々御屋敷共ニ前夜ゟ御当日夜中迄、
宣明院様　六月十七日
松寿院様　正月十日
心了院様　六月晦日、小ノ月ハ廿九日
右御祥月ハ所々御屋敷共ニ前夜ゟ御当日夜中迄、
心尽院様　五月十四日
智厳院様　八月二日

良徳院様　六月三日
幻光院様　十一月十四日
　右御祥月は所々御屋敷共ニ前夜ゟ御当日夜中迄、

「一〇一」（朱）江戸表御門外諸事心得方、
「文化十一戌年十一月」（朱）

一日光御門主様御三家様御三卿様御庶子様姫君様御行列は、御先払有之候間可成程は脇通いたし、若無拠御行列へ行懸り候ハヽ片脇へより、供之者迄行儀能片寄鑓を伏セ可罷在候、勿論雨天之節傘を用不申供之者迄笠を為取可申事、

一御同席様御老中様若御年寄様幷御親類様方右御行列へ行懸候節御時宜（辞）仕候、控候而御供之内ゟ相尋候ハヽ　御名内何之誰と相答可申事、

　附、供減忍ひニ而往来之節ハ御時宜ニ不及、御行列之妨ニ不成様片寄候而可罷通、尤忍之節たりとも御先払有之御行列へ行懸候節ハ其趣ニ相心得へく事、

一万石以下之御方へハ御家来不致下座御家格候間此旨可相心得事、

一大手御門前下馬札之外ハ馬上ニ而往来幷日笠冠候儀も不苦、供之日笠ハ不相成、勿論雨笠ハ不苦候、供之日笠を取候は大腰掛後之角ゟ酒井雅楽頭様御屋敷脇辻番所を過候迄、且又大腰掛前ゟ御畳蔵前通ゟ一切往来不相成候事、

一西丸大手御門前も下馬札之外右同断之事、

　附、供之日笠　此方様御家（屋）敷辻番所ゟ外桜田御門迄不相成事、

一御登　城日御退出迄之内西之丸下通不相成候事、

一御本丸大手御門ゟ酒井雅楽頭様御屋敷脇を通候得は、御登　城日たりとも往来差支不申候処、是又御退出迄遠慮可致事、

一御鷹据通候節は不及下馬片寄可申、尤込合候節ハ致下馬其前ニ致猶予妨ニ不相成様可心懸事、

　附、御馬率通候節も右ニ準可申事、

一上野増上寺之御山内ハ駕籠ニ而乗通候義ハ不苦、馬上之節ハ下馬札之手前ニ而可致下馬ハ勿論之事、

　附、上野吉祥閣下ハ駕籠ニ而通り不申、且又増上寺蓮

池之方ハ往来不相成候事、

一内曲輪之御堀端を馬上ニ而通候節ハ、馬術之達者不達之差別なく両口を附可申、万一騒候事有之御堀へ入候ハヽ、其所之辻番へ申達率上候儀頼可申、乗人共ニ御堀へ入候而ハ不軽事ニ付落入不申内落馬可有之、其儀心ニ任セ不申乍乗落入候程之儀ニ候ハヽ、致怪我歟溺候歟ニ而得上り不申前後不覚ニ可有之候条、其所之役人之裁判ニ而人ニ助ケ上られ候上始末之趣可申達候、御門番所近所ニ候ハヽ其御門番人ゟ取扱候由ニ候条可有其心得候、尤御屋敷へも早々申越へく候事、

附、船之出入有之御堀ニ而、人ニ助ケ上られ候ニ不及上候程之体ニ候ハヽ早々上候而も不苦、馬を上候儀も其辺之辻番人又ハ町番所へ可相頼事、

一内曲輪御堀へ笠抔落不申様供之者迄も可申付、風烈之節抔不図落候儀有之候とも其通ニ而可罷通事、

一於途中ニ若不快候歟、又ハ落馬抔致し如何体ニも御屋敷へ難罷帰程之節ハ、其辺之辻番へ相頼町方ニ候ハヽ町番所を頼、或ハ町家知人有之候ハヽ右を頼候而成とも保養可有之、尤御門限等も有之儀ニ候得ハ其段早々御屋敷へ可申越事、

附、辻駕籠等有之所ニ而可罷帰程之体ニ候ハヽ、可成丈ケ御門外ニ罷在不申様可致事、

一供之内若病人等有之節も又同断、辻番所又ハ町番所を頼家来壱人附置早々御屋敷へ申越迎之人可差越事、

一病馬等有之節も辻番を頼馬具を預早々御屋敷へ可申越、自分急き之御用ニ而其所ニ罷出不申節ハ家来壱人付置可申事、

一惣而御門外喧嘩等無之様別而可相慎義ハ勿論ニ候得共、向方ゟ理不尽之体在之候ハヽ其程ニ応し可相心得候、自然無事を専らニ致し人前ニおいて早（ママ）之体有之候而は、其身ハ不及申御家中之武名を汚し候事ニ付其覚悟肝要ニ候、万一難差延筋ニ而相手を打放候ハヽ其所不立退辻番所へ相断、町方ニ候ハヽ町番所へ申述是亦其所ニ見合可罷在候、尤御屋敷へ早々可申越候事、

附、辻番所受負有之事ニ付其所ニ而承合、其受負之辻番所へ可申達事、

一供之者へ理不尽之体を以切懸候様之者候ハヽ、取抑候而其主人之名右何方何之誰と申儀承届、其場所次第ニ辻番所へ其訳前条同様申述取抑候者を預ケ、勿論自分も其所ニ罷在早速御屋敷へ可申越事、

一酒狂又ハ病乱体之者理不尽之儀致懸候ハヽ是又取抑前条同様可相心得候、若酒狂病乱之由を以相断候ハヽ、其断候者何方誰と申儀委敷承届候上相渡可罷通候事、

附、酒狂病乱と申なから万一供之者手負候様成儀有之候ハヽ、仮令断候者有之候(ママ)共容易ニ相渡間敷事、

一惣而外様向ニおいて異変之儀有之其段御屋敷へ申越候節は、誰支配誰組ニ而も御聞番江可申越、左候得は其段御聞番〻申達筈ニ候事、

一町筋本通ハ軒下壱間、横町壱軒下三尺外往来之道筋ニ而候間、右往之所ニ而干物等出置若馬抔踏敷候共其町〻申分不相成、万一申分有之候ハヽ右之趣申聞会釈等ニ不及候事、

附、右之通ニハ候得共可成程ハ致用捨、且又別而貧しき町家ニ而干物等損候ハヽ相応ニ心を付可罷通事、

一丸頭巾角頭巾其外一切かふり申間敷、異風之頭巾面体を隠候品を冠歩行候者ハ名前をも承糺、疑敷者ハ召捕候様公儀御触有之候間兼而可相心得事、

一四月朔日〻九月九日迄之内御間内又ハ御使番者之節足袋堅無用之事、

附、九月十日〻三月中足袋を用ひ候、月次之内足袋不用儀は苦からさる事、

一御供相勤候者心得方之儀は凡而御家格之通相心得可申、不案内之面々其支配頭或ハ御刀番江承合可申、御使者之義は一ト通相知候義ニ候得共、御先方次第心得之差別有之事ニ付是又委敷承合可相勤候、惣而承合候筋兼而不委候得ハ差懸り当惑間違も有之事ニ付心懸ケ専一たるへき事、

一他所者と出会之節応対不都合無之様可相心得、譬へハ御先祖様已来之儀候へハ御親類様御続等之儀相尋候節、大略之答も難成様ニ而は御不都合ニ候間都而其心得可有之事、

附、御国之義ニ付他所者問候節は答ニ精粗之程も可有

之儀ニ付其斟酌勿論之事、

一御親類様之内御両敬之御方々様御使者御取次等之節は不及申、其外応対ニ而も不都合之儀無之様可相心得事、

一出火之節馬上之火元見留出消防之障ニ成候間火口へ乗込申間敷、火元迄不相越候而も火事之様子ハ可相知事ニ候間、火元一二町も手前ゟ見受、場所へハ決而乗込申間敷旨従公儀御触有之候条、此旨可相心得事、

附、火事場へ見物かましき者別而多馬上ニ而も出候儀堅無用ニ可致、右体之者ハ御目付衆姓名承糺被申上候「御使番衆」(朱)

筈ニ御触有之候間、此段も可相心得事、

「公儀御触」(朱)

一火事場江罷出候　「明和三戌年三月　寛政四子年十二月　文化十三子年三月」(朱)　公儀衆ハ左之品被用候事ニ候条相用間敷旨御触有之候間可有其心得事、

御小性衆御納戸衆目印

一網代笠端反り裏金但溜塗

一丸小挑灯白赤花色竪筋

御使番衆

一白塗笠　鐔付

「文化八未年七月十二日」(朱)

一立弓為持通候節御門番所へ供之内より可相断、鉄炮御聞番（ママ）者ハ御徒目付ゟ之断を可受、見付々々断方之儀ハ御徒目付へ可承合事、

附、夜中六ツ時過女通行之節ハ、自分々々ゟ断可差出事、

「享保八卯年四月七日」(朱)

一御紋付御召物着用罷通候節、　公儀町同心抔改候義有之由ニ候条、此方様御家来之由威勝かましき無之様可相答事、

「一〇二」(朱)　日用之儀ニ付御作法、

「貞享四卯年二月十九日」(朱)

一諸士之面々改名之儀、或ハ先祖由緒有之、或ハ同名差合無拠義ハ格別、無故恣ニ不可改事、

附、為差訳も無之候而は先祖之名たりとも容易ニ相改間敷候、「明和三戌年十一月廿八日」(朱)都而御近習向表向相勤候者他江名顕たるハ別而相改間敷事、

「前々(朱)之例」

一御家中之子弟私ニ剃髪して致出家候儀停止之、雖然不得止子細有之訴出候ニおいてハ御吟味之上可被任願事、

附、妻其夫を失ひ再縁之意なく剃髪致尼ニ成候義ハ可為格別事、

「公(朱)儀御定」

一大なて付大額大すりさけ下鬚幷ねはり鬚停止之事、

「明(朱)暦元丑(ママ)年九月五日」

一士屋敷へ浪人共召置間敷、若不召置候而不叶子細有之ハ御家老共へ申達可任差図事、

「前々(朱)之例」

一諸士諸奉公人之子弟私[寛政三亥年二月](朱)として町郷村ニ居住致し間敷申達可受差図事、

「元(朱)禄四未年三月」

一諸士之内自然乱心之気味有之者見及候ハヽ無遠慮可申出之、若隠置ニおいてハ可為越度事、

「明(朱)和三戌年五月廿日」

一願之上永代之御暇被下においてハ会津住居停止之事、

「前々(朱)之例」

一他所者泊置候節申達可受差図事、

「正(朱)徳四午年正月廿七日」

一切支丹御改之証文御近習ハ御納戸、外様ハ無役組以上組支配有之者ハ、組支配之内を以公事所へ可相納之、組支配無之面々ハ直ニ可相納之、右以下ハ組支配有之候共直納可有之、病気差合等有之者ハ子弟親族之内を以可相納事、

附、同役之内支配之有無両様有之候共支配有之者之証文と一同可相納事、

「寛(朱)政二戌年四月廿日」

一独礼以上親族縁族家内有人帳毎年五月新帳ニ調之御祭事役所へ可差出之、狂ひ無之者ハ其旨を以可相断事、

「前(朱)々之例」

一御通之者已下分限帳ハ狂ひ之有無ニ拘はらす、毎年二月新帳ニ調御祭事役所へ可差出事、

「宝(朱)永三戌年四月　享保六寅(ママ)年十月二日　正徳四辰(ママ)年十二月八日　元文四未年七月十二日」

一百姓町人へ会符をかし或ハ武芸を指南致し、或ハ鉄炮を貸候儀停止之事、
「(朱)文化八未年四月廿六日」
一軽々父子勤之者一方別苗字ニ相改候義停止之事、
「(朱)寛政二戌年五月　同五丑年六月」
一御家中之面々本妻無之者妾を取立留主居と号し本妻同様之会釈致置候儀不苦事、
「(朱)同年七月廿三日」
一男子内々ニ而貰置候儀停止之事、
「(朱)享和三亥年三月十九日」
一養女之儀双方ゟ続柄幷養ひ候次第共ニ書付可願出、甲賀以下軽々ハ頭々吟味之上御祭事役所へ承合可任願事、
「(朱)元文元辰年八月廿八日　公儀御触」
一養弟或ハ養妹停止之事、
附、其者不養して不叶子細有之ハ養女ニ可相願候、縁続取組ニ付養女ニ致し可願と存候而も、養女ニ難成年齢ニ候ハヽ何之続或ハ何之由緒有之手前へ呼取誰方へ婚姻相願候趣ニ願書可差出事、
「(朱)前々ゟ之例」
一諸士之悴致元服候節十六歳迄ハ願之上可受差図事、
「(朱)享保十三申年二月五日」
一御物成導手形他邦へ出間敷事、
「(朱)元禄元辰年十一月二日」
一他所ゟ売物持参候商人御家中へ宿貸申間敷、不差置候而不叶候ハヽ申達可受差図事、
「(朱)前々ゟ之例」
一北山石慶山石高サ三尺以上ハ御普請奉行裏書判形を可受、三尺六寸以上ハ御家老共之裏書可受事、
「(朱)同」
一湯川石三人持以下ハ御普請奉行判形を可受、四人持以上ハ御家老共之判形を可受事、
「(朱)同」
一鉄漿含或ハ惣髪等ハ私として致間敷申達可受差図事、
「(朱)文化十三子年六月」
一男女奉公人之返金幷諸入金物、或ハ貸金類為催促郷村へ飛脚差越間敷候、御代官之書状相認郡方役所へ可差出事、

「寛政二戌年十二月七日
一凡而故有之分限ニ引受候義達之上可受差図事、」(朱)
「(朱)元文三年十二月廿日」
一日市祭礼之場へ諸士諸奉公人ハ勿論子弟幷軽々又者迄参
間敷事、
一停止之殺生左之通可相心得事、
「文化元年十一月」(朱)「前々ゟ之例　大川筋　帰川筋」(朱)
鉄炮殺生　干川殺生
「前々ゟ之例」(朱)
鷹殺生但角鷹ハ不苦事、　鳥殺生役人共ゟ礼申受候分ハ格別、
「(朱)正徳三巳年六月十三日」
一土手之外町はつれへ相集相撲を取又ハ躍なとし、「延享三寅年八月晦日」(朱)「天明元丑年八月七日」(朱)或ハ町
中之茶屋ニおいて及飲食、或ハ夜中大勢辻立致、門戸を
たゝき少年之者へ難渋申懸、或ハ墓所を例し(倒)橋石を引迦
し石礫を打、或ハ楽書致し、「延享四卯年四月七日」(朱)或ハ風俗を替夜陰ニ忍行之
類制禁之事、
「(朱)寛文三卯年八月」
一田畑を踏荒し、「享保十巳年正月」(朱)或ハ野火を付、或ハ養水之妨をなし、或
ハ百姓共へ理不尽之品申懸候儀制禁之事、
「(朱)延宝五巳年」
一惣而百性(姓)と士分と何品ニよらす交遊不作法之義不可致、
在郷ニおいて百性(姓)共相撲取候とも士分一切其場へ参間敷
事、
「(朱)正徳二辰年四月十四日　同三巳年」
一独礼以上幷子弟迄町家之湯風呂へ参間敷事、
「(朱)享保八卯年四月十四日」
一御大名様幷　公儀衆他邦衆等　御城下通行之節為見物罷
出候儀停止之事、
「(朱)天明四未(ママ)年十一月廿五日　天明三亥(ママ)年十二月十三日」
一賭的幷角場無之士屋敷ニ而鉄炮を打候儀停止之事、
附、尋常之矢代的は可為格別事、
「(朱)延宝三卯年正月十三日　文化九申年六月十一日」
一左義長を焼或ハ花火を建候儀停止之事、
「(朱)前々ゟ之例」
一省子(雀カ)取間敷、鳶からすの巣かいわらさる以前可相捨、か
い割候者ハ其儘可差置事、
「享保三戌年二月十八日」(朱)
附、飼鳩無用之事、
「(朱)享保戊年七月廿一日」
一故なくして狗午を不可殺事、

「同」(朱)

一凡而旧来頼来候祈禱ハ格別、出所不明之僧侶社人へ祈禱を頼護符等申受間敷事、

「寛政六寅年三月十二日」(朱)

一乗廻として罷出、或ハ早乗等致候者人込之場所へ往来難儀之者怪我等も難計儀ニ候間、右体之場所へ乗込候儀ハ勿論平日早乗等致し候共心得可有之事、

「正保戌年十一月廿三日」(朱)(正保三年)

一若輩成子共鷹(供)抔持候儀不似合様ニ候、親々致分別武芸之足ニも成候事を可為嗜、年若成者ハ道之達者をも可心懸事、

「寛政三亥年四月十九日」(朱)

一軽々之内訳有之苗字相改候儀ハ頭々不承置申達可受差図事、

「附録」(朱)

「一〇二」(朱)(重出)　御領内湯治之願申出他邦迄打越候者も有之哉之由相聞候ニ付御家老共ゟ申聞候事、

一近来御領内湯治願申出他邦迄相越、或ハ先々遊興ニ耽り候体之義も有之哉之由相聞甚以如何成儀ニ候、御領内湯治之義ハ御先手当前之者迚も任願来候処、右体欺　上候義ハ決而有之間敷、尤御先手之内抔に右体之族有之候而ハ別而不相済義ニ付此度改而筋々へも申聞候事ニ候、先々迄屹度御吟味之上其次第ニ寄而ハ重キ御所当被仰付候儀ニ候条、心得違無之様可被申聞候事、

文政元年戊寅六月十五日

「一〇三」(朱)　諸役御賞方之儀ニ付頭々心得方之儀御家老共ゟ申聞候事、

一諸役御賞方之義年数打続候上勤功之厚薄ニ依而夫々御沙汰被成候儀ハ格別、一時之功労を以永久へ引候御賞等被成下候儀ハ古来ハ容易ニ無之儀ニ候処、御改政以来諸向追々考課之御吟味ニ被成替、面々ゟ勤怠科条有之儘ニ書上御吟味を受候事ニ相成候処、多き内ニハ心得違之者も有之自分功を衒ひ賞を貪候体之弊とも相聞候ニ付、尚御吟味之上考課被相止、去ル未年已来ハ総而古来之通役場

々々之旧例古格ニ基き御吟味可有之儀、尤其節一統へも令知置候義ニ候間、支配向勤怠之次第ハ兼而頭々ニ而取握取成、紙面等之振合支配々々へ可令知筋無之候ハ本より之儀ニ候処、頭々心得方ニ寄而ハ支配筋へ打まかせ置草案等為取調、又ハ当人々々ゟ内願を取組申立候体之者も粗相聞、右等之類ひ始凡而紙面を飾り実ニ越候相成共申出候向々共有之様相見候へハ、組支配を引立度心底ゟ起候義ニも可有之候処、頭々無筋訴論を取次不筋ニ相成等不申上様兼而被仰出も有之儀ニ候へとも、畢竟考課之余習不相除故ニも有之廉恥之風儀を取失如何成儀、且聊之廉を以席進御加恩等願出候類御吟味之上賜物又ハ御言葉之御賞等被　仰出候へハ、仮令不軽御賞賜を蒙候而も規模ニ不相心得廻通し願出候向々も有之候、功を衒ひ賞を貪り候体之義ハ臣下たる者之於心根有之間敷儀ハ勿論、一言一（ママ）之御恩も甚重き儀ニ候処、右体　上へ対し軽々敷再三願出候体之義甚以不心得義ニ候、依而ハ左之条々頭々厚差心得、仮令支配筋ゟ只管願出候儀たりとも筋なき過当之義ハ取挙間敷候、尤事ニ寄過当之願等申出候者有之候ハヽ、願人共ハ勿論頭々迄御咎方被仰付候義も可有之候事、

（朱）「一〇四」頭々心得方之条々、

一凡而御賞方之義ニ付仲ケ間同士又ハ組支配噂迚も兼而見聞之趣を以取成申出候義ハ格別、当人々々へ令知又ハ紙面為見合人情ニもたれ内願等被挙取組申上候体之儀ハ決而致間敷候、尤支配筋噂之義ハ頭々手元自筆ニ取調吟味役体之者へも其次第申聞間敷候、

但、町人地下人体之噂ハ事ニ寄役人共手元ニ而為取調候義ハ不苦候、

一向々臨時之功労御賞方之義旧例古格も有之義ニ候条、凡而一時之功作ハ賜物又ハ御言葉を以御賞被成下、席進御加恩等不被成下儀ニ候、

但、不依何義数年を経而成功ニ至り、又ハ臨時之義たりとも永利之基ひを立、不朽ニ伝ひ候体之抜群之功作無比類功労有之候者ハ格別之御沙汰可被成下候、

一是迄臨時之御賞方迚も年数御取組之上ニハ席進御加恩御

役料等罷下候義ニ候処、是以役場々々旧例古格ニも叶候程之者ハ格別、左も無之候而ハ容易ニ御取組御沙汰有之間敷候、

但、年数旧例古格ニ叶候とも勤怠之次第ニ寄御沙汰不被成下段ハ勿論ニ候、

一諸向共ニ面々受前筋持前之勤致候とも例年より取込候とか、又ハ繁多ニ相勤候とか聊之廉を以臨時之願ニ申立御賞方願出候向も相見候処、受前之筋ハ右勤為可被仰付兼而被任置候御知行御擬作其外御役料費料等をも被下置候義ニ候へハ、著敷廉々無之候而ハ別段御賞不被成段ハ勿論ニ候間心得違無之様、

一御賞方先例之義重軽共考課御吟味之例ハ御取用無之筈ニ候、御改政後新規之役場ハ古例無之事ニ候間古代似寄之役場之例を以御吟味可有之候事、

文政二己卯正月十三日

「一〇五」(朱)兵学修業方之義ニ付頭有候(立カ)面々へ御家老共ゟ廉書を以申聞候事、

一兵学修行之義ハ武役之面々専任之廉々為及吟味被置、臨時之御用ニも被相立度　御主意を以先年厚御世話共被仰出候儀ニ候処、近来眼病又ハ口中病等品々若輩成者共申立武講出席不致、或ハ度々及無断御咎等蒙候而も先迄ニ打過候者も有之歟ニ相聞、右体廉恥を失ひ修行方相厭候様ニ而ハ甚如何成儀ニ候条、屹度所存相尋被　仰付方も可有之義ニ候へ共、自然無力之面々講習之作法泥ミ不得止右体ニ至候半歟、　先ツ此度ハ不達　御聴候、依而は已来左之廉書之通為取計候間猶又仲ケ間互ニ申合専任之廉々実用ニ吟味積候様無怠慢修行可致候、此旨仲ケ間并外様江も可被申聞候事、

「一〇六」(朱)武講返講心得方之廉書、

一兵学修行之輩多キ内ニハ無力ニ而作法之通返講難相成者も可有之哉之処、右体之者ハ師範役付之面々心を付人々之力ニ応し何分受用致易き様主意簡固ニ被指致御授、尤返講致候面々ニも主意慥ニ致会得候而平日談話同様ニ講候とも不苦候間、専任之廉々不鮮所ハ吟味を積不失実用

様可相嗜候、

一是迄病気痛所有之全快迄ハ難罷出候而本務ハ乍相勤永々武講へ不罷出者も有之歟ニ候処、以来ハ本務相勤候位之義ニ候ハヽ武講欠席不相成候、

一返講会へ病気障或ハ湯治等ニ而不参輩ハ出勤候翌日罷出可返講候、翌日休日之節ハ翌々日、若又休日相続候ハヽ会業相立候初日ニ罷出可致返講候、

但、出役又ハ忌中産穢等ハ返講ニ不及候、尤湯治中返講ニ当候而不罷越已前相仕舞候とも勝手次第ニ候、

一御用繁多ニ付御用捨被成置候面々も一ケ月壱度ツヽ返講ニ罷出候様、且右同断願之上日を不定一ケ月壱度ツヽ罷出候輩是迄補返講翌月迄ニ致来候処、已来ハ其月切ニ返講可致候、

但、本文両条共ニ若御用格別差湊ひ不得止其月切ニ返講難致者ハ猶吟味も可有之候条其筋々委細ニ可申出候、

一三会已上無断致欠席候者是迄武講ゟ及通達来候由之処、以来不通達武講ゟ直々可申達候、

右条々之外凡而是迄之通可被相心得候事、

文政二己卯六月五日

(朱)「一〇七」御家中之子弟為営町郷村へ罷出居候者慎方之儀ニ付父兄へ被　仰出候事、

一御家中之子弟為営町郷村へ罷出居候者之内ニハ高利之貸金致差引、返済滞候へハ直々罷越家財道具等取上之、出入事有之候へハ腰押致、又ハ貸金催促得頼先々江罷越難渋之義を申懸ケ戸前甚迷惑致、其上一己得用を見込溜金取立として町家相廻、或ハ女差置人寄等致候者も相聞、御家来子弟ニ有間敷作法未練之所行共甚不相当儀ニ候、此度風俗取締方改而被仰出も有之候ニ付、此末別而風儀相嗜凡而町在之作法を守治教之障ニ不相成様可致候、若如何之所行有之候ハヽ屹度御所当可被仰付候条、兼而役筋之者心を付見聞之次第不打置申出候様申聞候間、心得違無之様父兄之者厳敷可致教誡候事、

文政二年己卯十一月十日

(朱)「一〇八」仲ケ間御用談抔申立新参之者引廻し等事乙甲ニ

致、或ハ於番所々ニ及飲食品々風儀ニかゝり如何之儀共有之歟ニ相聞候ニ付、御家老共ゟ頭立候面々へ申聞候事、

一御家来一統心得方之義ニ付而ハ御参府巳前被　仰出も有之候処、中ニハ不相用仲ケ間御用談抔申立及飲食、且新参之者引廻し等事乙甲ニ致、或ハ於番所々及飲食品々風儀ニかゝり不宜義共有之歟之由相聞候、御制導ニ戻(悖)り甚如何成儀ニ候、自然右体之義自外被聞召御吟味ニも相成候而ハ於頭々ニ油断致不相済儀ニ候、依而ハ此節厳敷遂吟味若不心得之者有之候ハヽ厚加教誡、夫(をカ)とも不相用者ハ屹度曲事可被仰付候条早々可被申出候事、

文政三年辰四月廿八日

「(朱)一〇九」婦人往来之義ニ付夫并父兄へ心得方被　仰出候事、

一諸生諸奉公人分格有之者之妻身軽ニ仕来町方へ罷出自身調義物抔致、或ハ指物として野辺へ罷出中ニハ不似合之所行も有之歟ニ相聞候、御時節柄も婦人往来之節成丈ケ供をも可召連旨被仰出も有之候処、分格を崩甚如何成儀畢竟夫并父兄之申付忽緒故之義ニ候、自然右体之所行有之者ハ吟味申出候様其筋へ申聞置候間、心得違無之様屹度可申付候事、

文政三辰五月十三日

「(朱)一〇十」(ママ)四民風俗取締之儀ニ付御家老共ゟ大小御目付へ申聞候事、

一御政事之得失四民風俗之善悪右進退を以御差引も有之候上ハ、右勤体は風俗張弛之係ル所勿論ニ有之、当　御発駕巳前も尚又改而被　仰出右油断ハ無之事なから、此度相触候廉々ハ右ニ申出候廉ニハ無之候得共、如何之筋も相聞候ニ付難捨置一統へ申聞候、無申迄候へ共仕来ニ因循し諸事見遁勝なるハ御為ニ不相成、聊も如何之筋(ママ)形ニ過行候ハヽ其為一体綱紀之弛と相成決而不相済厳重之御取締被仰付候、此節甚御大切至極ニ候条如何之所を抑揚致候ハヽ風俗興起可致候、常々苦労ニ懸ケ能肝要之所江目を配り見聞を広メ、聊たり共善悪之筋不打置速ニ申

出候様可被致候、

右之趣御徒目付夜廻り之者へも被申含、御主意不空御為ニ相成候様可被相勤旨大小御目付へ申聞候事、

文政三戌(ママ)年五月十五日

「一(朱)一一」武備実用ニ相嗜御奉公可相励旨被　仰出、

一武備教場之義近来流弊も相聞候間、御吟味之上　御国力ニ応候様簡易実行(ママ)修行方ニ被成替候、無申迄至備ハ禍を未萌ニ取鎮邦家を鎮護致し、事有時ハ急ニ応し抽軍忠御家之瑕瑾ニ不相成様不心懸候而ハ、面々之御奉公不相立而已ニ無之　公儀御忠勤も相欠候義ニ候処、昇平之流俗不忽、武備之筋は御家訓を始　御代々被　仰出候御主意宜相奉し、難渋之此節といへとも堅固ニ志操を立弥武道之本源へ目を付替、御家来之軽重専任之処夫々精々吟味を尽し不怠武備実用ニ相嗜、御奉公行届候様頭々身を以先立厚差引可致旨被　仰出候事、

文政三年辰七月四日

「一(朱)(一一二)一二一」土津様御尊信被遊候程朱之正学ニ被為基学風御改正ニ付、実学之筋弥以深切ニ可相励旨被仰出、

一学校之義此度御吟味之上御国力ニ応し簡易之制被被(ママ)成替、虚文之弊を改弥以実学之風俗御興起被成度御尊慮ニ候処、学問之義ハ御家来一己々々嗜ニ而毎年上之御世話を相待候迄も有之間敷候条、父兄之者共身を以先立　土津様程朱之正学御尊信被遊候御余風ニ基き人情日用倫理之教を講習致、　恭定様御編集童子訓之趣猶家々無油断子弟へ令教誡候義ハ勿論、幼年より文武之両道を一様之事と為心得、稍生長ニ随ひ廉恥を知士道を研、仮令人々得手不得手有之候へとも、何れ学候所を以其身之実用ニ施し行ひを眼目とし、今日之行事を学問之筋万事之事と不相成様専一ニ心懸ケ、往々其才器をなし持前相応之御用ニも相立、忠孝ともニ不欠様実学之筋弥以深切ニ可相励旨　御意ニ候事、

文政三辰八月廿三日

「一(朱)一三」御入部ニ付御家中へ被　仰出候事、

一殿様御入部被成御大慶被遊　御代々不相替倍忠義を可被励との思召ニ候、依之御家中之諸士諸奉公人前々被仰出之旨謹而相守り忠孝文武之道無遺失、農工商賈ニ至ル迄其身を慎職分ニ精を入可励風儀事、

一凡而御先代様御入部之節被仰出候別紙御ケ条之旨堅可相守事、

文政六未年五月廿六日

「一一四」(朱)御入部ニ付目付役之者へ心得方被　仰出、

一御目付役之者共四民風俗之善悪貴賤親疎之隔なく風説たりとも可申上旨去ル卯年も被仰出候儀ニ候処、善悪共ニ相尋候上ニ無之候而ハ申出候向も少キ由被聞召候、御取捨は御吟味之上ニ有之義御目代ニ御附被置候上ハ、兼而善悪ニ心を配り屹度見聞を広メ世上取締ニ相成候様厚可心懸旨被　仰出候事、

文政六未五月廿六日

「一一五」(朱)文武之芸術修行方之義ニ付被　仰出、

一武講会業之義御賄扶持中出席勝手次第ニ被成置候処、此度御賄扶持被相復候ニ付而ハ、兼而被仰出候　御主意を奉し武役長立面々兵学専業之篇を先立講可致義ニ候、依而高士之嫡子嫡孫ハ追々長役ニも可被召仕義ニ候処、文武之学問未熟ニ候へハ事ニ臨行当候義ニ有之、学ひ得候者迚も夫而已打捨置候而ハ不束ニ相成臨時之御用ニ不相立儀ニ候条、録高之面々ハ常々家事之世話迚も薄キ義ニ候へハ文武之芸術片向相嗜候義左程難き事ニも有之間敷、終身之業と相心得無間断可致修行儀勿論之事ニ候、且小知之者といへとも単騎之心得無之候而ハ不相済儀ニ候間不怠兵学修行可致義ニ候、依之此度武講兵業家督相続之節小普請可被成御免規則被相立、面々志を立実用ニ修行可致旨被　仰出候事、

文政六未五月廿六日

「一一六」(朱)文武御教導其外子弟慎方之義ニ付父兄へ被仰出、

一文武御教導之筋実用ニ可相励ためニハ色々御世話被成下候処、家長之面々うかと心得師授ニ相任置候如くニ而ハ

不行届義ニ候、父兄共厳敷制導を加ひ候へハ師教も入易キ道ニ候条、自然不所行之所生有之は畢竟家長之教誡悪キ故ニ候間、父兄へ之御崇り是迄ゟも重かるへく候、依之弥不怠父兄之者厳敷教誡可差加旨被仰出候事、

一諸士諸奉公人之子弟類山野川狩等之往来作物を犯し荒し百姓をなやませ徒者も有之由不届成仕方ニ候、加様之業致候者ハ父兄迄も厳敷御崇り可被仰付候条厳敷可加制導旨被　仰出候事、

文政六年未五月廿六日

「(朱)一一七」撰挙心得方ニ付被　仰出、

一撰書ハ賢良を相糺御国用之為ニ可被相立□□□味被仰付義ニ候間、前々被仰出候通人品芸術年頃気質之長短偏所等迄も慥ニ吟味を詰可申上義ニ候、尤時々被仰出候撰之役ニハ兼而弁居事候故能人を撰上シ御用も相立候義と心懸候ハヽ、其向々人品をも得と可申候、度々存寄無之旨申上候も心懸ケ薄様ニ候間、弥実義ニ吟味を尽可申上旨被　仰出候事、

文政六年未五月廿六日

「(朱)一一八」文武御教導筋之義ニ付被　仰出、

一諸生教導筋合之義面々志求るを待て教ると申候義聖教之常典と相聞、昌平坂抔も左様之趣ニ候処、是ハ教も入易く導ニも能候由、然ル処御家御作法之趣は御家中之子弟勝手次第ニ無之学校へ被差出、近くハ人々父兄之事子弟を導筋より御奉公申上候筋道不取失、修身斉家ゟ国家之器用をなし候様可致教育之御設被置候処勿論ニ候処、近来士風卑劣柔弱之行無之士道廉恥之風引立候様教導方肝要ニ相心得、其内先々持前之器用を尽し秀候者も出候様ニと御取立被成候、御制度之上不好者迄も其教強而引入平常夫々之嗜相整候様教立不申候而ハ不相成、左様ニ導候上からハ不好人迄も漸々憤発も生し持分を可尽義ニ候間、手近キ筋ゟ小を積大を成近を経遠ニ至り候様書物一片之教ニ不心得、其人々之器量相延候様御制度之御主意を土台致し、時所位人情共ニ取扱厚差引可致旨、但儒者ハ教導之棟梁ニ而諸事司候義勿論ニ候処、猶行届候様手

厚之為ニハ素読所取計之次第、同所勤幷手伝勤等学校奉行直ニも承、又御主意直ニ直ニも申聞候義等ハ時宜次第宜差引可致旨被　仰出候事、

文政七年申十月十五日

「一一九」（朱）御家中之面々無用之費を省キ厳敷倹約を守り士操を取不失様風儀為相励度思召、頭立面々身を以先立可為教誡旨被仰出、

一御内証方之義近年打続莫太之御物入共相重御難渋至極之処、此度　御上京御物入も大造之義ニ有之、加るニ申酉両年不作と申内去年之義ハ天明卯辰以来之不作ニ有之不少御取落ニ相成り、其上不計も此度御凶事ニ付而ハ是又不少御入方ニ有之弥増御内談御逼迫至極ニ相至候ニ付、此節尚又江戸表御供連御道中御具器等迄も被減、其外非常之御倹約被成候旨　公辺へ御届被成、御近親御懇意之御方迄も乍御不本意御贈答を始厳御断被成候義ニ候、右之通御逼迫ニ付而ハ御家来へ之諸渡方被減候外ハ無之場ニ相至候処、御賄扶持已来別而相疲れ居候上之義ニ候へハ、強而此上御借上ケ等無之様と厚キ　御尊慮之趣相奉し、筋々ニおいても精々相尽し其儀ニ不及候処、此儀万一不作或ハ御物入有之候ハヽ不被得止諸渡方被減候外必至と無之儀ニ候間、此段兼而厚相心得罷在、去ル未年被　仰出候趣猶又厳重ニ相守り、別而出納ニ預候役々ハ御内証方御取直ニ相成様此上考量相尽し、御分規外等決而不申出精々可取計候、若又心得違を以婦人之衣服等制外之品相用嫁娶申合候節々贈物等致候縁女之支度先々御心も有之儀ニ候処、分外之華美高料之品相用ひ、且於仲ケ間合ニ飲食其外乙甲之仕成共致し、贈物等も致し其余飲食贈答凡而無用之儀ニハ先々費を懸ケ、自然内証不如意ニ及候所々借財買懸ケ等をハ猥りニ不相払、剰不束之手形証文等差出候儀ニも至、又ハ町人卑賤之者ニ交り飲食ニ及ひ躍三味線等之遊興を催し、其外御家来ニ不似合卑劣之挙動ニ相及候体之者有之候而ハ、士風被相励度　御尊慮ニ相背キ甚以御家来たる者之志を失ひ風儀を乱す之徒たるへき事ニ候、依而ハ此上三ケ年之間倹約厳重ニ相守り着服等之義ハ何程見苦敷候とも不苦義ニ候間、志操

を不失文武之心懸ケ可為肝要候、万一心得違之者有之候而ハ不相済儀ニ候条、別而頭立候者其身を以先立少しも無怠慢可及教誡旨被　仰出候事、

文政九年戌二月十一日

「一二〇」(朱)御流岐之兵学へ山神流之兵学築城等之法を附し可為致修行旨御家老共ゟ御軍事奉行へ申聞候事、

一御流岐之義ハ天下之逆賊を征伐せん為メニ被挙たる義ニ而居而守ル儀は無之、尤攻法を知れハ守法ハ自ら其内ニ有事ニ候処、時ニ臨番手境目城等取立候儀も可有之、何れ武備ハ全キニ利有事ニ候間、山神流築城之法を附し可相学儀ニ候条、方円曲直鋭之五法幷ニ山城平山城三城之法一ト通不相学者ハ出師ニ相進間敷候、戦格へ相進候上猶又さかひめ城之取立方等可為相学候、依而頭取幷懸り勤之者始門弟共出師へ級第可致者ハ、牧原主馬方へ致入門相学候様可被申聞候、尤右修行方ニ付而ハ主馬義御軍事奉行へ随従致し取計候様申聞候間、修行方果敢行候様可被取計旨御軍事奉行へ申聞候事、

文政九戌三月十六日

「一二一」(朱)頭役之者或ハ知行高之者供連之義ニ付被　仰出、

一御家中供連之儀去々申年中来酉年ゟ已前之通可被召連儀ニ候処、永々御賄扶持ニ而未痛も有之義一度被相復家来共多召拘(抱)候様ニ而ハ難渋之者も可有之間、去当両年新番頭已上若党壱人増し其余是迄之通被成置、当年切ニ付而ハ相応之供連候様可被仰出儀ニ候処、御賄扶持已来内証痛ニも可相成旨御察し思召一統江ハ不被仰付候、併頭役之者或ハ知行高之者無僕体ニ而ハ如何ニ候間召連候様可致候、併同席仲ケ間ニ而も少知之者ニ而差支候節ハ不及其義、仮令格席ニ無之候とも知行高之者ハ相応ニ供連候様被仰出候事、

翌春ゟ新番頭已上道具為持候儀ニ相成候、

文政九年戌十一月十三日

「一二二」(朱)御留主中御家来一統之様子御案事思召委曲可申上旨被仰出候ニ付、頭立候面々身を以先立士風

可相励旨御家老共ゟ申聞候事、

一役々専任之廉々先達而士風可相励旨　御懇之御世話有之面々無油断相嗜候儀ニハ可有之候へ共、多き内ニハ心得違之者有之間敷儀ニ無之、左候へハ御気之毒なから御咎被仰付候義ニ至り頭々身を先立引起候義ハ勿論之儀ニ候処、元来役場旧来相勤候者共思ひ入違候得ハ、後輩も心ならすもたれ押移連々風俗取乱候元ニも相成候間、頭役之者ハ勿論凡而先輩ニ立候者ハ別而風俗相嗜後輩を励候様可心懸儀ニ候、尤臨時之節専任之義も常々不相学怠り居、或ハ倹約之掟を取失ひ候体之義有之候而ハ不相済儀ニ候、今度御留主中御家来始一統之様子御案事　思召委敷可申上旨被仰出も有之候ニ付、猶又前条之趣申聞厚相心得候様仲ケ間并組支配へも可被申聞候事、

文政九戌年十一月廿三日

「一二三」（朱）学校奉行添役被増候ニ付儒者素読所勤等之勤体ニ付被　仰出、

一此度学校奉行添役被増候ニ付而ハ、儒者之儀申迄なく学問教授ハ勿論風儀取立之義素ゟ之義ニ候処、如何ニも手元繁雑多端之様子ニ相聞、両様之取立方全ニハ難行及義も難計候条、已来ハ学問取立方重ニ相任講釈所へも一簡出席いたし修行方果敢行候様可取計候、

一学校奉行添役之義是迄迚も文武之芸風儀行跡共引立方任居候義ニ候へ共、儒者共前件之通被仰付候ニ付而ハ、猶又武之芸は勿論風儀行跡共ニ格別ニ相励候様儒者共へ談事之上、素読所勤并手伝之者共へも手近ニ立入事ニ寄諸生共へも直ニ申諭、専ら儒者へ立添学校被設置候御主意全行届候様可被取計候、

一素読所勤之義も是迄朝会之外ハ先ツ壱人ツヽ居残候由之処、已来ハ両人共ニ終日詰切教授いたし、手伝勤之義も昼前ハ勿論昼後迚も武学寮出席前後繰合罷出、互ニ無底意申談諸生相励し修行方果敢行候様、右ニ付格別之労費も可有之義ニ付素読所勤へハ是迄之費金三分ツヽ、手伝勤へハ費金壱両之高被成下候、

一右ニ付学校奉行手元ニおいて厚差引之上風儀引立候様精々宜取計旨被仰出候事、

「文化十四九月朔日丑年」(朱)(年脱カ)

「一二四」(朱) 一正月十一日陳(陣)将宅ニ而組支配之者共へ禁令読聞、跡ニ而掟書可為読事、

「一二五」(朱) 一大御目付大組物頭已上迚も奉書之節御家老共宅へ直勤有之筈、

「一二六」(朱) 一かひらき鞘惣朱ニ無之朱鞘ハ陳刀ニハ不苦候事、

「同年十月廿五日」(朱)

「一二七」(朱) 一軽々暇取他江召拘(抱)或ハ養子ニ成候義年限定も有之候処、職業秀御用ニも可相立者職ニ寄時々吟味有之筈、

「同年十月廿一日」(朱)

「一二八」(朱) 一目録差上御礼申上候節目録御目付へ遣候節、大組物頭已上ハ大書院小座敷ニ而直渡、其已下ハ御目付詰所へ持参直ニ相渡取次を以ハ納間敷筈、

「同年十一月廿五日」(朱)

「一二九」(朱) 一御家中譜代他へ養子、或ハ御家人筋へ新拘(抱)は十ケ年も相勤候上ニ無之候而ハ不相成候処、譜代ゟ譜代之養子ニ成候子ニ限り年限不拘方ニ究候、

「文政元寅年正月七日」(朱)(文化十五年)

「一三〇」(朱) 一為御機嫌伺罷出候役々御目付詰所へ罷出来候処、已来は夜居之間下之溜において相伺筈、

「同年三月七日」(朱)

「一三一」(朱) 一御家老広間へ罷出留主之節面々紙面ニ候迚差置候者も有之候処、是迄差置候廉ハ格別略義之事ニ付已来差置間敷筈、

「同年(朱)三月九日」

「一三二(朱)」一於家近火薬を以火業之真似致候義如何之旨究ル、

「同年(朱)三月廿二日」

「一三三(朱)」一町郷村之医師被賞方年数一ト通り、或ハ治療之多少ニより合金銀銭等等級を以被賞候義ハ被相止、治給有之者銀子被下　御目見被仰付御合力等被下候義ハ古格之通被仰付筈、

「一三四(朱)」一正月廿一日被賞達之内へ其役場年限ニも不当を平日之勤体及ひ臨時之廉等取組、考課之時之如く被下方等願出候向も有之候処、臨時之廉等溜置申出候義不宜候間、臨時迚も功労著敷者先例ニ而も有之体之事は其時も申出候様、仮令年功も積重申出候噂へ取組臨時之廉をも申出候ハ格別之筈、尤御賞済候廉をも再応申出候類は有間敷筈、

「一三五(朱)」一御家老若年寄迄御用透之節折々罷出民間之様子及見聞可然との　思召ニ候、近山并於郷中鉄炮殺生御用捨被成、随而供立等略之微行致候筈ニ究候、

「同年(朱)七月二日」

「一三六(朱)」一七月六日例朝御目見以来流ニ被　仰出、

「同年(朱)八月十一日」

「一三七(朱)」一火事之節若年寄壱人会所へ可相詰事、

「一三八(朱)」一出火之節御目付壱人会所へ相詰、御徒目付会所次番已下諸事可及差図事、

「一三九(朱)」一出火之節御勘定所ハ当番御旗之者三人へ黒鍬之者弐人定付夫丸壱人諸道具取始末以後、風下人少之所へ加勢可致事、

「一四〇(朱)」一甚火急之節ハ当番御旗之者三人中間之者三人

ニ而御勘定所之諸道具早々表へ出し差図可相待事、

一諸役場近キ出火之節ハ面々屋上之水之手配いたし火可相防事、

一惣而出火之節役場々々吟味役小役人共諸書物道具之取始末等諸事入念可申事、

旧来之御定増損之上御儀定、

火事之節会所内役場々々へ可相詰人別、

一会所溜御徒目付弐人会所次番三人御旗之者五人中間五人、

一会所右屋上検地役人弐人御旗之者七人、

一会所門幷腰懸橋掛役人壱人郷村普請方橋懸役人下役之者、

一会所北門御勘定所小役人壱人中間壱人、

一御用所御用所組頭御用所役人同所附人使番之者、

但、御城当番両追手郭門火元番所役付之外会所幷非番之面々ハ会所へ可相詰事、

一御勘定所御勘定奉行同添役御勘定組頭改役小役人同所附人弐人夫丸有合次第、一会所御金蔵両御納戸役壱人同所金払役人壱人同所小役人壱人同所附人壱人、一会所両御納戸両御納戸役同所金払役人壱人同所小役人以下下役迄同所附人共、

一元〆所元〆懸御勘定改役、一廻米所廻米荷頭以下之役迄附人有合次第、一紙蔵御勘定所小役人弐人紙蔵附人、

一雑物方御買物役人壱人諸道具預候役、一町役所町役所吟味役壱人同所小役人弐人右已下之役之者町同心当番之者弐人、

但、町奉行何れも持前之場ニ罷出候事ニ候間、吟味役已下申合手配可罷在事、

一御蔵入役所御蔵入郡奉行同御勘定頭同御勘定役人同小役人迄御蔵入同心小頭同心共、一郡方役場郡奉行居合次第駒改役同断郡方吟味役同所諸懸り役人小役人已下下役迄郡同心居合

次第、一公事所公事奉行公事所吟味役切支丹類族改役人ゟ小役人迄公事所同心共、一御祭事役所御祭事奉行御祭事方吟味役同所小役人已下下役迄御祭事下小奉行附人同心共ニ、一産物役所産物奉行産物役所吟味役銅山方勤之者産物役所小役人以下下役迄同所附人同所同心小頭同心、一武具役所武具奉行壱人武具役所吟味役諸品受払役小役人已下下役迄、

「同年九月廿日」（朱）

「一三八」（朱）一御供之面々麻木綿之裂羽織、士分以上ハ麻木綿之裁付、其外ハ股引自分往来勿論と有之候処、着服ハ御紋附御羽織ハ不及申凡而是迄之通、貸足軽ハ絹羽織、先徒ハ主人ゟ一様ニ致度者ハ絹羽織為着不苦、駕脇召連候類麻木綿勿論ニ有之、徒迎も麻木綿不苦、

一士分以下自分往来之節木綿野袴踏込裁附等勝手次第之筈、

一御用出役帰り当日被召出候者裁附裂羽織之儘不苦、若シ野袴持合候ハヽ先ニ（夫カ）而も宜筈、

一武器類革覆ハ勿論、武器入候長持革履金紋不苦筈、

「同年十月十九日」（朱）

「一三九」（朱）一御家中子弟医師秀候者ハ俗体ニ而医官ニ被召仕候筈ニ究ル、

「一四〇」（朱）一次男養子ハ同姓或ハ分限内之者幷従弟甥等之続ニ而養ひ親は他へ養子ニ遣候義続キ遠キ者ハ不被仰付御定ニ候処、実弟を二男養子ニ仕不苦哉之伺ニ付、相続ニ無之養子ニ願出弟を養子ニ致候義ハ不苦、格好不都合之取組ハ不相成、併相続と違候間忌懸り之続迎も格好不都合之取組ハ不取上筈究ル、

「一四一」（朱）一婚金ハ引越三ケ月掛頭或ハ仲ケ間月番ゟ其筋

へ通達之上相渡候、近頃引越月不顕向も有之候ニ付、引越期月相顕自然延候時ハ其趣其筋へ可断筈、

「同(朱)二年正月廿六日」

「一(朱)四二」一平士御役替御加増席進等差上物ニ而御礼申上候廉、御留主之節ハ便書を以上ケ物仕御礼可申上、勤番前三十日ニも候ハヽ罷登候而御礼申上候筈、

「同(朱)年二月九日」

「一(朱)四三」一所当を以減給或ハ浮人等ニ相成候者組入期月ハ四ケ月過候而可申付筈、

「同(朱)年六月十九日」

「一(朱)四四」一高屋敷と卑屋敷と最寄勝手一ト通を以ハ相対替被任願間敷筈ニ候処、何れも高屋敷ニ候へハ其人ニハ高と卑と差別有之候とも可被任願筈、

「同(朱)年九月廿五日」

「一(朱)四五」一軽々之者願之上暇取其跡へ悴召拘(抱)ニ相成候者、年限不相立内ハ御奉公筋難相成御定ニ候処、於諸役所当座ハ雇ニ召仕候義ハ格別、直ニ本人等ニ召拘(抱)候義ハ不相成筈、

「同(朱)年十一月十六日」

一軽々之者年寄或ハ病気痛等ニ而弓銃之業難相成者、頭々願候上減給浮人、又ハ弓銃無之場所へ召仕候義も無(有カ)之候処、已来は勤先又ハ役弓銃之場所ニ而怪家(我)致候者迚も暇被取候とか、悴召拘(抱)候とか両様之内致候筈究ル、

「同(朱)年十二月五日」

一諸職人続目之節手際は勿論、御備方要用之職或ハ平日御召物御腰物御用相勤候者、又ハ古来ゟ故有職人ハ格別、近来追々増候分ハ欠捨被仰付、尤新拘(抱)候義ハ容易ニ被仰付間敷筈、

「文政三辰年二月九日」

「一四六」一弓馬槍刀之四術ハ勿論、其余之芸術共以来試業被相止其業練熟之者へハ師範々々目鑑之上許可遣筈、

「同年二月廿五日」

「一四七」一御規式之節以来於新番々所煙草呑候義停止之筈、

「同年三月三日」

「一四八」一於町家中ニ紙鳶揚候義三尺位を限と致し、大人迄も手を添候位之大振成紙鳶停止之事、

「同年三月廿五日」

「一四九」一諸職人ゟ御家来独礼已上之養子縁組被差留、地下町方ゟ取組之義続柄を以ハ養子ハ同性（姓）幷親族血筋之続柄従弟迄ハ不苦、女縁之続ニ而難相成婦人縁組之義ハ母方之続キ縁続又ハ従弟迄不苦筈、

「同年五月十一日」

「一五〇」一家業を以被召仕候者以来相続之節悴業未熟ニ候ハヽ、御知行御切符共格別被減御扶持等被下格好被相下無役ニ被成置、家業練熟之上元ニ被相復候吟味も有之筈、

「同年六月五日」

「一五一」一失事有之御役儀被召上候者ハ、追而席或ハ勤被仰付候節夫々格好被相下候へ共、組付或ハ与力之義又々元へ被相復来候処、以来外様士新番組或ハ組付出候者ニ而も失事品ニ寄組入不被仰付格好被相下、与力之義も元へ不相戻格好被相下候義も可有之筈、

但、御通年割等之与力格好被相下候上与力被仰付義ハ格別之筈、

「一五二」(朱)一軽々ゟ御徒格或ハ御通り又ハ一代切年割等ニ御取立ニ相成候者、辞役幷続目之節勤功も無之者ハ是迄之形ゟ格好被相下候義も可有之筈、

「同年七月四日」(朱)

「一五三」(朱)一教場操練之義三月末ゟ五月迄之内御先手ゟ二隊ツヽ一日三四返位弓銃甲士合隊稽古致し、暑中相除之、七月末ゟ九月迄之内日割返数右同断四隊合隊稽古可致候、御馬廻り備之役々右ニ準し春秋両度之稽古ニ可相心得候、

但、足軽共勤番当前之者ハ登り已前可相痛候間江戸表ニ而稽古可致候、爰元ニ而ハ右当前之者を除キ組之有人丈ケ可致稽古事、

一御旗指之義日割返数共ニ右同断、

一役弓銃被相止遠丁幷腰発目当打持場之射法実用ニ可致稽古候、

一遠丁目当打之節ハ三人ツヽ為相並鬼形三ツ建置遅中早三段之達放御備打稽古可致事、

一鳥狩之義先ツ被相止以来五三年ニ壱度位ツヽ手軽ニ平常野懸之装束ニ而、馬ハ於御場被貸渡候間一軍運用之ならし可致、尤御貸人御貸金も無之鳥も被差出間敷、其内三度ニ壱度位行軍之ならし被仰付候義も可有之筈、

「一五四」(朱)一武講之義御近習外様御役懸聴聞会毎月壱度出師以上へ進候者勝手次第、同返講会毎月壱度勝手次第ニ可罷出筈、

一諸奉行始諸役人勤候者迚も新番組之外之士已上之者ハ御用之隙勝手次第武講へ罷出可致修行筈、

一独礼已下武講出席被相止、望之者ハ御軍事奉行宅ニ而可致修行候、

但、其内ニ格別ニ出精抜群ニ秀器を可成者ハ、御軍事奉行吟味之上等級可相進事、

「(朱)一五五」一独礼以下之子弟学校出席被相止、併講釈所生ニも相進候者ハ是迄相進候者ハ勿論已来共ニ於学校可致修行、其余ハ南北学館へ罷出武芸之儀ハ於宅々可致修行筈、

但、襟制已下軽々其外又者之子弟寺院諸社家町医師類ハ学校幷学館出席被相止、

「(朱)一五六」一高懸之者新抱ニ相成願之上暇取候者ハ、三十六ケ月不相立内ハ独立之者へ養子取組難相成、親跡相続致候者ハ実子幷養子共ニ高懸之者へハ格別、独立之者へハ右月数相立候とも養子取組不相成御定ニ候処、不調法有之御扶持給被召放候者迚も右同様之筈、

「(朱)同年八月廿三日」

「(朱)一五七」一毎月講釈会両度ツヽ是迄御家老共学校へ令出席、諸奉行諸役人共罷出承候処、以来ハ儒者講釈之節時節を不定春秋之内両度位も罷出承之、諸奉行諸役人も勝手次第ニ罷出筈、

「(朱)一五八」一士分上之者家督跡式之節筆道算術礼式柔術体座術許を得候者共小普請御免ニ不相成、鉄炮之義ハ拾匁玉已上之許長銃之業をも可被仰付程之者ハ、是迄之通小筒一ト通リニ而ハ御免被成間敷筈、

一拾五歳已上之諸生迚も不及願望之者ハ武学寮入門勝手次第之筈、

一於学校勤之者会日をも被立置候処、以来被相止月々三度ツヽ儒者講釈有之間望之者勝手次第可罷出筈、

「(朱)同年十月廿六日」

「(朱)一五九」一独礼之養子ニ月割与力ハ取組不苦、会所次番格ハ難相成筈、

「(朱)同年十一月十一日」

「(朱)一六〇」一高懸之者実子養子之差別なく二家相続被差留、

「(朱)同年十一月十五日」

「(朱)一六一」一私用慎被仰付置候歟、何カ故有之当人ゟ難申出諸願ハ当人之頭を以可申出筈、

「(朱)同年十一月廿三日」

「(朱)一六二」一定席花色緒已上之役頭之詰所座中へハ士中たりとも刀持参不相成、独礼ゟ已下之格好ニ而司り候役場へハ刀持参不苦、独礼ゟ以下之者ハ諸向溜之間へ刀可差置筈、

「(朱)文政四巳年正月廿六日」

「(朱)一六三」一高懸之者二家相続之義父子勤ハ勿論一方二代ニ相成候者、又ハ兄弟ニ而二家ニ相成候者迚も一方ハ相続不相成筈、

「(朱)同年二月廿三日」

「(朱)一六四」一絵師共続目之節悴業抜群ニ秀候者ハ格別、左も無之者ハ家業相続ニ無之夫々被仰付筈、

「(朱)同年三月十七日」

「(朱)一六五」一九家之面々若年寄已上在職之節三代已上相勤候老役は勿論、三拾年已上相勤候者ハ一代一度於時計之間　御目見被仰付、若年寄之老役も旧来召仕候者ハ在職中一代一度於新番々所御目見被仰付筈、

「(朱)同年五月七日」

「(朱)一六六」一寺社修験之子弟御家人筋へ養子取組血脈之者ハ格別、其外取組被任願間敷候、併郷村寺院之実子地方御家人江之取組ニ限り土着格別ニ被任願候筈、

但、郷村寺院分限之者ゟハ縁組不相成筈、

「(朱)一六七」一父子勤之者卑席之親願之上御擬作差上悴之分

限ニ相成候節悴之服色可相用筈、

「同年十二月廿九日」(朱)

一御用ニ而道中往来之面々御朱印人馬之外無用之人馬為差出候義堅可為停止事、

「一六八」(朱)

一町人へ会符を渡し武家之荷物ニ為致候義堅為停止事、

一往来之旅人川々渡銭之義川会所へ相懸り人足相雇川越共と相対決而致間敷、相雇候人足酒手ねたれ候とも聊も不差控川役人共之内へ相達往来可致事、

一東海道富士川渡舟留之節是迄歩行越明キ候而も馬を留候節ハ乗馬之分も越立不致候所、以来乗馬之儀ハ歩行越明候ハヽ見計ひ壱艘ニ壱疋乗ニ而越立筈ニ候事、

一百姓町人売(ママ)之分宮門跡堂上方其外重キ家筋之会符手寄を以借受往来致候族も有之、以来紛敷会符決而相用間敷事、

「文政五午年閏正月廿一日」(朱)

「一六九」(朱)

一上下免許軽々之者最初養子ニ相成苗跡相続、又ハ実子ニ候とも其家令断絶或ハ他へ養子ニ相成候義、高懸之場ニ限り不苦御作法ニ候処、以来高懸り之者ニ而も他ニ養子ニ相成、或ハ実子ニ而も親跡致相続令断絶、又ハ他へ養子ニ相成り実家相続等ニ参候義不相成筈、

「一七〇」(朱)

一御家老附寄合組辞役、或ハ御入用無之被仰付候者ハ元席を以割込(朱)「立場」ミニ被成置、親跡相続之者又ハ蒙御勘気候者追而組入致候類ハ末へ打込先輩次第ニ被成置候処、以来一二三之段等之内ニ而一体打込先輩次第ニ被成置、追而御近習役被仰付候節も元席吟味被相止、席合組を出席ニ致し先々可被仰付筈、

「一七一」(朱)

一御通与力之義総而打込先輩次第ニ被成置、御近習役被仰付候節ハ元諸役人類或ハ親跡相続

ニ而入候者夫々御吟味之上席被仰付、且御通ゟ被賞独礼被仰付候者御通席之立場を以抑上ケ席被仰付役々も、御改正後ハ御近習三ノ寄合席被仰付候間、以来御近習役被仰付候節元席吟味被相止御通与力を士席ニいたし先々可被仰付筈、

「同年二月九日」

「一七二」一組外之士続目之節先祖訳有之者、或ハ格別之功作有之歟、或ハ悴芸能勝候者ニ無之候而ハ格好被相下或ハ御扶持方等も猶吟味も可有之筈、

「同年二月十五日」

「一七三」一御城へ罷出候面々新番々所へ刀或ハ持参候品、御規式等之節ハ格別平日ハ溜之間へ可差置筈、

「同年九月二日」

「一七四」一猪苗代五拾間足軽、或ハ上荒井新田弓足軽之義、病死或ハ暇取候節実子は拾歳已上召抱ニ相成、養子之義ハ拾五才以上ニ無之候而ハ不相成筈、

「一七五」一高懸之者二家相続之義是迄二家三家ニ相成居候者共相続御免被成候処、父子ニ而相勤父之方欠候節子を差置別ニ養子為取候義ハ不相成筈、

但、去ル寅年二家ニ而禿ニ相成候者共も実子有之分、其外無拠訳柄有之分ハ猶吟味も可有之筈、

「一七六」公儀御手前御日柄毎月江戸表所々御屋敷謡鳴物御停止之定、

一権　現　様　十七日夜中迄、四月ハ上御屋敷計前夜ゟ御当日夜中迄、

一台徳院様　廿四日夜中迄、正月ハ上御屋敷計前夜ゟ御当

日夜中迄、

一大猷院様　廿日暮六ツ時迄、四月ハ右同断、

一厳有院様　八日同断、五月ハ右同断、

一常憲院様　十日前夜ゟ御当日夜中迄、此廉書落し、原ニ在之、

一文昭院様　十四日暮六ツ時迄、十月ハ上御屋敷計前夜ゟ御当日夜中迄、

一有章院様　晦日同断、上御屋敷計同断、

「二」（朱）一惇信院様　十二日同断、六月ハ同断、同断、

「一」一有徳院様　廿日同断、六月ハ同断、同断、

一浚明院様　八日同断、九月ハ同断、同断、

御家御日柄

一土津様　十八日　一鳳翔院様　三日　一徳翁様　十日

一土常様　廿七日　一恭定様　廿九日　一貞昭様　廿七日

一欽文様　廿九日

右前夜ゟ御当日夜中迄、

一宣明院様　十七日夜中迄、六月ハ所々御屋敷共ニ前夜ゟ御当日夜中迄、

一松寿院様　十日前夜ゟ御当日夜中迄、

一心了院様　晦日暮六ツ時迄、六月ハ所々御屋敷共ニ前夜ゟ御当日夜中迄、

一心窓院様　十四日御祥月計所々御屋敷共ニ前夜ゟ御当日夕七ツ時迄、

一智厳院様　二日右同断、

一良徳院様　三日前夜ゟ御当日夜中迄、

一幻光院様　十四日暮六ツ時迄、十一月ハ所々御屋敷共ニ夜中迄、

一貞鑑院様　廿二日夜中迄、八月ハ所々御屋敷共ニ前夜ゟ御当日夜中迄、

右御精進謡鳴物停止刻限通御門魚鳥留、

但、正月三日、三月三日ハ昼七ツ時ゟ魚鳥御弛、

「文政六未年五月廿三日」（朱）

「一七七」（朱）一学校御入之節講釈所生ハ月割之子弟ニ而も罷出不苦、

「同(朱)年五月廿六日」

「一(朱)七八」一江戸勤番扶持幷常詰御知行扶持渡り以来十七人扶持以上三分減、其外五人扶持以上弐分減、三人扶持以上壱分減之割を以可被相渡筈、

「一(朱)七九」一家中之子弟為営町郷村へ罷出度願ハ容易ニ被仰付間敷、併新田開発等致し治教之助ケニも相成候者ハ格別之吟味も可有之筈、

「一(朱)八〇」一衣服之制御条目之内御通已下紐制已上布木綿と有之候処、御通以下紐制之男女下着ニ紬幷糸入類免許之筈、

「一(朱)八一」一御参勤御往来を始御供之面々装束ハ麻木綿之裂羽織、士分以上ハ麻木綿之裁附、其外股引着用自分往来勿論と有之御箇条、

「一(朱)八二」一功労有之者共年を積被賞方之義ハ、賜之員数をも被減、追々年をも被相延上ニ而御沙汰被成下候処、一時之功労臨時之被賞方被致候而も、以来平等致候様是迄ゟ減之御吟味可有之筈、

但、勤番其外定式同様(ママ)ニ立被賞候廉、及被下物類も先々ニ減等之御吟味も有之筈、

「一(朱)八三」一御徒組頭御徒相勤候在之悴共父祖之年功を以継目之節直ニ御徒被仰付候処、以来文武之芸相嗜器量も有之者ハ、父祖之年功是迄ゟ少候とも御吟味之上被仰付候義可有之筈、

「一(朱)八四」一御徒目付悴共父祖之年功を以直ニ悴御徒被仰付来候処、以来文武之芸相嗜器量有之者ハ、父祖之年功是迄ゟ少ニ候とも御吟味之上被仰付義も可有之筈、

「一(朱)八五」一同心料是迄之渡しへ弐分減を以当暮ゟ可被相

渡筈、

「一八六」(朱)　一御役料御四季施代其外費骨折料諸奉行筆墨紙代客賄料之類、是迄之渡りへ弐分減之上割を以可被相渡筈、

「一八七」(朱)　一御領内幷御預所共ニ差上金致被下候御知行御扶持方、已来御知行五分渡り御扶持方ハ三分減之筈、

「一八八」(朱)　当七月ゟ此先三ケ年御倹約被仰出候条々、

一親子兄弟同姓聟舅忌懸り故有之懇意之者参り懸候而軽キ酒食差出候義ハ格別、重キ吉事たりとも親類寄合候義一切無用之事、

「文政九戌年二月十九日」(朱)
但、親子兄弟聟舅ハ家内迄、其余同姓叔姪孫之続キ迄ハ参り懸り時刻ニ及候ハヽ、給料之酒食差出候儀心次第、

一内会を立師範を得候者へハ軽キ贈物或ハ時刻差支候節ハ給料之麁飯差出候義心次第之筈、

「同年同月同日」(朱)
但、酒給候者へハ極手軽ニ有合之酒食差出候義心次第之筈、

一病用或ハ無拠用事頼候者へ不得止有合之酒食差出候義心次第之筈、

一其家ゟ出候者参候節ハ勿論幼年之者ニ而附添罷越候者江も酒食差出候義同断之筈、

一御城下駈隔候一類懇(意カ)者之者罷越候ハヽ、止宿無之者へハ有合之酒食差出候儀も勝手次第之筈、

一仏事祭事等入済可致候余力有之者於宅ニ致修行候とも続柄之内をも可成丈ケ相省膳部も手軽ニ可致筈、

但、故有之者為焼香被相招とも、庭前之花或ハ線香之類聊之品霊前へ相備候義心次第之筈、

一老養幷病人給物贈方之義、親子兄弟同姓聟舅忌懸故有之懇意之者ハ軽キ品遣候義ハ格別、吉凶を始凡而音物一切無用之筈、

但、父母祖父母兄弟聟舅之重キ吉事之砌ハ至而聊之品贈候義心次第之筈、

一年始ハ格別其余寒暑等之節御家老共始頭々へ罷越ニ不及、
尤一類江も一ト通之儀ニ而見舞候義可相省筈、

「一八九」(朱) 一振袖ハ拾五歳已上之男女着用不相成御定ニ候
処、御家来地下共ニ七歳未満ハ格別、八歳以
上之男女振袖着用不相成筈、

「一九〇」(朱) 一大小之寸尺鞘之塗色、於　公儀も当時之御振
合当時御構も無之由ニ候間其心得可有之事、

「一九一」(朱) 一痛所有之立髪致候義於　公儀も近頃勝手次第
被仰付候儀も有之由ニ付、於願出は吟味も可
有之筈、

「一九二」(朱) 一三百石以上之嫡子嫡孫文武之芸術小普請御免
之格左之通被相定、
一七百石已上之面々学問ハ素読師範於手元試候
上、儒者手元ニ而再試候上一等へ相進候者、
一兵学三篇之返講弁書ハ勿論、書込等無之相仕
舞候上尚試学之上、
一武芸一流極、　但、弓馬槍刀大筒之内、
一三百石以上学問七百石以上同様試之上二等へ
相進候者、
一兵学幷武芸之儀ハ七百石同断、
右三廉共ニ右之極ニ不至者家督相続之節小普請
被成置修行被仰付候事、
一御役懸之面々番頭始役々専任之廉先立壱度ツ
ヽ好返講可致候、実年五拾歳已上之者ハ勝手
次第被成置候事、

「一九三」(朱) 一武講会業之義御近習外様共ニ御役懸り聴聞会
毎月壱度ツヽ、返講会三度ツヽ、高之嫡子嫡
孫ハ勝手次第ニ無之罷出候、役懸りニ無之面
々幷子弟共ハ(ママ)罷出可致修行事、
一御役懸りニ無之面々幷高之嫡子嫡孫共ニ出師
戦格会毎月壱度宛、勝手次第ニ無之本業ニ可

罷出事、

但、右年齢ニ相成候而も嫡子嫡孫ハ小普請御免之格不至、二男以下四書五経之素読不相済者、一芸之極無之者ハ勝手次第ニ不相成筈、

「一九四」（朱）一卑之嫡子嫡孫は学問講釈所生兵学出師之上、武芸一流も極候而御定年限以前ニ而も出席勝手次第、槍馬ハ戦場之要務ニ候間其業不怠可致修行事、

但、二三男ニ而も同様之筈、

「一九五」（朱）一書学寮之義ハ拾九歳ゟ出席勝手次第、諸用致弁達候程之者ハ年齢已前ニ候とも師範々々目鑑之上勝手次第、左も無之者ハ其人ニ寄年限延候吟味も可有之筈、

「一九六」（朱）一学校入門之義拾歳ゟ、遠方虚弱之者ハ拾壱歳ゟ之御定ニ候処、以来拾弐歳ゟ入門可致事、

但、願之上罷出候儀ハ格別、併拾歳ゟ拾壱歳之者迄ハ被任願、九歳已下之者ハ願出候而も入門不相成筈、

一役弓銃ハ毎年雪消次第組々於角場ニ一組二日懸りニ而、合組三組六日之積を以致稽古、引続右之規を以小田教場ニ而腰発膝台之致稽古、右畢而合隊三組一同於三ノ丸御備打可致稽古事、

「一九七」（朱）一三ノ丸稽古之次第ハ隊々甲士寄合組与力計りニ而足置稽古一日ニ致し、夫ゟ相備之弓銃隊と合し一隊切之稽古一日致し、右畢而二隊合隊稽古一日致し、夫ゟ一陣（陣カ）合隊之稽古相済候而於大野原御先手御左右ニ而一日、後殿御本隊ニ而一日稽古可致候事、

一御旗指稽古之義三ノ丸ニ而組切之稽古一日致し、其余相備之稽古有之毎度可罷出事、

「一九八」(朱) 一月割与力共之義金鼓之業相勤候者共、以来撰挙之後相勤候者同様之廉を以続キ日之節ハ吟味も可有之筈、

「一九九」(朱) 一足軽差配与力被相止小頭古復被仰付、弓組七石五斗、鉄砲組七石高ニ被成置、

「二〇〇」(朱) 一寺社修験幷分限内陰陽師之類、或ハ検断名主郷頭町郷村帯刀御免之者共目印是迄啄木萌黄下緒制被居置、其余羽織之紐ニも啄木之品相用、羽織着用不致節ハ袖口へ小紋形付可附筈、

「二〇一」(朱)(二〇二脱) 一郭門御定之内他国之商人ハ不依何品可令出入御定ニ候処、以来不依何品被差留、

一郭門江乳母入用之張紙以来無用之筈、

「二〇三」(朱) 一郷中間給金上中間弐両弐分幷中間弐両壱分、其以下相対次第、賃券之義ハ上中間四両限り、消金壱両弐分限り、其以下相対次第、下女之義も右之規を以可召拘(抱)筈、

「文政六未年六月廿四日」(朱)

「二〇四」(朱) 一浮人共足軽との役被替ハ勿論、以来凡而諸向之者共役被替不相成筈、

「二〇五」(朱) 一御擬作地方御振替願之義月割与力格之上ハ格別、其已下被任願間敷御定ニ候処、以来月割已下軽々ニ而も望之者ハ其村所へ対談故障無之於願出ニハ吟味可有之筈、

「二〇六」(朱) 一二男以下武芸一流相極四書五経之素読不相済者ハ勝手次第ニ不相成、嫡子嫡孫ハ四書五経之素読不相済者ハ勝手次第ニ不相成義勿論之事、

但、嫡子嫡孫迚も至極之上器量ニ而兎ニも

角ニも不参、人も許候程之者ハ、四書五経之素読不相済候とも武芸之極有之者ハ、壱人ニ当り格別之吟味も可有之筈、

一高之嫡子嫡孫学校講釈所生兵学三篇相済、武芸一流不究候ハヽ御定年齢已前迚も武芸之出席勝手次第、学問兵学之義ハ御定年齢迄ハ勝手次第ニ不相成候事、

一卑之嫡子嫡孫ハ学問講釈所生武芸一流極有之者ハ、学問共諸芸勝手次第、兵学出師書芸一流相極候者ハ、余芸ハ格別学問所へハ御定年限之内ハ四書五経之素読相済候迄勝手次第ニ無之可罷出筈、

「文政六未年七月九日」

「二〇七」公儀御手前御日柄毎月御用地向謡鳴物御停止之御定、

一権現様　十七日御当日夜中迄、

一台徳院様　廿四日同断、

一大猷院様　廿日夕七ツ時迄、一厳有院様　八日同断、

一常憲院様　十日前夜ゟ御当日夜中迄、

一文昭院様　十四日夕七ツ時迄、

一有章院様　晦日夕七時迄、一有徳院様　廿日同断、

一惇信院様　十二日同断、一浚明院様　八日同断、

御家御日柄

一土津様　十八日　一鳳翔院様　三日　一徳翁様　十日

一土常様　廿七日　一恭定様　廿九日　一貞昭様　廿七日

右前夜ゟ御当日夜中迄、

一宣明院様　十七日御当日夜中迄、六月ハ前夜ゟ御当日夜中迄、

一松寿院様　十日前夜ゟ御当日夜中迄、

一心了院様　晦日夕七ツ時迄、六月ハ前夜ゟ御当日夜中迄、

一心窓院様　十四日御祥月計り夕七ツ時迄、

一智厳院様　二日御祥月計り夕七ツ時迄、

一良徳院様　三日前夜ゟ御当日夜中迄、

一幻光院様　十四日夕七ツ時迄、十一月ハ御当日夜中迄、

一貞鑑院様　廿二日終日夜中迄、八月ハ前夜ゟ御当日夜中

迄、

「同年(朱)七月十一日」

「二〇八(朱)」一嫡子嫡孫ハ二十五歳迄、二男以下ハ二十壱歳迄文武之学寮出席勝手次第ニ無之候処、講釈所ニ而傾修行被仰付候嫡子は、二十六歳以上ニ候とも勝手次第ニ無之罷出尚修行可致筈、

但、勤候者ニ而傾修行被仰付候者ハ、御用之外罷出欠席之断も追而断候而も不苦筈、

「二〇九(朱)」一独礼之嫡子嫡孫幷御徒格已上之嫡子嫡孫ハ二十五歳、独礼之二男三男ハ二十二歳〻勝手次第ニ候処、重々諸役人ニ被召仕候儀ニ付学問は等閑書芸之内御定之格ニ入候手跡四ツ折算術割物ニ而も相成位之手際之者ハ格別、御定年齢過候而も御定之格ニ不至者ハ出席勝手次第ニ無之筈、

「二一〇(朱)(二一〇脱)」一稽古小普請之義月割已下之者迚も出席勝手次第ニ不相成、御徒格已上之者小普請御免ニ不相成者勝手次第ニ無之義勿論ニ候筈、

「同年(朱)七月廿日」

「二一二(朱)」一子弟之内ニ而御雇勤或ハ文武之学寮役付相勤候者、小普請御免之格ニ至候者ハ勝手次第、右之格ニ不至者其格ニ不至稽古場ハ勝手次第ニ不相成筈、

「二一三(朱)」一御小性相勤候者ニ而勤中無滞相勤候者ハ、小普請御免之格ニ不至者迚も格別之吟味も可有之筈、

「同年(朱)七月廿日」

「二一四(朱)」一卑之嫡子嫡孫ハ学問講釈所生ニ相成候上武芸一流極有之者、学問共ニ諸芸勝手次第之出席ニ候処、講釈所之義ハ年限以前ハ勝手次第ニ

不相成筈、

「同(朱)年七月廿五日」

「二一五(朱)」一他所商人之内越中富山薬売肴売女他諸職人類目印相渡置候分ハ郭門出入不苦筈、

「同(朱)年七月十三日」

「二一六(朱)」一御情扶持取之者男女血縁有之者ハ家名再興之為養子被仰付候処、以来男子之血縁ニ而相応之続無之者ハ婦人之続ニ而もまさ敷其家ニ親敷甥従弟、無拠ハ又甥再従弟之類迄ハ養子被仰付筈、

「二一七(朱)」一身売女是迄其筋切手無之御代官裏判差出候処、以来郷中間同様奉公人改懸り切手を以御代官裏判之上ニ而可召仕筈、

「文政七申年(朱)」

「二一八(朱)」一南北素読所へ月割迚も勝手次第ニ無之可相出筈、

「同(朱)年四月十九日」

「二一九(朱)」一高懸之者病気ニ付暇為取、又ハ出奔跡其外不時欠付へ新抱(抱)致候節、他所生之者ハ勿論、素性不宜者ハ不召拘御家人筋子弟之内吟味之上召拘候様、尤養子迚も其心得を以可召拘筈、

「同(朱)年五月朔日」

「二二〇(朱)」一閉門退嫡逼塞以上之御咎被仰付候節ハ、其父子兄弟始同姓一類迄差控可相伺御定ニ候処、学校所生之儀ハ父子兄弟幷同居之祖父ハ格別、其余之親類ハ伺出ニ不及筈、

「二二一(朱)」一軽々之子弟御家人筋へ奉公之義、直相対ニ而召拘(抱)候者、幷ニ奉公ニ差出候身元之者、何れへ奉公致すと申義御式懸り御目付所へ可相届

筈、
但、郷村居住之軽キ奉公人子弟ハ家中奉公（同年六月廿一日）（朱）
可為勝手次第哉之伺ニ付如前例旨申聞、

「同年六月七日」（朱）
「二二二」一御普請奉行支配之内幼年ゟ職業有之者ハ格別、
其余勤中紐制之者迚も悴高へ入候分ハ家中奉
公可為致筈、

「同年七月廿一日」（朱）
「二二三」一近来他邦湯治願夥敷候処、格別御懇情を以子
細御聞届之上被任願候所、軽キ方之者猥りニ
願出他邦湯治追々願継キ永々罷在候者も有之、
已来ハ頭或ハ仲ケ間等ニ而無拠子細屹度承届
可申出事、

「文化七申年八月十四日」（文政七年カ）（朱）
「二二四」他邦往来人馬御定

一本馬乗下　弐拾貫目　但、三四貫目迄ハ用捨、
一軽尻同　五貫目　但、二三貫目迄ハ同断、
一駄荷本馬　三拾六貫目　但、三四貫目迄ハ同断、
一軽尻　弐拾貫目　但、弐三貫目迄ハ同断、
此外ニ重貫目有之候へハ荷物作り直シ候筈ニ候、尤是迄
ハ荷物当り貫目ゟ相増候得ハ人足半人増、又ハ壱人増ニ
而相起継立相成候得共以来ハ決而不相成事、
一長持駕一挺六人懸り　一長棒引戸駕同（人足四人懸り極手軽キ引戸ニ而あをり駕同様ニ候へハ三人懸り之積）
右之外人足持之義壱人五貫目其外五貫目一前と相改、
八貫目有之候得ハ壱人六歩と相成候、右之外不相分儀
ハ駅懸りへ可談事、

「同年閏八月廿九日」（朱）
「二二五」一肝煎之子弟之外ハ帯刀奉公不為致セ候処、以
来並百姓ニ而も召抱置候内貸刀致帯刀ニ而召
仕、暇出候節ハ帯刀不為致筈、

「同年九月十三日」(朱)

「二二六」(朱)一諸職人共以来肩替勤願出候節ハ試業申付候上ニ而任願、追而相続之節試業不申付筈ニて、肩替勤願出候ハヽ其心得を以可申出筈、

「同年十月十五日」(朱)

「二二七」(朱)一御家老共講釈所へ春秋両度程ツヽ罷出候処、御用隙を見合四季壱度位ツヽも罷出、其節講釈所生及ひ一等出精之者講釈をも承、手際ニ応し即席之講釈詩文等をも可申付筈、

「二二八」(朱)一諸生拾七歳迄ニ学問壱等へ致昇進郷里之間ニおいて悪遊楽等不致一方ニ而老敷と人々も申程ニ候ハヽ被下方を以被賞御吟味も可有之筈、一学問人品とも可相嗜拾六歳ニ而講釈所へ致級第候者ハ、是又被下方を以被賞候御吟味も可有之筈、

「二二九」(朱)一書学拾四歳ニ而試之上手際宜敷者一等へ致昇席、平日老敷悪ル遊ひ等も等も不致一方ハ老敷と人々も申程之者ニ候ハヽ、御硯等被下候御吟味も可有之筈、一書学之義以来学問同様拾弐歳ゟ致入門、退席年齢ニ至候而も二等優等ニ不至者ハ退席不相成筈、一書学壱等へ相進候者ハ出席勝手次第ニ候処、已来ハ御定年齢迄ハ勝手次第ニ無之可罷出筈、

「二三〇」(朱)一礼式配膳方之義日用之芸ニ候間、諸生盛長之内学校会日ニ罷出可致修行事、但、其業得手之者ニ而秀候者出候ハヽ傾修行をも被仰付、壱人ニ寄費も御扶持等被下候御吟味も可有之筈、

「二三一」(朱)一数学之義日用之業ニ候間、天文学をも込学校会日へ罷出望之者可致修行事、

但、其業得手之者ニ而秀候者出候ハヽ傾修行をも被仰付、人ニ寄費御扶持等被下候御吟味も可有之筈、

「二三二」(朱) 一文武之芸極を以御普請御免之廉夫々定も有之候処、玉芸(至カ)は柔術居合、文芸ハ書学数学算術天文礼式配膳といへとも、一芸ニ抜群ニ秀候者ハ出格之吟味も可有之筈、

「二三三」(朱) 一医術他邦修行之義町郷医迚も大一等ニ不至者ハ容易ニ被任願間敷候、尤帰国之節ハ於医学寮手際之次第可及吟味筈、

「二三四」(朱) 一士中郭外之寄的之場へ罷出候義被相止、右代り於諏訪社地ニ恒例ニ祭日之外年々三度程、学校出席日を除期望(希)之内寄的興行可致事、

「二三五」(朱) 一武芸格ニ立被賞候義被相止、槍術拾九歳、剣術拾七歳ニ而相極、弓ハ昼夜之大数、馬術ハ遠乗いたし人品相嗜候者ニも候ハヽ、被下方を以被賞候御吟味も可有之筈、

「二三六」(朱) 一医学之儀諸科之治療凡而宜秀候義ハ容易ニ難相成業ニ可有之候へとも、一般ニ治療之儀医家本体之由ニ候へハ、修行方之規則目当を広く立往々治療一手ニ行届候様可取立、依而御普請御免之格左之通被相改、

一本道大一等之上ニ外科一等ニ至候者、

一本道一等ニ而も本草学第一等ニ至り治療相応ニ被得候者、

一本道一等ニ而も外科逸等ニ至り治療同断之者、

一生質文才拙ニ而医学級第不相成候とも、治療方相秀諸科之内宜敷取廻し、弘功験有之手際抜群成者ハ、格別御免被成下候吟味も可有之筈、

一本道外科宜相嗜候上諸科共ニ広相究療功著敷

秀達之者子弟ハ修行扶持被下、御雇勤等被仰付勤候者ハ御役料御加恩席進等をも被成下候吟味可有之筈、

一町郷村医ニ而本道外科一等ニ相進療功有之諸科之内相究候類、又ハ外科逸等ニ至り候ハヽ町医ハ大書院　御目見被仰付、郷村医ハ苗字御免被成下候筈、

一町郷村医にて本道大一等之上外科一等ニ相進療功有之諸科之内一等相究類、又ハ外科一等ニ至候ハヽ町医ハ小書院、郷村医ハ大書院御目見可被仰付筈、

「同年（朱）十一月十一日」

「二三七（朱）」一軽々之者病気差重候節、町郷村ゟ養子取組直ニ親跡へ召拘（抱）候へハ家中奉公致候間も無之候処、早速ゟ奉公無滞可相勤者ハ末期養子ニ限り家中奉公不致候とも召拘不苦筈、

「同年（朱）十一月十九日」

「二三八（朱）」一御家人分限内之医師幷郷村帯刀御免之医師大小下緒制ニ被成置候処、以来右之外羽織ニ萌黄と白打交之紐相用、羽織着用不致節ハ小紋附之袖口可相用筈、

一士中普代分限之医師　御目見被仰付候者ハ大小下緒啄木、其已下ハ萌黄下タ緒ニ而羽織紐萌黄と白打交候紐相用、羽織着用不致節ハ小紋形付之袖口可相用筈、

但、啄木羽織紐等仕立ニ無之一色之品へ外色之糸を縫入紛敷体之義ハ無之、格別色打交候品ニ而屹度相分候様可致筈、

一御家人父兄子弟等ニ而願之上医師ニ相成居服色其家主同様ニ被成置候者、町医並之唱被相止町医幷　御目見之者之上ニ而別格ニ父兄之服制順先輩次第ニ而　御目見可被仰付筈、

一六社之社家以前之通下緒制ニ被成置候間、白黒打交之啄木可相用筈、

一寺社修験幷子弟分限ニ陰陽師之類町郷村名主郷頭検断帯刀御免之者共、是迄下緒制之外啄木紐相用候処、已来寺社修験幷子弟分限之類ハ萌黄と不打交之羽織紐、町郷村検断郷頭已下ハ萌黄と赤打交之紐可相用筈、

「二三九」(朱) 一卑知ニ而無足士分上之面々家督跡式之節、御定之武芸相極候上学問三等ニ不至兵学練心胆返講不相済者ハ勤被仰付間敷筈ニ究ル、

「二四〇」(朱) 一他所養子取組之義元御家出之者他所分限ニ移り、追而御家中之養子等ニ取組候者も有之由、於御家取組可相成格好之者ハ格別、左も無之者之願ハ被任願間敷候、以来他所者養子縁組之願書へ媒酌之姓名を顕し可願出筈、

「文政八酉年三月十一日」(朱)

「二四一」(朱) 一凡而高懸之類出入有之毎度届可申出筈、

「文政八酉年六月廿七日」(朱)

「二四二」(朱) 江戸道中白川通夜中継立幷早追之節、賃銭割増道中奉行衆ゟ宿々へ被申渡割合左之通、

一本馬壱疋本馬壱疋と軽尻壱疋と違丈ケ二ツ分増、一軽尻壱疋本馬賃銭ニ而継立、

一人足壱人弐人分賃銭ニ而継立、夜五ツ時ゟ暁七ツ時迄、

昼之内早追継立割合

一本馬壱疋右同断、一軽尻壱疋右同断、

一人足壱人壱人七分五厘之賃銭ニ而継立、暁七ゟ夜五ツ時迄、

夜之早追継割合

一本馬壱疋弐疋分之賃銭ニ而継立、一軽尻(壱疋脱カ)弐疋分之賃銭ニ而継立、

一人足壱人弐人半分之賃銭ニ而継立、夜五ツ時ゟ暁七ツ時迄、

「文政九戌年正月九日」(朱)

「二四三」(朱) 一講釈所生之義以前ニ被相復上中下之三等ニ被相分、上等之内ニ而材器を可成程之者へハ人ニ寄御扶持方被下、尤御吟味之上江戸修行をも可被仰付筈、

但、上等級第ニ無之者ハ自力ニ而罷越候ともも於江戸表御扶持方不被下筈、

「同年(朱)三月二日」

「二四五(朱)(二四四脱)」一御法度書之内独礼以上之妻女帯ハ縮緬類を可限と有之候処、類と申義左之趣ニ相究候、

一花文綾　一加伊岐　一竜文　一真似八丈

一郡内縞　一上田絹　一丹縞絹　一はかた織

一琥珀縞

但、右ハ縮緬ニ類する品ニ候処、紋はかたハ不相成、真似八丈縞并右ニ準候品等着用不苦、

「文政(朱)九戌年三月三日」

「二四六(朱)」院内近辺之山火事并院内村出火之節月番御家老共始諸役詰之定、

一奉行壱人　一大御目付壱人　一町奉行弐人　一郡奉行壱人　一御普請奉行壱人　一御目付弐人　一神料役人弐人

一御徒目付三人　一甲賀之者　一郡代同心　一物頭五人

一御長柄頭壱人

但、不時番副番之物頭院内へ相詰、副番之不時番ハ天寧寺町口郭門へ相詰居、差図次第組之者召連可翔着筈、

「同年(朱)三月五日」

「二四七(朱)」一地方御家人共養子取組之義、以来格好并続キ柄有無ニ不拘地下筋々之縁組被差留、

「同年(朱)六月十二日」

「二四八(朱)」一卑知無足士分上之悴学問講釈所へ相進候上、兵学練心胆返講済兵学出師へ相進、学問三等へ相進候者ハ小普請御免之筈、

「同年(朱)十月十三日」

「二四九(朱)」一江戸詰御家来重軽御屋敷内目印紐制已上之者上下着用之節ハ衣服ハ是迄之通、平日羽織着用之節ハ会津通之形を以夫々御定之色合之紐

可相用筈、
但、羽織着用不致節ハ面々持前之紐色之袖口可相用筈、

「二五〇」(朱) 一襟制之者共ハ平日大小下緒琥と巻付、羽織着用致候節ハ紐制已上之者相用候紐色之品可相除筈、
右何れも御屋敷外之義ハ是迄之通可相心得筈、

「同年十一月廿八日」(朱)

「二五一」(朱) 一軽々之者養子之義以来地下ゟ之取組不相成、
「文政十亥年二月二日」(朱)

一軽々末期ニ臨養子致候者拾八歳以下ニ而も実子ニ準候続之者共ハ格別、弓銃相成候迄弐人扶持為取候処、存生之内養子致直ニ相果候者之子共(供)ハ、続柄なく拾五歳ニ未満之者も弐人扶持為取候筈ニ究ル、

附録上下終

一六　御触留（仙台藩）

（表紙）

御触留

定

一忠孝を専にし、義理を守り、礼儀を正くし、学問をはけみ、武芸可嗜事、
一諸士男女共ニ行義を正くし、風俗猥ニ無之様可相慎事、
一応分限郎徒(ママ)を扶助し、并弓鉄炮鎗甲冑馬具を好ミ私之奢いたす

御条目

定

一忠孝ヲ専ニシ、義理ヲ守リ、礼義ヲ正クシ、学問ヲハケミ、武芸可嗜事、

一諸士男女共ニ行義ヲ正クシ、風俗猥ニ無之様可相慎事、

一応分限郎徒ヲ扶助シ、并弓鉄炮甲冑馬皆具可嗜之、兵具之外不入道具ヲ好ミ私之奢イタスヘカラサル事、

一軍役之節ハ百石以上馬上役タルヘシ、常々於国許ハ百五十石以上可為馬上役事、

一諸事内証ノ奢ヲ省キ、不困窮様心懸奉公可相勤事、

一結徒党、或成誓約、或ハ落書張文、或ハ博奕酒色ニフケリ、惣テ士ニ不似合業不可仕事、

一喧嘩口論堅可慎之、不依何事ニ令荷担ハ其咎本人ヨリ可重ル事、

一於城中万一喧嘩口論有之節ハ、同間之者可取扱、猥ニ他間ヨリ不可寄集、若同間人少之節ハ他間之者モ可相計之、番人等無之席ハ其所之近輩可被計之、令油断ハ可為越度事、

一奉行頭人其以下之役人迄其役々勤方不怠無滞相弁、私欲カマシキ儀ハ勿論依怙贔屓不可仕、其役々ニ付下々不痛様可心懸、尤奉行頭人其支配頭等申付儀ニ候共存寄於在之ハ無遠慮其趣意可申聞之事、

倹約之制　御先代ゟ段々被　仰出といへとも、更ニ相守候際無之、却而逐年世上一統悉花美驕奢之風俗ニ相流、婦女之身廻リハ尚又取餝候而相見得不宜事ニ候、畢竟無用之費有之方ゟ借財相嵩、大小之御家中一統甚及困難ニ、分限相応之御奉公ハ不及申、稀成家並禄役之勤も不相立候段深痛被　思召候、且今度御家中身持之義も別而被　仰出通ニ有之、旁以是非節倹を第一ニ不相勤不叶事ニ候処、世上之俗習花麗を好而、中に壱人立簡略難成儀も可有之か、諸事花美を除無用之費を省永御奉公取続子孫相安候儀ハ、何も可為本望事と被　思召候、依之御先代之　思召をも被為継、倹約之制改而左之通被　仰出候条一統ニ此旨を勘弁仕、分限ニ応し衣食住を始万端厳ニ驕奢を費し、取分飲食之儀ハ何分ニも軽仕、節倹第一ニ相守末々永御奉公取続候様可仕

旨被　仰出候、

一諸士於御国許ニ指立候節共ニ布木綿〻絹紬迄を着用可仕候、拝領物たり共巻物已上ハ是迄之通り先ハ着用仕間敷、各分際を考小進之者ハ不及申　御城下御供ニ而も多ハ布木綿を着し、少も結構成義仕間敷候、

附、絹紬ニ而も結構成品ハ堅着用仕間敷候、

一諸士婦女之衣類ハ其父其夫之服ニ可准事故兼而従　公義も御制ハ無之事ニ候、女服ハ結構ニ而も不苦物之様ニ心得違候族も有之事ニ相見得不取合之事ニ候、自今父夫之分際ニ応し布木綿〻絹紬迄を相用、結構成品ハ相用申間敷候、幼少之者も可為同然候、

附、帯ニハ巻物已上ニ而も相用不苦候、ぬめ繻子縫箔金入之類ハ無用ニ可仕候、是亦衣服ニ准し何分軽品を相用、少も結構成体仕間敷候、

一御一門衆始三千石已上之輩ハ、制外たりといへとも右ニ準多ハ軽品を可被用候、布木綿着用之儀ハ可為勝手次第候、内室方婦女も諸事右ニ可准ニ候、人々見習候様可被心懸候、

一御簇元足軽以下御扶持人ハ、従前々絹類ハ御停止之事ニ候間、男女弥布木綿ニ限り着用仕、帯袖口襟等ニも絹類堅可為停止候、

一御一門衆始諸家中男女之衣服等之義、右之通主人々々衣服之儀被　仰出候趣ヲ以、何分麁服相用候様屹度可申付候、万壱猥之儀於有之ニハ主人迄可為越度候、

一元服嫁娶喪祭之事近年不相応之事共相聞得候、弥従前々被　仰出候通堅相守、少も花麗分限ニ不応事共仕間敷候、且贈答之儀ハ鳥目拾疋弐拾疋ニ不可過由先年被　仰出置候通大進歴々之輩も屹度相守、況小進困窮之者共ハ尚又斟酌仕五疋三疋と申様、贈答之品ハいかニも軽、情義専厚ク仕候様可心懸候、土産餞別之儀も段々被　仰出置候通相心得、右ニ准何分軽可仕候、

附、常々之贈答ハ指立候節共右之通堅可相守候、抑倹約之儀ハ無用之費を省、有用之助と可仕儀ニ而、礼義を失へ吝嗇ニしてみたりニ金銀を貯候様ニとの事ニハ無之候、親類其外老弱を養疾病貧窮を救候ためニ厚相贈候義ハ格別之事ニ候、

一振舞之儀一汁三菜酒三献、祝儀之節といふとも不可過之由御条目ニも被相載置候処、世上一統甚結構ニ相成、料理吸物肴等数多相出驕奢之風悉被行不取合之事ニ候、自今屹度相改指立候重祝儀之節大進歴々たりといふとも弥一汁二菜、酒ハ吸物一通肴三種ニ限り常々ハ其内を減候様可仕候、小進之輩ハ指立候祝儀砌ハ勿論、常々共右ニ准何分手軽ニ可仕儀ハ勿論之事ニ候、品を替銘義を附御定外ニ増菜等相出候儀ハ堅可為無用候、

附、親類朋友之会専交接之道厚飲食を薄仕、御奉公之事文武之道を吟味仕候儀ハ尤之事ニ被　思召候、若料理等不都合寄合不正事共於有之ニハ屹度可被為及御沙汰ニ候条、堅右体之儀無之様可仕候、

一屋作り之事近年花美結構ニ成甚不相応之事共も相聞得心得違成事ニ候、各分際を考へ弥前々ゟ被　仰出置候通何分ニも手軽ニ仕、表通ハ不取乱様内証ハいか程も都而質素ニ仕、少も花麗結構成義仕間敷候、

右之通何も堅可相守候、且江戸詰之輩衣服等之儀ハ、文化拾四年被　仰出置候通屹度可相守候、若違犯之者於有之ニハ御近習目付御目付御徒目付等見当次第申断、及再応ニ候ハヽ厳ニ可被及御沙汰ニ候条、頭々ハ不及申同役親類五人組合迄心を添猥成気無之様可仕候、且小進之輩ハ何様ニ倹約仕候而も不得止事及困難ニ候者も可有之哉、平日行跡正敷御法令を守厳敷節倹を務候而も右之困難ニ相至候者も候ハヽ、支配頭申出候様被　仰付候間、自今一統覚（悟）語を励廉耻をみかき候様可仕旨被　仰出候事、

天保四年二月

覚

諸士身持之儀ハ御条目江も被相載置、従　御先代段々被仰出置候通之儀ニ而、改而可被　仰出品も無之事ニ候得共、士風年増ニ相衰大勢之内ニハ更ニ文武之嗜も無之、其上家並禄役之御奉公及怠慢ニ、甚敷心得違之者ハ逸楽を好酒色ニ耽り、利欲を恣ニし公事沙汰を求め、或民間ニ数年閑居し不作法之身持を持下、種々不都合之族も相聞得、都而士之本意覚語ニ悖り　御先代厚ク御世話被遊候　思召も不相立、大小御譜代之御家人世禄之弁も無之事と深歎被　思召

候、向後一統身分之程相慎、文武之芸ハ勿論家並禄役之御奉公何も出精相励候様可仕候、御譜代之輩ハ壱人として疎ニ被　思召事ニハ無之候得共、大家歴々ハ勿論之義、殊ニ大番組之儀ハ諸役ニも被召仕、小進たりといふとも器量ニ応し高役ニも被　仰付儀ニて、諸事之嗜ミ平日之心懸諸士ニ抽し格別ニ無之不叶事ニ候間、此末別而厳重ニ身分を嗜ミ候様可仕候、大家歴々之輩ハ各領地撫育を始御領内之警固郡村之取締ニも相成、在所ニ罷在候儀可被相嫌事ニハ無之候得共、兎角在所ニ計罷在候而ハ諸事不案内之上、諸稽古事等も行届兼候事ニ可有之候間、時々出府仕殿中向見習諸稽古事等仕、成丈定仙も仕候様可心懸候、且大番組始諸士定仙之儀も段々被　仰出置候得共、右様其本立兼候故か今以際立定仙之者も無之、御制導も不行届故之義と是又深　御気之毒ニ被　思召候、自今各覚語を改　御先代之思召も相立御制導も相届候様屹度心懸定仙可仕候、若　御趣意ニ悖り不都合之輩於有之ニハ可被為及御吟味旨被仰出候事、

天保四年二月

一今度被仰出候御目付続(読カ)渡之御書立両通ハ、其組々之御触頭呼出御帳役ヲ以為申談早速右之趣仙在共ニ無滞相通、致承知候輩ハ名下江印形いたし取揃候而我等宅指出候様可致事、

但、触壱組ニ付壱通ツヽ御帳役ニ為認相渡可然事、

一壱役壱人御詰所へ御呼出被仰渡候御書立御帳役江拝見為致、右被　仰出候ニ付而ハ面々組子取扱振之儀心付も候ハヽ、吟味書立ヲ以申聞候様申談可然吟味致候事、

但、御帳役共江此末勤向之義右被仰渡ニ向申含置候方と吟味致候事、右ハ主水殿ゟ御談候趣也、

近年我等共大番組武芸見分致中絶候処、此末前々之通令見分候条、何も武稽(ママ)古可致居事ニハ候得共猶更出精稽古も可仕候、尤二男三男弟等迄致出精候様兼而父兄令撮当候様可有之候、此度諸士身持之義勿論、文武芸道之義も専被仰出候事ニ候間、何も無怠致出精候様可心懸事、

右之通各其心得同役并御触組中へも無落相通様可被申候、

以上、

天保四年巳六月十六日　　松岡　主水

大番頭衆江被　仰出候御触写

郡村之儀ハ御大切之義ニ而是非ニ郡村相立候儀ニ無之候而ハ難被為成義ニ付段々御世話も被成下候事有之、是迄要害在所所拝領之輩ハ不及申、其外給人之内ニも段々知行所百姓共農事出精立続之義精々世話仕候輩も相聞得候得共、右ハ実ニ稀々ニ而却而郡村之害ニ相成候類不少粗相聞得不引合之輩ニ候、右害ニ相成候趣大略左之通、

一地頭之権威ヲ以金石（穀）を借受返済指滞候由之事、

一過之人馬を召仕品ニ寄候得ハ不相応之代取立ニ致、壱人ニ而間ニ合候義をも二人三人と申様人足等割付候類之事、

一田地見或ハ廻村之節百姓共ゟ馳走を受過分之入料為相懸候由之事、

一給人幷諸家中之内ニハ百性之若キ者共を引入相手とし酒を飲風雅を楽しミ、又ハ弓寄合等其外都而百姓ニ不似合義を取すゝめ、或諸士諸家中猥ニ百姓家へ出入候類之事、

一聊之過失をも大造ニ申立、申詫も不承届終ニハ理不尽之取行等有之、又ハ百姓共公事争論之間ニ立入、諸願様之義等も下書致呉、其身之権を求め我儘之振舞有之由之事、

右之類其地百姓を虚遊惰之風を移し、専郡村之害ニ相成候義相聞得甚不都合之事ニ候条、自今以後　上之御取扱見習取扱候様可有之候、若亦　上之御取扱不心得之輩も候ハヽ御代官江取合相談を受候様可有之候、勿論此度尚又郡村之儀厚ク御世話も被成下候ニ付而ハ、諸役人十里已下ハ歩立、或ハ鞍馬江乗候義被相止候役々も有之、諸案内相出候義も被相略候条、諸家中ハ尚心を用田地見等ニ而廻村之節鞍馬ニ乗候儀堅ク可被相控、其地宿賄を始省略雑費不相懸様可申付候、前条之次第ハ文化四年ニも被相触置候処、近頃ニ至り候而ハ相弛ミ、且主人々々制道不行届之儀も相聞得候条、已来ハ屹度可相守候、万一非常之取計於有之ハ厳ニ可被為及御沙汰候事、

天保四年凶歳ニ付諸御触幷諸首尾合等左之通附諸達幷諸留

一七月十七日主水殿御宅御取締御寄合之節、米払底ニ付御

払米被成下候様御吟味被成候様仕度趣口上ヲ以相達候処、下〻吟味起り不申候而ハ御吟味難被成下趣若狭殿主水殿御両人共被仰渡候ニ付、十番御取締同役共江吟味いたし御払米被成下度趣、十番一統御用前御帳役連名を以当番〻相達候事、

但、当月十日米払底ニ付四穀町江二千俵御払米被立下、同廿日又以払底ニ付五千俵被払下、八月十一日二千俵、都合九千俵被払下候事、

覚

連日不気候ニ付市中出米無之世上一統及難儀候ニ付、段々御払米も被成下候義ハ何レも心得居候通ニ候処、兼而御扶持方引当貸金致し置候者、御扶持方渡米先々之約定通金主へ可引取儀ハ勿論之事ニ而、異乱無之訳ニハ候へ共、此節柄米穀聊ニ而も散在相成候得ハ　御上下之助ケニ相成候事ニ候条、此旨を宜敷勘弁致来月渡りニ限り借主之望次第ニ金代を以返済を受、米ハ借主方へ相渡候共、亦ハ弥米ニ而返済ニ引取候ハヽ、御蔵場ニて直々払米ニ相立候共、いつれ米穀散在致候様何分心を用候様金主方へ可申含候事、

右之通御奉行衆〻御番頭衆へ被仰談候上御書付被相渡、十番一統焼印引当貸方致候者御呼出相成、御帳役手前ニ而七月廿八日右之趣申談候事、

大番組一統へ御払米被成下度相達候所、御吟味難被成下趣被仰渡候ニ付、八月九日真山源太左衛門宅御取締寄合之席ニおゐて吟味相決、翌十日十番一統又々相達候達書面左之通、

去月中大番組一統へ御続ヲ以勝手次第御払米被成下度早々相達候所、度々市中へ御払米被成下候而米穀散在相成居候事ニ候間一統大番組へ御払米ハ難被成下旨被仰渡承知仕候、扨又大番組御扶持方之輩ハ当月ハ渡し月ニて米被相渡取続罷在候事ニ候所、在郷御知行所持之輩ハ先達相達候通、兼而買米ヲ以取続居候事ニ候所、此節市中ニて相調申度及相談候得共、払米一円無之相調可申様無御座、勿論白米も壱升弐升ニ限り壱度ニ三升共払不申、家内人数多之輩ハ日々朝夕之飯料ニも間ニ合不申甚難儀罷在候事ニ相聞得、右様之次第ニ而ハ御知行取之輩ハ取続居可申様無之事ニて、此

度御扶持方渡ニ付而は金主之者へハ金子ニ而遣、渡米ハ御焼印主受取、残米ハ於御蔵場ニ直々払ニ相立候様御吟味被仰渡候ニ付而ハ、米穀散在ニ相成候訳とハ相心得、先々諸方へ払米相受度趣面々及相談ニ候事ニ候得共、是又只今ニ不気候故か、何レも払米ハ一円無之由ニ申聞一切米相調可申様無之、如何様共手配ニ及兼候次第ニ御座候、因而ハ定仙之大番組御知行所之輩々計も御続ヲ以勝手次第御払米被立下候様今一応御吟味被成下度奉存候、一旦御吟味難被成下旨被仰渡候事ニて押而相達候も恐入遠慮至極ニ奉存候得共、困難之者ハ面々今飯米相調兼候方ゟ朝飯ハ相用、夕賄ハ相用兼候程之類も有之哉ニ相聞得、極老幼少之者共此節之歎於人情ニ無拠次第之事共相聞得候間、御取詰御吟味被成下否被仰渡候様仕度、十番一統之同役共又以吟味仕、拙者共御用前ニ付此段相達申候、已上、

八月十日　　十番御牒（帳）役連名

尚以、定仙之大番組御知行所持之輩十番取合八百三拾七人ニ御座候間、御取合御吟味被成下度此段共ニ如此ニ御座候、已上、

右之通相達候処、御吟味難被成下段御奉行衆ゟ被仰渡候段被仰渡候事、

酒造方御停止

○当作毛不熟ニ付穀物甚不自由飯料ニも及迷惑ニ候事ニ相聞得候ニ付、　御城下御酒屋之外市中酒屋如前々之不残被相止候間新酒造方ハ勿論商売急度可相止候、若違（背）輩候段令露顕候ハヽ其者ハ不及申ニ組合迄曲事被　仰付事、

附、諸侍幷軽キ者迄薬酒ニ相用候分か、或ハ婚礼元服等指立候儀ニ付酒相用候節ハ、御勘定所江申出御勘定奉行聞判を以御酒屋ゟ可相調候、右始末之儀ハ御勘定所可承合候、

一御一門衆大進歴々之輩共御造方為仕候儀可為無用候、只今迄之造方為仕候残酒之分相用候儀ハ格別之事ニ候、夫共ニ紛敷儀無之様急度可申付事、

一有来候酒屋共令所持候残酒当年中ニハ急度可売払候、其以後ハ商売（ママ）葬と相止候事、

（一脱カ）御城下出穀不足ニ付諸士進退高人数ニ応在々ニ而勝手次

第米穀相調、御郡奉行通帳ヲ以　御城下幷在々住居之所へ相廻候義共当分　御免被成下候条、委細之義ハ向々承合首尾可申事、

御救助御見当相立候ニ付早々御触

○一当作毛不熟ニ付御家中士凡始下々迄来新穀迄取継至極無御心元被　思召、仍之向々重ク御吟味被相尽、四民飢渇之体ニハ不到様救助御手当之御見当も相立候処、右ニ付而ハ左之通被成下候条、此上　上之御世話而已不相待一統覚語(悟)を相改猶も質素倹約屹度相守、麁喰雑飯等専ニ相用候内之者男女共ニ人数等相減、幾重ニも諸事取賄相凌候様可心懸候、

一士凡御扶持方米三貫文已下ハ一円米渡ニ被成下、三貫文已上ハ七歩五厘之御割合を以弐拾五人分以下一円米渡被成下弐拾五人分以上は半穀半代ニて被渡下候、

一御蔵米幷御役料之義ハ八分之御割合ヲ以被渡下、百俵已下ハ半高米渡、百俵已上ハ三ケ壱米渡、三ケ弐金代ニて被渡下候、

但、石内ニハ進退高ニ応し半穀半代、又ハ三ケ壱三ケ二と被渡下候而ハ割合過不足不相当之分可有之候、何も実飯料丈ケハ米ニ而被渡下、其余之分ハ金代渡りニ被成下輩も可有之候、

一御家中士凡当壱ケ年五分壱催合米ヲ被召上、外旧諸上納懸り幷諸拝借金元利共当壱ケ年上納被延下候、

一前条之通御吟味被成下候而も知行幷御焼印引当借財有之者数多之義ニ候間、知行幷御扶持方等士凡共進退引当借財之分ニ限り借金元金計来暮迄当座元延ニ被成下候、

附、金主々々之者此節柄之義ニ候間、諸人不及迷惑候様何分心を用貸借之通用是迄之通ニ而聊不通用之義無之様仕、借主々々之者も信義不取失様可仕候、焼印引当之分ハ焼印ハ金主方江引留置、其時々被渡下金石計借主方へ不残可相送候、

右御触八月十四日也、町方へハ同日夜九ツ後ゟ十八町幷端々迄四民御救助之御触一夜之内被相触、翌十五日ゟ人心稍安堵之様子也、

米穀調達

一当作毛不熟ニ付仙在共市中出米無之四民及難儀ニ候事ニ相聞得、御救御手当之義先々御吟味被相尽如何体ニも御行届可被遊候処、此節囲置候者ハ仙在共ニ早速可申出候、御救助之御見当も有之上ハ聊　上之御繰合等ニ被相加訳ニも曾而無之候、幾重ニも御手当ニ被成下訳ニ候間、此旨勘弁志願有之者早速可申出候事、

八月十五日

春秋当番

御城当番先規之通被　仰付置候処、当年作毛不熟面々可及迷惑ニ、仍窕キニ而相成候様春秋之内壱ケ度ツヽ相勤候様御用捨被成下候、

右ニ付虎之間当番被相止候之間、虎之間之者ハ中之間ニ而相勤、次之間之者ハ御広間ニ而可相勤候、

八月十八日

被下籾被渡下候御触

当作毛不熟ニ付世上米穀払底一統及難儀候事ニ相聞得、御家中之内御扶持方取之輩ハ当月渡迄常年之通無御減少被渡下候処、知行取之内ニハ遠在ニ知行有之輩ハ一入早速飯米可指逼候、仍知行取定仙之輩ニ限り文政三年　御入部之節被下置候籾御挽方被成候を早速可被渡下候、尤新穀出盛ニも相成候ハヽ、物成米ハ勿論市中ニも一円出来無之事ニも有之間敷候間、先以当座凌ニ相成候程可被渡下候、禄高ニ而俵数有之者ハ何分跡々之備ニ致置候心得不取失様ニ俵数相減申出候様可仕候、頭々手前ニ而も実事飯米ニ行当候者を遂吟味取調向々承合首尾可申事、

知行取之外ニも無拠品有之飯米之已ニ渇命ニも至り候程之者ハ、是又頭々見詰次第可被渡下候事、

八月十四日

知行所ゟ米穀駄送御免

此節　御城下出穀不足ニ付可及迷惑ニ候条、知行取定仙之輩ニ限り拾里以上遠在ニ而も知行所ゟ米穀御郡奉行通帳ヲ

以御定駄賃駅継才料付ニ而為相登候儀、幷勝手之者ハ自分人馬ヲ以引通ニ為相登候儀共ニ当分御免被成下候条、委細之儀ハ向々承合首尾可申事、

八月廿一日

糀室御停止

当作毛不熟ニ付穀物甚不自由一統及迷惑ニ候事ニ相聞得候ニ付、御城下在々共ニ糀室当分一切被相留候、若令違輩(背)候ハヽ其者ハ不及申組合迄厳ニ可被及御沙汰候事、

八月廿七日

皆無ニ付御用捨

御家中知行被下候輩之内当水損皆無青立皆無取合八分三厘三毛以上、幷青立ニ而も八分三厘三毛以上引方之分ニ限当十月中迄御村改相請、右証状差添御用捨願当十一月中御勘定所江可被相出候、兼而青立皆無之方ハ御格之通御用捨不被成下候処、当年ニ限り青立皆無八分三厘三毛以上之者へも五分壱御役金催合米ハ水旱損皆無之者同様ニ御用捨被成下候事、

委細之義ハ御勘定所可承合候、

八月廿八日

此度常式供人数被相減候ニ付、火事場へ召連候供人数等左之通、

若老大番頭格以上

一小性壱人　徒者壱人弓挑灯壱ツ　纏壱人　高挑灯壱人

草履取壱人　鎗持壱人　口付壱人弐人ニ而も勝手次第

右之内若老ハ御火消方執事之間高挑灯弐人、口付も弐人可召連候、

番頭格已上

一小性壱人　徒者壱人弓挑灯壱ツ　草履取壱人　鎗持壱人

高挑灯壱人

御徒小性頭、脇番頭、御町奉行、御近習目付、侍御武頭、御郡奉行、江戸番組頭並御武頭

一若党弐人弓挑灯壱ツ　小籏壱人夜中高挑灯　草履取壱人

右之内御郡奉行大水賦御村火消差引共目印只今迄之通、

一同断御町奉行、御近習目付ニ限り小籏ハ相控鎗為持候事、
　但、御近習目付ハ安永八年ゟ鎗ハ相控小籏為持候事、
一御武頭目印只今迄之通、
　御目付
若党弐人弓挑灯壱ツ　高挑灯壱人　草履取壱人　鎗持壱人
　但、昼中ハ鎗夜中ハ高挑灯目印只今迄之通
右何も小性若党壱人相減候共勝手次第、
　御勘定奉行
若党壱人弓挑灯壱ツ　小籏壱人夜中ハ高挑灯
草履取壱人目印只今迄之通
　江戸番馬上三百石以上
一徒者壱人弓挑灯壱ツ　草履取壱人
　但、三百石以下弐百石以上壱僕ニ而も勝手次第、
一御作事方本〆、横目、御徒目付、水道筋改、御行列役人、
　水賦小役人等一僕并ニ無僕ニ而罷出候故目印只今迄之通、
右之通火事場ヘ罷出候役々供連之義、当分被相減候条、即刻ゟ火事場ヘ罷出候役々、右覚書之通供人数召連罷出候様御火消係り之者ヘ相通可申旨、若老ゟ申来候間、各其御心得御同役并御支配之内御火消係り之輩ヘ首尾可被成候、以上大番頭衆御触留写、

九月二日

在郷ニ而調米為相登候義ハ停止

御城下出穀不足ニ付諸士進退高人数ニ応在々ニ而勝手次第米穀相調、御郡奉行通帳ヲ以　御城下并在々住居之所江相廻候儀共当分御免被成下旨先達被相触置候処、最早新穀出盛之節ニも相成且遠在之知行米為相登候義等も夫々御免被成下候間、右買方之儀ハ一切被相止候事、

九月四日

当作毛不熟ニ付御家中士凡知行并御扶持方等進退引当借財之分ニ限り借金計来暮迄当座元延ニ被成下旨去月中被相触置候所、連々困難之上ニ候得は借財自然相嵩利足計も不少之者多分ニ相聞得候、依之利足共来暮迄当座延ニ被成下候、金主方之者元利共ニ元延ニ相成候間ハ無拠可存、依一旦元金計被延下候事ニ被相触候得共前段之通ニ而不得止を利足

共被延下候条、此節之義何も勘弁仕委曲ハ先達而被相触候通借主之者信義を不失様ニ仕、金主々之者も不通用ニ不至様何分心を用候様可仕候、

九月十四日

密酒

一当作毛不熟穀物甚不自由飯料ニも及迷惑候ニ付、御酒屋之外　御城下在々共市中酒屋不残被相止、新酒造方ハ勿論濁酒造方商売共被相禁、若違之者於有之而ハ組合迄可被及御沙汰旨被相触置候所、万一心得違令密商売候者有之候ハヽ誰々ニよらす早速可申出候、密商売本人幷組合共過料被召上、右過料訴人ニ直々可被下置候事、

密石

一密石之義ハ兼而厳ニ被相禁置事ニ候得共、心得違之者ハ米穀貯置密石を犯先々御仕置被　仰付候処、当年之義ハ別而御領内大不作他領迚も同様不熟米穀高直ニ相聞得候間、万一心得違之者他領へ脱石等相犯候儀ニ而ハ甚不都合之事ニ候、右様之者有之候ハヽ誰ニよらす早速可申出候、右密石幷組合ゟ過料ゟ(ママ)過料被召上、右過料共々訴人江直々可被下置候事、

九月廿六日

大目付江

近年諸国違作之国柄多く米穀払底ニ付、酒造人共当巳年之義ハ銘々造来米高之三分一相減三分二酒造可致候、若隠造等いたすニおゐてハ其ものハ勿論、其処之役人迄吟味之上急度可申付候条心得違無之様可致候、

九月廿八日

来年始、御野初御規式、当年御領内大不作ニ付被相控候段被　仰出候間、各其心得同役幷支配之内携輩江可被相通候、以上、

十二月七日

高泉　杢

片平数馬殿

当不作ニ付米相場御蔵米拾俵ニ付三拾切、市中米壱切ニ付壱斗七升、銭壱貫五百五拾文ニ当分被相定旨先達而被相触置候処此度御吟味之上右ハ被相止候、乍去弥増米銭共ニ払底諸人及難儀候事ニ候間何分融通諸人之ためニ相成候様売買可仕候、将又此節ニ乗し米穀相場不法之取行も有之事ニ相聞得候処、類外非常之年柄諸人之痛飢渇をも不顧勝手をはかり利欲ニ耽候段、人情を失し甚敷心得違不都合之事ニ候、自今右体之輩於相聞ニハ如何様之申合有之候共右ハ不拘厳ニ被及御沙汰ニ候条、有余之在之輩不囲置相払一統之窕ニ相成候様訖度可心懸候、右之通御城下不残如兼而之早速可被相触候、以上、

十二月十日

山　城
縫　殿
木　工
監　物

御目付中

右両通村上徳之丞ゟ相出、十二月廿三日堀越大助相達承知致候事、

一石田定之丞殿御奉行職被　仰付候事、

一芝多対馬病気ニ付如願御役御免被成下候事、

一来正月被下籾左之通月割ヲ以被渡下候事、

天保五年正月十三日
大番組　壱番弐番
同　正月十四日
同　三番四番
同正月十五日
同　五番六番
同正月十六日
同　七番八番
同正月十七日
同　九番十番

右之通一書ヲ以二宮平六ゟ順達申来候事、

一去々年大不作ニ付御家中士凡旧諸上納懸り諸拝借金等年

延被成下候分不及申、相定諸上納物被成不足等ニ而不納之分ハ、去年中年延被成下候処、当年ゟ御割合通可被召上事ニ候得共段々相痛居候、指上分御割合通被召上候而ハ取続かね候事ニ可有之候、依而非常之御差略ヲ以此末諸上納物等左之通被成下候事、

一新七ケ年賦当年ゟ向三ケ年御元金御割付被延下御利足計被召上候事、

一古七ケ年賦当年被召上候御元金壱ケ年分を当年ゟ向三ケ年ニ御割合被召上候事、右七ケ年賦御利足金揚置御元金皆納之上八ケ年賦ニ被召上候分ハ払ニ被成下候事、

一一統御引当地有役八ケ壱無役六ケ壱、五貫下有役九ケ壱無役七ケ壱ニ御割合被弛下候事、

一前段御引当地有無役共ニ五貫文以上七ケ壱、五貫文下八ケ壱御割合被弛下候事、

「(朱)諸向御備金之類当年ゟ向三ケ年御利足計被召上候事」

一是迄無利足年賦之分ハ当年ゟ向三ケ年上納被延下候事、

一諸難渋金百石壱両之割ヲ以被召上候分、是迄之通被召上候事、

一上江之諸上納物等前条之通格別ニ御用捨も被成下候上ハ、自今相対借財も去々年八月元延御触出以前進退等引当之分ハ勿論、総而借財元利共ニ元延ニ相成居候分右ニ準、貸人ハ借人共不痛様何分勘弁仕、借人共不失信義様程能取引可仕事、

右之通兼而之通可被相触候、以上、

山城　監物　杢

七月廿八日

右天保六年被相触候事、

一八　手控（北海道開拓関係記録）

（表紙）

手控〔伊達邦成記〕

（中表紙）
「手　控」

一ゐなご百六丁目壱斤ニ而壱歩一朱位
右ハ箱館ニ而交易ニ相成申候、
売商右文之通り、
函館定宿
敦賀屋六兵衛
地蔵町会

明治三庚午年三月廿七日ゟ
三月廿四日かつきケ浦江拝借之鯨丸着岸ニ付、同廿七日四ツ時惣人数引卒出発寒風沢江着一日滞留、廿九日五ツ時長鯨丸江乗船同日七ツ時出帆、晦日四月朔日両日無異事同二日五ツ時箱館表江着船ス、沖ノ口役人江相談之上同所江上陸、開拓使御役所江直ニ出頭別紙之通り御届仕候左ニ、
今般私事長鯨丸御便船ヲ以仙台寒風沢港ヨリ家来男女惣計弐百五十人引卒乗込、室蘭港着岸ニテ有珠郡支配所江移住為仕候、依而此段不取敢御届申上候、以上、

四月二日　　伊達藤五郎

開拓使
御役所

同所船中三日滞留五日暮則出帆、六日四ツ時室蘭港江着船
同日同所上陸一泊、同七日有珠郡支配所江着ス、勇払江届
書左ニ、
今般私事長鯨丸火船御便宜ヲ以仙台表寒風沢港ヨリ家来
男女惣計二百五十人引卒乗込、箱館港江着船室蘭港江回

船上陸有珠郡支配所江移住為仕候、右之趣於箱館表に御届申上候へ共尚更此段不取敢御届申上候、以上、

四月八日　　伊達藤五郎

勇払御出張
開拓使
御役所

当正月中ゟ開拓使ゟ御達書左ニ、留主中之義斎藤雄治方ニ而御請等之始末致候よし、別紙御達左ニ、

石狩本府
開拓使

伊達藤五郎殿

印

伊達藤五郎

今般其支配地有珠ゟ当石狩大府江之新道開可被　仰付之処、移住ニ付而は入費も多々可有之、同所善光寺古来ゟ開墾之志モ厚ク当住尚又墾願之次第モ有之候付新道開被　仰付候、依之其最寄土人不差支分右夫役ニ労シ候様当分之内善光寺江委託可有之候事、

午正月　　開拓使

別紙之趣呼出之上相達可申之処、右様候而ハ風雪之折柄格別可及難渋、幸善光寺帰郡ニ而此段相達候条可上其意（マヽ、被カ）候也、

正月十九日　　開拓使

伊達藤五郎殿

大臼山善光寺々禄之義は一ケ月金拾両宛被下来候処、昨冬中其郡其藩支配所ニ相成候ニ付、昨十一月迄之分ハ既ニ御下渡相成候間、十二月ゟハ其藩ニ而可取計旨開拓使ゟ御達ニ候条、此段及御達候也、

勇払
黒沢権大主典

伊達藤五郎殿内

有珠郡
詰　合
御　中
午二月六日

（本文抹消）
「四月
一十一日開拓場所江男子之分一宇遣し屋敷割小屋懸等急速申付候事、
有珠郡着翌日ゟ開所見分、
一四月廿日モンヘツ東通開拓可然場所見立、別紙絵図面之通り仮ニ屋敷割渡小屋五十程出来段々開拓之運ひ相付候事、四月廿今廿日（四日）迄ニ相付候事也、」
四月廿日会所守并ニ惣土人迄手当並ニ申渡書左ニ調之通り申付候事、
申　渡
一今般我等事家来共二百五拾人取移追々数多之家来共引移候ニ付、向役土人共心得方申渡候間、左之条々屹度相守可申事、
一何事ニよらず　天朝之御用ハ勿論、我等向役之申付候事ハ違背無之精勤可申事、
一家来共江も土人と慢り不疎様厳敷申渡置候へハ、土人共も何事をも信実を旨と致し、剰諸士ニ対し不礼不敬之事屹度無之様相守可申事、
一何事ニよらす土人之妨ニ相成、難渋ニ相及候事も在之候ハヽ其向役江可申出事、
右之通り申渡候条屹度相守可申事、
右書付斎藤雄治読渡、通事長松異言ニ而目通之上役土人共江申聞セ候事、
一金六歩　嘉　平
一同弐歩　番人　弁之助
一同同　長　松
一同同　市五郎
一同同　幾太郎
一同二朱　常　吉
一同同　金太郎

一同同　仁太郎
一同同　惣助
一同同　半次
一金弐切　富之助
一同同　直右衛門
一同同　徳太郎
一同同　兼之助

右四人ハ諸荷物運送方ニ付世話致候ニ付、頭書之通り、

一金四切　茶壱袋　谷藤鉄蔵

右同人宅江米幷諸荷物預候世話ニ付、頭書之通、

一金壱切　茶壱袋　谷藤平治郎
一同断　戸沢悠治

右両人人数宿いたし候世話ニ付、頭書之通り、

一茶壱袋　寺田栄助
一はな紙十状　チマヱベツ常吉

役土人

一清酒二盃　莨二わ　惣乙名　クロソウ
一清酒五合　脇乙名　アカムイ

一同同　惣小使　コランクミユ
一同同　並小使　サンシ
一同同　同　イタクハヱ
一同同　同　チヤシテキ
一同同　同　トムアン

以上七人

飯焚土人馬追土人共はしめ惣土人人頭江米一盃ツヽ酒一盃ツヽ手当ス、役付土人ハ前文之通り江米一盃ツヽ手当致候事、

葉莨二わ

同同　極老女土人　セヒラ　九十五才
同同　クネヱケワ　八十六才
同同　イトフリ　八十四才
同同　孤独難渋之もの　シネモン　七十四才

馬追土人名

シモト
ハシテクロ
レクンタ

トンレキ
シユホクロ
イタクチヤ
ヲヤワカ
シユヤンケ
バルヒタ

シトシカ
アキレクシユ
シロマクロ

一土人家江猥ニ出入難相成候事、
右之条々違背於有之ニは厳ニ御沙汰ニ被及候事、
四月廿七日
一今般左之通永久新ニ組合被相立候間、互ニ助合候様可心懸事、

飯焚土人名

斎藤保之助
関本市右衛門
太田平蔵
森松三郎
砂金源治郎
「御用前」（朱）

三品万之助
大川三九郎
渡辺源之丞
及川忠八
百井栄之進
「御用前」（朱）

鈴木浅右衛門
鷲崎雄之助
「御用前」（朱）

四月廿七日開拓場役所ニ而申渡左ニ、
被　仰渡条々
一何事ニ不依信実を旨と心得、礼義廉恥之風ヲ厚ク体認可致事、
一土人と慢リ欺キ偽リ不可為翫弄事、
一土人と諸品交易幷夫馬召仕候事、自分と致難相成其時々夫馬惣長へ申出指図ヲ請可申事、

加藤仁三郎
三品桃治

鈴木留之助
小田島孫六
南条徳三郎
佐藤安平
高橋常之進

「御用前」(朱)

寺島菊治
水戸部万治
清野岱助
高橋昌之進
高橋市郎
森友七

「御用前」(朱)

佐藤直右衛門
水戸部要七
斎藤善助
半沢俊蔵
武沢忠治

「御用前」(朱)

伊藤勇八
斎藤透助
佐々数茂
高野良三郎
大友儀平

「御用前」(朱)

横山勝四郎
志も八十郎
松本幸左衛門
白石幸右衛門
山木外守

「御用前」(朱)

鈴木喜膳
阿部周助
斎藤琢治
才藤貞吉
水戸部雄三郎

佐藤玉蔵
太田勝吉
佐藤治右衛門

「御用前」（朱）
- 庄司定吉
- 佐藤久蔵

「御用前」（朱）
- 金沢春吉
- 大橋虎蔵
- 沢井四郎
- 内海猪之松
- 風間嘉平

「御用前」（朱）
- 伊藤善助
- 石田松三郎
- 伊藤小三郎
- 石井軍太右衛門
- 長岡勘助

「御用前」（朱）
- 荒徳治
- 今野喜蔵
- 杉田清吉
- 阿部滝之助
- 鈴木栄蔵
- 田村新九郎

「御用前」（朱）
- 杉浦織之丞
- 国島広衛
- 牛坂喜四郎
- 伊藤粲三郎

「御用前」（朱）
- 阿部順助
- 高橋司馬
- 小川助四郎
- 才藤雄治
- 荒川又左衛門

「御用前」（朱）
- 笠原弥一郎
- 手代木蘊蔵
- 小熊進
- 鹿野与一郎
- 萱場源之助

「御用前」（朱）
- 山本惣平
- 大内民蔵
- 大内重松
- 大橋重平

以上

一五月五日セ反見物ス、右調ハ別ニ有リ、

一来ル七日方一先帰国ニ付、詰所以下有役無役ニ不拘於役所ニ門送為申上候事、

但シ、詰所以上ハ会所迄罷越為申上候事、

一副執事見次　杉浦織之丞

右同人ハ〆リ之ため[不明](ママ)と同於役所門送為申上候事、

一参事見次　高橋善平

是迄三役江兼

右之通リ申付候事、

一家中廟所見分ス、北ニ当リ相応之地所有之委曲ハ絵図ニて可見、

一開拓紀取(統取カ)ゟ畝反書上候処七丁七反五畝二歩也、舟岡之者共ハ七反程開拓ス、惣合八丁四反五畝二歩、

五月七日有珠支配出立ニ付、一通サル江家老萱場源之助名前ニて届させ候事、

一遊佐常治箱館に在宿罷有候ニ付、開拓使ゟ呼出之上海官所規則并税員定則弐冊被渡候事、

五月九日也、同十日箱館江我等着ニ付一見ス、

五月十二日箱館開拓使御役所江出頭差出候願書草稿、

恐惶頓首奉懇願候、先般御届申上置候通男女惣計弐百五拾人支配所江移住為仕、字名モンヘツ川以東平地ニシテ土勢モ可ナリ相見得候ニ付、於同所小屋懸同様之戸数五拾余相営開墾為仕、即今弐拾丁余ニ相至リ植仕付等モ為仕候処、同所は豊沢牧近傍之地ニ当リ、数多之牧馬縦横跋扈耕作之障リ不容易事ニ有之、柵立相防候手段モ相尽候得共、当月末夏毛植仕付之分迄開墾為仕候ハヽ数多之畝段モ開拓ニ可相成、左候得ハ数丁之間ニ柵立相防候手段而已ニ日ヲ費自然開拓之妨ニモ立至リ可申甚恐縮之至リニ奉存候得共、昨冬御取方他方江被移御取残ニ相成候分ニモ被為在候ハヽ、牧馬之儀被相任候様被成下度奉願候、右様ニモ被成下候ハヽ夫々深キ手段モ相立差障リニ

不成様仕度奉存候、尚当二月中於東京表ニ重役之者御取残之牧馬種馬ニ頂戴被成下度趣奉願候処、於箱館表ニ御沙汰被成下候旨御達ニ相成居候間、乍恐彼是御取合御憐察御仁恤之御詮儀被成下度俯仰奉懇願候、頓首再拝、

五月十二日　　伊　藤　五　郎

開拓使

御役所

謹上奉願候、私支配所有珠郡ニ有之候大臼山善光寺々禄之義は一ケ月金拾両宛被下来候ニ付、昨拾弐月ヨリは其方ニ而取計候様当二月中御達之旨奉拝承候、然ニ私旧家来一千三百六拾弐戸撫育来候処、一昨年来本藩減（ヵ）禄之末ニ付更ニ寸分之食禄モ分与可仕様無之、剰昨年之大違作方今ニ立至リ凍餓ニモ差迫リ候族不少折柄ニは有之候得共、実ニ必至之覚悟ニ而婦女子之裙釵は勿論、朝夕必用之具ニ至リ候迄委（悉カ）ク売却僅数月之食饉（糧）而已用意、去月中御届申上置候通リ男女惣計弐百五拾人移住為仕候末弥増必至困弊、支配所魚漁出産之儀迚も御見聞被成下候通リ至而取場も無御座場所、殊ニ従前ヨリ世話方之者一時ニ産ヲ失候而は困難ニ立至リ候趣、去冬品々申出モ有之、於私而モ前文之通リ疲弊相極候付而は土人之撫育往還之諸入費等卒然ニ方向モ相立不申ニ付、当一ケ年従前世話方之者江是迄之姿ヲ以百五円之運上金ニ而相任セ、外ニ当今支配地ヨリ相出候利潤迚も絶而無御座候へ共、当秋ニモ相至リ候得ハ即今開拓仕付之作利モ可有之候ニ付、甚恐縮之至ニ奉存候得共当秋迄之処、善光寺々禄之儀私見込ヲ以手当仕候様被成下度奉願候、尤当住僧之儀モ極老体殊ニ檀中迚も無御座事ニ相見得実ニ可憐儀ト奉存、細クモ餬（糊カ）口話（活カ）計相付候程ニは手当モ仕置候間、何卒前条之次第乍恐御汲量御垂憐之御詮儀被成下度俯仰奉懇願候、

五月　　伊　達　藤　五　郎

開拓使

御役所

右両文共広川大主典江出会差出候事、

北海道大港税員定則

輸出税

一生鯡　百石ニ付　永五貫弐百五拾文

但、十二月ヨリ翌春彼岸迄、

一同　百石ニ付　同四貫弐百五拾文

但、春彼岸後、

一走身カキ鯡　百石ニ付　同弐拾七貫文

一中鯡後ケ鯡　同　同拾九貫百五拾文

一胴鯡外割鯡　同　同拾五貫弐百五拾文

一撰数ノ子　同　永四拾壱貫八百文

一不撰数ノ子　同　同弐拾九貫弐百五拾文

一白子　同　同弐拾七貫七百五拾文

一笹目　同　同拾四貫弐百五拾文

一鯡〆粕　同　同弐拾四貫四百文

但、渡島国出産、

一同　同　同弐拾七貫文

一コマイチカ粕　同　同弐拾六貫弐百文

一鮭〆粕ホッケ　同　同弐拾六貫文

一鰯〆粕　同　同弐拾四貫四百文

一同　同　同弐拾貫文

但、渡島国出産、

一同囲〆粕同玉同同穴同　同　同拾六貫八百文

一鱈粕　同　同拾四貫八百文

一鮪粕同骨殻　同　同五貫四百文

一雑魚粕　同　同弐拾四貫四百文

一鯨骨馬骨　同　同三貫五百文

一干鮑カスベ　同　同四拾三貫文

一同鰊ウグイ　同　同拾六貫五百文

一同鮭　同　同弐拾三貫五百文

一同鱈　同　同七拾壱貫九百文

一棒鱈　同　同七拾弐貫三百文

一干鮫　同　同弐拾貫三百文

一煎海鼠　同　同四百四拾壱貫文

一干鮑　同　同三百四拾四貫文

一鰯　同　同百五拾三貫文

一鱈ノ中　一万個ニ付　同壱貫四百文

一帆立身　同　同壱貫文

一同貝　一万枚ニ付　同弐貫百文
一生并塩切鮭　百石ニ付　同九貫六百文
一塩鮪　同　同拾七貫八百文
一同鰤　同　同拾九貫五百文
一同鱈　同　同拾五貫八百文
一同鮭　同　同四拾貫九百文
但、縄泉郡（幌カ）、十勝国、釧路国、根室国ノ内西別浜益郡、
天塩国、北見国、樺太洲出産、尤樺太出産ニ限リ総テ
出港ノ節庁税ノミ取立候事、
一同　同　同三拾七貫弐百文
但、三石郡、根室国、千島国出産、
一同　同　同三拾壱貫百文
但、渡島国、後志国、石狩国、胆振国、日高国出産、
一囲鮭　百石ニ付　永弐拾九貫弐百文
但、縄泉郡、十勝国、釧路国、根室国ノ内西別浜益郡、
天塩国、北見国、樺太洲出産、
一同　同　同弐拾五貫弐百五拾文
但、三石郡、根室国、千島国出産、

一同　同　同拾九貫六百文
但、後志国、石狩国、胆振国、日高国出産、
一筋子　二斗入百樽ニ付　同五貫百弐拾五文
一解子　同　同　同弐貫六百文
一塩鱒　百石ニ付　同弐拾四貫文
但、釧路国、千島国、根室国、天塩国、北見国出産、
一同　同　同拾八貫七百文
但、石狩国、樺太洲出産、
一魚油　四斗入百樽ニ付　同三拾二貫五百文
一同　四斗入百樽ニ付　同弐拾五貫九百文
但、渡島国出産、
一硫黄　百石ニ付　同拾壱貫三百文
一昆布　同　同三拾弐貫九百文
但、日高国、十勝国出産、
一同　同　同弐拾九貫六百文
但、釧路国、天塩国出産、
一同　同　同弐拾六貫六百文
但、利尻郡、根室国出産、

一同　同　同弐拾四貫九百文
但、シコタン島、国尻郡出産、
一同　同　同弐拾弐貫五百文
但、石狩国、北見国、勇払郡、沙流郡、樺太洲出産、
一同　同　同弐拾貫三百文
但、後志国出産、
一長切昆布　同　同拾弐貫三百文
但、渡島国根田内村出産、
一同　同　同六貫弐百文
一元揃同　同　同弐拾五貫四百文
一花折同　同　同拾九貫三百文
一茅部折同　同　同拾五貫四百文
一早前長切昆布　同　同六貫五百文
一刻同　同　同六拾六貫文
一布海苔　同　同拾八貫文
一銀南草　同　同拾弐貫八百文
一若和布　同　同五貫八百文
一上鹿皮　同　同百弐拾三貫百文
一中同　同　同八拾八貫弐百文
一下同　同　同六拾弐貫弐百文
一鹿角　同　同百五貫文
一鹿爪　同　同弐拾六貫三百文
一売蛹　百斤ニ付　同壱貫七百八拾五文
一屑同　同　同五百五拾五文
一蚕種紙　五分種百枚ニ付　同三貫四百八拾五文

右税額ハ卯辰巳三箇年元代相場平均高ノ六分ヲ以之ヲ定ム、尤入港出港半高宛可取立、且前ニ掲ケサル産物輸出ノ節ハ、其時ノ相場元代ヨリ六分税出入ニ半高ツヽ取立候事、

材木津出役

一雑木角　長二間尺〆直し　一本　永弐百文
一丸太　長二間末口一寸　一本　同五拾文
一櫂木　壱本　同百文

石役

一船幅九尺六寸余ヨリ百六十石迄　同弐貫三百文
一百六十石余ヨリ二百六十石迄　同三貫四百文
一二百六十石ヨリ三百六十石迄　同四貫五百弐拾文

一三百六十石よヨリ四百六十石迄　同五貫六百四拾文
一四百六十石ヨ、リ五百六十石迄　同拾弐貫五百五拾文
一五百六十石ヨ、リ六百六十石迄　同拾弐貫六百文
一六百六十石ヨ、リ七百六十石迄　同拾弐貫六百五拾文
一七百六十石ヨ、リ八百六十石迄　同拾弐貫七百文
一八百六十石ヨ、リ九百六十石迄　同拾弐貫七百五拾文
一九百六十石ヨ、リ千六拾石まで　同拾弐貫八百文
一千六拾石ヨ、リ千弐百石迄　同拾弐貫八百五拾文
一千弐百石ヨ、リ千三百石迄　同拾弐貫九百三拾文
一千三百石ヨ、リ千四百石まで　同拾弐貫九百八拾文
一千四百石余ヨリ千五百石迄（石カ）　同拾三貫三拾文
一千五百よヨリ千六百石迄　同拾三貫八拾文
一千六百石ヨ、リ千七百石迄　同拾三貫百三拾文
一千七百石ヨ、リ千八百石まで　同拾三貫百八拾文

右ノ外積石相増シ候船ハ、百石ニ付永五拾文増シノ割合ヲ以取立候事、

面役

一二人乗　同七百五拾文

但、大中遣船、中遣船、図合船、三半船、筒船幷南部津軽ノ天当船熟（孰）レモ南部津軽地行キノ節ハ半面役取立候事、

一三人ノリ　同壱貫弐百拾五文
一四人ノリ　同壱貫五百文
一五人ノリ　同壱貫八百七拾五文
一六人ノリ　同弐貫弐百五拾文
一七人ノリ　同弐貫六百弐拾五文
一八人ノリ　同三貫文
一九人ノリ　同三貫三百七拾五文
一十人ノリ　同三貫七百五拾文
一十一人ノリ　同四貫弐百拾五文
一十二人ノリ　同四貫五百文
一十三人ノリ　同四貫八百七拾五文
一十四人ノリ　同五貫弐百五拾文
一十五人ノリ　同五貫六百弐拾文
一十六人ノリ　同六貫文
一十七人ノリ　同六貫三百七拾五文

一十八人ノリ　同六貫七百五拾文

常燈料

一船一艘ニ付　永五拾文

但、大小ニ拘ハラス取立候事、

帆形役

一帆布六反　同百五拾文

一同八反　同弐百文

一同十一反　同弐百七拾五文

一同十四反　同三百五拾文

一同十六反　同四百文

一同十八反　同四百五拾文

一同二十反　同五百文

一同二十一反　同五百弐拾五文

一同二十二反　同五百五拾文

一同二十四反　同六百文

一同二十六反　同六百五拾文

鯡取船役

一ホツキ船一艘　三人乗　金壱両弐朱

一持符船一艘　四人ノリ　同壱両弐分

一三半船一艘　六人ノリ　同弐両壱分

一乗替船一艘　八人ノリ　同三両

一図合船一艘　十三人ノリ　同四両三分弐朱

一中遣船一艘　永五百文

是ハ前ノ漁船其漁場ェ囲置候末、翌春中遣船ェ乗組罷下リ候節乗船役トシテ取立候事、

合船幷修復船役

一弁財船（合船）（幅九尺七寸以上）　百石ニ付　金八両

一同（修復）　同　同四両

但、北海道国内ノ材木相用ヒ候分、

一同（合船）　同　同五両

一同（修復）　同　同弐両参分

但、北海道内ノ材木ト向地ノ材木ト半ハ取交ェ相用ヒ候分、

一同（合船）　同　同弐両

一同（修復）　同　同壱両

但、向地ノ材木相用ヒ候分、

一合船大中遣船幅八尺七寸ヨリ九尺六寸迄　百石ニ付　同五両弐分
修復　同　同弐両三分
一合船中遣船幅八尺七寸ヨリ九尺六寸迄　一艘ニ付　同壱両弐分
修復　同　同三分
一合船図合船幅六尺七寸ヨリ七尺六寸迄　同　永五百三拾文
修復　同　同弐百六拾五文
一合船筒船幅七尺ヨリ一丈迄　同　同五百三拾文
修復　同　同弐百六拾五文
一合船三半船幅五尺一寸ヨリ六尺六寸迄　同　同三百五拾文
修復　同　同百七拾五文

但、三半船ノ幅尺ニテ筒替或ハ大持荷造リ合船ノ節ハ永弐百五拾文、修復ノ節ハ同百三拾三文取立候事、

一合船持符船幅三尺一寸ヨリ五尺迄　一艘ニ付　永百七拾五文
修復　同　同八拾七文
一合船磯船幅三尺以下　同　同八拾七文
修復　同　同四拾三文

職人役

一諸職一人ニ付　同百弐拾五文

但、小頭ノ分ハ免役、且弟子附キノ者ハ三箇年ノ間免役、四箇年目ヨリ職札相渡半役取立、其後師匠ノ方引取一人立相働キ候節ハ外並ノ通取立候事、

滞在役

一男一人　永百文
一女一人　同五拾文
一男子一人十五歳ヨリ十一歳迄　同五拾文
一女子一人　同弐拾五文

但、六箇月未満帰国ノ者ハ総テ半役取立候事、

一輸入税ハ海官所ニ於テ毎月三度物品ノ相場ヲ調ヘ、諸品入港ノ時々相場元代高ノ一分五厘税取立候事、

右之通相定候条来午正月ヨリ可施行、若シ年月ヲ経相場ノ騰低有之節ハ、模様ニヨリ平均ヲ斟酌シテ税額等ヲ改ルヿ有ルヘシ、

巳十二月

箱館　松前　縄泉　江差　寿都　手宮　海官所規則

規　則

一輸入諸品ハ其時之相場元代高ヨリ税壱分五厘取建(立)候事、

但、毎月三度相場相調候事、

一北海道出産之品ハ善悪其場所分ケヲ以上中下ヲ定メ、三ケ年平均相場元代高ヨリ税六分ヲ見込ミ其品ニ税額ヲ定テ出入ニ半高ツヽ取建候事、

但、鮭、鱈、鰤、鮪、生鯡ニ限リ渡島国有川村其外ヨリ、東京其外エ直(帆)風之儀願出候節ハ税一時ニ全ク可取立、且北海道ノ内遠地エ積取船差下シ、其地ヨリ直風相願候節ハ右船間尺相改候節積高ニ応シ前同様税取立候事、

一船々間尺ノ高二九四ヲ掛、且柾替引ノ用捨致候テヨリ又積高ノ二割ヲ用捨シ、其代金高ヨリ又々一割ヲ用捨シテ税取立来候処相廃シ、向後ハ間尺通ノ積荷高ヨリ弐割丈ヲ用捨シテ定額ノ税取立候事、

一船ニヨリ判賃ト唱エ銀壱匁ツヽ取立来候ヲ相廃シ、常燈料ト唱ヘ永五拾文ツヽ取立候事、

一諸廻船面役ノ儀乗組一人前永三百七拾五文取立候事、

一諸廻船石役ノ儀是迄ハ米一升代鏹銭六十文ノ割合ニ有之甚不当ニ付、近年ノ米相場三ケ年平均ヲ以積リ立候処、殊ノ外員数相増シ突然其通取立候テハ船方之者難渋可致ハ必然ニ付、右三ケ年平均相場高ヨリ三割ヲ相減シ右役員数相定メ候事、

一箱館、縦(幌)泉、寿都、手宮四港ノ内エ通船ト唱エ風待滞船致シ候節ハ帆形役帆布一反ニ付永二十五文可取立、尤滞船五日以上ハ半面役取立、又其儘囲船致翌春出帆ノ節ハ本面役取立候事、

一鯡取船役金之儀乗組定ニ応シ、一人前金壱分二朱取立候事、

但、本文ノ漁船其漁場エ囲置候末、翌春中遣船大中船等エ乗組罷下リ候節、中遣船ハ永五百文、大中遣船ハ半石役取立候事、

一合船并修復船役金之儀是迄ノ定数一倍増ニシテ取立候事、

一軍艦ヲ除クノ外ハ都テ定額ノ港税可取立、又官船雇船共北海道ニ関係候売荷積入ノ節ハ四港ノ内エ一応出入致候上荷物税取立候事、

一北海道国内諸藩支配地ヨリ出産物幷同所エ差下シ品、諸藩雇船ハ勿論手宮ニ積入候共是非四港ノ内エ入船荷物税等諸廻船並ノ通取立候事、

但、支配地ヨリ鮭積入何方エモ直艘致シ候節ハ、前以四港ノ内其近傍ノ港ニテ積船ノ間尺ヲ改メ定額ノ税取立候事、

一北海道産物ヲ港内ニ於テ外国人エ売渡シ候節ハ、輸出品同様売主ヨリ半高税取立候事、

一諸家荷物幷神仏具ハ免税、其余都テ税取立候事、

但、諸家荷物ト偽リ売物運輸致シ候節ハ荷物取上可申事、

一寿都、手宮、幌泉ノ三港内ニ於テ其地ヨリ出候産物ヲ積取候船直ニ出帆致シ候処、右三港地産ノ品ニ限リ入込ノ税相掛不申ニ付、出船ノ節定額ノ税金取立候事、

一北海道国内ヨリ産物積取候船四港ノ内エ不寄シテ他国エ乗落致シ候節ハ税七倍増シ、且振合ニ寄リ十倍増ヲ以取立候事、

但、択捉ニ産物積取船年々両度ツヽ差下シ候処、彼地ハ難海ノ隔島故秋闌ニ相成四港ノ内エ乗付ケ出来兼候節ハ向地エ落船ノ儀有之ニ付、最前ヨリ積取間尺ヲ改メ其高ニ応シ定額ノ税取立候事、

一北海道国内エ相廻リ候船々産物積取帰帆ノ節四港ノ内エ一応入船可致儀勿論ニ付、仮令ハ寿都エ入船可致筈ノ処風順ニ寄リ箱館エ落船、直ニ向地エ出帆ノ節ハ同港ニテ定額ノ税可取立、外両港交モ前同断ノ事、

一四港ノ内ニ於テ産物類積入出帆致シ候船、風順悪ク引戻シ滞船中追々秋闌ニ相成脚方重出港出来兼候故、積荷ノ内陸揚致シ度旨願出候エハ、船中見届ノ上一端税納済ノ品ニ付蔵入ノ荷物封印致シ置、翌年右船エ積入候はハ税不取立、若シ外船エ売渡シ候節ハ荷物税取立候事、

一諸廻船四港ノ内ニ於テ産物積入税納済出帆免状ヲモ相渡シ候末、風待中勝手筋ニヨリ積荷外船エ売渡シ候節ハ、尚又双方ヨリ税半高ツヽ可取立、尤出帆差許候日ヨリ三日ノ内ニ売渡シ候分ハ、売主ノ方免税買主ヨリ半高税取立候事、

一北海道国内ヨリ産物積取入港ノ船ニ積付ノ儘出帆願出候

節ハ、定額ノ税取立出帆差許シ候事、

一樺太産物ハ四港ノ内エ入込ノ節ハ免税、出港ノ節半高税取立候事、

但、出入共改ノ儀ハ外品並取調、其品ニ寄リ極印等打入レ候儀前同断ノ事、

一諸藩用船雇船間尺石高ノ内用物三分二以上積来候分ハ三分一面役取立、船頭自分ノ売荷石高三分二以上積来リ空船出帆ノ節ハ面役取立、其以下積来リ前同断ノ節ハ三分一面役可取立、尤産物類積請候節ハ北海道国内ノ船々ハ五人乗迄面役、其余六人乗以上且向地ノ船々ハ石役取立、又売荷積来候船四港内ニ於テ諸家雇船ニ相成候トモ面役取立候事、

附、諸藩用船雇船四港内エ用物陸揚空船帰帆ノ節、幷官廻米積船為風待乗込候節共常燈料取立候事、

一諸廻船四港ノ内ニテ港役済ノ上、三港ノ内エ入船出帆ノ節ハ常燈料ノミ取立候事、

但、積荷外船エ売渡シ候節ハ荷主相替リ候ニ付、荷物税取立候事、

一諸廻船空船ニテ出帆ノ節ハ面役取立候事、

一石役差出シ出帆可致船買積ノ産物不足ニテ、石高五分一以下積入ノ節ハ半石役取立候事、

但、石高五分一以上積入候節ハ本石役取立候事、

一官廻米積船荷揚ノ上産物類積入出帆ノ節石役取立候事、

但、荷揚ノ上空船ニテ出帆ノ節ハ、常燈料ノミ取立候事、

一諸廻船四港ヨリ交モ四港ノ内エ相廻リ候節、積荷物有無ニ不拘石役取立、尤北海道国内ノ中遣船以下ハ常燈料ノミ、大中遣船ハ半石役、二人乗以上且南部津軽ノ天当船共石役取立候事、

一北海道国内ノ地船向地エ出帆致シ候節ハ、六人乗以上石役取立、五人乗以下面役取立候事、

一箱館港ハ亀田全郡、(幌)縄泉港ハ縄泉全郡、寿都港ハ寿都全郡、手宮港ハ高島全郡、各其地船ニテ其郡内限リ荷物積取トシテ相廻候節ハ、小廻シト唱エ常燈料ノミ取立候事、

一北海道国内ノ炭薪ヲ其地船ニテ北海道中積廻シ候節ハ、常燈料ノミ取立候事、

但、本文向地ノ船ニテ積廻シ候節、且向地ヨリ積来候節共外並ノ役取立候事、

一諸廻船四港ノ内ニ於テ修復相加ヱ候節、積荷陸揚致度旨願出候ハヽ聞届陸揚荷物封印可致シ置事、

一諸廻船向地ヨリ積来候入荷物ノ分都テ向津ヱ津出シ停止、尤兼テ積付断リ有之品ハ津出シ不苦事、

但、陸羽ヨリ輸入致シ候蚕種紙鯨骨馬骨ニ限リ津出シ差許シ定額ノ輸出税取立候事、

一諸廻船積荷物ヲ船移致シ候儀停止ノ事、

一船々食料積入ノ分免税ノ事、

但、積入ノ時々海官所ヱ可届事、

一諸荷物一切箱館ハ同所海官所幷弁天町改所地蔵町改所右三箇所ノ内、縄（幌）泉、寿都、手宮ハ各所ノ海官所ニテ改済ノ上揚卸可致候、万一四港共他ノ海岸ヨリ窃ニ揚卸候ヲ見留次第ニハ現品取上、又後日相顕レ候ハヽ品物相当ノ代金取上可申事、

一船々積荷物揚卸ノ儀ハ日出ヨリ日没迄ニ相限リ候事、

但、夜中ト雖モ至急ニ揚卸致候ハテ不叶節ハ、海官所又ハ改所ヱ届出候上時宜ニ依リ可差許、若免許ヲ受ケスシテ夜中揚卸致候節ハ品物取上可申事、

一抜積其外密商ノ筋見聞次第届出候者ヱハ、取上ノ現品或ハ代金共半高相与ヱ候事、

一北海道国内ニ於テ材木幷櫂木伐出シ他国ヱ輸出致シ候節ハ、津出役雑木角長二間尺ニ〆直シ一本ニ付永弐百文、丸太長弐間末口壱寸一本ニ付同五拾文、櫂木一本ニ付同百文取立候事、

但、炭薪ノ儀ハ他国輸出停止ノ事、

一向地ヨリ稼方ノ為四港管轄ノ市在ヱ入込候者ヨリ滞在役、男一人永百文女一人永五拾文年々可取立、尤六ケ月未満帰国ノ者、又十五歳以下十一歳迄ハ男女共半減、十歳以下免役ノ事、

但、是迄ノ越年役水揚料稼方役相廃シ、且北海道国内本条四港ノ外ヱ入込候者ハ免役ノ事、

一北海道国内ノ入民他国出致シ候節ハ、其市在役人ヨリ差出シ候証書四港ノ内海官所ニテ一覧ヲ遂ケ乗船差許シ候事、

附、向地ヨリ稼方ノ為入込候者帰国等致シ候節ハ、海官所出切手相渡候事、

一諸藩支配地ヱ稼方ノ人民ハ、海路ヨリ直ニ其地ヱ出入致サセ、且其藩印ヲ以テ北海道中通用致サセ候儀不苦、尤四港ノ内ヨリ出入致サセ候節ハ、海官所ヱ届出印鑑改ヲ請通行可致事、

一地方幷向地ヨリ入込候職人役永百二十五文宛可取立、尤小頭ノ分免役、且弟子附キノ者ハ三ケ年免役四ケ年目ヨリ半役、師匠離レノ上外並ノ通取立候事、

一問屋口銭ノ儀諸荷物代金高ノ二分受用致シ来候ヱ共向後相廃シ、尤商人相対ヲ以口銭受用ノ儀ハ可為勝手事、

但、口銭輸入ノ分ハ一分、輸出ノ分ハ一分五厘ヲ不可過、且商人外国船ニテ積求候荷物モ売買ニ於テハ取扱候ヱハ荷主ヨリ口銭受用ニ付、其内半高海官所ヱ上納可致事、

一北海道地船焼印箇所左ニ

元船弐箇所

面楫台下艫ノ方

腰当木中程

橋船壱箇所

舳ノ方横木

一船々間尺改ノ法左ニ

長舳シヤタツヨリ艫飛車迄、幅腰当木鈌（ママ）外榴付ニシテ、深腰当榴払ヨリ船底敷木迄、

一船々乗石幷帆形定左ニ

天当	二人乗	帆布六反
幅九尺六寸余ヨリ百六十石迄	二人乗	同八反
百六十石ヨリ弐百六十石迄	三人乗	同拾壱反
弐百六十石ヨリ三百六十石迄	四人乗	同拾四反
三百六十石ヨリ四百六十石迄	五人ノリ	同拾四反
四百六十石ヨリ五百六十石迄	六人ノリ	同拾六反
五百六十石ヨリ六百六十石迄	七人ノリ	同拾八反
六百六十石ヨリ七百六十石迄	八人ノリ	同拾八反
七百六十石ヨリ八百六十石迄	九人ノリ	同弐拾反
八百六十石ヨリ九百六十石迄	拾人ノリ	同弐拾反
九百六十石ヨリ千六十石迄	十一人ノリ	同弐拾壱反

千六十石よゝり千二百石迄　拾二人ノリ　同二拾二反
千二百石よゝり千三百石迄　拾三人ノリ　同二拾四反
千三百石余ヨリ千四百石迄　拾四人乗
千四百石余ヨリ千五百石迄　拾五人ノリ
千五百石よゝり千六百石迄　拾六人ノリ　同二拾六反
千六百石余ヨリ千七百石迄　拾七人乗
千七百石よゝり千八百石迄　拾八人乗

右之通確定候条来午正月ヨリ可施行、猶其細目ハ税員定則ヲ添エテ之ヲ審カニスル者ナリ、

巳十二月

五月五日畝反歩調

一四畝歩　仕付壱宇、　斎藤保之助
一　右同人石井軍太右衛門寄合ニ付屋敷内江手入不仕、　太田平蔵
一三畝歩　砂金源次郎
一三畝歩　仕付壱宇、　三品万之助
一壱反歩　仕付壱宇、　大内三九郎
一壱反歩　八畝歩仕付、　百井栄之進
一壱反八畝歩　仕付一宇、　鈴木浅右衛門
一病気ニ付一円手入不致候、　岡本市右衛門
一六セ歩　森松三郎
一壱反三セ　壱反仕付、　渡辺源之丞
一壱反　仕付一宇、　及川忠八
一二セ歩　鷲崎雄之助
一八セ歩　仕付一宇、　加藤仁三郎
一壱反　三品桃治
一六セ　三セ仕付、　鈴木留之助
一弐反四セ歩　仕付一宇、　小田島孫六
一三反歩　仕付二反五セ、　南条徳三郎
一壱反三セ五歩　仕付一宇、　寺島菊治
一九セ歩　仕付一宇、　水戸部万治
一壱反三セ　仕付一宇、　佐藤直右衛門
一壱反四セ歩　仕付二セ歩、　水戸部要七
一九セ歩　仕付二セ歩、　佐藤善助
一壱反三セ　仕付八セ歩、　高野良三郎
一壱反四セ歩　仕付一宇、　大友儀平

一壱反二セ 仕付一反、
一壱反 仕付一宇、
一壱反三セ 九セ仕付、
一二セ五歩 仕付一宇、
一七セ 仕付三セ、
一壱反 仕付一宇、
一九セ 仕付五セ、
一壱反四セ 壱反一セ仕付、
一八セ 仕付六セ五歩、
一壱反三セ 仕付壱反、
一壱反六セ 仕付壱宇、
一九セ二歩 仕付四セ、
一三セ
一六セ 仕付三セ、
一五セ 仕付壱宇、
一五セ 仕付壱宇、
一六セ 仕付一宇、
一壱反二セ 仕付七セ、

白石幸右衛門
山本外守
鈴木喜膳
佐藤安平
高橋常之進
清野泰助
高橋昌之進
高橋市郎
森　友七
半沢俊蔵
武沢忠治
伊藤雄八
斎藤透助
佐々数茂
横山勝四郎
志茂八十郎
松本幸左衛門
阿部周助

一壱反三セ 仕付五セ、
一壱反五セ 仕付一反、
一六セ 仕付五セ、
一壱反六セ 仕付壱反一セ、
一八セ五歩 五セ仕付、
一壱反壱セ 仕付一宇、
一壱反 仕付五セ、
一壱反 仕付四セ、
一五セ歩
一二セ
一二セ 仕付一セ、
一壱反 仕付五セ、
一壱反三セ
一四反五セ 仕付一宇、
一弐反 仕付一宇、
一弐反 仕付一宇、
一壱反六セ 仕付壱反三セ歩、
一壱セ二歩 仕付一宇、

斎藤琢治
斎藤貞吉
佐藤玉蔵
太田勝吉
庄司定吉
佐藤久蔵
金沢春吉
大橋虎蔵
沢井四郎
内海猪松
風間嘉平
田村新九郎
杉浦織之丞
国島広衛
荒川又左衛門
笠原弥一郎
牛坂喜四郎
伊藤粲三郎

一壱反二セ歩　高橋司馬
一四セ歩　仕付一宇、　小川助四郎
一　小熊進
一　手代木蘊蔵
一三セ五歩　仕付二セ、　今野喜蔵
一壱反　六セ仕付、　石田松三郎
一用多ニ付一円開発不致、　伊藤小三郎
一右同様、　阿部滝之助
一六セ　仕付一宇、　鈴木栄蔵
一弐反　仕付一宇、　石井軍太右衛門
右同人荒徳治、太田平蔵寄合、
一五セ　永岡勘助
一　荒徳治
右同人石井軍太右衛門寄合ニ付屋敷一円、
一壱セ　杉ノ目清吉
一六セ　仕付一宇、　佐藤治右衛門
一壱反　仕付一宇、　山本惣平
一三セ　大橋重平
一壱反　仕付一宇、　大内民蔵
一壱反二セ　仕付一宇、　大内重松
惣〆開発七丁三反五セ二歩
内仕付五丁三反九セ
外
一役所前四反歩　仕付一宇、
一舟岡ハ七反歩　仕付六反歩、
〆八丁四反五セ二歩
舟岡除外一宇而
七丁七反五セ二歩也、

六月五日仙表出立白府江出御届仕候、七日ニ出頭ス、八日同所出立角田県江出ル、九日夜四ツ時頃旧領江安着ス、
一帰農之輩願済申渡ス、
一不帰農之輩直ニ諭申候、
一十二日礼服御呼出ニ而伊達勝三郎相頼候処、室蘭増地拝領ス、直ニ一統江申渡ス、実ハ去月廿八日本藩江御達相成居候由也、
一十三日人数移住大評義有リ、

一十四日馬上ニ而登仙ス、増地御礼旁也、

明治三年庚午九月廿五日於函館表御賞誉閏十月田村新九郎ゟ報知左ニ、

写

伊達藤五郎

其支配地今般長官巡廻熟視之処、開拓之御趣意厚奉戴格別精力ヲ尽候条一段之事ニ候、自今開墾之事業益勉励可有之事、

庚午九月　開拓使

午年有珠郡土人家数人別調

有珠郡

一同所住

	惣乙名	
妻	クロソウ	七十七
倅	ムイトリ	六十三
嫁	リイクンヘ	四十四
	ハアヒ	三十二
倅	シイヒシカリ	二十七
同	トシクロ	二十五
同	フシカヲク	二十三

以上七人男五人女二人

	脇乙名	
聟	アカムイ	六十四
孫女	トリクシユ	四十七
同男	アワカ	十九
同同	サンリ	十七
同同	ドンリ	十五
同同	ドンハクロ	十二
同同	ゴンケロホ	七

以上七人男六人女一人

惣小使　コランクミユ　六十一
妻　ウヌテキ　五十九
倅　クトリサン　三十四
同　イタキトリセ　二十五
以上四人男三人女一人
並小使　サンシ　六十二
妻　ソーケシ　五十五
倅　エコロサン　二十七
娘　サンテリキ　二十四
孫男　セカチ壱人　二
以上五人男三人女二人
並小使　イタクハエ　四十九

聟　クトリウシ　五十二
妹　モンヌカル　四十七
姪妹　ノシキ　三十九
姪　セトルハシ　二十七
同倅　ホンヲヤヲク　十
以上六人男四人（ママ）女二人
並小使　チヤシテキ　五十四
妻　サアモン　四十三
弟　ラツハシ　二十六
倅　トンノリ　十六
同　マクンレキ　十三
孫女　カナツ壱人　当才

以上六人男四人女二人

並小使　トムアン　四十九

妻　シルミ　五十二

弟　フクマツ　四十一

以上三人男二人女一人

男士人　エテミユクロ　三十二

倅　コンケル　十三

同　シユクトフ　九

以上三人男三人

男士人　アムテ　五十五

妻　エツテキ　五十四

弟　ヲヘサン　四十一

倅　シレキ　三十一

同　シヨフクロ　二十七

以上五人男四人女一人

男士人　キコトク　三十八

妻　シイフツ　二十六

倅　アエサン　八

娘　カナツ壱人　四

倅　セカチ壱人　二

以上五人男三人女二人

男士人　セヌエ　六十六

妻　ヌマツサン　六十四

聟　サメモン　四十四

娘　シユハツヌ　四十一
孫女　サアヌカル　十七
同男　カルコトツク　十三
同　エコロシノツ　十一
同女　シトキネ　八
同　カナツ壱人　三
以上九人（ママ）男五人女四人
男壱人　エカシハクロ　四十六
妻　ニサシノヲク　三十一
娘　クチシイ　十一
同　シルリ　九
同　ウエナリミ　六

以上五人男壱人女四人
男壱人　シロマクロ　五十二
母　セヒラ　九十五
（厄）屋介女　テキトタヌ　六十二
以上三人男一人女二人
男壱人　エカシカヲク　二十九
母　テキフシ　五十四
妻　ウミシロ　二十
弟　シイトワシ　二十三
同　シコテクロ　十二
娘　カナツ壱人　二
以上六人男三人女三人

男壱人
エシュカフ
二十三
姉
コツチヤヲク
四十七
妹
シユウリミ
十九
同人娘
カナツ壱人
三

以上四人男壱人女三人

男壱人
コスケ
六十二
妻
シイケシ
〔原本年齢欠〕
娘
クエリ
二十七
娘
トモンキフ
十七
同
ルーシーコ
十一

以上五人男一人女四人

男壱人
トシニクロ
三十八

母
ハエタレ
五十九
弟
カンナハウ
三十二
妹
シユコサン
二十九
弟
シイカシタ
二十一
同
アコウエンクロ
十三

以上六人男四人女弐人

男壱人
エリハケ
五十一
妻
シネホフケ
四十三
娘
シーメン
二十
同
ラルマサン
十八
悴
サムンテ
十五
同
セタヲクロ
十

娘　テツ　チヤ　クマ　五
倅　セカ　チ　壱人　二
以上八人男四人女四人
男土人　ハウ　エサン　二十三
妻　チヤシヌテキ　二十四
倅　ハウ　エキ　二
以上三人男二人女一人
男土人　ムコツ　チヤリ　二十九
妻　シユ　ケラン　三十六
倅　キミ　タヨク　五
以上三人男二人女一人
男土人　シト　シカ　五十二

妻　キナ　モン　四十六
以上二人男一人女一人
男土人　エカシ　マト　四十二
妻　サツ　カ　四十一
娘　シユ　チリ　二十
以上三人男一人女二人
男土人　ハシテ　クロ　五十二
妻　カムエ　ヒロ　四十八
倅　リクン　テキ　十七
同　シヤレツ　キ　十二
娘　ヌヘキ　サン　七
以上五人男三人女二人

男土人　トンハシ　二十六
妻　トルヲク　二十五
倅　アコチシ　八
同　セカチ一人　三

以上四人男三人女一人

男土人　シイハヌ　六十六
倅　エホシアシ　三十九
嫁　ムツヘアン　五十八
養孫女　ヲマンテキ　二十五

以上四人男弐人女弐人

男土人　キムンテキ　三十二
養母　ヌマエサン　五十五

妻　シイマツ　二十四
弟　シエアエ
〔原本年齢欠〕
娘　カチホエ　八
倅　セカチ壱人　三

以上六人男三人女三人

男土人　ノツクミユ　三十五
母　キルテキ　六十七
弟　イタキチヤ　二十八
イタキチヤ妻　サンタヌイ　二十三
妹　シコロマツ　二十三

以上五人男二人女三人

男土人　トキレ　三十七

妻　マケテキ　三十九
倅　マサリキン　十六
娘　シウチウ　十一
倅　サマシノクロ　八
同　サキシカ　六
倅　セカチ壱人　三
以上七人男五人女二人
男壮人　ムニヲク　二十五
妹　フツカツ　二十一
弟　シコニセ　十九
以上三人男二人女一人
男壮人　シヤハトク　三十二

伯母　イトフリ　八十四
弟　エヒレキ　二十二
同　フラタケ　二十
同　ニヨテキ　十八
同　サンハソ　十六
以上六人男五人女一人
男壮人　ヌフンノレキ　三十九
妻　フンマテキ　三十八
娘　ニワシテキ　十七
倅　シアマ　十五
同　レツカハウエ　十二
娘　カツクテキ　八

以上三人男二人女一人

男壬人
ヱヤナンケ 四十七
妻
クヨシ 四十二
悴
コサンクロ 十八
同
ヌカルアシ 十三
娘
キクノセツ 八

以上五人男三人女二人

男壬人
マコヤイ 七十三
（妻カ）才
シコミ 六十三
聟
ホロセカチ 三十八
娘
クヱアフカシ 四十二
悴
ヱカシ 二十四

悴
イナツマ 五

以上七人男四人女三人

男壬人
トハロク 五十九
妻
アンテキサ 三十九
娘
トテリケアシ 十三
悴
トハシナ 十
娘
ヤマノヱ 七
悴
タケル 六

以上六人男三人女三人

男壬人
ケンノ 六十五
妻
ヱモントナシ 六十二
悴
コヽトク 二十五

孫男　ハーハヌ　二十
同　イタクチヤス　十三
同　ホフケトク　十一
孫女　イワテモリ　七
以上九人　男六人　女三人
男士人　シノチ　二十三
母　シキハ　六十
姉　ウサエンカリ　二十七
妹　レシフツチ　二十
同　チカフキシマ　十九
弟　シエクル　十五
姪男　セカチ壱人　四

以上七人　男三人　女四人
男士人　サフサフ　二十四
姉　ホンネカフ　三十六
才　ナントル　二十四
娘　アシリマツ　四
以上四人　男一人　女三人
男士人　エカシキタエ　三十一
才　エモンラキキ　二十七
悴　イワシロ　七才
同　タマキ　五
以上四人　男三人　女一人
男士人　ショクネ　四十九

妻　トムシソ　四十二
倅　シタシコロ　二十六
以上三人男二人女一人
男壮人　ノトムシ　二十九
才　トホシミ　二十七
娘　カナツ壱人　四
以上三人男壱人女弐人
女壮人　ウチユマツ　三十九
娘　キヨカネ　二十
同　リテンカ　十六
倅　カムキトミ　十一
娘　カナツ壱人　四

同　カナツ壱人　二
以上六人男一人女五人
男壮人　チヨシケ　六十二
才　エヲク　五十八
倅　ホユフクロ　三十五
同　シイタンフ　二十九
娘　アヌヲソヤ　二十二
〔原本続柄欠〕
イシヨハシ　十五
以上六人男四人女二人
男壮人　トンネクロ　三十一
才　ニワシノヲク　二十四
以上二人男一人女一人

男壮人
トウヘツ　六十一
才
イトキセ　三十九
弟
シイクミエ　三十四
以上三人男二人女一人
男壮人
トヒンカネ　四十二
以上男壱人
男壮人
カムヽヽ　五十四
才
シユリキン　四十五
倅
ヌフケクロ　二十九
同
トモノヲマ　二十四
同
エマハクロ　二十三
娘
シユチノマツ　二十二

同
タカサ　十八
同
シリシユモイ　十一
孫男
セカチ壱人　四
以上九人男五人女四人
男壮人
セタエンカリ　四十三
才
トマムリキ　三十六
倅
セタキヽ　十九
同
セタサン　十四
同
サヽラコ　十二
同
サミセン　十一
倅
サラシナ　九
娘
アマツヒコ　六

倅　カセチ壱人四

以上九人男七人女二人

男壮人　エアンルエ六十二

姉　エフルカル六十四

妻　ラツカ四十二

娘　セタセフ二十

倅　キヨタケ十六

娘　ルエサン十

以上六人男二人女四人

男壮人　トリセ四十九

姉　トナシヲク六十七

倅　アタキセタ二十三

以上三人男二人女一人

男壮人　エカシフニ四十七

才　キヽチマ三十六

娘　ハツハル十三

同　サヤカタ七

以上四人男一人女三人

男壮人　エモノコ六十一

才　モニフサ四十三

倅　ヲムニン二十五

倅　イクエ二十二

同　シイホツハ二十一

娘　エトホロ十八

同　ロサク　十三

以上七人男四人女三人

男土人　ニシテクロ　三十

才　シイヲヨフ　二十五

娘　ヒサシマツ　六

悴　セカチ壱　二人

以上四人男二人女二人

男土人　ヲヤワカ　三十四

才　シエイテキ　三十二

以上二人男一人女一人

男土人　ユフホリ　四十七

才　ニセヲク　四十四

悴　リクンラキ　三十六

娘　トンモイ　二十四

孫娘　カナツ壱人　四

以上五人男二人女三人

男土人　ヲナアレ　四十五

妻　エクリサキ　四十四

悴　テンタクリ　二十一

悴　サンロク　十九

悴　トンノクロ　十五

娘　ハナヲーキ　十四

同　エヘアフ　十二

同　ホンエクリ　十

以上弐人男一人女一人

男壮人

コヒロ　五十六

才

ハシトル　三十六

娘

ソバカム　十七

同

タマサンケ　十三

同

コサンマツ　八

悴

クマサカ　六

同

セカチ壱人　三

以上七人男三人女四人

男壮人

アンネリ　六十五

才

アツテキ　五十四

悴

アキレクミユ　二十八

悴

イナシノ　七

同

ツネヤマ　五

以上十人男六人女四人

男壮人

リモケリ　五十七

才

ホサレヲク　四十五

悴

シイキシマ　二十四

娘

シユケマツ　二十一

悴

サンタロ　十六

同

ホンヤエラマツテ　十二

以上六人男四人女二人

男壮人

ヤクランケ　六十

才

ウヌキサラ　六十

同　シイマ　二十七
同　シクフハロ　二十五
同　レキトナシ　十八
娘　ヒカンマツ　十七
倅　ホンテラ　十一
以上八人男六人女二人
男壮人
母　シモト　四十五
母　カアエ　七十六
才　ウヌハシ　五十壱
娘　サクサ　二十五
同　シイアサム　二十一
倅　イタクタサ　二十一

娘　セタシンタレ　十四
以上七人男二人女五人
男壮人
養母　アコニウケシ　四十六
養母　シイテキ　六十八
娘　ハシミユケフ　二十
倅　ノミヲク　十八
同　フツノクロ　十六
同　ホンニハトリ　十一
以上六人男四人女二人
女壮人
シネモン　六十七
以上女一人
男壮人
チヤシヌラン　二十七

才　ウミンテキ　二十四
悴　セカチ壱人　二
以上三人男一人（マヤ）女二人
男十人
ミユマカフ　三十七
母　ワタラ　六十一
才　フツキヒ　三十五
弟　エクツチヤリ　二十七
同　タンラリ　二十三
妹　ウシヤホ　二十
同　シレトコロ　十六
以上七人男三人女四人
女十人
ハルトル　四十一

娘　アミフマツ　十三
以上女弐人
男十人
トエマヌ　三十一
才　アンテナン　二十八
悴　ホントエマ　十
娘　キヌカサ　七
悴　セカチ壱人　三
以上五人男三人女二人
男十人
ハウエチヤ　五十五
才　シヒテキ　五十四
妹　ウコキヒ　四十
悴　ミユトヽム　二十七

同　ヱカシモン　二十五
同　ヱホンレキ　二十
同　ヌサハシ　十七
娘　ヤヱカキ　十四　フトルアシ（ママ）？

以上八人　男五人　女三人

男士人　アヘチ　六十一
才　コナンキル　五十九
娘　シイミタレ　二十一

以上三人　男一人　女二人

男士人　コウロク　四十七
才　シフサ　四十八
悴　ヲフルト　二十九

以上三人　男二人　女一人

男士人　シキニアン　五十八
才　ヲフンハレ　五十
娘　シイホニ　十九
悴　マサムネ　十八
同　ヱラシヘツ　十三
娘　ホンヲフン　十
孫女　ヲハシテ　六

以上七人　男三人　女四人

男士人　ヱラントリ　六十六
悴　ヱヲラニ　三十九
同　タンチシ　三十三

娘
ヌヘケム
二十二

以上四人男三人女一人

男土人
ホエホレ
二十三

祖母
クネエケワ
八十六

母
キマカン
五十一

弟
ウエサワ
十六

娘
サワラヒ
九

同
カナツ壱人
四

以上六人男二人女四人

男土人
エカンキサラ
三十七

母
テシユシキ
六十

才
タヲリ
三十九

悴
トクランケ
八

以上四人男二人女二人

男土人
トウルエ
五十九

才
コレシクフ
五十三

妹
シユケンノ
五十二

娘
トフリキン
二十三

悴
アフコアシ
二十一

同
タフカシ
二十

シユケン（ノ脱カ）悴
ヲソマウシ
十七

同
サーランクロ
十六

孫女
カナツ壱人
四

以上九人男五人女四人

男壮人
コレトク
六十一
才
ヲヤカル
六十
倅
サヒリカフ
二十六
娘
フニサン
十八
以上四人男二人女二人
男壮人
カエヘウシ
三十五
才
シユチコハ
三十四
倅
ホンカエヘ
十
以上三人男二人女一人
男壮人
シノクヲク
三十一
娘
シラムセマツ
十三
同
ホンエツ
十一

同
カクリケン
八
以上四人男一人女三人
男壮人
ランケヲク
四十二
才
エリアシ
六十三
娘
トナシテキ
十五
以上四人男一人（三カ）女三人（二カ）
男壮人
エハキセタ
三十二
才
トムカタ
二十五
娘
ツルノクシ
六
同
カナツ壱人
四
以上四人男一人女三人
男壮人
ヌサフニ
四十四

才　テシケナン　四十一
娘　シヲクミュツ　十六
悴　イナウアニ　十
娘　アツマノ　七
悴　セカチ壱人　四

以上六人男三人女三人

男十人
才　ハシテヤキ　六十四
才　ソネマツ　六十一
悴　タルシモン　四十四
嫁　ムルハル　四十九
妹　ウトンナ　四十
娘　アレキマツ　二十三

悴　トン　十九

以上七人男三人女四人

男十人
母　チャウケクロ　二十八
妹　シユチクハ　四十九
弟　シーサツカ　二十四
同　ムマノシケ　二十一
同　サンタル　十六

以上五人男三人女二人

男十人
才　トンレキ　四十四
娘　シイハシ　三十九
娘　トムエサン　二十一

以上三人男一人女二人

男壱人
シユヤンケ
四十四
才
エハンテ
四十一
倅
セタヽフ
二十一
娘
キンサ
十七
娘
カツラキ
十
同
ミツノエ
八
同
アサチフ
六
同
カナツ壱人
三
以上八人男二人女六人
男壱人
トンセタ
五十七
才
ホンヲヘリ
十八
以上二人男一人女一人

男壱人
チカフトル
五十六
才
ラシマツ
五十一
倅
エケウトモヲク
二十四
同
トサンノヲク
十七
娘
シインネ
十四
以上五人男三人女二人
男壱人
ヲヤヲク
三十七
才
レウシヽ
二十七
倅
セカチ壱人
四才
以上三人男二人女一人
男壱人
エトカフ
三十七
才
マケサン
二十九

モンヘツ住

娘　カシセシケ　十

以上三人男一人女二人

男土人　アツヌクロ　六十五

姉　イリカム　七十一

以上二人男一人女一人

男土人　サロテ　三十四

母　キクンネ　五十九

才　トツタ　二十五

娘　マソテ　六

以上四人男一人女三人

男土人　ヤンケテキ　五十三

才　テキリキン　五十一

悴　シイマト　二十七

同　メトント　二十六

同　シクヽマ　二十五

同　ウエナカフ　十八

娘　テキランケ　十

悴　シヤキラ　九

以上八人男五人女三人（マヽ）

男土人　カムヤシテ　六十四

才　シイタラ　六十

悴　コウクロ　三十六

嫁　モンカツ　三十九

娘　チンキハシ　二十九

孫男　レツキタサ　十二
孫女　ハルトンヤ　十
孫男　アテロク　八
同　トモツナ
〔原本年齢欠〕
同　セカチ壱人　二
以上十人男六人女四人
男土人　アチユリキン　五十
娘　シユウヒシ　二十一
倅　キンナタラ　十八
同　シフクロ　十二
娘　ハルカセ　十
同　スマノウエ　七

以上六人男三人女三人
男土人　トクスケ　十四
母　トレカル　四十八
娘　ヒタルサン　二十一
以上三人男一人女二人
男土人　ヲソラクロ　五十四
才　カフシユ　三十
娘　シアフカシ　十
倅　タアサンクロ　九
同　セカチ壱人　五
同　セカチ壱人　三
以上六人男四人女二人

男土人　イタコラン　六十一
才　ハセサン　四十三
悴　イソエツ　二十三
同　ヌサレキ　十五
以上四人男三人女一人
男土人　リキクロ　三十四
母　ウルハ　五十八
娘　ヘマンタセメム　十一
同　タカマト　八
以上四人男一人女三人
男土人　ケフラン　六十五
才　コシヨロ　六十二

聟　セタロク　四十三
嫁　フツシケ　三十九
悴　トヲカ　二十四
孫男　アンヌルサン　十七
孫女　ウタサン　十三
同　リキンキク　九
同　カクレミノ　六
以上九人男四人女五人
男土人　カムキテキ　六十三
才　ソシラン　六十二
聟　セタリキン　二十九
娘　シネリヲリ　二十九

同　トシヒマツ　二十
孫男　セカチ壱人　四

以上六人　男三人　女三人

男壮人　フツロク　五十八
才　サアテキ　五十
聟　レウケ　四十三
娘　シユミサン　二十七
悴　コサンヒラ　二十一
同　シヤハウエン　十五
娘　シニテリケ　九
孫女　カナツ壱人　四

以上八人　男四人　女四人

男壮人　コロモン　四十六
才　セタリ　二十六
娘　ソエマクラ　六
悴　セカチ壱人　二

以上四人　男二人　女二人

ヲヒロネツフ住
男壮人　エカシロ　五十二
才　キマカン　四十八
悴　ウエナリキ　二十四
娘　エハクマツ　十八
同　ホンヲヘリ　十五
悴　ワカクサ　十
娘　サンラリクロ　七

以上七人男三人女四人

男土人　ヲエトク　六十二

才　イリサン　五十五

娘　ハルウエナ　二十七

娘　ムエシロ　二十

倅　ハルヒタ　二十

同　アコラリクロ　十七

娘　ハナ　十五

倅　イワカネ　八

孫男　ホンエサリ　八

孫女　セカチ壱人　三

以上十人男六人（ママ）女四人

男土人　コハンロク　三十六

才　クンネハシ　二十五

以上弐人男一人女一人

男土人　シトマム　五十

伯母　ムケヤ　七十六

才　リテンヲヘリ　四十四

娘　ニサシマツ　二十五

孫女　ハシコエキ　八

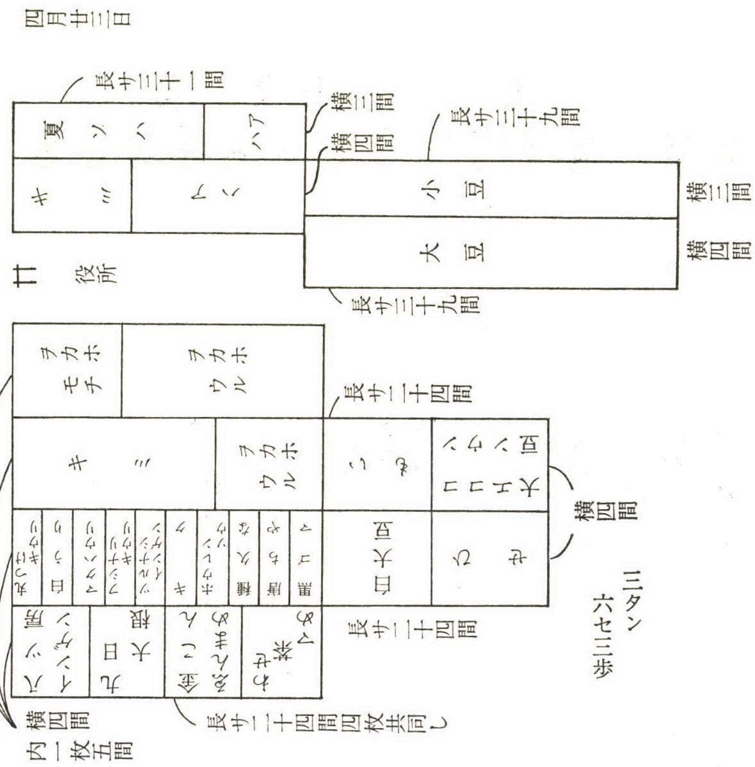
同男　ムマフンキ　六

以上六人男二人女四人

惣家数百五軒、此人別五百三拾五人

内、男弐百八拾三人、女弐百五拾弐人　以上、

明治三庚午四月廿日写取也、


四月廿三日
長サ三十一間
夏ソハ
横三間
横四間
長サ三十九間
小豆
横三間
大豆
横四間
長サ三十九間
廿　役所
ヲカホ モチ
ヲカホ ウル
長サ二十四間
キミ
ヲカホ ウル
横四間
長サ二十四間
三タン六セ三歩
横四間
内一枚五間
長サ二十四間四枚共同し

一日本外史　弐拾弐巻
一袖珍名乗字引　小本　全
一新論　弐巻
一近思録　四巻
一同講義　四巻
一歩操新式　横本　五巻
一草庵和歌集　全
一掌中怜野集　横本　全
一掌中草野集　同　全
一和歌呉竹集　弐巻
一三体詩　全
一明良洪範　拾巻
一蝦夷行程記　横本東部下　壱巻
一ヒストル　壱挺
右玉数七拾五
拝領
一本込　壱挺
右多付　壱道
右玉数四拾九

一状箱　壱ツ
右之通リ
五月五日
高橋善平ニ渡ス、
○一鳴驚人（ウス）
但シ、屏風之書也、
○雨霖（ヲシヤマンベ）　○雑尋（食ノ大字）　○華旗　○龍飛
○掛物竹ニ虎
○延寿千万歳（大野）
○楽票（ヘツ）

籠入
一茶台蓋共ニ　壱組
竹ニ雀紋付
一唐草　茶碗壱ツ
一湯つけ茶碗　壱ツ
一汁わん　壱ツ

一つほわん　壱ツ
一かくわん　壱ツ
右三つ内葉竹雀引両紋入
一茶土ひん　壱ツ
但シ、瀬戸物
一小皿　弐枚
一松竹盃　壱ツ
〆九筆
五月六日鹿野与一郎ゟ高橋善平江預置也、
一朱塗三組重　壱ツ
但シ、くされもの也、
右も同日同人江預ル、

一金弐両壱朱　箱館ニ而調物
一金六切也
但、鹿皮調入料、
一金弐両
但、帰り之折箱館ニ而、
〆五両二歩壱朱
金三切三朱入ル
残四両二歩二朱入費也、
一弐歩

一三朱
〆残五両壱歩壱朱入費也、

○一壑松濤生計足
○幽居便是神仙宅
○洞桃源処以文筆
右三枚錦画

○繞屋峰巒三十六
○大塊仮我千林錦
○松風巒翠山房寿
ハコタテ宿ニテ　右同様三枚

長敬ノ歌ニ
君いまた来ませるものをしハしそと思ふもつらし今朝の別路
返し邦成
言の葉のふかきなさけの有し故にいやましつらき別れ路やせし

大間の宿床掛物

ゑんこふの図ニ対す

及はさる身の程そしれいましめハ水の底にも有明の月
水に移る月のうつるをとらんとて身のあやうさもしらさる
やなに

原本北海道胆振国有珠郡伊達町
男爵伊達廉夫氏所蔵
昭和七年四月十四日謄写了
松　原　甲　介

中川善之助寄贈文書解説

一昨年度より今年度まで三年間にわたって「中川善之助寄贈文書」（以下、中川文書と略記する）の全目録と、未公刊の主として近世史料を刊行してきた。史料館所蔵史料目録の第三号・第四号、そして本号（第五号）がそれである。そしてこの間、中川文書の旧蔵者である故中川先生の人となりについては、第三号に法学部遠藤浩教授に「中川先生のことども」と題してご執筆いただき、さらに第四号には故中川先生の略歴と主要著作目録を掲載した。また中川文書の概要と特色についても、すでに各号の序文で大石史料館長が述べた。そこでここでは、中川文書からどのようなことが明らかになるかということの一例を示すことで解説にかえたい。

さて、中川文書のうちでとくに目につくものの一つに「一生不通養子証文」がある。それらは「一生不通養子証文之事」とか、単に「不通養子証文之事」とか題された文書で、すべて第三号に収録したが、これがかなりの数にのぼっている。あるいは故中川先生が意図的に収集されたもののようにも思われるのである。

それでは一生不通養子証文とは何か。これを文字通りに解釈すれば、養子縁組に際し、実親（ないし親権者）と養親の間でとりかわされる証文で、実親が以後生涯にわたって養子になった者とは通わない、つまり一切関係しない（＝一生不通）ことを約束した証文である。その意味では、実親が養子になった者と関係を断つことで、養子と養親との間に密接な結合関係が生み出されることを期待したものといえる。一生不通養子とは本来はそういうものであった。養子が実親を知らない、あるいは実親と往来しないことが養子にとって幸せであることは応々にしてあった。

ところがこれが悪用されることがしばしばあった。徳川幕府は一貫して人身売買を禁止したが（牧英正著『近世日

本人身売買の系譜』創文社、一九七〇年参照)、この法の網をくぐるために一生不通養子が利用されたのである。すなわち一生不通養子という形式をとることによって、実質的な人身売買が行なわれたのである。

もちろん本来的な意味での一生不通養子も行なわれた。そこで本来的な意味でのそれと、実質的には人身売買であるそれとは何によって区別されるかといえば、樽代とか養育料とかいう名目の金銭が実親から養親に渡るか、逆に養親から実親に渡るかでほぼ区別されるのである。すなわち普通の養子の場合には実親から養親に金銭が渡され、実質的な人身売買には逆に養親から実親に渡されるのである(なお後者の場合、金銭の授受は本紙証文では行なわれず、別紙証文で行なわれる)。さらに、証文文言についてみても、前者の場合には、実親と養親の間でその養子が成人した後においても「遊女かましき」奉公とか、「悪敷」奉公は一切させないと約束しているのが普通である。これに対し後者の場合には、実親から養親に宛てて、その養子が成人の後は「傾城・遊女ハ不及申、如何体之賤敷給金先借奉公ニ御出し被成候共」最初から納得のうえでのことだからいささかも申し分はない、と約束しているのが普通である。そして一生不通養子が実質的な人身売買として悪用されたのも、まさにこの文言にあるように、傾城や遊女にする場合がほとんどであった(石井良助著『江戸の遊女その他　第二江戸時代漫筆』自治日報出版局、一九七一年参照)。このことは、中川文書のうちで実質的な人身売買である一生不通養子証文に男子に係るものが一通もなく、すべて女子に係るものであることからも証明される。

そこで中川文書のうちの、実質的には人身売買である一生不通養子を列挙すれば次のようになる。

イ　天保十三年十二月、娘とく・十七歳を養育料三十七両一分で、実父山形屋磯吉から岩井屋おまきへ(文書番号九六・九七、以下同じ)。

ロ　安政五年五月、娘りう・十一歳を養育料十両二分で、実父若狭屋栄助から八百屋おとよへ(一一七・一一八)。

ハ　万延元年三月、娘こま（年齢不明）を樽代十両で、実父大坂屋宇八から近江屋常七へ（一二二、ただしこの文書は、宇八が常七にさらに追加の二両を無心して受けとった際のもの）。

ニ　万延元年十二月、娘ふさ・八歳を養育料三両で、実親丸屋ゆかから井筒屋きくへ（一二四）。

ホ　文久元年十一月、娘ゑん・六歳を樽代一両で、実父越後屋安次郎から柳屋おやすへ（一三三～一三五）。

ヘ　文久三年十月、娘元・九歳を養育料四両二分で、実父越前屋清次郎から川村屋万助へ（一三七・一三八）。

ト　慶応元年十月、妹ふさ・二十二歳を養育料八十両で、実兄安波屋安右衛門から紅屋亀次郎・おちかへ（一三九・一四〇）。

チ　慶応四年六月、娘たね・八歳を養育料十五両で、実父清水屋長右衛門から東井屋おいを・後見三吾へ（一四三・一四四）。

リ　慶応四年八月、娘みつ・九歳を樽代一両で、実母ゑいから広島屋おまつへ（一四五～一四七）。

ヌ　明治二年八月、娘みき・十一歳を養育料十五両で、養父山崎屋嘉七から万屋おふきへ（一五一・一五二）。

ル　明治四年二月、娘つる・十五歳を養育料二十両で、実父桐畑儀兵衛から土田喜兵衛へ（一五七・一五八）。

さて、これらからただちに一般論を述べることは慎むべきだと思うが、いくつかの特徴を指摘することはできよう。その第一は、養親になる者の大半が女性であることである。そして実親がほとんど京都居住であることから、これらの女性もおそらく京都あたりの遊廓の女将ではなかったかと推測される。なお一生不通養子の成立によって、これらの女将が法的には母となることにも注意しておこう。第二は、実親（実兄・養父も含む）十一人のうち五人までが借屋住居であることである。残り六人についても、家持であることが明らかであるのはヘの越前屋清次郎のみで、他の五人は家持であるか借屋人であるかは不明なのである。この二つのことを組みあわせて考えれば、主として京都居住

の困窮した借屋人層がその娘を遊廓に売り渡した姿を想像することは容易であろう。

第三に、その金額についてみると、最も高いのは**ト**のふさ・二十二歳の八十両で、以下**イ**のとく・十七歳の三十七両一分、**ル**のつる・十五歳の二十両と続き、逆に安いのは**ホ**のゑん・六歳、**リ**のみつ・九歳の一両である。このことから、年齢のうえの者の方が値段が高かったことがわかる。やはり、成長をまつことなくただちに使役できたからであろう。しかし**チ**のたねは八歳であるにもかかわらず十五両という高額であり、同じ八歳の**チ**のふさが三両、九歳の**ヘ**の元が四両二分であることからみれば、年齢のみが評価基準であったとはいえない。それにしても、中川文書のうちの人身売買でない普通の一生不通養子の際に、実親から養親に渡されるわずかの持参金に較べれば、実質的な人身売買によって実親が養親から受けとる養育料ないし樽代との間に大きな隔たりがあることは否定できない。

以上、中川善之助文書のうちの一生不通養子証文、とくに実質的な人身売買に係るものについて紹介した。これらの文書は、故中川先生が京都の古書店などから購入されたものであるため、遺憾ながら断片的で、人身売買をせざるをえなかった状態などまで明らかにすることはできないが、しかしこれらによって、少なくとも江戸時代後期から明治初年にかけて、すなわち法的には人身売買が禁止されている下で、一生不通養子に名をかりた実質的な人身売買が行なわれていたことが明らかであろう。

ところで、明治政府は、明治五年の太政官布告第二九五号をもって、あらためて人身売買の禁止を確認するとともに、さらに進んで年季奉公等に名をかりた人身売買同様の所業をも禁止し、娼妓・芸妓等の年季奉公人一切を解放することを布告した。布告文だけをみれば、これは旧幕時代よりさらに一層進んだものといえよう。しかし、果たしてこの布告によって人身売買が止み、また苦界に身を沈める（あるいは沈めざるをえなかった）女性が一掃されたであろうか……。

（斎藤洋一記）

中川善之助寄贈文書（下）

学習院大学史料館所蔵史料目録　第5号

昭和55年3月20日発行

発行者　学習院大学史料館

代表者　大　石　慎　三　郎

東京都豊島区目白1－5－1

(電)03—986—0221〈内〉569

印刷製本・(株)三秀舎

学習院大学史料館所蔵史料目録　第五号

中川善之助寄贈文書（下）